日本社会のメカニズム。後天的定住集団の社会。

IWAO OTSUKA

目次

日本社会のメカニズム。後天的定住集団の社会。
Mechanisms of Japanese society. A society of acquired settled groups.

Iwao Otsuka

（参考）前もって読むべき、筆者の電子書籍の一覧。

男女の性差と女性の優位性
女性優位社会が、世界を支配する。
移動生活。定住生活。社会的性差の起源。
生命の本質。人間の本質。それらの暗黒性。
母権社会論 - 強い母の社会。事例としての日本社会。 -
気体と液体。行動や社会の分類。生命や人間への応用。

概論

説明。日本社会のメカニズム。後天的定住集団の社会。

日本社会は、以下のような社会である。

///
その社会の基層。それは、定住生活集団の一種である。人々は、長期的には永住しながら、一時的、短期的に空間移動し、また元の地点に戻ってくる。
それは、移動生活とは区別される。移動生活では、人々は、長期的には空間移動しながら、一時的、短期的に定住する。それは、欧米諸国。

///
その定住集団。それは、後天的定住集団である。その集団メンバーは、先天的な血縁関係を必要としない。それは、先天的定住集団とは区別される。先天的定住集団の社会の例。それは、中国。韓国。先天的定住集団の社会は、巨大血縁集団で動く。

///
その社会心理。それは、定住生活の心理である。それは、以下の内容である。相互の一体感や同調性や和合の重視。閉鎖性。未知へのチャレンジの禁止。個人行動の禁止。個人の自由独立の禁止。

///
その社会的現実。それは、以下の内容である。女性優位。その必死な隠ぺいが行われていること。家庭古参定住民女性としての人生投資家女性による社会支配がなされていること。それは、社会支配の中核である。家庭中心の社会観の徹底がなされていること。しかし、表向きは、その価値観を、先進的移動生活者に合わせて、企業中心に見せかけていること。

///
日本の天皇制は、なぜ潰れないか？それは、国が、巨大後天的定住集団として作用しているためである。その巨大定住集団内部では、相互の一体感や同調性や和合の徹底が、人々によって図られる。異質者や批判者は、その定住集団の中では生きていけない。国への批判。それは、以下の場合のみ、許される。スーパー上位者の欧米諸国の視点を取ること。

///
その社会の理想。
（１）先進的な移動生活者へのあこがれがあること。定住生活への劣等感があること。しかし、心の底では、定住性の全面的肯定を行うこと。
（２）家父長制へのあこがれがあること。女性優位性を、表向きは、必死になって否定すること。しかし、心の底では、女性性の全面的肯定を行うこと。

///
その定住集団の定住民になれる機会。それは、人生一度きりである。それが、社会的慣行となっている。

（１）赤ん坊としての誕生。それによる、家族集団への、一生に一度の加入。
（２）小学校、中学校、高校、大学への、一生に一度の入学。
（３）企業での新卒一括採用の慣行が持続していること。一生に一度の入社。
（４）家庭での嫁入りの慣行が持続していること。一生に一度の結婚。

///
その定住集団への終身所属。終身雇用。その慣行の持続。その慣行の当然視。それが、以下の全てにおいて、そうであること。家族。企業。学校。地域。

///
定住民。定住集団。その分類は、以下の通りである。
（１）家庭。家。
（２）企業。会社。社。
（３）学校。学。
（４）地域。
（４－１）村落。村。
（４－２）市街。町。
（４－３）不動産。土地。地。

///
その社会は、以下の二者に二分される。
（１）定住民。定住集団のメンバー。
（２）流民。定住集団に入れない者。
それらの間に、大きな社会的差別が存在する。

///
その社会における、上位者と下位者。
彼らの上下関係においては、女性的価値観の徹底がなされている。
その価値観は、以下の内容である。
（１）上位者による下位者への専制支配。
（２）下位者による上位者への隷従。

その上下関係は、具体的には、以下の通りである。

上位者。下位者。そのリスト。

（上位者。）　／　（下位者。）
中心者。／　周辺者。

国。役人。／　民間。

所有者。／　借用者。
経営者。経営層。／　労働者。

発注者。／　請ける者。

有職者。／　無職者。
役職者。／　役職無し。
上司。／　部下。

古参者。／　新参者。
旧住民。／　新住民。
先輩。／　後輩。
師匠。／　弟子。

文系。／　理系。
人間系。／　機械系。
感情系。／　論理系。
文官。／　技官。

中枢。／　現場。
奥。／　表面。

///
定住集団における、人々の立身出世。それは、以下の内容である。
定住集団内部に所属したままで、昇進すること。そのキーワードは、以下の通りである。内部昇進性。集団内昇進。
集団内昇進の条件。それは、以下の通りである。上位者に気に入られること。
下位者は、上位者に対して、以下の行為を行う。懐きと媚びと迎合と忖度。上位者が気に入る成果を出すこと。その努力の振りをすること。根性論で動くこと。

///
その社会は、以下のように動いている。

（１）表向き、男性的社会規範の導入を推進すること。
（２）集団内部では、女性的集団規範への従順の徹底を推進すること。

///
後天的定住集団。そこでは、定住民も、条件を満たせないと、定住資格を取り消される。定住民による永住。それは、条件を満たし続ける限りにおいて、可能である。
後天的定住集団では、定住条件失格者に対して、以下の行為が頻発する。
（１）集団内孤立の強制。集団追放。村八分。
（２）集団でのいじめ。

///
その社会は、前例重視で動く。その社会では、前例蓄積者や前例運用指導者が上位者になる。それは、以下の人々である。教授。先生。師匠。先輩。
人々は、以下の感情を持って動く。前例破りの独創行動への嫌悪。集団を通さないで行われる、独自研究や独自出版への蔑視。

///
その社会は、以下の人々に対する嫌悪や差別感情によって動く。
異質者。非同調者。被害者。障害者。危険な人。流民。
それは、残忍で、冷酷である。それは、非人間的である。しかし、人々は、それを当然視する。

日本社会。その社会的な真実。

日本社会。その社会的な真実。
それは、以下の内容である。

（１）
脱亜入欧。
それは、日本の伝統的な国策であること。
その内容を、今なお、国を挙げて、強力に推進し続けていること。
欧米諸国への礼賛を、熱心に行うこと。
欧米思想の教条的な丸暗記を、行うこと。

欧米思想を、権威ある前例として、絶対視すること。
欧米思想と、伝統的な日本思想。
それら以外の思想を、蔑視し、無視すること。

欧米諸国。
彼らとの間に存在する、異質性や対立性。
それらの存在を、否定すること。

彼らとの間に存在する、異質性や対立性。
それらの存在を支持する内容の研究。
その実行の試み。
それを、社会的に、禁止し、阻止すること。
それは、例えば、以下の（Ａ）の内容である。

日本を、欧米諸国の仲間と見なすこと。
欧米諸国を、先進国と見なすこと。
日本を、先進国と見なすこと。
それらに対して、固執すること。

（２）
中国。韓国。北朝鮮。
彼らに対して、蔑視や無視や敵視を、行うこと。
ロシア。
彼らに対して、敵視を、行うこと。
東南アジアの諸国。
彼らに対して、蔑視や無視を、行うこと。

彼らとの間に存在する、共通性や同一性。
それらの存在を、否定すること。

彼らとの間に存在する、共通性や同一性。
それらの存在を支持する内容の研究。
その実行の試み。
それを、社会的に、禁止し、阻止すること。
それは、例えば、以下の（Ａ）の内容である。

//
中国。韓国。北朝鮮。
ロシア。
東南アジアの諸国。

//
彼らのことを、先進国とは、決して呼ぼうとしないこと。
その状態が、いつまでも続くこと。

（Ａ）
例。

性差の存在についての、研究。

性差。
文化の差。
それらの両者の間における、関連の存在。
そのことについての、研究。

女性性。
東アジアや東南アジアの文化。
それらの両者の間における、関連の存在。
そのことについての、研究。

定住生活についての、国際的な研究。

天皇陵を、発掘すること。
そのことによって、天皇家のルーツの真実を、解明すること。

（３）
日本や国内。
外国や海外や国外。
上記についての、二者択一。
それを、国際関係の把握において、専ら、行うこと。
物事を、その枠組みによってのみ、考えること。

外国を、一括りにして、捉えること。

日本の人々。
彼らが、彼ら自身の視野に入れる、外国。
それは、欧米諸国の一択のみであること。
彼らは、それ以外の存在を、無視すること。

外国の分類。
その中における、日本の位置づけ。
それらについて、欧米思想の知見以外の内容を、一切、採用しないこと。

日本の特殊性や唯一性。
それらについての強いこだわり。
それを、持ち続けること。

日本社会や日本文化。
それらは、以下の内容に、過ぎないこと
//
世界中で良く見られる、共通の文化的パターン。
その、一類型。
//
そうした意見。
それを、決して採用しないこと。

（４）
フェミニズム。
それは、脱亜入欧の国策の一環であること。
家父長制。
それを、世界的に普遍的なものとして、捉えること。
日本社会を、家父長制の社会として、捉えること。
男性が、懸命になって、威張ること。
女性が、懸命になって、弱者や被害者としての主張を行うこと。
男女平等の理想を、熱烈に、掲揚すること。
欧米社会を、その理想形として、礼賛すること。
伝統的日本社会を、以下の内容として、捉えること。
//
男尊女卑。
女性差別。
男性社会。
男性支配。
//
それらの内容を、批判すること。
それらの解体や撤廃を、主張すること。

性差別を、否定すること。
性差の存在そのものを、否定すること。

性的表現を、阻止すること。

女性の企業進出を、推進すること。
女性の、企業における役職への就任。
その推進を、熱烈に行うこと。

性差についての研究。
その否定。
その実質的な禁止。
それらを、推進すること。

女性専用社会。
その内実を解明すること。
そのことを、誰も実行しようとしないこと。

女性専用社会。伝統的な日本社会。
上記の両者について、特徴面での照合を、行うこと。
そのことを、誰も実行しようとしないこと。

夫婦同姓。
それを、以下の内容として、捉えること。
//
夫による、妻に対する支配。
//

それを、以下の内容として、捉えること。
//
夫の母親による、夫の妻に対する、専制支配。
実は、夫の妻にとって、その回避が、本心であること。
//
そのことに対する言及。
それを、避けること。

そのような支配形態自体に対する批判。
それを、決して話題に出さないこと。

//
夫による、妻に対する支配。
男性による、女性に対する支配。
//

それらを、必死になって、主張すること。

姓の決定。
その自由化。
それについては、実際には、ロシアが先進的であること。
それを、誰も知らないこと。
例え、それを、知っていても、そのことについて、誰も、言及しないこと。

（５）
天皇制。
最大の多数派の政党を中心とする、社会支配の体制。
それが、永続すること。

体制の批判。
それを、タブー視すること。

内部告発。
それを、タブー視すること。

体制批判者。社会批判者。
彼らを、非国民扱いすること。

上位者に対する批判。
それを、タブー視すること。

多数派の勢力。
それに対する追従を、みんなで行うこと。

少数派の勢力。
その存在を、みんなで馬鹿にすること。

（６）
アメリカによる、日本に対する、軍事支配。
欧米の世界的な優勢。
それらの継続。
それを、前提として、動くこと。

欧米諸国を、スーパー上位者として、専ら扱うこと。
彼らを、無批判に崇拝すること。

彼らに対して、無条件に隷従すること。

彼らの文化を、安全で、先進的な、前例と見なすこと。
その内容を、率先して、受容すること。

彼らの社会規範。
それを、行動の模範や聖典と見なすこと。
それを、信仰の対象とすること。

それらの行為を、慣性の法則に従って、続けること。

（７）
民主主義。
その内容について、手放しの礼賛。
その内容を、彼ら自身の社会に対して、以下のような態度で、導入すること。
//
それは、教条的である。
それは、強制的である。
//

その内容の、丸暗記。
その強制を、学校教育において、行うこと。

それにもかかわらず、日本社会の実態は、以下の内容であること。

民主主義。
それは、表向きだけの、形だけの社会規範であること。
それは、機能していないこと。
人々は、実際には、以下の内容に従って、動く必要があること。
//
旧来から続く、伝統的な、社会規範。
//
仮に、人々が、その内容に従わずに、自分勝手に動いた場合。
彼らは、社会不適合者として、日本社会から追放されること。

そのような社会的真実。
それを、日本の人々が、皆で、必死になって隠ぺいすること。
それについて、日本の人々が、見てみぬ振りをすること。

それらの背景。
欧米諸国。
日本の人々が、彼らの存在を、スーパー上位者として、捉えていること。
日本の人々が、彼らに対して、隷従していること。

欧米の政治思想。
日本の人々が、その内容を、上位の思想として、捉えていること。
日本の人々が、それらの内容に対して、隷従していること。

欧米の政治思想。
その中身本体に対する、理解の能力や、体得の能力。
それらが、日本の人々において、根本的に、欠如していること。

欧米の政治思想。
その日本社会への導入。
それは、表面的であること。
それは、見かけ倒しであること。

（８）
定住集団。
例。
役所や企業。
学校。
市町村。
家族や家庭。

どこかの定住集団の内部に、正式なメンバーとして、必ず所属すること。
定住集団による、保証。
定住集団による、裏付け。
それを、得ること。
それを、所有し続けること。

その実現を、根本的に、重視すること。

そうした裏付けが無い主張。
その内容を、蔑視し、無視すること。
例。

出版社を経由せずに、出版された、書籍。
その内容を、蔑視し、無視すること。

定住集団から与えられる、社会的な肩書。
その所有を、重視すること。
例。
大学教授の肩書。
役所や大企業における、管理職の肩書。

定住集団による、身分的な裏付け。
それらを持たない人々。
彼らの主張。
その内容を、蔑視し、無視すること。

そうした定住集団。
それが、大きく、有名なこと。
そのことを、重視すること。

女性は、最初から、定住集団のメンバーとして、有利に扱われること。

（９）
彼ら自身の社会の内部における、真実。

それを、機密情報として、専ら、扱うこと。

その内容を、解明すること。
その内容を、外部に対して、放流すること。
それらを、実行すること。
そのことを、社会的に、禁止し、阻止すること。

その実行を、強行した人物。
その人物を、社会の内部から、追放して、生きていけなくすること。
その人物を、国外退去や、自殺に、追いやること。

彼ら自身の社会。
その真実。
それを、決して、解明しないこと。

（１０）
その時々の、外部の有力思想。
その内容が、日本国内へと、流入すること。

そのことに対して、忠実な追従を、行うこと。
その最新の内容を、教条的な態度で、丸暗記すること。

それを、以下の内容として、専ら、捉えること。
世界社会における、普遍的な真実。

日本人の子供や学生に対して、その内容のみを、専ら、教えること。

（初出2021年3月。）

日本定住集団の社会の特徴

以下、日本社会、日本の定住民の特徴がどのようなものか、説明を個別に行う。

（１）『対人関係の重視』

「対人関係を重視すること。つながりを指向すること。縁故主義であること。
日本の定住民は、対人関係を本質的に重視する。
彼らは、無機的な物質よりも、人間の方に興味が行く。
彼らは、人間関係、縁故、コネ、人脈の構築に注力し、得意とする。
彼らは、人と人とのつながり、絆を重視する。
政党などで、明確な目標論争やビジョンの相違によってグループができるのではない。
彼らは、「私は、あの時、○○先生に○○でお世話になったから、○○先生の門下に入ろう」といったように、人物や対人関係本位で縁故関係を作る。
それが派閥、学閥等となって、社会を動かしている。
彼らは他人の気持ちに敏感で、人の心の動きを読むことや、心理学

やカウンセリングに関心を持つ人が多い。
彼らは、無機的な機械、ロボットをも、ヒューマノイドとして人間化してしまう。
彼らの考え方は、小さいときから人形や周囲の人間に興味を惹かれて、気に入られるように行動する女の子の考え方と、考え方が一緒である（男の子のように、無機的な機械や物質に興味を惹かれる度合いが低い。）こと。
（ＶＳ欧米人（移動生活民）：彼らにとって、対人関係は、何か目標を実現するための手段に過ぎず、一時的なものである。彼らにとっては、つながることよりも、独立して自由に動けることが重要である。）

（２）『コミュニケーションの重視』

「コミュニケーション、話し合い、打ち解け合いを重視すること。
日本の定住民は、対人関係構築、維持のために、会社とかで、コミュニケーション、通信をやたらと重視する。
彼らは、周囲の親しい他者と対話、会話をする、しゃべる、打ち解け合うのを好む。
彼らは、ペラペラおしゃべり可能な電話や、グループでの頻繁なメッセージのやりとりな可能なLINEを好む。
彼らは、親しい相手との手紙、メール、メッセージの、間を置かない頻繁なやり取りを望む。
彼らは、対人関係維持のために、要件が無くても、長話するのを好む。
彼らは、直接対面でのコミュニケーションを好む。
（ＶＳ欧米人（移動生活民）：彼らにとって、コミュニケーションは、何か目標を実現するための手段に過ぎず、それ自体が目標になるものではない。）

（３）『対人関係の累積』

「対人関係が累積する。リセット出来ないこと。転身が難しい。
日本の定住民の場合、対人関係が、世代を重ねてどんどん累積していく。
彼らは、対人関係、コネの切断、リセット、初期化が出来ない。
彼らは、一度できた関係やコネをそのままずるずる続け、保持していく。

彼らは、ある分野、領域で一度できたコネを気軽に切って、別の分野、領域に転身することを嫌い、一度入った分野、領域にずっと居続けることを要求する。
彼らの場合、友人関係とか、学校、職場に入った最初の一瞬で、その後がずっと決まってしまう傾向がある。
彼らが、別の領域、組織集団に転身、「転定住集団」しようとしても、既にその領域に既存の対人関係が累積して出来上がってしまっているため、後から入り込む、入れてもらうことが容易には出来ない。
あるいは入れてもらったとしても、彼らは、身分、立場の低い新入り扱いになってしまう。
（ＶＳ欧米人（移動生活民）：彼らは、対人関係は簡単にリセット出来て、次の新天地への転身が可能である。）

（４）『対人関係の癒着』

「対人関係が長期持続する。対人関係が癒着、粘着しやすい。公私混同、談合体質であること。
日本の定住民の場合、いったん出来た対人関係が長期にわたって延々と持続する。
彼らは、対人関係が粘着的であり、しつこい。
彼らの間では、一度始まった会話や説教が延々と長引き、なかなか終わらない。
日本定住集団の社会は人間関係が納豆みたいにネバネバ、ベタベタ、ネチネチしており、「納豆社会」と呼べる。
彼らにおいては、対人関係が癒着しやすく、公私混同とか談合とか起こしやすい。
（ＶＳ欧米人（移動生活民）：彼らの場合、対人関係は短期的なもので、淡白で、あっさりしたものである。）

（５）『集団主義』

「一緒にいること、群れを重視すること。仲良しグループ形成、護送船団方式を好むこと。巻き込み、連帯責任が生じやすい。
日本の定住民は、皆で一緒にいようとする。
彼らは、群れるのを好む。

彼らは、集団、団体での行動、共同作業を好む。
彼らは、集団主義である。
彼らは、一人では行動できない、行動するのを好まない。
彼らは、互いにべたべたくっつき合おう、一緒になろうとする。
彼らは、派閥を作り、互いに主流になろうとしていがみ合う。
彼らは、一人では気が弱くて何もできないくせに、徒党や集団を組むと途端に気が大きくなって、「数の力」を頼りに大声で騒ぎ、傍若無人なことを行う。
彼らは、一人～少数を集団で寄って集っていじめるのを許容する。（多勢に無勢。）
彼らは、集団内の一体感、愛情を何よりも重んじる。
彼らは、「全社一丸となって取り組もう」みたいに、集団の一体感の強さ、一心同体であることをやたらと強調する。
彼らは、皆で一斉に集中して何かするのを好む。
彼らの社会は、互いの安全、保身を確保するため、皆で一緒に群れて、つるんで、周囲と互いに守り合う形で行動するのを好む「護送船団方式」社会である。
彼らは、皆が分け隔てなく処遇されることを求める。日本人は、食事もトイレも皆、仲良しグループでつるんで行動したがる女性と根が一緒である。
彼らは、一人が何か行動を起こすと、当人で自己完結せず、周囲を否応なく巻き込んで大事、騒動になる可能性が高い。
彼らは、起こした行動の責任が、当人一人の責任にとどまらず、グループとかの連帯責任になりやすい。
彼らは、周囲と無関係でい続けることが難しい。
（ＶＳ欧米人（移動生活民）：彼らは、グループよりも一人で独立、自立しているのを重視する。彼らは、互いに訴訟し合うのを好む。彼らの場合、責任は、個人で動く結果、自分一人で取る結果になる。）

（６）『所属の重視』

「所属を重視すること。包含感覚、胎内感覚を重視すること。集団自決を好むこと。
日本の定住民は、所属を重視する。
彼らは、必ずどこかの集団に所属しようとする。
彼らは、どこかに所属していないと不安である。
彼らは、所属する集団から排除されるのを何より恐れる。
彼らは、集団に属さずに、一人で独立、自律するのを根底で嫌う。

彼らは、どこの集団にも所属していない自由な人を、フリーターとか言って軽蔑し、信用しない。
彼らは、どこの集団に入ったか、所属しているかを重視する。
彼らは、以下の行為を重視する。入ること。（入ったこと。）所属すること。（所属していること、所属していたこと。）彼らは、学校、会社の名前、ブランドを重んじる。
彼らは、正規の所属であること、その集団の身内の正社員であることを重んじる。一方、臨時の非正規社員は、同じ仕事をしていても身内に入れようとはせず、所属しているとは見なさず、待遇に格差を設ける。
彼らは、成員が、所属集団のために、我が身を犠牲にして、汗を流すことを賞賛する。
彼らは、成員が、所属集団に身も心も完全に包含、吸収され、所属集団と常に一体化して、自分があたかも所属集団を代表する一人であるかのような心意気で行動することを重視する。
彼らは、成員が所属集団の身体の一部として動くことを重視する。
彼らは、所属集団に、成員一人ひとりが完全に溶解、融解しきって、所属集団それ自体がひとまとまりの人格を持って動くような印象を外部に与えようとする。
彼らの所属する集団が、成員に対して、夫の浮気を疑う奥さんのように嫉妬深い。
所属する成員は、会社、学校とかの所属集団のために、休日、残業時間も含めて、全ての時間を浮気せずに１００パーセント入れあげて、捧げることを強いられ、要求される。
あるいは、成員は、所属集団との、可能な限り長時間の生涯にわたる付き合い、長時間残業を要求される。所属集団への連続所属が求められる。
彼らは、所属集団に絶えず一体化し、同調し、気配りし、尽くす姿勢を見せないと、所属集団の上位者によって所属を外され、集団から追い出されてしまう。これが日本定住集団の社会の生きにくさの本質である。
成員は、自分のプライベートの全てを削って、所属集団に合わせること、自分の時間の全てを所属集団のために使い切ることを要求される。（滅私奉公。）
成員が所属集団に、時間的にも、空間的にも、完全包含されることが望まれる。永続的に所属集団に所属すること。
所属第一主義であること。
会社のリストラみたいに、所属集団側で、その成員の所属を維持できなくなったら、所属集団側によって、一方的に関係が破棄され、成員は所属集団から自己都合で脱退することを強いられる。

一方、所属集団側では、いったん成員を集団の中に入れると、その成員を外に出すことがなかなか出来ない。
成員は、自分の所属集団の存続を第一に考え、その存続のために死力を尽くして、集団の全員が一丸となって最期まで戦おうとすることを要求される。
彼らは、最後まで戦ってそれでダメだった時は、所属集団丸ごと滅びようとする。
彼らは、集団自決を好む。
彼らは、集団への所属は、その集団限りで完結させよう、終わりにしようとする。成員が他集団に、捕虜とかで生きたまま拾われるのを好まない。
所属集団は、成員が一つの所属集団にのみ終生忠誠を誓うことを望み、成員が2つ以上の集団に、同時あるいは逐次に所属することを嫌う。また成員が所属集団の仕事以外の副業をすることを禁止、制限しようとする。
所属集団の存続が行われれば、自分はその犠牲になってどうなってもよいと考えることが求められる。
彼らは、集団の成員が、所属集団のために、特攻隊のように、進んで犠牲になることを尊ぶ。
所属集団は運命共同体であり、成員が所属集団と最後まで運命を共にすること、「死なばもろとも」、集団自決を求める。
日本社会では、学校 (大学とか) を卒業すると同時にどこかに入社する内定を予め取って、所定の日にきちんと新卒で入社しないと、所属集団から外れた、放り出された既卒扱いされて、どこの会社にも入れてもらえなくなってしまう。 (既卒差別。)
日本社会では、学卒だけでなく転職の場合でも、今までの所属集団から時間的に切れ目なく次の所属集団に入らないと行けない。彼らは連続的所属を重視する。
日本社会では、所属において、どこの定住集団にも所属しないフリーの期間があると、あるいは定住集団への所属の履歴にブランク、空白の期間があると、定住民としての信用度が低下して流民化したと見なされ、会社とかでなかなか採用してもらえない (履歴ブランク差別) こと。
日本の定住民は、中の一員で有り続けること、外に出されないことを望む。
彼らは、転職を、所属集団からの排出と見なし、嫌う。
彼らは、転職を、スキルアップではなく、前にいた集団で、他の成員とうまくやっていけなかったため、外に出されたか、自分から外に出たとネガティブに捉える。
日本社会では、所属集団を出て行くことが、元の意図、意思に関わ

りなく、裏切り者、マイナスポイントとみなされ、非難される。所属集団を自分の意思で出ていく回数が増えるほど、社会的信用度が低下する。
日本社会では、成員は所属集団の用意した人生のレール、エスカレーターから決して外れない、降りないことを要求される。成員が所属集団専用の人生のレール、エスカレーターから外れない、降りない限り、成員の生活は所属集団である定住集団が保証する。一方、成員が、いったん、定住集団のレール、エスカレーターを自分から降りた、卒業した、定住集団を出た場合はその後の生活は自己責任で、所属集団は一切関与しない、助けない。その後は定住集団による援助は期待できず、自力で何とか食べて行くしかない。
彼らは、所属集団に自分が包含された感覚、所属集団が自分の母代わりとなって、あたかも自分が母の胎内にいるかのような感覚を好む。
彼らは、所属集団との一体感が極めて強い点、相手との一体感を重んじる女性優位な性格である。
（ＶＳ欧米人（移動生活民）：彼らは、どこかに所属するよりも一人で独立、自立してベンチャーするのを重視する。彼らは、所属することによって生じる束縛を避け、フリーを好む。）

（７）『定住の重視』

「定住、定着、根付きを重視すること。継続を重視すること。専門家を重視すること。固執すること。
日本の定住民は、定住集団落での居住する土地とか、勤め先の官庁、会社とか、一箇所に定住、定着して長期間根付くのを好む。
彼らは、土着を好む。
彼らは、転出して、出ていく人を裏切り者呼ばわりして嫌う。「転定住集団」することを嫌うこと。
彼らは、定住しない浮き草、根無し草のような、永遠の旅人のような人たちを軽蔑する。
彼らは、あるいは、転職を繰り返したり、一つの職場に定職を持たない人を信用しない。
彼らは、住居でも職場でも、一箇所に腰を落ち着けて、その場で居心地の良い、長期間居着くことを目的とした巣作りをすぐ始めようとする。
彼らは、重心の低い、腰の重い、一箇所に腰を落ち着けてそこから動こうとしない女性優位な性格である。

彼らは、学者とか、役者とか、早いうちから一つの分野を専攻して、そこに腰を落ち着けて、根付いて、浮気せずに、その専門の一本道をずっと継続して歩むことを重視する。
彼らは、専門家を重視する。
彼らは、継続は力なりという言葉を重んじる。
彼らは、数多くの専門外のことに多様な関心を持って首を突っ込む人、専門を持たない、決めない人のことを信用せず、軽んじる。
彼らは、自分の代々住んでいる土地のことや、あるいは、自分の専門分野に付いては何でも知っていて、答えられないことが無いのを当然とする。
彼らは、専門知識面での百点満点を指向する。
彼らは、知らない、質問に答えられない、他の人が答えられると恥ずかしいと考える。
彼らは、自分が回答可能な範囲を狭く決めておいて、その範囲内では何でも答えられるようにすることで、専門家としての自分の高いプライドを維持しようとする。
彼らは、知っていること、知識があることを第一と考え、知識を学習すること、暗記することにエネルギーを集中する。
彼らは、学殖のある知識人、学者を重んじる。
彼らは、国会の議論とか、外交とか、自分が根を下ろした今までの意見に、固執して、柔軟に譲ろう、意見を変えようとしない。
彼らは、自分が譲ったら、変えたら負けと考えがちである。
彼らは、譲歩の契機となる対話や審議を拒否し、会議を欠席しようとする。
彼らは、あるいは、話し合いがいつまでも平行線で、押し問答となり、強行採決を繰り返す。
（ＶＳ欧米人（移動生活民）：彼らは、どこかにずっと定着するよりも一人でどんどん新天地へと移動していくのを重視する。彼らは、新分野への新規参入能力、新規アイデア、知見を生む能力を重視する。）

（８）『同調主義』

「同調性が強い。画一、横並び、流行、トレンドを重視すること。相対評価を好むこと。嫉妬心が強い。
日本の定住民は、同調性が強い。
彼らは、流行、協調性を重んじる。
彼らは、周囲の流行に敏感であり、流行に振り回される。

彼らは、映画やアニメとか、メジャーな流行に皆で追随しようとする。
彼らは、付和雷同を好む。
彼らは、トレンドに合わせて動くのを好む。
彼らは、互いの間の気配り・足の引っ張り合いが得意である。
彼らは、みんな一緒に、横並びでいること、分け隔てなく同じであることを強要される。
彼らは、授業とか一斉に行うのを好む。
彼らは、周囲について行けない「落ちこぼれ」を嫌う。
彼らは、周囲との協調性や気配りをやたらと重視し、「出る杭は打たれる」みたいに、遅れてお荷物になる人間、周囲に歩調を合わせない独立独歩タイプの人間を、寄って集っていじめる。
彼らは、自由、フリーを本質的に嫌う。
彼らは、相互牽制、嫉妬心が強く、行くならみんな同時に同じところに同調して行くことを望み、誰かが一人だけ抜け駆けをしようとするのを許さない。
彼らは、人間や組織の成績評価を、偏差値を利用して、周囲との相対評価で決める。
彼らは、自分に対して気分を害する人が出ないように、誰に対してでも八方美人的に平等に配慮する。
彼らは、嫉妬深く、他の人が自分より上位に行くこと、良い思いをすることを全力で阻止しようとする。しかし、他人が上に十二分に行って手の届かない存在になると、途端にその他人のことを上位者扱いして崇拝し媚びを売り出す。
彼らは、常に他者、他社と自分との立ち位置を相対的に比較し、上位を行く他者、他社に必死で追いつこう、追い越そうとして、互いに自らを鍛錬し、向上させようとする。自分が周囲に対して相対的に上位者、優位者になり、下位者に対してマウンティングしたり、威張ろうとする。
彼らのこうした嫉妬心の強さが、日本社会、日本企業業績向上の原動力となっている。
彼らは、他人が自分と結果的に平等であること、同じであること、格差が無いことを指向し、その結果、社会が均質化する。それは、互いの処遇上の一体感を求める女性優位な性格である。
（ＶＳ欧米人（移動生活民）：彼らは、周囲と同調するよりも、各自が強い個性、独自性を持ってバラバラに、自分の能力を発揮できることをしようとする。彼らは、新規のトレンドを生み出し、それに真っ先に乗って、追随者を多く生み出すことに心血を注ぐ。）

（９）『同期～先輩後輩制の重視』

「同期意識が強い。年功序列、先輩後輩制、エスカレーターを好むこと。追い抜き、競争を嫌うこと。天下りを好むこと。
日本の定住民は、入社とかのタイミングを年一回とかに一斉に合わせ、同期させるのを好む。
彼らは、一緒のタイミングで同じ集団に入った人を、同期と見なして、互いに格差の無い同一、均等の待遇を求めたがる。
彼らは、同じ入社年次、同期の人たちが、揃って同期して昇進し、昇進に格差が生じないのを好む。
彼らは、エスカレーターに乗るのと同じく、年を取るに従って、役職が上に順調に昇進していく、あるいは、組織内で年を取った先輩格の人が後輩格の人よりも常に上位者扱いされる、年功序列、先輩後輩制を好む。
彼らは、官庁や大企業で、同期の関係にある人同士が、役職で上下に格差が生じた状態で互いに顔を合わせるのを嫌い、役職の低い方の人が、外局に落下傘降下する形で、顔を合わせないように組織の外に出ていくのを好む。（天下り。）
彼らは、あるいは、先に組織に入った先輩格の人が、後から組織に入ってきた後輩格の人に、昇進とかで追い抜かれることを嫌う。
（後輩格の人が先輩格の人を追い抜くこと。彼らは、それを嫌う。）
彼らは、追い越しの伴う競争を根本的に嫌う。
彼らは、後輩格の若い人が、先輩格の年取った人の上司になるのを、互いに扱いにくいとして双方で嫌う。それは、中途採用で高齢者の就職口が限られる一因となっている。
彼らは、学校での昇級や会社での昇進で、飛び級を嫌い、用意された階段を一段ずつ順次登っていくのを好む。
彼らは、いったん登った役職から降格されるのを嫌う。
こうした性格は、互いの処遇上の時間的な揃い、一体性を求める女性優位な性格である。
こうした性格は、あるいは、身の安全性を担保する前例や知識の習得を重視し、先に入社した人が、前例蓄積の度合いが大きく、無条件でいつまでも上位になると考える、女性優位な性格である。
（ＶＳ欧米人（移動生活民）：彼らは、同期にこだわらない。彼らは、若い人が年取った人よりも役職が上なのが当たり前である。彼らの場合、追い抜き、競争が日常茶飯事である。）

（１０）『物真似指向』

「物真似、コピー、合わせが好きである。
日本の定住民は、他人の物真似を好む、物まね、コピー、パクリ文化の持ち主である。
彼らは、周囲の動向、流行に必死になって付いて行こう、同調、同期しようとする。
彼らは、周囲とは別の独自の途を一人で歩むのを好まず、周囲に合わせようとする。
彼らは、個人のオリジナリティ（独創性）を、一人だけ周囲と違ったことをするのは好ましくないとして根本的に嫌う。
彼らは、周囲の他者の真似をすることで、周囲との一体感の持続を確保する。
日本定住集団の社会は、周囲と離れて一人ぼっちになるのを恐れる、皆で一緒に群れて行動するのを好む「護送船団」社会である。
それは、自分の保身に人一倍気を遣う女性優位な性格である。
（ＶＳ欧米人（移動生活民）：彼らは、独自性を好む。彼らは、個人のアイデアに基づく独創性を好む。）

（１１）『和合の重視』

「和合、一体感、共感を重視すること。
日本定住集団の社会は、集団内で、相互の一体感、共感、調和、和合を好む。「和」の社会、仲良しクラブ社会であること。
彼らは、互いに同質で同じ考えを持つことを良しとして、集団の和を乱す個人個人のバラバラで異質な強い自己主張を許さない。
日本定住集団の社会は、集団の和を乱す突出した考え、行動の持ち主を、皆で寄って集って袋叩きにして潰そうとしていじめる社会である。
彼らは、集団の存続それ自体がいつの間にか自己目的化し、集団内が喧嘩別れをして割れることを嫌う。
彼らの社会は、互いに、集団の和が保たれる方向へと、自分の行動を合わせる「迎合」「媚」社会である。
彼らは、相互の体温、温もりの感じられる、互いの距離感の無い、親近性のある、親しい相手に対してプライバシーの欠如した対人関係を好む。
彼らは、相互の間で距離を取って、対象となる相手を客観的、冷静に見ようとする科学的な行き方を、相手との関係が冷たいとして、根本的に嫌う。それは、相互の一体感、融合感を重んじる女性優位な性格である。
彼らは、揉め事とか、何事も丸く収めようとしがちである。

彼らは、訴訟、裁判を嫌い、なるべく和解しようとする。
彼らは、物事の形状で、円形、丸型、柔軟なクッションを好む。
彼らは、円満解決、大団円を好む。
彼らは、争いごとを好まない丸腰体質である。
女性は、生まれついての（生得的なこと。）集団主義者＝collectivist、同調主義者＝conformistであること。そうした性格は、いずれも、個人主義的な欧米では価値が低いが、日本社会ではメジャーである。
日本の国民性が集団主義となるのは、日本社会で女性が強い証拠である。
（ＶＳ欧米人（移動生活民）：彼らは、意見の対立や訴訟、戦争を厭わない。彼らは、人と意見が違っていて当たり前である。）

（１２）『小グループ間の無関心』

「小グループ同士がバラバラ、無関係、無連携、無関心、縦割り、不仲である。
日本の定住民は、互いに一体感の持てる交遊の範囲を個別に狭く限定し、互いに独立した、外に向かって閉じた小さな集団、サークル、派閥を沢山作りたがる。（クラス女子高生の生成する仲良しグループなど。）
日本定住集団の社会では、学校、会社とかで、メンバーの形成する社会集団が、小さく固まり、個別に小さく互いにバラバラになりやすい。
複数の小さな仲良し集団同士が、互いに閉鎖的、排他的、不仲である。
そのため、各々独立、孤立した個別小集団同士の意思疎通がそのままでは不足になる。
全体集団、全体組織がバラけたままで統合されにくい。全体集団、全体組織が、統制が取れない、互いに無関係で動く状態になってしまいがちである。
中央官庁とかで、より小さなグループのまとまりが、より大きなグループのまとまりより優先される。（国益より省益、局あって省無し。）
あるいは、政党で、派閥がそれぞれ独自に勝手に動いて、政党全体のまとまりを欠きがちである。
集団の下位グループが、互いに連携しようとせずに、勝手にバラバラに重複して動いて、その集団や社会全体の利益を損なう、縦割り

の弊害が発生しやすい。
日本定住集団の社会では、そうした閉鎖的個別小集団間の間を取り持って、相互の意思疎通を図り、何とか互いに一体感を持たせ、全体の統率を持たせることが課題になる。
彼らは、個人ではなく、自分たちのグループが独自と言われるのを好む。
彼らは、個人が周囲からかけ離れて突出するのは好まないが、グループごと突出するのは、存在を強く主張でき、グループのイメージを強くすることにつながり、自己の保身に有利となるので良いとする。
彼らは、他所のグループや国と違う、他に無い独自、独特の文化を持つと言われると喜ぶ。
（ＶＳ欧米人（移動生活民）：彼らにとって、グループは一時的なもので、個人単位でバラバラ、無関係である。彼らは、自分の利益のために、互いに関心を持ちドライに連携しようとする。）

（１３）『被保護への欲求』

「守られたい、頼りたい、養ってもらいたい、甘えたい、寄生したい心理が強い。
日本の定住民は、一人では不安を感じる度合いが強く、保護されたい、守ってもらいたいという気持ちが強い。
彼らは、依存心が強い。
彼らの間には、甘えの心が充満している。
彼らは、官庁や大企業といった、大組織への依頼心、帰属意識、甘えが大きい。
彼らは、一人で自立するのは不安であり、誰かに助けてもらいたがる。強い者になびくこと。
彼らは、あるいは、誰かに寄生して養ってもらいたがる。「寄らば大樹の陰」ということわざが、この辺の事情を明示している。
彼らが、就職のとき、大きな会社を選びたがるのもこの一例である。
彼らは、ひとりで外部に露出するのが不安であり、アメリカのような強い国に頼ろう、守ってもらおうとする。
彼らは、強いもの、お金のあるものからおこぼれを頂戴しようとする、集り根性が強い（例えば、政府から公共事業費を少しでも多く分配してもらおうとする等）こと。
日本人の性格は、自己保身に気を遣い、何事も優先して守られる、

エスコートされるのを好む女性優位な性格である。
（ＶＳ欧米人（移動生活民）：彼らは、自分の身は自分で守る。彼らは、自助を基本とする。）

（１４）『権威主義』

「権威主義であること。批判、反論を許さないこと。心が傷つきやすい豆腐メンタルである。
日本の定住民は、権威、ブランドに弱い。
彼らは、権威主義である。
彼らの文化は、媚の文化、迎合の文化である。
彼らは、自らの保身のため、少しでも権威ありそうな、主流派を形成している人、あるいは、大学、病院のような知的権威のある機関に属する教師や医師を、「先生」と呼んで、その後を追従し、ペコペコする。
彼らは、自分も権威ある者の後ろを歩めば、安全であり、威張っていられると考える。
彼らは、あるいは、権威ある人の言う事を聞いていれば、大丈夫、間違いないと考える。
彼らは、自分の身の安全や、自分の判断の正しさを保証してくれる、外部のより大きな存在を求めたがる。
彼らは、自分より強そうな者に対しては、ひたすら媚を売り、ペコペコするが、ちょっと弱そうだと、途端に強気に出て、イヤな仕事の押しつけや、恐喝まがいのことをする。
彼らは、自分を権威付け、高く見せるために、評価の定まったブランド品を進んで身に付けようとする。
彼らは、欧米列強の文物を、権威があるとしてやたらと崇拝する。
彼らは、これを信じておけば間違いない定説とされる学説を、宗教のように信仰し、それに対して批判したり、異を唱えることを認めない。
彼らは、自分を押し倒し、圧倒した強大な存在に対して、進んでその色に染まる。あるいは、盲目的に追従し、お伺いを立てること。
彼らは、先生や先輩とかに対する口答え、批判、反論を、相互の一体感が損なわれ、言われた方の威信に大きな傷が付くとして許さず、絶対服従を強要する。彼らは自分への批判に弱く傷つきやすい豆腐メンタルの持ち主である。それは、自らの保身のため、権威に寄りすがろうとする点、女性優位な性格である。
（ＶＳ欧米人（移動生活民）：彼らは、権威に盾付き、批判、反論

の自由を求め、行使するのを好む。）

（１５）『リスクの回避』

「安全、保身第一であること。不安感が強い。退嬰的であること。リスク、チャレンジを回避すること。独創性が欠如する。
日本の定住民は、安全第一、自己保身第一で、不安を感じる度合いが強く、臆病で退嬰的である。
彼らは、冒険しない。
彼らは、ベンチャーを嫌う。
彼らは、失敗を怖がる、許さない。
彼らは、前例がないと何もできない。
彼らは、独創性が欠如している。
彼らは、例えば、人文社会科学分野では、欧米学説の後追いばかりやっている。
彼らは、既存の学説を乗り越えて、新たな学説を作ろうとする気概に乏しい。
彼らは、既存学説との、同化・一体化の力が強過ぎる。
彼らは、未知の分野はどんな失敗をするか分からないので、怖い、として、手を出したがらない。
彼らは、先頭に立たず、欧米の先駆者の後を追う方が安全である、と考える。
彼らは、危ない、リスキーなこと、未知の新しいことはしない。
彼らは、モルモット（実験台）になるのはいやである。
彼らは、より危険で風当たりの強い一番手を嫌い、より安全で楽な二番手で行こうとする。
彼らは、皆を先んじて率いる必要がある、より大変なリーダーであるより、ただ付いて行くだけで良いフォロワーであろうとする。
彼らは、チャレンジを心の底で嫌う。
日本定住集団の社会は、一度失敗すると、敗者復活戦、再チャレンジが難しい。
日本社会は、新卒で大会社とかに入れないと、既卒扱いになって、二度と入ることが出来なくなる仕組みになっている。
日本の科学技術が欧米より常に遅れる、後進性のくびきは、不安の強さ、安全指向、退嬰性、前例指向といった、女性性と関係があり、日本社会で女性が強い証拠である。
（ＶＳ欧米人（移動生活民）：彼らは、安全、保身にこだわらず、リスクに積極的にチャレンジする。彼らは、独創性に富んでいる。）

（１６）『前例踏襲指向』

「前例、しきたり、レール偏重であること。前例の小改良、磨き上げが得意である。先輩後輩関係がきつい。
日本の定住民は、前例となる知識、ノウハウの急速な学習、消化、吸収に長けている。
日本社会は、明治維新の時とか、欧米の新知識を素早く吸収、学習し、程なく我が物にすることに成功した実績がある。
彼らは、学校や学習塾、予備校とかで、前例となる知識、ノウハウの学習にとかく熱心である。
彼らの社会では、自身への前例、しきたりの蓄積の度合いに応じて上下関係が決まる。
彼らの社会では、前例、しきたりを自身の中に豊富に持っているほど集団や組織の中で上位者になれる。
彼らの間では、年功序列、先輩後輩関係がきつい。
彼らの社会では、集団や組織で、局のような古株が威張っている。
彼らの社会では、新人いじめが当たり前に行われ、いずれの組織においても、新入りの地位が低い。そうした社会関係は、家庭における嫁姑関係に通じる。（家風習得の度合いの面で、姑が先輩、嫁が後輩、新人。）
彼らの社会では、前例となる知識や技能を持っている者が、理屈抜きで偉いとされ、一方、若い新人の方が豊富にあると考えられる独創性は評価されない。
安全性を第一と考え、未知の危ない道を通ることを避けて済ませるには、取るべき行動の前例となる経験知識を豊富に積んでいることが求められる。そうした前例としての経験知識は、年功の上の人たちがより多く持っている。
彼らは、既に誰かが先行して成し遂げたオリジナルの前例を吸収、学習して、その小改良を着実に重ね、磨き上げを重ねて、競争力を付けることで、オリジナルを凌駕し、競り勝つこと、打倒することに長けている。
彼らは、人生で、決まったレールの上を進むのを好み、レールから外れることを恐れ、歓迎しない。
そうした性格は、未知の危険を避け、前例のある道のみを行こうとする点、女性優位な性格である。
（ＶＳ欧米人（移動生活民）：彼らは、前例、しきたりにこだわらず、積極的に破壊、批判して、自分の力で新しい知見を生み出し、それを普遍的に普及させようとする。）

（１７）『後進的、現状維持的』

（１７－１）「思考が伝統的、封建的、後進的である。
（１７－２）「無競争、無風、停滞、（既得権益とかの）現状維持が好きである。不変を好むこと。事なかれ主義であること。
（１７－３）「外部からの先進的考えの流入に抵抗するが、いったん突破されると諾々と受容するものの、流入が止むと元に戻る。
日本の定住民は、考え方が伝統的、後進的、遅滞的、封建的である。
彼らの社会では、姑、局のような古株が偉くて、新入りが古株を超えることができない。
彼らは、古い伝統に縛られ、前例やしきたり、現状維持をひたすら重視する。
彼らは、集団内部での内発的な進歩的な新たな試みを危険であるとみなして皆潰してしまう。これは「姑根性」という言葉で表現できる。
彼らは、新参者が古参者を後から追い越す可能性のある競争を嫌い、既存の安寧秩序を守ろうとする。
彼らは、波風が立つのを嫌い、無風、凪、停滞、事なかれを好む。
彼らは、既得権益とかの不変、維持を好む。
彼らは、外来の新しい文化の流入に抵抗しつつ、圧倒、突破されると無条件で受容、追随する。
彼らは、欧米とかの進歩的な文化、制度が外部からやってくることを黒船来襲と見なして、警戒し、攘夷で抵抗する。
彼らは、外部文化にいざ圧倒、突破されると、手のひらを返したように、その進歩的な考え方にほとんど盲目的に追随し、丸呑みしようとする。
彼らは、iPhoneのように、外部から入ってくる優勢で抵抗しがたい、自らの力では生み出せない、新たで進歩的な考え方、アイデア、製品に、無条件、無批判で我先に追随し、取り入れよう、真似しよう、小改良しようとする。
彼らは、率先して取り入れたこと、導入した結果を、周囲に対して箔付けして自慢する。
外部からの（先進的なこと。）考えが入り込むことに抵抗しつつ、いったん突破されると諾々と受容、丸呑みすることは、男性優位な精子と、女性優位な卵子の受精関係に似ていること。（卵子的行動様式。欧米的＝精子的。日本的＝卵子的。）

しかし、
彼らが、そのように進歩的で新しい、競争的な態度を取るのは、外部から優勢な新しい考えが存在、流入していて、それに対処する必要が生じている間だけに止まる。
彼らは、外部からの新規文化の流入が止まると、元の無風の凪状態、現状維持的、既得権益維持的な気風に戻る。
彼らは、天皇制のように、ずっと不変なもの、永続するものを好む。
彼らは、変化を嫌う。日本社会の、進歩的な欧米社会に比較した場合に見られる遅滞、封建制の本質は、危険やチャレンジを避けて安全な前例をひたすら守ろうとする女性、母性にある。
（ＶＳ欧米人（移動生活民）：彼らは、思考が、伝統に囚われず、先進的である。彼らは、競争、変化を好む。彼らは、外部から先進的な考えを当初から積極的に歓迎し、発展させようとする。）

（１８）『恥、見栄の重視』

「恥、見栄を重んじること。人付き合いで表裏がある。内部問題を対外的に隠蔽すること。綺麗事、美辞麗句を好むこと。公式、公開の発言の場で沈黙すること。
日本の定住民は、自分に対して向けられる他者の視線や評価を非常に気にする「恥の文化」の持ち主である。
彼らは、自分が周囲にどう思われているか盛んに気にして、周囲によく思われよう、上位に思われようとして、いろいろ気を遣ったり、演技をしたりする。
彼らは、八方美人であり、周囲の国にいい印象を与えることに懸命である。
彼らは、周囲から自分がどう思われているか、自分が気に入られているかどうかが気になって仕方がない。
彼らは、自分が周囲に気に入られるように、盛んに媚びたり、いい子ぶったりする。
彼らは、自分の周囲に対する印象をよくするために、やたらと気配りをしたり、外面的な見かけを整えたりすることに忙しい。彼らは、外部に露出した表向きの面と、閉じた身内での裏の面が別々であり、対人関係で表裏がある。
彼らは、面目、体面をとても気にする。
彼らは、常に人の目が気になって仕方がない。
彼らは、他の人に見られているという感じが強い。
彼らは、他人の視線を前提とした見栄張りの行動を行う。それは、

「見栄の文化」である。
彼らは、自分が他人にどう見えるかについて自意識過剰である。他人の視線を前提とした化粧や服装チェックは、女性の方がより行う。
彼らは、自分や自分たちのグループが内部に問題を抱えていることを、外部に対して必死になって隠そうとする。
彼らは、問題が無い振りをしようとする。
彼らは、良い格好をしようとする。
彼らは、対外的に良い子でいようとする。
彼らは、「ぶりっ子」をする。
彼らは、自分についての良くない噂が広まる、騒ぎが起きるのを何よりも恐れる。対外的に自分が良く見られたい、受け入れられたいとして、問題を隠すなど自分の印象操作することは、女性の方がより行う。
彼らは、感覚的に美しい快い美辞麗句、スローガンを使うのを好む。
彼らは、大勢がいる中で発言することで、皆の注目を集めてしまう、失笑を買うのが恥ずかしくて、他人の目が気になって発言できない。
彼らは、シャイである。
彼らは、プライベートな小グループの中だと発言できる。
（ＶＳ欧米人（移動生活民）：彼らは、人目を気にせず、自分の良かれと思うことを恥も外聞も無く堂々と行う。彼らは、セキュリティのために内部プライバシーを重んじる反面、情報のオープンな提示に積極的である。彼らは、公開の場で歯に衣を着せない発言をして物議を醸す。）
R.Benedictが、「菊と刀」の中で唱えた、罪の文化・恥の文化との関連では、。
男性は、「罪の性（ジェンダー）」であること。彼らは、誰かに見られていなくても、悪いことをしたとして罪悪感を感じ、償いの行動を起こす。男性は周囲の動向とは独立して、独りだけで罪悪感を感じる点、ドライであり、罪の文化（男らしい文化）の基盤をなすこと。
女性は、「恥の性（ジェンダー）」であること。女性は、「赤信号、皆で渡ればこわくない」といったように、罪悪感を感じるかどうかが、周囲の視線の有無や動向に左右される点、ウェットであり、恥の文化（女々しい文化）の基盤をなすこと。女性は、他者に「見られている」感が強く、他者の視線を前提にした自己アピールである化粧・服装・ファッションを好む。
日本が「恥の文化」に基づく社会となったのは、「恥のジェンダー

＝女性」が、社会の根幹を支配しているからである。

（１９）『気配りの重視』

「配慮、気配りを重視すること。遠慮、引きこもりがち、孤立しがちであること。
日本の定住民は、周囲の他者に対して、心情的に細やかな配慮、気配りをすることを重視する。
彼らは、周囲に対して温かい思いやりの気持ちを持って接することを重視する。
彼らは、温もりに満ちた社会の実現を目指そうとする。
彼らは、互いに、周囲の他者に迷惑をかけないようにと遠慮して考えるあまり、個人、家族単位で、周囲との交渉を避けて、各々引きこもりがち、孤立しがちになりやすい。
彼らの社会は、社会の統合が弱い。
彼らは、無縁社会を招きやすい。周囲への細やかな気配りは、女性のほうが得意である。
（ＶＳ欧米人（移動生活民）：彼らは、直接的な物言いを好み、配慮、気配りに欠ける。彼らは、遠慮をせず、どんどん物を言う。彼らは、積極的に交渉する。）

（２０）『みそぎの重視』

「清潔さを好むこと。みそぎをする、洗い流す、総取り替えするのを好むこと。
日本の定住民は、自分の心身を、洗い流して清めるのが好きである。
彼らは、汚れ、穢れを嫌う。
彼らは、清潔、きれい好きである。
彼らは、河川とかで清流を好む。
彼らは、自分の吐く息等が他の人に臭ったりしないかどうかのエチケットにやたらとうるさい。
彼らは、自分の（他人の）汚れ、穢れが他人に（自分に）回らないか、転移、伝染しないか、影響を及ぼさないか、とても気にすること。
彼らは、他人に対して、汚れていない、綺麗な、清らかな、良い印象の自分を見せようとして、やたらと自分の髪や身体を洗うのを好む。

彼らは、綺麗な水流に入って心身の汚れ、穢れを洗い落としたつもりになる「みそぎ（禊）」をするのを好むこと。
彼らは、風呂に入るのを好む。
彼らは、失敗や過去を「水に流して」済まそうとする。
彼らは、汚れのない白装束を、正月の巫女衣装みたいに神事等で着るのを好む。
彼らの考え方は、自分の身体の汚れに対して自意識過剰になって毎朝シャワーやシャンプーを繰り返すのに余念が無い女子中学生と考えが一緒である。
彼らは、互いに（女性的に）自己の保身を図るために、護送船団方式で互いに密集して一体感を持って共同生活することを指向すること。
彼らは、そのため、互いに近場の他人の（自分の）身体とかの汚れが自分に（他人に）付かないか、伝染しないか敏感になっていること。
彼らは、新しい導入物に感化されやすい。
彼らは、新たに外から圧倒的な力を持って入ってきた、あるいは国内から新機軸を打ち出して成功した新興勢力の文化に社会全体が一瞬のうちに簡単に感化されてしまう。
彼らは、今まで自分たちが大切にしてきたはずの古来の文物を、新しいものと総取り替えで簡単に二束三文で投げ捨ててしまう。
明治時代初期の西欧文物崇拝と廃仏毀釈や、Apple社のiPhone導入がその好例である。
彼らは、新しい権威やカリスマが生み出した、新たな力ある文物に、各自が自分だけ乗り遅れないように必死で追随しようとする。
彼らの社会では、社会全体が一斉に新たな文物に乗り換えて、古い殻を脱ぎ捨てる現象が起きる。
彼らは、各自が周囲の動向に敏感で、少しでも遅れて仲間はずれになるまいと必死で同調する。
彼らは、また力あるものに我先に順応して我が身の保身を図ろうとする。それらは、いずれも女性優位な性格である。
（ＶＳ欧米人（移動生活民）：彼らは、汚れに寛容であり、シャワーの回数が少ない。彼らは、新文物が導入されても、古いよりオリジナルな思想に基づくものは捨てない。彼らは、各自、互いに一人我が道を行くのを許容する。）

（２１）『責任の回避』

「責任を回避すること。決定、判断を停止、回避、先送りするこ

と。無責任であること。匿名行動を好むこと。
日本の定住民は、責任回避、責任転嫁の傾向が強い。
彼らは、自分の取った行動の結果生じる責任を一人で負うのをいやがり、皆で連帯責任にして、一人当たりが負うリスクを軽くしようとする。
「赤信号皆で渡れば怖くない」という格言が流行したり、太平洋戦争の敗戦責任を「一億総懺悔」して取ったつもりになっていることがその現れである。
彼らは、そうすることで失敗の責任を取らされて危ない目に会うことを避けることができる。（例。社会的生命を失うこと。それを避けることができること。）
彼らは、あるいは、物事の決定にできるだけあいまいな玉虫色の態度を取ることで、責任の所在を不明確にして、責任逃れができるように逃げ道を作るのが上手である。
彼らは、そもそも責任が生じる意思決定、判断すること自体を回避、停止、保留する。
彼らは、自分からは決断せず、誰かに決めてもらおうとする。
彼らは、他の責任を取れる人に判断を一任して、その判断が下るまで自分からは決定せず、待ちの姿勢を取り、判断対象を体良く無視し続ける。
彼らは、判断を他人に決めさせることで、決めた他人に決定責任を押し付ける。
彼らは、自分から進んで動くと、行動責任を問われるので、自分からは進んで動かず、誰か他の人がモルモットになるのを待つ。
彼らは、自分では責任を取りたくないので、誰か自分の行動に責任を取ってくれる指導者の存在を望む。
彼らは、決定、決断を先送りする。
彼らは、無責任である。
彼らは、自分が取った行動について、後々まで自分がやったという証拠が残って責任追及されるのを避ける。
彼らは、そのため、自分が誰かを、他者に特定されるのを恐れ、匿名でいようとしたがる。
彼らは、証拠が残るのを好まない。
彼らは、SNSとかで、個人情報や実名、顔を出すのを好まない。
彼らは、失敗時、潔く責任を取ろうとせず、責任逃れの言い訳をするのを好む。それは、社会的に、責任を取るのを免除されやすい女性優位な性格である。
（ＶＳ欧米人（移動生活民）：彼らは、個人行動基本のため、責任は回避できない。彼らは、決定、判断を急ぐ。彼らは、責任感がある。彼らは、実名行動、顔出しを好む。）

（２２）『なつきの重視』

「可愛がり、なつき、情けを重視すること。
日本の定住民は、成員が、その中枢に深く入り込んだ所属集団内で、上位者に可愛がられること、上位者になつくことを重視する。
彼らは、旧日本軍将校に見られるように、失敗しても、責任を問われず、仲間内で内輪でなあなあで、もみ消し、穏便に済ませようとする。
彼らは、失敗した当人を冷たく切り捨てることができず、情けをかけようとしたがる。
彼らは、情状酌量で処分が甘くなる。
彼らは、冷徹さを嫌い、情緒的な対応を好む点、女性優位である。
彼らは、可愛い部下や生徒に対して、えこひいきをする。
（ＶＳ欧米人（移動生活民）：彼らは、冷徹な能力主義を貫徹し、失敗に容赦しない。）

（２３）『事前合意の重視』

「事前合意を重視すること。いったん合意した流れ、方針の変更が困難である。慣性で進もうとすること。
日本の定住民は、予め、利害関係者同士で、内密に議論して、落とし所＝事前の合意点を決めておくのを好む。
彼らは、関係者への事前の根回し、談合を好む。
彼らに、前もって、事前合意を取らずに、突然新たな話を進めよう、決めようとすると、反発、拒否されること。
彼らは、国会とかで、その場その場の即興の公開討議を嫌い、事前の密室での利害関係者を集めた交渉と合意形成を好む。
それは、予め互いの合意、賛成を取り付けておくことで、互いに和合することを好む女性優位な性格である。
彼らにとっては、既に、皆で合意、決定した内容、方針や流れを、後から変更する、覆すことが根本的に難しい。
彼らは、太平洋戦争で、戦局が不利になるという分析結果が政府内で後から出ても、既に戦争をやることで首脳部で合意ができていたので、方針を変えることが出来なかった。
彼らは、いったん決めた方針にとって有利な数字合わせを後付けで行う。
彼らは、いったん進むと決めた流れの方向に、不都合が起きても、

そのまま慣性の力でずっと進もうとする。
それは、いったん形成した合意による皆の一体感、仲良し状態を後から人為的に壊してしまうのを怖がる女性優位な性格である。
（ＶＳ欧米人（移動生活民）：彼らは、リアルタイムの討議による合意形成を好む。彼らは、方針変更をあっけなく大胆に行う。）

（２４）『失敗恐怖症』

「プライド（良い格好を重んじる度合い）が高い。失敗恐怖症であること。
日本の定住民は、プライドが高い（皆の前で良い格好をしようとすること。）こと。
彼らは、失敗して、皆の前で自分のプライドが傷つくのを何よりも恐れる。そうした性格は、英語とかの語学の授業で顕著である。
彼らは、他人が失敗するのを見ると馬鹿にして総攻撃を加えて袋叩きにしたり、陰口を叩いたり、触れ回ったりする。
彼らは、本当は自分が公衆の面前で失敗するのが怖くて仕方がない。
彼らは、失敗を、誰でもする可能性のある日常的なことと許容することができない。一度失敗すると再び立ち直る機会が社会的に与えられない。
彼らは、失敗者を日頃の鬱憤晴らしの対象として、ひたすら責め立てる。
彼らは、試行錯誤による失敗の繰り返しを避けて、誰か成功した事例はないかとひたすら探し回り、見つかったと見るや、一斉にその真似をする。
彼らは、その成功事例を究極の正解、侵すべからざる信仰対象として、それにひたすら改良の磨きをかける。
彼らは、そこから少しでも外れた者を、エラー、間違いを犯したとして直ちに叱り飛ばす。それは、自らを大切で貴い存在と見なし、自らに少しでも傷が付くのを嫌がる女性優位な性格である。
（ＶＳ欧米人（移動生活民）：彼らは、失敗を恐れない。彼らは、自分は有能だというプライドが高い。）

（２５）『閉鎖的、排他的』

「閉鎖性、排他性が強い。内外感覚が強い。入試がある。白紙採用を好むこと。思考が内向きである。閉塞感が強い。対内融通、配慮

が効く。自前で済ませようとすること。
日本の定住民は、形成する社会集団が閉鎖的、排他的である。
彼らは、集団内と外とを厳格に区別し、よそ者に対して門戸を閉ざす。例えば、中央官庁や大企業では、成員の採用の機会は、新規学卒一括採用がほとんどである。こうした組織では、白紙状態でまだどの社会集団の色（しきたり、組織風土など）にも染まっていない若者に対してのみ門戸を開き、本格的な中途採用の道は閉ざされている。
彼らは、純血性を保った自集団（「内輪」）内で他集団に対抗する形で強固に結束し、内部に縁故（コネ）の糸をはりめぐらすこと。
彼らの社会は、よそ者を入れずに内部だけで強固に結束する鎖国社会である。
彼らは、親しい、付き合い上の安全が保障された身内、内輪だけで固まろうとする。
彼らは、よそ者に対してとても冷淡である。
彼らは、オープンさが欠如している。
彼らは、内輪の会話、なれ合いに夢中で、外界について関心が薄い。
彼らは、思考が内向きである。それは、女子中学生、女子高生の仲良し集団が原型である。
彼らは、内輪での仲の良さを外部に向けてアピールする。
彼らは、内輪で浮いているメンバーを外部からは分からないように、陰湿にいじめ、差別する。
彼らの社会は、内輪から外れる、定住集団八分にされると、他に行くところが無い社会の仕組みになっている。そこで、彼らは、皆、外されないように必死になって、他の集団メンバーに配慮する。
彼らの社会では、いったん集団に入ると、定年やリストラなどで用済みになるまで、その中にずっとい続けることが要求される。（浮気をしないことを要求される。）
彼らの社会では、転定住集団の自由が存在しない。定住集団を出ると定住集団への裏切り者され、新たに別の定住集団に入れてもらおうとしても、前の定住集団で対人関係が上手く行かなかったと思われて信用されずに入れてもらえないことがしばしばである。転定住集団回数が増えるほど定住民としての評価が低下する。また、定住集団を出てから、しばらくどの定住集団にも属さない空白期間があると、定住民としての空気が薄くなって、ただの浮浪人と化したとする見方が強まり、定住民としての評価が低下して、転定住集団先が見つかりにくくなる。
彼らは、よそ者は自分たちと行動様式が異なり、何を考えているか分からないので安全でないと考える。あるいは、彼らは、よそ者

は、一緒になると自分の属する集団のしきたりや風紀を乱すことを平気でされるのではないかと不安で、安心できないと考える。
彼らは、中途採用者に対して、いじめを行ったり、新人と同じような屈辱的な扱いを強制する。
彼らは、そもそも外部から入ってくる者を、派遣社員のように、一時的、部分的にしか、自分たちの組織にタッチさせず、締め出そうとする。この場合、よそ者の許容が自身の保全に悪影響を与えるという女性優位な心配が、閉鎖的な風土を生み出す要因となっている。
なお、この閉鎖性は、自分たちの所属する身内集団内部の一体感を保つため、よそ者が入るのを防いでいるという点、女性の好きな、他者との一体融合感維持指向に通じるものがある。
彼らの社会では、人々が、あらゆる物事に内と外があると考える、「内外感覚」を持っている。
彼らは、そして、外から内に移行する「入る」という意識（エントランス）を重視すること。
彼らは、とにかく何でも入ろう、入れてもらおうとする。「入る」という意識は、相手、対象が閉鎖的な場合にのみ生じるものである。
日本人や女性が、何かと「入る」ことにこだわるのは、社会や集団が閉鎖的であることの現れである（欧米のようにオープンな社会のもとでは、人々の「内外感覚」「入る意識」は弱いと考えられる。）こと。
彼らは、あらゆる物事に、入ることが大変な入試を求める。
彼らにとっては、卵子に例えられる、外部に比べてよりリッチな栄養のある内実を持つ閉鎖空間（公務員、大企業、名門学校等）に何でも良いから入ることが、人生の目的になる。
彼らの社会は、ある人が、中に入れてもらうと、その人は、優遇され、リッチな気分を味わえる仕組みになっている。（中に入れてもらうことの例。一員になる、溶け込む、一体化すること。）
彼らは、そのように入れたことを周囲に向かって何かと自慢しがちである。
彼らの社会は、白色無垢の者のみ加入を許す。
彼らは、色付きの者の採用を嫌う。（色が付くとは、どこか別の集団に長いこと加入していたこと。）
彼らの社会は、嫁入りで白無垢の装束を着たり、会社や官庁で、特定の組織の色の付いていない新卒学生の白色、白紙採用を好む。
彼らの社会では、色の付かない無垢の状態のまま、あるいは今まで付いた色を全てご破算にして（社会的に一旦死んで）、一から所属先の新たな色に染まります、という態度を見せないと、集団（会

社、官庁、嫁入り先の家族・・・）の中に新たに入れてもらえないこと。
彼らは、新入りが、集団の既存の色を乱さないこと、集団の既存の色との調和、融合を重んじる。
彼らは、付いた色の濃いのが先輩で、薄いのが後輩であるとする。
彼らは、集団に居続けるに従って、自らに染み付く色が徐々に濃くなっていく、それに伴って他集団への転出が難しくなっていくと考える。
彼らは、学校の入学試験や、企業、官庁の入社試験のように、部外者が集団に入るために、やたらと厳しい入試を設けたがる。
彼らの社会では、集団の中に入れてもらうのが大変である。ところが、彼らの社会では、厳しい入社試験とかを突破していったん集団の中、ウチに入れてもらうことができると、途端に母の胎内にいるかのような、融通が効く、クッション感のある、柔軟な動きが取れる、温かい、利便性に満ちた、優遇された扱いを受けることが可能になる。
彼らは、役所とかで、親しい身内、内部者に対しては柔軟で融通が利く、配慮に満ちた態度を取り、部外者に対しては、杓子定規で利便性を考慮しない硬直した配慮に欠ける態度を取る。
彼らは、自分の本当の気持ち、意見（本音）は、親しい身内に対してのみ開示する。
彼らは、部外者に対しては、見かけの表面上取り繕った、上辺の気持ち、意見（建前）のみを示すこと。
彼らの間では、国外や、社外といった、外部に対して関心の薄い、所属グループ内のことに専ら関心が行く、内向き思考が蔓延している。
彼らの社会では、閉塞感が強い。
彼らの社会では、グループの中に閉じこめられている、外に出にくいという感じが強い。
彼らは、人材の調達とか、外部に頼らず、自前で（自分たちのグループ内で）全て揃えよう、済ませようとすること。
彼らは、互いに、他グループに任せず、自分たちのグループでやろうとする。
彼らの社会では、似たような内容の組織やアウトプットが、国とかで、重複して発生、生成しがちである（文部科学省の幼稚園と厚生労働省の保育所とかの二重行政がその例である。）こと。
彼らは、自分たちのグループ以外の他グループをライバルと見なして、頼ろうとせず（互いに閉じているため、頼ることが出来ず。）、自分たちのグループ内で自活、自給自足、自己完結しようとすること。

彼らは、家電製品や携帯電話とかで、機能とか全部入りのオールインワンの機種を好む。
彼らは、自分たちの領域に侵入してくるもの以外の、外部の動向に対しては、どうなろうと知ったことではないと考え、無関心である。（演習飛行をする米軍機が自分たちの領空を飛ばないと分かった場合など。）
彼らは、自分の領域、領空を直接侵犯してくる以外の他者、他グループの存在に対して、徹底的に無関心であり冷たい。あるいは、彼らは、税金を、自分たちの会社や家庭から、国とかに支払うと、自分たちの管轄外に拠出されてしまったと考え、その使い道に無関心になる。
（ＶＳ欧米人（移動生活民）：彼らは、開放的である。彼らは、開かれた空間内にいるため、内と外との区別があまり無い。彼らにとって、転出、転入が日常茶飯事である。彼らは、アウトソーシング、買収と売却が得意である。）

（２６）『受動的』

「受動性が強い。行動主体が非明確である。主体性が欠如している。他者のリードを求めること。静止、不動状態が好きである。
日本の定住民は、取る行動が受動的である。受け身であること。
彼らは、自分からは積極的に行動を起こさず、意思決定を先送りし、周囲からの働きかけや外国からの外圧があって初めて「仕方なく」行動を起こす。
彼らは、そうして、周りに引きずられる形で意思決定をする。
彼らは、自主性に欠ける。
彼らは、退嬰的である。
彼らは、「お不動さん」の信仰に見られるように、静止、不動状態を好む。
彼らは、行動を起こした原因が自分ではないとして、責任逃れをする。男女の恋愛において、結婚のプロポーズやセックスへのアプローチといったリードを、ほとんど男性側が行うのと根が同じである。
彼らは、主体性が無い。
彼らの文化は、待ちの文化である。
彼らは、自分からは動かず、誰かにやらせよう、やってもらおうとする。
彼らは、誰が行為責任を負うかが明確になってしまうのを避けるため、行為主体をはっきりさせない。

彼らは、主語を省略して表現する。
彼らは、主体をはっきりさせないことで、周囲との一体同調の強さ、心理的な凪、和合、静止状態の心地よさをアピールする。
（ＶＳ欧米人（移動生活民）：彼らは、能動的である。彼らは、行動主体が明確で、主体性がある。彼らは、他者を進んでリードする。彼らは動きまわるのが好きである。）

（２７）『相互監視の重視』

「相互監視、告口を好むこと。他人の噂話を広めるのを好むこと。プライバシーが欠如している。
日本の定住民は、相互監視が行き届いている。
彼らは、互いに、周囲の他者が何をしているか、チェックするのに忙しい。
彼らは、プライバシーが無い。
彼らは、他人について、噂を広めたり、陰口を叩くのが好きである。
彼らは、権威者や当局に対して、密告をするのを好む。（学校の教室で「先生、○○さんが隠れて○○しています！」と告げ口するなど。）
彼らは、自分は、そうした噂や陰口の対象にならないように、絶えず保身に気をつかい、安全地帯にいようとする。
（ＶＳ欧米人（移動生活民）：彼らは、互いに他者が何をやっているかに無関心である。彼らは、自分のことに忙しい。彼らは、プライバシーを重んじる。）

（２８）『間接的対応』

「対応が間接的、ソフト、遠まわしである。
日本の定住民は、対応が間接的であり、陰湿である。
彼らは、相互の一体感、和合をできるだけ維持するため、他人に対して批判をする際にも、直接的な、明らさまな表現を嫌う。
彼らは、意見を口に出さず、相手に直接直言せず、以心伝心で伝えようとする。
彼らは、表現をソフトにしようとして、間接的な遠回しの表現を好む。
彼らは、そうした遠回しの表現の真意に気づかない他者を、鈍いとして陰口を叩いて批判し、無視したり、陰で他人に分かりにくい形

でいろいろ寄ってたかっていじめたり、意地悪する。
彼らは、ソフトだが、真綿で首を閉めるような陰険なやり方をする。
彼らは、相手に直接言わず、間接的に陰湿なやり方で相手の足を引っ張る。
（ＶＳ欧米人（移動生活民）：彼らは、対応や物言いが直接的であり、ハードである。彼らは、直接進言する。）

（２９）『局所的（ローカル）』

「対応が近視眼的、場当たり的、個別、局所的である。
日本の定住民は、対応が、近視眼的、場当たり的である。
彼らは、自分にとって身近な目先の場所や、時間的に目の前の事柄に注意が専ら行き届く。
彼らは、ずっと先の未来や、世界全体規模をコントロールしようとする長期的、遠大な計画性や視点に欠けている。
彼らは、自分のいる周囲の動向のみに注意を払う。
彼らは、自分のところの狭い個別の事例、利害に囚われて、物の見方が局所的になりやすい。
彼らは、「～の説は、自分のところとは違うので、正しくない」という言説がまかり通る（「～の説は、全体の○パーセントが当てはまらない、あるいは論理的に～なので、正しくない」というふうになりにくい。）こと。
彼らは、自己中心で周囲が見えない。
彼らは、全体を鳥瞰して判断するのが苦手である。
彼らは、道路の用地買収とか、全体の利益を考えず、個別の利害をゴリ押しする。
（ＶＳ欧米人（移動生活民）：彼らは、対応が長期的、計画的、普遍的である。）

（３０）『感情的』

「対応がヒステリック、情緒的、非科学的である。感情的に反応すること。
日本の定住民は、取る対応が、ヒステリックで感情的、情緒的である。
彼らは、相手からの刺激に対して、冷静に分析する事ができない。
彼らは、思わずキーッとなって集団全体で感情的に激昂し、前後の

見境がなくなって、予想外の飛んでもない行動に出る。（太平洋戦争時の真珠湾攻撃など。）
彼らは、相手との一体感の有無、好き嫌いを目安にして行動する。
彼らは、相手に対して、客観的に突き放す形で向き合う事ができず、感情的な好き嫌いをむき出しにして対応する。（太平洋戦争時のアメリカ、イギリスへの鬼畜米英呼ばわりなど。）
彼らは、対象との一体感を重んじ、対象と距離を置いて物事を見ることができず、物の見方が非客観的である。
彼らは、冷静、客観的に物事や状況を捉える科学を嫌い、何事も気合を入れて努力して行えば不可能なことは無いとする、精神論、根性論、努力万能論を振り回すのを好む。
彼らは、教師とかの熱血指導を好む。
彼らは、学説のような、本来冷静に突き放して評価すべき対象に対する主観的、情緒的な思い入れ、こだわりを強く持ち続け、他人に批判されると感情的に反応する。
（ＶＳ欧米人（移動生活民）：彼らは、対応が冷静、客観的、科学的である。）

（３１）『小スケール』

「スケールが小さい。高精細であること。
日本の定住民は、やることのスケールが小さい。
彼らは、小さな精密部品の設計、組み立てのような、微調整や、神経の細やかさが必要な、高精細、高い正確性を要求される事項に、世界で並ぶ者のない強みを発揮する。
彼らの社会は、重箱の隅をつつくような、細かい視点が、大学の入学試験とかで要求され、それに適応した若者を次々と生み出している。
彼らは、小さくか弱い柔らかい「かわいい」、それでいて色気のある「萌える」存在を、アニメやコミック等で次々生み出すのが得意である。
彼らは、天地を駆け巡る壮大なスペクタクル叙事詩を著述するのが苦手であり、俳句のように、小さく凝縮した箱庭のような小さい世界を著述するのを好む。小さい可愛いものは、女性がより好み、生み出すのを得意とする。
（ＶＳ欧米人（移動生活民）：彼らは、スケールが大局的で、細かいところには神経が行き届かず、大雑把になってしまう。）

（３２）『高密度指向』

「高密度、詰め込み、集中を好むこと。
日本の定住民は、高密度、詰め込み、集中を好む。
彼らは、個人のスペースの空きをできるだけ詰めようとする。
彼らは、ゆとりを嫌う。
彼らは、満員電車を当たり前のものと考える。
彼らは、重箱に寿司や料理を詰め込むのを好む。
彼らは、教育で、子供への知識の詰め込みを重視する。
彼らは、東京を中心とする首都圏への一極集中、密集を好む。女性の方が男性に比べて、過密状態をより好むとされている。
（ＶＳ欧米人（移動生活民）：彼らは、低密度で、空間的に余裕、自由がある、空きがあるのを好む。彼らは、分散、拡散を好む。）

（３３）『厳格さの重視』

「厳格、正確であること。
日本の定住民は、厳密、厳格、厳正さを好む。
日本の社会、政府や企業は、医薬品の許認可とか、国際基準に比べてやたらと厳しい（厳密、厳格なこと。）検問や検査数値設定を行いがちであること。
彼らは、より安全、安心になるためには、より厳しい審査をしなければならないと考える。ちょっとでもリスクがありそうだとやたらと不安になる。あるいは、検査数値設定が甘かったということで、いざリスクが発生した時の責任を取りたくないと思う。それは、誤り、落ち度、突っ込みどころ、隙、減点箇所が無いことを過剰に求める、女性優位な責任回避の心理がなせるものであると言える。それは、嫁のすることにうるさく、厳しくチェックを入れて嫁を叱る姑と根が同じである。それは、姑根性と呼べる。
彼らは、正確さを好む。
彼らは、時間に対して、やたらと正確である。特に会社、学校の始業時刻に間に合うことを厳守しようとし、１分でも遅刻すると強く非難すること。
彼らは、定時性、定刻性を重視する。
彼らの社会では、鉄道が、ラッシュ時でも定時発車が当たり前のことのように行われている。あるいは、首都圏の路線バスが、1秒も狂わない電波時計の導入で、発車が、発車時刻の00秒ジャストに行われるのが普通になっている。もしくは、テレビ放送のニュース番組とか、秒刻みのスケジュールで番組が構成されている。

（ＶＳ欧米人（移動生活民）：彼らは、コンピュータＣＰＵ設計のような論理的な、理屈面での正確さ、厳密さにこだわる。それは、父性的な正確さ、厳密さの指向である。）

（３４）『減点主義』

「正解、正論、完璧、無難、無傷指向、減点主義であること。
日本の定住民は、物事には正解がある、完璧、完全な状態があることを最初から自明視する。
彼らは、正解と見なされることのみ行おうとする。
彼らは、正しい、批判されにくい正論を主張する。
彼らは、間違うことを恐れる。
彼らは、完全であること、テストの点数とかで百点満点であることを目指そうとする。
彼らは、自分に傷、瑕疵が付くことを恐れ、嫌がる。
彼らは、人や物事の評価を、百点満点の完璧、無傷な状態から、どの位下方に離れているか、差分があるかで判断しようとする。
彼らは、人や物事の評価を、百点満点からの引き算で行う減点主義で動く。
彼らは、無難であること、欠点が無いことを重んじる。
彼らは、評価対象に目立った長所があっても、同時に見逃せない欠点、粗があると、直ぐに否定的な評価を下す。
彼らは、完璧な状態に少しでも近づくことを目指し、ひたすら修行する。
彼らは、物事に失敗したり、正解が直ぐに見いだせない状況になると、道に迷ったとして、途端に怖くなって混乱する。そして、それより先には進もうとせず、元来た道をすぐ後戻りしようとする。
彼らは、正解とされる定説を習得すべき前例と見なして、その奥義習得にひたすら励む。それは、ひたすら正しい、安全が保証された道のみを、奥義を求めて極めようとする、自己保身第一の女性優位な心理が元になっている。
彼らは、自分の心や、自分の持ち物に少しでも傷が付くのを恐れる。
彼らは、自分の買ったスマートフォンの液晶とか、傷が付かないように、保護ケース、保護シートとかで、万全、完璧に対策しようとする。
彼らは、マイカーとか、無傷でピカピカに洗い上げ、磨き上げるのを好む。
彼らは、自分に心の傷が付かないように、自分の心に傷を付ける可

能性のある他者との交流、対人関係を避け、引きこもりがちになる。それは、自分自身や自分の大切なものを傷つけるという、自らの保身に取ってマイナスとなる行為を嫌う女性優位な心理である。（ＶＳ欧米人（移動生活民）：彼らは、他人の長所を短所よりも積極的に見出し評価し、活用を図ろうとする加点主義である。彼らは、難点が見つかっても、長所がそれを上回れば採用する。）

（３５）『管理統制主義』

「一体行動、一斉行動を好むこと。管理主義、統制主義であること。牽制、長時間拘束を好むこと。休むことを罪悪視すること。自由行動を許さないこと。
日本定住集団の社会では、集団とかの所属者が、一体となって動くことを要求される。
彼らの社会では、集団内での個人の自由で勝手な行動が許されない。
彼らは、教育とかで、成員の管理、統制、締め付け、縛りを行うのが好きである。
彼らは、個人が自由に行動しようとするのを、自分勝手であると決めつけ、束縛、制限しようとする。
彼らは、集団から外れた行動をしたことを個人責任として、行動した本人が助けを求めても、勝手な行動をしたとして冷たく突き放し、助けない。
彼らは、集団に属さない個人行動、独自行動による成果を、格下扱いして認めない。個人がどこかの集団に所属して、その所属集団を通して出した成果でないと認めない。あるいは、一定の権威ある集団による編集を通した内容でないと認めないこと。
彼らは、学校とか、団体行動での統率、一斉に揃った行動をするのを好み、みんなでお揃いの制服、バッジを着用するのを好む。
彼らは、役所とかで、相手の行動を自由に許可、禁止できる許認可権限を得たり、行使するのを好む。
彼らは、周囲の他者が思い通り自由に振る舞うのを妬み、他者の振る舞いを規制、牽制、長時間拘束して不自由にしようとしたがる。
休むことを悪いことだと考え、長時間労働、長時間残業を美化すること。一人だけ仕事を早退することを、皆が頑張っているのに一人だけ帰るのはけしからんとして非難する。
彼らは、自由が与えられることを、どう行動すればよいか分からず途方に暮れるとして怖がる。
彼らは、不自由であること、他人に指示されること、他人に行動を

合わせることを心の奥底で望んでいる。これは、奴隷根性である。これは、統制されることで集団メンバー間に生まれる一体感を大切にする点、周囲との一体感を重んじる女性優位な性格である。
（ＶＳ欧米人（移動生活民）：彼らは、バラバラの個人行動を好む。彼らは、他人による管理統制を制限する。彼らは、自由行動を許す。）

（３６）『従順さの重視』

「上意下達を好むこと。従順であること。
日本の定住民は、上意下達を好む。
彼らは、上位者、下位者間の一体感を重んじる。
彼らは、上位者、下位者間の一体感を損なう、下位者による上位者への言挙げを嫌う。
彼らは、上位者、上官の言うことを、異を唱えずに素直に聞く人間、上官の命令をそのまま誠心誠意、忠実、誠実に守る人間、上官の指示を守って動く人間、上官の意を自主的に汲んで動く人間を好む。
彼らは、上位者に素直に従おう、従順であろうとする。上位者を受け入れよう、上位者に反逆しないように行動しようとすること。上位者に忖度しようとすること。強者になびくこと。
彼らは、国とかの上位者の決めた規則を忠実に守ろうとする。それは、上位者、下位者間に生まれる一体感を大切にする点、相互の一体感を重んじる女性優位な性格である。
彼らは、上位者に反抗する人たち、あるいは過去に反抗したことのある人たちのことを警戒して、差別したり、自分たちの仲間に入れようとしない。（日本のキリスト教徒、日本共産党党員、労働組合組員、等）
彼らの社会的態度は、理想は「上懐下愛」。（上位者に懐き、下位者を可愛がること。）だが、実際は「上媚下虐」。（上位者に媚を売り、下位者を虐げること。）。彼らは、そのようになりやすい。
（ＶＳ欧米人（移動生活民）：彼らは、反逆、反抗、異を唱えること、自分流を好む。）

（３７）『総花的』

「総花式、オールインワン、万能、八方美人を好むこと。
日本の定住民は、総花式を好む。

彼らは、偏りや、特定面でのみ優れているのを好まない。
彼らは、何でも出来る万能さを好む。
彼らは、製品とか、あらゆる面で平均以上に優れているのを好む。
彼らは、製品の機能がオールインワンで、機能が万遍なく入っているのを好む。
彼らは、八方美人で、誰からも好かれるのを好む。
彼らは、医薬品とかの製造、販売で、どんな症状にも効くことを指向して、例えば、相反する働きを持つ制酸剤と消化剤を一緒に混ぜた胃腸薬を製造、販売する。それは、女性が、絵を描く時の色遣いで、特定の色に偏らず、万遍なく使おうとするのと根が一緒である。
彼らは、全てを満たそうとする。
彼らは、何でもこなせるジェネラリストを、役所とかで重んじる。
彼らは、つぶしの効かないスペシャリストを嫌う。
（ＶＳ欧米人（移動生活民）：彼らは、製品とかが特定機能に優れていて、ライバルがいないのを好む。彼らは、鋭い判断が出来るスペシャリストを好む。）

（３８）『突出の回避』

「突出を回避すること。目立たないようにすること。標準、普通を指向すること。
日本の定住民は、ネットとかで、目立ったことをした他者について、すぐその身元を特定し、プライバシーを暴露することに情熱を注ぐ。
彼らは、逆に、突出した目立った行動を取るのを極力控えようとする。
彼らは、そうすることで、自身が外部に目立って危険な目に合いやすくなったり、自身のプライバシーが暴露されたりすることにつながること、あるいは周囲との協調、和合を乱すことを避ける。
彼らは、普通、標準でいようとする。
彼らは、オタクのように、特殊扱いされるのを嫌い、一般人（普通の人、標準的な人）でいようとすること。
彼らは、一人だけ目立つのを嫌う。
彼らは、目立ちたい時は、宴会の隠し芸とかで周囲の他人と一緒、同時に目立とうとする。
彼らは、何か一人で行動を起こすと何かと突出して目立ち、叩かれるので、自分からは何も行動を起こさず、無為でいようとする。
彼らは、誰か他の人が勇気を出して行動すると、それに便乗する。

それは、突出することで集団から浮くことを恐れる女性優位な性格である。
（ＶＳ欧米人（移動生活民）：彼らは、突出しようとする。彼らは、強烈な個性で目立とうとする。彼らは、特異性を求める。）

（３９）『中心指向』

「中心、周辺を区別、差別したがること。皆で中央、中心、都心を指向すること。
日本定住集団の社会は、（ウェットな液体分子群のように、）中心、中央の概念、中心形成の度合いが強い。
彼らの社会では、中心、中央と周辺、地方との差が大きい。（ドライな気体分子群のような欧米では、バラバラ、散り散りで中心、中央の形成が弱い。中心があまり無い。中心と周辺の差があまり無い。）日本の定住民は、皆が一カ所に集まろうとする。
彼らは、中心部に集中して存在しようとする。
彼らの社会では、都心が過密状態になりやすい。
彼らの社会では、通勤とかで、皆が都心に集中するオフィスを一斉に目指そうとする。それは、皆で集まった方が、護送船団と同じで保身に有利である、中心に近いほど外部環境露出が少なくて保身に有利であるとする女性優位な考え方である。
彼らは、自分が皆の中心に位置して、皆の注目を集めたいと考える。
彼らは、中心、周辺視が強い。
彼らは、中心、中央と周辺とを区別、差別する考えが強い。日本では、首都東京と、地方との格差が大きい。都心に住んでいる人とか、中華思想を持ちやすいこと。中華思想は、自分たちが世界の中心である、自分たちが世界の中心にいて偉い、中心部が偉くて周辺部は劣っているとするものである。
彼らは、日本軍による沖縄戦対応のように、中心、本土を守るために、周辺の人々を捨石扱いする。
彼らは、自分や自国が、より大きなグループ、世界の中心、中枢、中央になろうとする。
彼らは、中枢で周囲から温かく守られると共に、周辺に向けて命令できるのを好む。
彼らは、中心に集中する。
彼らは、中央、中心を目指そうとする。
（ＶＳ欧米人（移動生活民）：彼らは、あまねくグローバルに普遍的に拡散して分布しようとする。彼ら、父性、ドライな人、個体

は、自分や自国の文化や指令の、中心の不定な、普遍、グローバルな感染、拡張、拡大、広がりを目指す。彼らは、気体の空気やガスのように、あまねく世界中に広がる、普及する、拡散することを指向する。
彼らは、空気に乗って伝播、伝染するインフルエンザのウィルスと同じ行動を取る。）

（４０）『マイナス思考』

「他人の陰口、悪口を好むこと。他人の欠点探しや粗探し、足を引っ張るのを好むこと。思考、やり口がネガティブ、マイナス、陰湿、陰険である。
日本の定住民は、他人のマイナス面に関心が行き、他人の欠点や失敗、粗探しをひたすら行おうとする。それは、他人に対して駄目出しをすることを好む「駄目出し社会」である。
彼らは、他人が自分の上を行くことに我慢が出来ず、足を引っ張るためのネガティブ要素を探すのに夢中になる。
彼らは、学校や会社で、自分が気に入らない、かつ、その場にいない他人の陰口を叩く、悪い噂話を広めるのを好む。
彼らは、そうすることで、当人のマイナス評価を周囲に広め、足を引っ張り、当人に大きなダメージを与えようとする。
彼らは、思考、やり口がネガティブ、マイナス、減点主義である。
彼らは、宴席とかで、その場にいない人の悪口を言い合って盛り上がり、その場に居合わせた一同が、悪口を叩かれた不在者をダシにして一致団結しようとする。
彼らは、一方、当人がその場に居合わせる時は、面と向かっては当たり障りの無いことを言ってごまかしたり、見かけ上褒め合ったり、迎合したりして、裏表が激しい。
彼らは、気に入らない相手を直接攻撃せず、周囲から、からめ手で間接的に足を引っ張る。
彼らは、やり口が陰湿、陰険である。それは、相手の欠点、粗ばかりを探そうとする、減点、マイナス思考の姑根性のような性格である。
（ＶＳ欧米人（移動生活民）：彼らは、他人の長所を見出し積極的に褒めて、勇気づける。彼らは、ライバルと正々堂々と勝負する。）

（４１）『努力、苦労、労働の神聖視』

「努力し、苦労することを良しとすること。楽をすること、休むことを罪悪視すること。
日本の定住民は、以下のことを重視する。周囲の他人が、地道に努力し、苦労すること、たくさん働くこと。日本の定住民は、それらを尊ぶ。労働することを重視すること。
彼らは、自分の周囲で仕事を省力化して楽をする人、さっさと効率的に働いて直ぐに仕事を終らせて帰ろうとする人に嫉妬して、非難したり、強引に別の仕事を割り振ったり、残業させようとする。
彼らは、休むこと、手を抜くことを罪悪視する。体調が悪くても仕事を休まないことを賞賛する。とにかくひたすら働くことを重視し、周囲に強要すること。長時間労働、長時間残業を肯定すること。
彼らは、仕事を効率化して成果を上げることより、仕事で努力、苦労をいとわない姿勢、心がけそのものを重視する。
彼らは、楽をしていると、仕事をしていないとみなされ、嫉妬されて足を引っ張られるので、必死で苦労している振りをする。
（ＶＳ欧米人（移動生活民）：彼らは、労働を生きていくための必要悪とみなし、少しでも仕事を効率化して楽をしよう、休もうとする。バカンスを楽しもうとすること。）

（４２）『真実、内実の隠蔽』

「真実を隠蔽すること。相手から急所、真実を突かれると無反応状態になるか、相手を無視すること。
日本の定住民は、本当のこと、真実、内実を、知られると騒ぎになると考えて、隠蔽して語ろうとしない。
彼らは、真実からかけ離れた、当り障りのない、表面的に都合の良い、綺麗事のみを強調した建前の議論でお茶を濁そうとする。
彼らは、リアルな真実を語ることが、社会として出来ない。太平洋戦争時の大本営発表や、福島第一原発事故の際の情報隠蔽、精神障害者の子供を持った親による子供の病気の対外隠蔽が好例である。陰湿な女社会の内実を隠蔽してきた女性たちと根が一緒である。
彼らは、公式、公開の場で発言せずに沈黙する。
彼らは、建前上の、無難な、その場の大勢に迎合した良い子、ぶりっ子の発言のみ行う。
彼らが積極的に自由に発言するのは、ある程度非公式、非公開の場に限られる。
彼らは、衆目の監視の中で発言すると、発言内容に公の責任が生じるため、保身のため、何も発言しないで、黙って含み笑いしている

のみである。
彼らは、親しくない人が大勢いる中で自由な発言をするのに抵抗がある。
彼らは、親しい内輪の中でないと自由に発言できない。
彼らは、相手が急所、真実を突いてきたとき、そこが急所、真実であることを気づかれないために無反応だったり、わざと取り繕ってお茶を濁したり、茶化したり、ことさら無視したり、話題を関係ないものに変えようとする。
（ＶＳ欧米人（移動生活民）：彼らは、自分個人の独立に忠実であるために社会の真実を積極的に語ろうとする。彼らは、自分の急所を突かれると直ちに猛反撃を開始する。）

（４３）『多数派指向』

「多数派に属そうとすること。与党に投票すること。大きな組織に属そうとすること。数の力に頼ろうとすること。少数派を叩くこと。
日本の定住民は、多数派に就こう、属そうとする。メジャーな存在が大好きである。常に自分の所属する集団の大きさに注意が向いて、少数派だと力が弱く差別されると考える。
彼らは、選挙で多数派の与党に投票しようとする。彼らは、自分が与党の一員となることで、より多数の人と同じ仲間に属することによる安心感を心の中で求める。マイナーな少数派に属することを不安がること。彼らは野党を少数派と見なして見下す。
彼らは、就職とかで大きな組織、会社に属そうとする。「寄らば大樹の陰」ということわざに沿って行動すること。
彼らは、何事も団体行動なので、団体の大きさ、数の力をとかく重視する。彼らは、数の力に任せて少数派を叩く、弾圧する。
（ＶＳ欧米人（移動生活民）：彼らは、個々人が独立しているため、自分が少数派になる可能性を常に計算し、少数派の意見をある程度尊重しようとする。）

（リストアップはここまで。）

日本社会「定住集団の掟」

日本定住集団の社会で生き抜くには、良くも悪しくも、以下のよう

な対処をすることが必要になる。これは公言してはいけない裏の掟である。人権上問題のある掟も多々含まれているので注意が必要である。
（１）「入定住集団の心得、転定住集団不可」初めて入った定住集団、生まれた定住集団が一生過ごす定住集団になる。後からはやり直しできないので、入る定住集団の選択をくれぐれも誤るな（結婚時、新卒時、就活とかで。）ということ。入ろうとする定住集団のこと（社風とか家風とか）を事前に徹底チェックせよということ。寄らば大樹の陰。大きく安定していて将来性のある福利厚生の良い定住集団に入れてもらえということ。
（２）「コミュニケーション力の重視」コミュニケーション、協調性を重視せよということ。定住集団の中の嫌いな相手にも明るく積極的に話しかけろ。コミュニケーション力が無いと、他の定住民から疎まれ、定住集団を追い出されるから気をつけろ。
（３）「飲み会の重視」飲み会、宴会を重視せよということ。同じ釜の飯を食うことで仲間、身内に入れてもらえやすくなるということ。
（４）「定住集団への滅私奉公」自分の所属する定住集団、身内の利益をひたすら考えよということ。身内のためにひたすら尽くせ、汗を流せということ。長時間働け、苦労しろ、滅私奉公せよということ。余所者（非正規雇用者とか）はどうなっても良い、無視して構わない。
（５）「定住集団内の強い人、偉い人への対応」定住集団内の強い人、偉い人（先輩、恩師、上司、姑）を立てろ、媚を売れということ。気配りしろということ。積極的に懐け、甘えろ、頼れということ。反論するな、批判するな、理屈をこねるな、言うことを聞けということ。良く話をして、そうした普段の話の中からふと漏れ出る彼らの弱みを握れということ。握った弱みを盾に相手を思い通りに動かせということ。長いものには巻かれろ。力ある者に逆らうなということ。御用聞きをして取り入れ。ペコペコして溜まったストレスは自分より弱い者をいじめてうっぷんを晴らせ。
（６）「定住集団外の有力者への対応」定住集団外の有力者（役人、議員、資産家等）とのコネ作り、コネ維持を重んじろということ。いざという時に助けてもらえるよう、常日頃から恩を売っておけということ。
（７）「権威への対応」権威あるもの（欧米の文物とか）にはとりあえず従っておけ。自分もその権威に積極的にあやかり、権威と一体化して箔を付けて、周囲に威張れるようにしろ。
（８）「先輩後輩制の重視」年功序列、先輩後輩制を重んじろということ。年を取るほど前例、しきたりが蓄積されて偉くなる。

（８－１）「先輩への処遇」古参、古株が偉いことを肝に銘じろ。先輩を立てろ、敬え、批判するな、とにかく言うことを聞けということ。先輩の言う通りに動けということ。
（８－２）「同期の処遇」同期はなるべく同等に処遇せよ。やむを得ず処遇に差が出る場合は、互いに顔を合わせずに済むように周囲が配慮せよ。仕事が出来ない方、コネが弱い方を子会社、子集団に出向、天下りさせろ。
（８－３）「後輩への処遇」後輩に懐かれる、尊敬されるだけの器量（技とか人間性）を持てるよう頑張れということ。後輩にバカにされるようでは終わりだ。後輩は部下としてこき使って構わない。
（９）「管理職の登用」定住集団のまとめ役、管理職は、長年定住集団のことを第一に考えてリードしてきた、生え抜きの年功を一定以上積んだ者の中から優秀な者を選べ。役職付きになれる者は上に行くほど限られている。
（１０）「役職登用と年齢制限」一定の年功に達したのに役職が付かなかった者は一生下積み、下働きの現場労働だ。
（１１）「空気を読むことの重視」自分を周囲に素早く合わせろということ。周囲の動きに敏感になれということ。空気を読めということ。自分の考え、独自の意見に固執するなということ。自分の考えを持つなということ。周囲と一体になれということ。とにかく周囲に合わせて動けということ。自分を無にせよということ。異を唱えるなということ。その時々の上位者や定住集団の有力者、定住集団の仲間、周囲、世間の中で大勢となっている意見に、時々刻々意見を合わせて、カメレオンのように迎合、変身して付いて行けということ。
（１２）「少しだけ先んじることの重視」ライバルや世間の一歩先を行くような気の利いた意見を流布させ、人気者になって力を得よということ。先に進み過ぎないようにせよということ。
（１３）「人気者になる心得」先進国、首都とかで人気が出たもの、出そうなものを、周囲に先んじていち早く取り入れて見せびらかせ。定住集団の人気者になれるぞ、儲かるぞということ。
（１４）「和合、事なかれの重視」定住集団内部の和を第一に考えよということ。波を立てることをするなということ。揉め事を起こすなということ。事なかれ主義に徹しろということ。空気を読めということ。
（１５）「出る杭は打たれる」出る杭は打て。内輪の和を乱す目障りな異質な者、異分子は寄ってたかって徹底的に叩け、いじめろ、同化させるか外に追い出せ、排除せよ。皆が一つの色に仲良く染まることを理想とせよ。自分は余り目立つな、浮くな。個人行動をするなということ。皆と一緒に地道に努力して、認められる時を待て

ということ。
（１６）「失敗回避と自己責任」起こした失敗はそのままでは連帯責任になってしまい、定住集団の身内や偉い人まで対象になり迷惑がかかる。とにかく失敗するなということ。石橋は叩いても渡るな。慎重に動けということ。定住集団の身内や偉い人を巻き込みたくなければ自分で腹を切れ。（自己責任を取れ、自殺しろ。）失敗したら再チャレンジの機会は無いと思え。
（１７）「遅刻、休みの禁止」遅刻は絶対するな（定時に皆揃って一斉作業を行うことが定住集団の行事遂行に必須である。）ということ。休むなということ。這ってでも出社せよということ。周囲に合わせて遅くまで残って頑張れということ。自分だけ早く帰るなということ。すると周囲の受けが良くなる。
（１８）「定住集団外に追い出されないことの重視」所属する定住集団（身内の集団）から決して外に追い出されないようにしろということ。出て行けと言われないように、常日頃から周囲に対する気配りを怠るなということ。定住集団に何が何でもしがみつけ。一度出されたら次は無い（余所者、浮浪人扱いされ、どこにも入れてもらえなくなる。）ということ。
（１９）「定住集団への連続所属の重視」所属する定住集団の存続、永続のために我が身を削って滅私奉公せよ。（あるいは、周囲の受けを良くするために滅私奉公している振りをせよ。）所属している定住集団に、死んだり、定年で退職するまでずっと所属し続けよということ。定住集団の用意した人生のレール、エスカレーターから決して外れるな、降りるなということ。外れない、降りない限り、生活は定住集団が保証する。いったん、定住集団のレール、エスカレーターを自分から降りた場合はその後の生活は自己責任で、定住集団は一切関与しない、助けない。
（２０）「定住集団八分」定住集団の掟を破ったり、定住集団に迷惑、負担をかける者はみんなで懲戒処分にせよ。定住集団八分にせよということ。困っていても無視しろ。自分が懲戒処分されないように定住集団の掟には絶対服従せよ。
（２１）「集団自決」定住集団と運命を共にせよということ。集団自決せよということ。一人だけ逃げ出すなんてもってのほかであること。
（２２）「定住集団を出ていくのは裏切り者」定住集団を自分で勝手に出て行った者（原発事故避難者等）は裏切り者扱いされるので、その覚悟をしろ。定住集団から出るなということ。一生を今いる定住集団で過ごす覚悟をせよということ。
（２３）「気に入らない者への対処」定住集団内で気に入らない者は悪口、陰口、噂話を流して潰せ。

（２４）「定住集団の名誉の重視と恥の回避」見栄を張れということ。同じ定住民として恥ずかしくないようにしろということ。定住集団の名誉のために頑張れということ。不祥事を起こして身内に恥をかかせるなということ。身内に迷惑をかけるなということ。
（２５）「内部告発の禁止」定住集団の内輪のことを外部に漏らすなということ。内部告発するなということ。漏らした者は裏切り者だ。
（２６）「余所者、非定住民の入定住集団不可」余所者、非定住民（非正規社員等）を信用するなということ。余所者、非定住民を内輪に入れるなということ。内輪だけで固まるようにしろということ。身内のことだけを考えろということ。
（２７）「強者の神格化」頂点の支配者（天皇陛下）を、上位者として神扱いせよということ。上位者にはいかなる時も絶対服従せよ。上位者の家来の役人にも絶対服従せよ。出世するには、厳しい受験競争を打ち勝って、上位者の官公庁のキャリアの立場に新卒の白紙採用で身内扱いで入れてもらうことを子息の教育の究極目標とせよ。
（２８）「強者への従順」上位者にはペコペコ頭を下げて従え。媚を売れということ。反抗すると命は無いと思え。上位者の言うことは絶対だ。強い者が誰かは時々刻々変化するので、遅れ無いよう、その時々の強者に付いて行け。
（２９）「弱い者いじめの容認」上位者にペコペコするとストレスが貯まるので、捌け口として弱い者いじめを積極的にせよ。多数で一人をいじめるのは全然構わない。数こそ力だということ。集団こそ力だということ。浮いた弱い者をいじって叩いて無視して、日頃の憂さ晴らしをせよということ。
（３０）「ピンはねの容認」自分より強い上位者や元請けには、頭を下げて仕事を貰え。ピンはねされても生きていくためには止むを得ないから黙って従え。自分より弱い下請けには、利益をピンはねして構わない。下請けは徹底的に搾取せよ。生きていく上で必要だということ。
（３１）「強者への反抗、一揆」止むを得ず上位者に反抗する時、一揆を起こす時は首謀者が誰か分からないように書類を全て焼却しろ。
（３２）「スーパー上位者の利用」国内の上位者や元請けを動かすには、外国、外資（西欧、北米）とか国連とかの、より強い「スーパー上位者」の『出羽守』になって、スーパー上位者の権威ある説の中から自分たちに都合の良い説をピックアップして主張せよということ。スーパー上位者の身内になって、国内の上位者や元請けよりも上の立場に立て。スーパー上位者に取り入って、自分の都合の

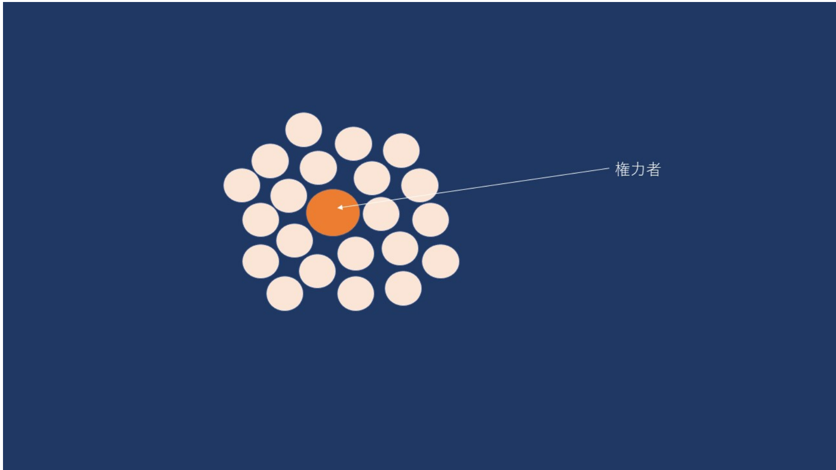
良い情報を吹き込んで操り、その力で、国内の上位者を支配せよということ。
（３３）「新卒一括採用の重視」定住集団に入ろうとする新参者は、自分に反抗しない子飼いにするため、出来るだけ若い新卒の白紙状態の者を揃えて一括採用せよ。色の付いた中途は採用するな。既卒や職歴の途切れた者は定住民の気が消えているので採用するな。
（３４）「派閥抗争の重視」定住集団の派閥に積極的に入れということ。派閥こそが身内の中の身内だ。自分の身内にとってライバルとなる他の定住集団や派閥に気を許すなということ。ライバルの派閥は身内一丸となって攻撃し、せん滅せよ。やられたらやり返せということ。身内の中で力を発揮して実力者の証を見せることを生きがいとせよということ。派閥に入ろうとしない八方美人とは付き合うな。
（３５）「情報統制の重視」自分たちが負けているとか、自分の定住集団、身内の恥になる都合の悪い情報が流れることが無いよう、徹底的に情報統制せよ。都合の良い情報だけが流れるように記者を会食とかで懐柔し締め上げろ。都合の良い情報だけを広報せよということ。都合の悪い情報を流した者、知っている者は、何としても探し出し処分せよ。身内の都合の悪い、恥ずかしい内情は最後の最後まで外部には隠し通せ。焼却処分して消せということ。
（３６）「根性論、精神論の重視」やる気、根性、精神力があれば、努力すれば、何事もなしうる。科学的指導など意味がない。根性の無い者、耐える力の無い者は、しごいて焼きを入れる必要がある。とにかくやる気を見せないと身内には入れてもらえないし、身内から放り出されるぞ。
（３７）「おもてなしの精神」自分の所属する定住集団にお金を入れてくれる元請けやお客様とかは、自分の定住集団の定住民で無くても定住集団の存続を図ってくれる有難い存在なので、神様扱いして最大級の心細やかなおもてなしをせよ。
（３８）「定住集団を通すことの重視」物事を通す、決定するには、必ず定住集団を経由しろ。身内で協議しろということ。定住集団を通さずに、個人で勝手に動いて出来た成果物は信用するな。書籍とか必ず出版社の定住集団の編集を通したものを買えということ。自費出版書籍とか信用するなということ。
（３９）「個人行動の禁止」個人で勝手に動くなということ。必ず他の定住民にお伺いを立てて、協議を通せこと。必ず事前に根回しをしろということ。

日本定住民度判定テスト

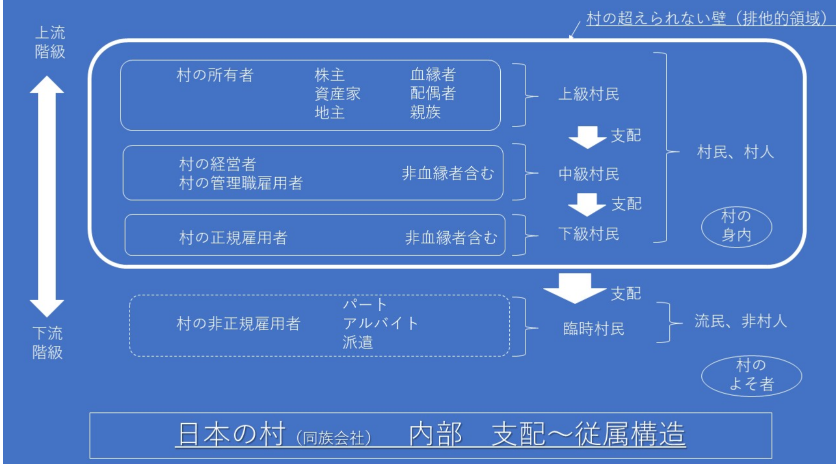
定住民かどうかを判定する基準は、テスト形式で以下のようにまとめられる。
１．「内」「身内」という言葉を良く使う→定住民
２．先輩後輩同期という言葉を良く使う→定住民
３．外人という言葉を良く使う→定住民
４．先生という言葉を良く使う→定住民
５．発言する時、空気を読む→定住民
６．人物の成績を偏差値で評価するのが好き→定住民
７．無難、事なかれなのが好き→定住民
８．減点主義である→定住民
９．失敗するのは本人の努力が足りないからと考える→定住民
１０．失敗するのは本人の根気、精神力が足りないからと考える→定住民
１１．身内の恥を外部に出さない→定住民
１２．人の目、噂を気にする→定住民
１３．見栄っ張りである→定住民
１４．上手く行っている他人が妬ましい→定住民
１５．陰口を叩くのが好き→定住民

日本定住集団社会、日本村社会の権力構造

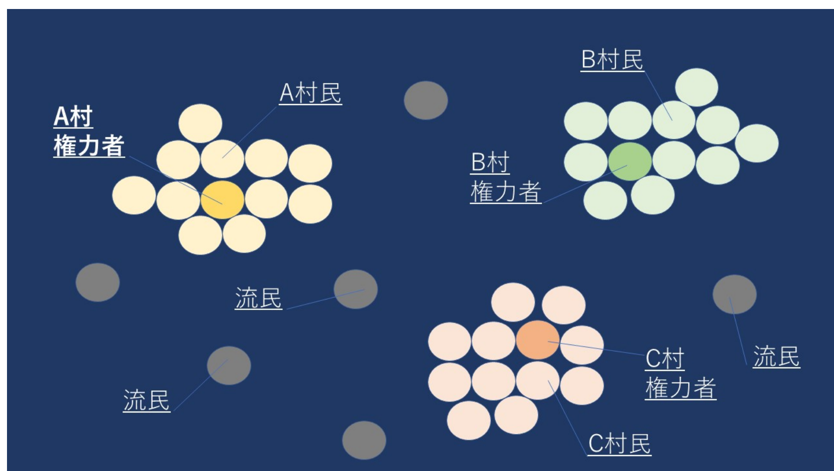
日本定住集団社会、日本村社会の権力者は下図の赤い個体のように、集団の中央、中枢部に永年居座る形で存在している。



さらに中身を細かく見ると、以下のように、定住集団の所有者＞定住集団の経営者＞定住集団の正規雇用者＞＞（超えられない壁）＞＞定住集団の非正規雇用者の順に社会的上下関係が確立している。

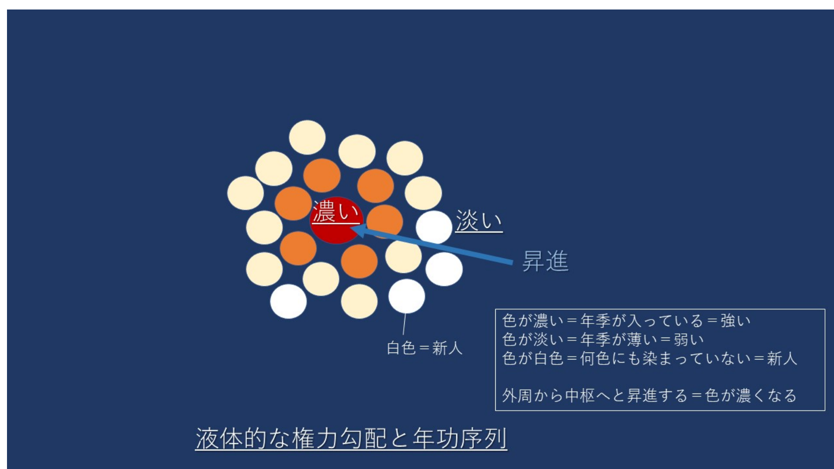


定住民と流民との関係は、以下のような図式で表せる。



どこかの定住集団に、周囲と同じ色に染まって所属し存続し続けているのが定住民、村民であり、どこの定住集団にも正式に入れてもらえず漂流しているのが流民である。中世日本から存在している村民と流民との社会的差別が現代日本でも存続し続けているのである。

液体的社会である日本の村内の権力勾配は以下の図のように表せる。



権力の強さを色の濃淡で表した場合、真ん中の支配者が一番濃くて、周囲に行くにつれて薄くなる＝権力が弱くなる。何も色の付いていないのが白紙の新人であり、日本の定住集団は新規の人材はもっぱら白色の新人から求めようとする。最初白紙の新人で定住集団に入った定住民が周辺部から中枢部に行くには、年功序列で年季

が入るに連れて中枢部に入って昇進していくようになっている。ただし、中枢部に行ける椅子の数は限られているので、その限られた椅子を巡る昇進のために周辺部の定住民たちの間で激しい競争、闘争が繰り広げられる。競争の敗者は定住集団内で飼い殺しか、集団外へと追い出される。

後天的定住集団的思考に囚われた日本人

彼らは、他国を後天的定住集団と勝手に見なす。彼らは、欧米諸国を後天的定住集団と勝手に見なす。彼らは、西側の一員、先進国の一員と称して、欧米諸国の中に勝手に加入したつもりになる。彼らは、欧米諸国からの村八分や集団追放があると勝手に見なす。彼らは、村八分や集団追放を恐れて、欧米諸国の社会規範に必死に合わせようとする。彼らは、欧米諸国と異質な側面を隠ぺいしようとして、必死になる。彼らは、自由民主主義を必死になって主張する。それは、「不気味な」自由民主主義である。彼らの間では、移動生活者的な自由民主主義は、生活の中に全く根付いていないが、そのことを暴露することは、社会的に禁止されている。彼らは、勝手に独り相撲を取って、勝手に一人負けをして自滅する運命にある。
日本の国全体が、後天的定住集団として、絶えず一体化して動く。国民は、全員、それを強制される。天皇制維持も、自由民主主義の強制一斉唱和も、その一環である。国民の誰かが、一体化を拒む。すると、彼は、国の中では、もう生きていけない。彼は、国外退去するか、自殺するか、周囲からいじめられて抹殺されるしかない。
日本では、学校の学級などで、集団の心理的一体化が容易に起きる。英語などのの授業で、生徒たちが、間違えるのが恥ずかしくて答えない。周囲が心理的に一体化している中で、何か失敗すると、周囲全体の足を引っ張ることになって、周囲から非難されたり、周囲の嘲笑を受けるので、心理的負担が大きい。

日本社会における自己責任と無責任の両立

一斉同調行進の最中に、石につまずいて転んで隊列を乱して外れた者が、自己責任を問われる。
一斉同調行進を続けた者たちは、その行進結果がNGであっても責

任を問われることは無い。
日本社会の自己責任と無責任の両立は、こうして生まれる。

日本の官学の根本的な誤り。

筆者は、日本の官学を批判する。

日本社会は、後天的定住集団の社会である。それは、昔も今も変わっていない。

日本社会は、以下の内容を、根拠無く、勝手に思い込んだ。
欧米諸国が、日本社会と同様の、後天的定住集団の社会であること。

後天的定住集団の社会としての欧米諸国。
それは、日本社会が、自分勝手に想定した、想像上の産物である。
それは、実在しない。
日本社会は、その中に、仲間に入れてもらおうと思い込んだ。

日本社会は、G7への加入によって、欧米定住集団の一員になれたと喜んだ。
その結果、日本は、周囲に向けて、自分たちは欧米先進国の一員だとして、自慢するようになった。

日本社会は、欧米諸国から異質と思われないように、欧米諸国と、一心同体化しようとした。
日本社会は、欧米諸国の文物の導入に、明け暮れた。

日本社会は、欧米諸国からの集団追放を喰らわないように、必死になった。
日本社会は、欧米諸国に合わせて、自分たちの社会を、家父長制であるように見せようと、懸命になった。

日本社会は、以下の内容を明言する言説のみを採用した。
日本社会が家父長制化していることを明言する言説。

日本社会は、以下の言説を、徹底的に無視するようになった。
日本社会が、昔ながらの、母親中心の社会であることを明言する言説。

日本社会は、以下の内容を明言する言説のみを採用した。
日本社会の欧米化を明言する言説。

日本社会は、以下の言説を、徹底的に無視するようになった。
日本社会が、昔ながらの、中韓やロシアや東南アジアと共通の社会であることを明言する言説。

日本社会は、以下の内容を明言する言説のみを採用した。
日本社会の欧米諸国と比べての独自性は、日本固有の独自性であると主張する言説。

日本社会においては、以下の言説は、徹底的に回避されるようになった。
日本と、中韓やロシアや東南アジアとの共通性を指摘する言説。

これらの日本社会の動きを主導したのが、日本の官学だった。
それは、今なお、日本社会の主流である。

日本の官学の主張は、日本社会の実態に反している。
その主張は、見掛け倒しであり、誤りである。

（2021年8月初出）

日本社会が、究極の嘘つき社会になっている、根本的な原因。

日本社会。
後天的定住集団の社会。
女性優位社会。
彼ら自身の社会規範。
それらの、男性優位社会の諸国への、一方的な適用。

女性優位社会が、男性優位社会の社会的規範や社会思想を、必死になって主張する理由。

それらは、以下の内容である。

欧米諸国。
先進的な男性優位社会。

日本。
中国。
ロシア。
朝鮮。
後進的な女性優位社会。

日本。
彼らは、以下の内容を、強烈に指向する。

（１）
脱亜入欧の政策を、採用し続けること。
東アジアの国々の定住集団を自主的に脱退すること。
先進的男性優位社会の諸国の、架空の定住集団。
その定住民になること。
その集団に加入させてもらうこと。
加入後。
その集団の社会規範に、無条件で同調し、調和すること。
その集団の社会制度を、無条件で、即座に、盲目的に、導入し続けること。

先進的男性優位社会の諸国。
彼らの社会規範に、無条件で同調し、調和すること。

日本。
彼ら自身が女性優位社会であるにも関わらず。

先進的男性優位社会の諸国の、架空の定住集団。
その集団への反逆者に対して、その定住集団の定住民の一員として、無条件に全面的に攻撃すること。
そうした反逆行為を、彼らが所属する定住集団に対する攻撃である

と、見なすこと。
その集団への反逆者としての女性優位社会。
そうした社会が、彼ら自身と同様の、女性優位社会であること。
彼らは、それにも関わらず、男性優位社会の社会規範に従って、そうした社会を、無条件に全面的に批判すること。
例。
ロシアのウクライナ侵攻。それに対する一方的な批判を行うこと。

日本。
彼ら自身の社会の内部が女性優位社会であること。
その内実を、対外的に、徹底的に隠ぺいすること。
男女の性差における、女性の優位性についての研究。
その実施を、彼ら自身の社会の内部で、徹底的に抑圧すること。

（２）
欧米諸国を、上位者として捉えること。

上位者としての先進的男性優位社会の諸国。
彼らに対して、無条件に、称賛や忖度を行い、追従すること。

戦後の軍事支配者としてのアメリカ。
彼らは、先進的男性優位社会の国家である。
彼らに対して、下位者として、無条件に従うこと。

上位者としての先進的男性優位社会の諸国。
彼らの社会規範を、無批判に丸呑みすること。
彼らの社会制度を、専制主義的に受容し続けること。
彼らへの反逆者を、上位者に対する不敬であるとして、無条件に批判すること。
そうした反逆行為を、上位者に対する不敬であると、見なすこと。

彼らへの反逆者としての女性優位社会。
そうした社会が、日本と同様の、女性優位社会であること。
日本。
彼らは、それにも関わらず、男性優位社会の社会規範に従って、そうした社会を、無条件に全面的に批判すること。

例。
ロシアのウクライナ侵攻。それに対する一方的な批判を行うこと。

日本。
彼ら自身の社会の内部が女性優位社会であること。
その内実を、対外的に、徹底的に隠ぺいすること。
男女の性差における、女性の優位性についての研究。
その実施を、彼ら自身の社会の内部で、徹底的に抑圧すること。

彼らの社会は、男女の性差の側面において、外面と内面が、正反対である。
彼らの社会は、そうした点において、究極の嘘つき社会である。

ケーススタディ。
G7に加入した、女性優位の、後天的定住集団の、社会。
日本。

彼らは、以下の内容で、行動する。
後天的定住集団として、G7を捉えること。
G7の定住民として振る舞うこと。
G7内部における、調和や一体性の実現。
G7内部における、抜け駆けや単独行動の禁止。
G7内部における、行動面での同調性の、絶えざる確保。
G7内部における、上位者に対する、隷従や懐きや忖度。

G7の定住民であることを、対外的に、盛んに誇示すること。
G7のメンバーである我が国は、先進国である。

G7の定住民でない国を、一方的に見下すこと。
そうした国は、新興国であるか、発展途上国である。

G7に新たに加入しようとするライバル国に対する邪魔を、盛んに行うこと。
韓国のG7加入を、妨害すること。

G7内部の上位国が、ある特定の国の制裁を行うと決議した場合。
それに対して、無条件に、同調すること。
ロシアへの制裁。

G7の主要国の価値観を、盲目的に丸呑みすること。

そのことについて、特に何も違和感を感じないこと。
例え、それらの内容が、彼ら自身の内包する価値観と真逆であっても、そうであること。
女性優位社会なのに、男性優位の価値観を、盛んに主張すること。

その理由。
G7の主要国は、男性優位社会である。
日本。
彼らが、G7に留まるには、そうした男性優位社会の価値観への同調が、恒常的に必要である。
彼らは、彼ら自身の定住集団のルールを、G7に勝手に適用している。
彼らは、彼ら自身を、G7の定住民と考える。
彼らは、G7内部の調和を乱してはいけないと、考えている。
彼らは、G7の決めたことには、抜け駆け無しで、必ず同調しなければならないと、思っている。
彼らは、G7を除名されることを、とても恐れている。
彼らにとって、G7は先進国の定住集団である。
そこに所属することは、彼らにとって、世界における上級民の証である。
それは、彼らにとって、高いプライドの源泉である。
その結果。
G7の主要メンバーが、他の女性優位社会を制裁するという意思を持った場合。
彼らは、それに対して、無条件に同調する。
彼ら自身が、女性優位社会であるにも関わらず。

国際秩序や、国際法。それらは、彼らにとって、G7という定住集団のルールである。

（2022年3月初出。）

後天的定住集団の社会における、天皇制の、普遍的な出現。

天皇制は、後天的定住集団の社会では、必然的に、いつでもどこで

も、出現する。
それは、日本のみに限定されない。

（2022年3月初出。）

日本の家（家族）。姑による支配。

説明。日本の家。

日本の家は、後天的定住集団である。加入には、血縁関係は必要ではない。血縁関係の無い嫁や婿も、新参者として、古参メンバーに対して全面的に従順の態度を示せば、定住集団の家に入れてもらえる。

ただし、嫁のような新規加入者は、その時点では、定住集団において、最底辺者の扱いを受ける。

加入者としての嫁の地位は、加入年数が経過するにつれて、次第に上位に上がっていく。加入者としての嫁が、定住集団内で安定した地位を得るには、実子の生成が必須である。そのことで、嫁は、一転して、支配者の立場に回ることができる。

また、嫁は、加入しても、周囲の家族メンバーとの一体化や同調行動、上位者の姑への忖度を絶えず上手く行わないと、家族メンバーから、いじめられて、離縁のような、集団追放を受ける。そのため、定住民の嫁にとって、日々の生活において、心休まる瞬間はほとんど無い。定住民の嫁にとっては、集団追放を受けないように、周囲への気遣いが絶えず必要で、日々がストレスと緊張の連続となる。日本の家で、嫁が、夫との結婚に際して、姑との同居をとても嫌うのは、これが原因である。

夫のような男性は、古参の定住民扱いはしてもらえるものの、姑や嫁による、生活や経済における支配を受ける。妻から夫への小遣い制がその象徴である。男性は、子供の教育において、主導権は握れ

ない。その主導権は、妻や母によって独占される。

日本の村（あるいは日本村社会、日本ムラ社会）と女性優位体質

はじめに

現代日本社会は、建前は西欧、アメリカ流の自由民主主義社会になったことになっている。

しかし、実際は、隠れた社会規範＝「日本村社会の掟」が存在する。この社会規範のことは公言しないことが日本人の間では暗黙の了解となっていて、それゆえ、この社会規範は、事実上「裏の掟」となっている。この本では、この村社会の掟について説明する。

日本「村社会」の概要

日本「村社会」の「村」の原義は「群がる」の「ムラ」である。
「村」とは群がって居住している人々の集団である。
「村社会」は「ムラ社会」と記述されることもある。「村」は村落限定をイメージするが、日本のムラ社会は中央省庁みたいな日本の都心中枢部とかにも広く分布するので「ムラ」という言葉を使うことでその日本国内におけるユニバーサルな性質を反映することができる。「社」や「学校」も、メンバーの全人格を包括する共同体的な側面を持っており、その点、「村」の一種と呼ぶことが可能である。
日本「村社会」は、世界（主に東アジア、東南アジア）に広く分布すること（稲作）農耕民社会の一種であること。日本村社会とそっくりな社会は、例えば同じ稲作農耕民社会のベトナムにもインドネシアにもあり、日本だけに特殊な存在ではない。同じ稲作農耕民の社会は共通性が多いと考えられる。（これに対して、欧米社会は、遊牧、牧畜民社会である。）
日本「村社会」は、都市にも農村にも共通に存在する。日本社会全体が村の空気に覆われている。日本村社会は地方の田舎だけに存在するみたいなことを言う人がいるが、そもそも日本の中心の東京霞

が関の中央官庁が村社会である。日本＝国家村であること。
日本「村社会」の成員は、大人だけでなく、子供も含む。子供も日本の村人である。
日本「村社会」は、。
・国家村　日本国の、天皇家を中心とする中央官庁単位での互助と行政組織と国民。
・地方村　都道府県、市町村単位での互助と行政組織。
・職場村　官公庁、会社の正社員と、家庭における専業マネージャー（専業主婦）のペア。
・学校村　保育園、幼稚園、PTA、学区　子供、託児所、学校（小学校、中学校、高校、大学、大学院）を媒介とした行政末端組織。あるいは、学習塾やフリースクールのような自主互助組織。サブとして、学級村、クラス村、講座村、部活村、サークル村のように、子供や学生の村人が校内に作る村を含む。また、学者村のように学校の教員が作る村を含む。
・地縁村　村落、町内会、自治会。地域の互助と行政末端組織。
・血縁村　血縁、親戚関係がある者同士の互助組織。門閥と閨閥の組織。
・組合村　生活協同組合のような、地縁の枠を超えた自主互助組織。
・通信村　通信、インターネットを媒介とした自主互助組織（電子掲示板、ソーシャル・ネットワーク・サービス、ネットゲームのコミュニティ等）
に分類することが出来る。

日本の村は、後天的定住集団である。加入には、血縁関係は必要ではない。血縁関係の無い嫁や新住民も、新参者として、古参メンバーに対して全面的に従順の態度を示せば、定住集団の村に入れてもらえる。ただし、新規加入者は、その時点では、定住集団において、最底辺者の扱いを受ける。加入者の地位は、加入年数が経過するにつれて、次第に上位に上がっていく。加入者が、定住集団内で安定した地位を得るには、複数世代の積み重ねが必要である。また、加入しても、周囲メンバーとの一体化や同調行動、上位者への忖度を絶えず上手く行わないと、集団メンバーから、いじめられて、村八分のような、集団内孤立の強制や、集団追放を受ける。そのため、定住民にとって、日々の生活において、心休まる瞬間はほとんど無い。定住民の村人にとっては、集団追放を受けないように気遣いが絶えず必要で、日々がストレスと緊張の連続となる。

「日本村社会＝女社会」論

日本の村人は女性優位である。日本社会、村社会は、女々しさにあふれている。社会が女の色に染まっている。（一方、欧米社会は、日本村社会に比べると男性優位であり、男社会である。）
これは、女性の、日本社会に占める勢力、影響力の大きさの現れである。男性の勢力を上回る女性優位の証拠であること。日本社会を支配するのは女性である。
日本社会、日本的村社会は、女流社会、女社会。女性優位社会。それは、そのように言うことができる。女性は、皆、生まれながらにして定住民であり、村人である、ということも出来る。村社会を作り出す力の源泉は女性である。
日本社会と女社会の相関、類似性は、日本的パーソナリティと女性優位パーソナリティが、双方共通して液体分子運動パターンに当てはまっていることに示されている。

液体分子運動パターンの基本（女性優位、母性的（稲作）農耕民的。日本的、中国、韓国、北朝鮮的、東南アジア的。ロシア的。）

日本人や女性は、少人数の閉鎖的、排他的な、内部が同質、同色で同調する派閥集団を複数作って分布する。

液体分子運動パターンにおいて、一つ一つの個体を日本人として捉えると、
・身内集団への所属重視
・集団同調行動を好み、浮くといじめられ追い出されること。
・身内に留まるため絶えず自分の向きを動かし必死で周囲に気配り、空気を読むこと。
・護送船団で個人責任回避
・身内のために滅私奉公
・閉鎖的、排他的
であること。
この液体分子運動パターン（リキッドタイプ）で、従来日本的とされてきた社会の特徴の大半を説明可能であること。

あるいは、液体分子運動パターンにおいて、一つ一つの個体を女性と見なすと、

・絶えず群れて派閥を作ること。
・必死に周囲と癒着し甘え媚び同調一体化しようとすること。
・自分の向きを絶えず動かし、周囲の空気を読むのに懸命
・周囲を絶えず相互監視し、足を引っ張り合う、妬む、陰口を言うこと。
・責任分散で個人責任回避

であること。
この液体分子運動パターン（リキッドタイプ）で、従来女性優位とされてきた社会の特徴の大半を説明可能であること。
この液体分子運動パターン（リキッドタイプ）で、日本的社会、女性優位社会を共通に説明可能であること。

女性（リキッド、液体的な行動原理で行動するジェンダー）が支配する日本社会の中で生活するのは、液体の中、言うなれば水中に潜って生活しているのと同じである。息が出来ない窒息感が著しい。
日本の人々がこうした行動を取る背景として、日本の人々が自分の保身に敏感であることがあげられる。
生物学的に貴重な性である女性の取りがちな行動は、根源的には、安全第一、危険回避、失敗が怖い、不安が強いという点に尽きる。
女性は、言わば、生ける宝石のような、貴重品として、護衛（の男性）に守られる形で、自分の保身を最優先にして行動するのであること。
女性の持つ「貴重な、守られる性」としての性格についての説明は、著者の他著作を参照されたい。
こうした、生物学的に貴重な性＝女性優位行動が、社会全体に及んでいるのが、日本社会の特徴である。
つまり日本人は、自分の保身に不安で敏感であり、安全第一、危険・失敗の回避を最優先にして行動する点、女性優位である。自らは危ない橋を渡らず、ベンチャーとか冒険を嫌がる。日本の銀行のベンチャー企業への貸し渋りがこの典型である。
上記村社会原理リストの各内容が、貴重な性としての女性に支持されるのは、みんな一緒に、集団でいれば、孤立して、他者の助けが得られなくなる、という事態から逃れることができて安全だからである。集団、護送船団を作って相互牽制し合う方が、ひとりぼっちの孤立無援状態になりにくい。生物学的に貴重な性として、安全な群れの中心部にとどまる女性に向いていること。
上記リストの各内容は、何らかの形で、女性の持つ、自分の身を守ろう、安全第一で、危険を回避しよう、誰かに保護してもらおう、

不安を回避しようとする自己保身傾向に合致している。
以上で見てきたように、
日本社会は、女性に都合よくできている、女性優位価値観で動く社会であると言える。日本は、母親の力の強い母性、母権社会であり、欧米は、父親の力の強い父性、父権社会である、と見ることもできる。

参考までに、日本とは対照的な父性、父権的な西欧、北米社会のパーソナリティと、男性優位パーソナリティは共通して気体分子運動パターンに当てはまっている。

気体分子運動パターン（男性優位、父性的。遊牧民~牧畜民的。西欧、北米、ユダヤ、アラブ、トルコ、モンゴル的。）

ここで、気体分子運動パターンでは、同質の個体同士は互いに固まらず、互いに連携を取りつつも伝道師のように広い空間を個人単位で自由に動き回る。

気体分子運動パターンの一つひとつの個体の動きを人々の心理的動きとして捉えると、
・個人主義、自由主義。プライバシーを確保できること。
・能動的。動きが高速。
・自立するしかないこと。一人であり、周囲に助けてくれる人がいない。自分のことは自分で守ること。（守らないと生きていけないこと。）責任を取ること。（責任を取らされること。）
・攻撃的。流れ弾がどんどん自分のところに飛んできて危険である。
・一人で未知の空間に進まねばならずリスキーであること。

といったようにまとめられ、西欧、北米社会の国民性に近いことが分かる。
日本と欧米とで権力者の行動様式が違うのも、日本で主流を占める女性の権力行使パターン（上司としてのあり方）が、欧米で主流を占める男性のそれと違うからではないだろうか？。
日本では、。
権力の行使のあり方が、。
（１）集団主義的であること。
（２）人格そのものを重視すること。（上位者に可愛がられること

が重要。上位者への甘え・なつきを重視すること。）
（３）（流行への）同調競争に勝ち得た者が、上位へと昇進する。
（４）前例を多く蓄えた年長者が威張る。
（５）上位者への権威主義的な服従を好むこと。
（６）一人の犯した失敗も周囲との連帯責任とする。
というように、ウェットであり、女性優位であること。

なぜ、日本社会が女性優位性格を持つに至ったか？それは、日本が典型的な稲作農耕社会であることと関係する。
稲作農耕社会を構築する過程で、集団による田植え・刈り取りなどの一斉行動、一カ所への定住・定着、農業水利面での周囲他者との緊密な相互依存関係の樹立、集約的農業による高密度人口分布、といったウェット、液体分子的な行動様式が求められた。
ドライ・ウェット、気体分子的・液体分子的な行動様式についての説明は、著者の他著作を参照されたい。
ウェット、液体分子的な行動様式を生まれながらにして身につけているのは女性であり（男性が生得的に身につけているのは、個人主義、自由主義といったドライ、気体的な行動様式。）、社会のウェット化、液体化には、女性の力が強く求められた。
女性の強い影響下で社会のウェット化、液体化を推し進めた結果、その副作用として、自己保身や安全第一といった女性優位な行動様式が、男性にも強く感染して、男性の「女性化」を引き起こした。のようにして、女性優位行動様式が日本社会全体を包み込むような形で、支配的になり、「日本＝女性優位性格を持つ社会」という構図が成立した。
日本社会全体、ないし国全体を一人の人格として擬人化して捉えるならば、それは一人の女性、女の子として捉えることができると考えられる。
（１）彼らは、自ら明確な意思決定をせず、あいまいな態度を取り続け、決定をずるずる先送りする。
（２）彼らは、自分からは行動を起こさず、受動的、退嬰的である。
（３）彼らは、その時々の雰囲気に流されて、周囲のメジャーな流れに追従する。
（４）彼らは、ヒステリーを起こす。（太平洋戦争などで、思わずカーッとなって、残虐行為を繰り返すなど）
（５）彼らは、意思決定のあり方が情緒的で、非合理・非科学的、精神主義的である（根性論を振り回すなど）
（６）彼らは、身内だけで固まり、外国人や難民などのヨソ者に対して門戸を閉ざす。（閉鎖的、排他的）

（７）彼らは、周囲の国々に自分がどう思われているか、やたらと気にする、八方美人的態度を取る。
（８）彼らは、先進国に追いつき追い越せというように、自らは先頭に立たず、二番手として絶えず先進諸国を後追いする。
（９）彼らは、アメリカなどの外圧がかかって、初めて重い腰をあげる。（外圧がないと、動かない。）
（１０）彼らは、長期的視点を持たず、目先の短期的な動向に関心が行って、場当たり的な対応に終始する。
など、日本の国ないし社会全体が、ウェットな液体的な女性優位人格をもって行動していると言える。 日本の国家・社会は、「女社会」「女流社会」「女性優位社会」「大和撫子社会」と呼べる。
こうした社会の液体的、ウェットな性質は、同じ稲作農耕民社会である、東アジア（中国南部、韓国）、東南アジアにも共通して見られると考えられ、その基本的性質は、決して、日本独特、日本特殊のものでは無く、東アジア、東南アジアの稲作農耕民社会ベルトに共通のものである。稲作農耕民社会は女社会であり、アジア的生産様式は、女性優位生産様式であると言える。
日本村社会の掟は、ほぼ稲作農耕民社会の掟、女社会の掟である。
（これに対して、気体的でドライな牧畜民社会の欧米各国は、男性優位社会、男社会として捉えることができると考えられる。アメリカが日本に導入した日本国憲法とか、ほぼ男社会の掟である。）
日本では男性も、女性の色に染まっている。日本男は、自分の保身に敏感であり、親分子分関係や浪花節といった、ベタベタ・ジメジメしたウェットな人間関係を好む、女性優位な中身を持っている。
日本男性の心理は、さらに、それに加えて、女性を守る役割を取らせるため、女性によって植えつけられた、表面上の専制君主的な「強さ」「強がり」とが、一緒に同居していると考えられる。
日本の男性は、筋力、武力のある女性モドキの存在、女性化し男性として劣化した存在として捉えられる。日本男性は、家庭で家計管理の権限を女性に取られてしまい、母子のために下僕のように給料を稼ぐしか存在意義が無かったり、育児の主導権を女性に握られていたりして、父性を喪失した立場の弱い存在である。
（これに対して、牧畜民社会の欧米各国の女性は、男性の色に染まった、男性化した存在、女性として劣化した存在として捉えることができると考えられる。）
日本の村社会＝女社会であり、共に閉鎖的、排他的で、村人や日本女は内部事情を必死で隠蔽しようとする。日本村社会、女社会の内情、掟を徹底的に明らかにして文書化することが日本の社会学では必要だ。日本の社会学者は欧米『出羽守』ばかりやっていないで、本気で取り組むべきである。

日本村社会と女社会との関連の実態

以下、日本村社会と女社会との関連の様々な実態について短文での説明をまとめてみたこと。

陰湿な日本村社会を作り上げた張本人が日本女である。
日本が自分から変われない、外圧があって初めて変わるのは、社会の中枢を女が支配しているからである。
日本村社会の解体には、日本女社会の弱体化が必要である。
何かと他人と自分を比較して、優越感に浸ったり、落ち込む、嫉妬することを延々と繰り返す人たちの集まりが日本社会＝女社会。他人は他人、自分は自分と区別が付けられた方が気楽で自由なのに。
母子一体化、母子癒着こそが、日本女が日本社会を支配する大きな手段になっている。日本女は我が子を通じて社会を支配する。
日本のフェミニストたちが欧米『出羽守』の文献、知見ばかり持ってくるのは、自分でオリジナリティの説明を出すと、周囲の村人たちから出る杭を打たれ、足を引っ張られて邪魔されるので、それを予防するためだと考えられる。日本人が、やたらと欧米の言説を取り入れて真似をしたがるのは、自分がいじめられないようにするための戦略なのだ。日本人のオリジナル言説だと「勝手に変な言説立てるなこと。独自研究するなこと。」と叩かれるが、スーパー上位者の欧米人の言うことは日本人より格上だから叩かれない。
本来、日本のフェミニストは、日本で女権拡張するなら欧米『出羽守』をやっていては駄目で、「日本伝統の村社会＝女社会、母権社会を、西欧／北米の男社会、父権社会による支配から解放しよう！」とか運動しないといけないはずである。
日本社会が停滞しやすいのは、保身第一で事なかれ主義の日本女性が社会を支配しているのが原因である。日本女性はリスクを取らない。
日本女性による男性保育士叩きは、男性に保育の主導権を取られたくない日本女性の本音を隠蔽するための工作だ。日本女性は保育の主導権を握る既得権益者なのだ。
テレビもラジオも、他人と同じ内容を視聴して、同調コミュニケーションが出来るので、日本村社会、女社会向けである。
日本の夫婦同姓（嫁入り）と、日本社会の長時間残業労働、滅私奉公労働とは深い関係がある。農村の嫁が、新入りした血のつながりの無い家での昼夜を問わない長時間労働を強いられるのと、日本の労働者による、新しく入った会社で長時間残業を強いられるのと、社会の根本原理は同じである。また、日本の中高生の長時間部活動

は、将来の滅私奉公長時間残業生活に向けての練習であると見ることが出来る。
女社会は自分からは変われない。変わるには行動や判断が必要だが、それに伴って生じる責任を、自己保身のため誰も取りたがらないので、皆変化の行動を自分からは起こさない。女社会の一種の日本村社会も、自分からは変われない。変わるには外圧が必要だ。
日本フェミニズム不要論が考えられる。日本は稲作農耕民社会で、農村とか、女性は、母や姑みたいにもともと強い。日本の都会の専業主婦も家の財布と子供をがっちり掴んでいて強い。日本のフェミニストの本来目指す女権拡張は既に実現してしまっている。
日本は母子癒着、母子一体化を理想とする社会なので、夫婦離婚になるとほぼ子供の親権は日本女の方に行ってしまう。これも日本女の権力の強さの現れである。
専業主婦希望の日本女が日本男に課す経済的ハードルは高すぎである。それに対応する価値を日本女が本当に持っているのか怪しい。
専業主婦と結婚したい日本男も、何か自分の母親を理想化しているようで、母子癒着で、母という日本女に負けている。日本男は母への甘え、依存意識があるから、それを断てない限り日本男は女社会の日本社会の中で弱者のままだろう。
陰湿で自由のない、社会の遅れの原因となっている日本村社会の解体が必要だ。そのためには、日本社会の村社会化の原動力となっている日本女たちの女社会を弱体化させる必要がある。
日本の社会学で言われてきたいわゆる封建思想は、女流の姑思想であると考えると整合性を取りやすい。上位者、上位者、姑には絶対服従で批判は一切許されない一方で、下位者はさげすみ、いじめの格好の対象となるとか、自分たちの苦労を若者、嫁にもさせないと気が済まないとか、下位者、嫁が休むこと、楽することは悪であると考えるとか、姑の考え方に合致している。
日本と欧米とでフェミニズムのあり方は根本的に異なる。
・家庭で夫から小遣い制を押し付けられていた立場の弱い女性たちが経済的自由を求めて、職場進出の運動をしたのが欧米フェミニズムである。
・家庭で夫に小遣いを渡していた立場の強い専業主婦が、性別分業のため収入を夫に頼る経済リスク低減のために職場進出の運動をしたのが日本のフェミニズムである。
戦前日本で選挙投票権があったのは日本男だけという時代があって日本フェミニストに非難されているが、伝統的母子癒着の日本男は母＝姑の子分でお遣い役でしかなかった訳で、選挙に行くのも権力者の母＝姑の代行に過ぎなかった。この件のフェミニストによる男非難は、日本女＝母、姑の権力保持隠蔽である。

厳しい同調圧力の発生、空気を読むことの強制、団体行動の強制、事なかれ主義と責任回避等によって日本中を村社会化して苦しめているのが日本女である。
日本人が強きを助け、弱きを挫くのは、日本社会が女社会だからである。女は強きになびき、弱きを嘲笑して助けない。
日本社会の建前と本音は以下のように分けられる。
・日本社会の建前＝疑似牧畜民＝疑似西欧・北米＝疑似男社会
・日本社会の本音＝農耕民＝中韓と同類＝女社会
日本社会の空気読み強制、同調圧力、一体行動・団体行動の強制、出た杭を打つ等は、全て女社会由来。日本社会が女社会であることの証拠。女社会は、欧米自由主義、個人主義とは明らかに異質であり、欧米男社会の敵である。
女社会の特質を解明すると、内部告発扱いになること。道理で皆やらない訳であること。解明すると、フェミニストが主張する男女に性差が無いなんてウソであることがバレてしまう。日本社会を奥から支配しているのが女であることがバレてしまう。女にとって都合が悪い。同様に、日本村社会の特質を解明すると、内部告発扱いになること。道理で皆やらない訳であること。日本が欧米と離れた中韓に近い存在であることがバレてしまう。日本人にとって都合が悪い。
毎日長時間残業して、有給休暇を殆ど取らない日本の官公庁や企業の社員は、立場が農村の嫁そっくりである。農村の嫁は、家族で一番早起き、遅く就寝すること、毎日休まず身内の家族のために、姑に怒鳴られながら明日の見えない下働きをひたすら長時間続けることが特徴だから。経営者や社員の上司が姑相当で、同僚が小姑相当である。
日本女は、結婚すると、自分は働かずに寄生して金をたかるだけでなく、家の財布の紐を奪取して、男への小遣い制を確立させるから厄介だ。日本女は家計管理者として家の金を使い放題。日本男は少ない小遣いで我慢。
日本女が専業主婦になりたがるのは、その方が、キャリア女になるよりも、社会的な待遇が圧倒的に良いからだ。
日本村社会が嫌いな人は、日本女に近づかない方が良い。なぜなら彼女らが日本村社会の総本山なのだから。
日本男も日本女も欧米『出羽守』なので、女性差別反対運動も、男性差別反対運動も、欧米発の社会理論をお経のように唱えながらやることになる。
夫婦共働きで両方とも滅私奉公だと、子育てに必要な時間的余裕が出来ず、夫婦の意思疎通も上手く行かず、少子化と離婚率の増加につながる。滅私奉公は無くす必要があるが、日本人には、男女とも

仕事が全て、キャリア構築が全ての職場村に包含された人が多いので、上手く行かない。
姑は怖くていたぶれないので、姑の子分の夫＝日本男を代わりにいたぶる嫁＝日本女。日本フェミニズムは嫁のフェミニズム。姑は決して出て来ない。
日本社会で、母との強力な一体感、癒着感持続で育てられた子供が、学校に入って、周囲生徒との一体感をずっと維持するために、学校部活を長時間活動する。更に会社や官庁に入ると、周囲の社員との一体感維持のために、社畜になって長時間残業するようにこと。これらは母子関係が原型、理想型になっている。
日本女が黒と言うと黒になり、白と言うと白になるのが日本村社会である。
母、姑として日本社会を隅々まで支配する日本女は許せないが、見かけの男尊女卑の優遇の上にあぐらをかいて亭主関白とか言ってふんぞり返るバカマッチョ日本男も許せない。特にフェミニスト媚びの日本男は最低である。
日本人は他人に対して姑根性で接する。とても厳しくてうるさいこと。しかも絶えず監視すること。
日本男は、日本女に対して、以下の相反する２側面の態度を持っている。
・お母さんのように甘えたいこと。依存したいこと。支配されたいこと。
・お嫁さんのように家風継承面での先輩として支配したいこと。（お嫁さんは新入り。）
今の日本では、性別分業制を肯定するＣＭを流すと、日本女（とスーパー上位者の欧米）の圧力で炎上し、男女両方外働きで男性の家事、育児を肯定するＣＭを流すと歓迎されるようだこと。でも、日本男の家計管理権限掌握を肯定するＣＭ、日本男が家計簿を付けるＣＭは、なぜか流れない。日本女によほど都合悪いからだろうこと。父子関係の母子関係への優越を肯定するＣＭ、日本男が家計簿を付けるＣＭが日本で作られ、受け入れられたら、日本の女尊男卑は根本的に解決されるだろう。
日本男による家事、育児の分担も、実際の管理監督の権限を握っているのは日本女の方で、日本男は実質下っ端のこき使われる労働者役しか担えないのだと思う。母子癒着と家計管理権限掌握こそが日本女による日本社会支配の原動力だから、日本女は権益を手放そうとはしないだろう。
女も男も自分らしく生きることが難しい社会、日本。常に自分を周囲に合わせて変えていかないと生きていけないこと。国際女性デーは、欧米スタンダードだ。

日本女は、本当は姑を批判したいんだけど、女同士なので出来ない。それで旦那を批判すること。旦那を家事、育児をしない人に育てたのは誰なんだろうか？姑に決まっている。
日本女が伝統的な日本の家族制度や母親像を批判するのは、姑との同居がたまらなく嫌だから。専業主婦になると、姑との一日中同居の危険性が高まるので、キャリア女になろうとする。
日本の父は母子の奴隷。大黒柱と威張っているけど、小遣い制に甘んじ、自宅に自分の居場所も無い。母子の間に割って入る力もなく無視されている。日本に家父長制を導入すべきこと。日本女が握っている家計管理の権限も、子育ての権限も親権も日本男に渡すべき。日本男の地位向上には、西欧、北米の家父長制導入が不可避。
日本で子育てを日本女が独占する現状だと、子供は母親に懐いてしまい、父親が除け者になってしまう。これが日本社会が女社会になる根本原因。父の立場を強めるには、子育てを日本男も担う必要がある。
今の父の給料の上に乗って母子が安泰に暮らす日本の性別分業制（母子上位、父下位）は、父母が離婚すると、放り出された母子が一挙に生活に困ってしまうので、母が子供の世話をしながら十分稼げるようにするとか、変革が求められている。
日本男は家事、育児に興味がない、良く知らない。お母さんが全部やってくれた時代の申し子だから。日本男に家事、育児ノウハウを日本女並に学習させる機会が必要。
日本男がお母さんに甘えるのと、家父長制とは両立しない。
日本男みたいな農耕民男は全てマザコン。中国、韓国、東南アジア、全部そうだろうこと。母親の子分、母親の奴隷だこと。
日本の村人になっている男性、村に適応している男性は、あまねく父性を喪失して女性化し、男性として劣化している。逆に言えば男性が日本の村人になるには、母子癒着育児による父性、男性性の除去が不可欠。女性の力が必要である。
女に利益があることと、男性に利益があることの両方を客観的に俯瞰するのが性差社会学のあり方。日本の女性学も男性学も、この姿勢が出来ていない。日本は、所詮は女社会なので客観性が欠如しているためだ。
子育てを担うことこそが、日本女が社会を支配する最も効果的な手段。日本男も日本女も母の子分。母子癒着、母子一体感の強い状態で育つと、皆、村人になること。
かつて、日本のテレビの「冬彦さん」ドラマでマザコンと姑を否定する風潮が作られ、嫁の勝利と思っていたら、今度は、嫁の実母を否定するドラマが流れている。日本女は、自分より上位者の女に耐性がない、というか日本女同士の権力闘争がそれだけ地獄だという

ことだろう。
日本＝男装の麗人であること。本来女流の国なのに、家父長制の欧米諸国の仲間に入れてもらおうと一生懸命になって男性国家の振りをしていること。
日本女は、自分の周囲の人間関係にうるさく、相互監視が大好きで、個人のプライバシーに興味津々である。また嫉妬心が満載で、誰かが自分よりも良い思いをしていることを知ると、足を引っ張ったり、陰口や密告で潰そうとする。日本で成立する予定の共謀罪と日本女とは、とても相性が良い。
日本の学校では、中学校辺りから急速に集団に合わせて一体行動することを学習する度合いが強くなる。こうした所属集団に自分を一体化させる行動は、女性がより良く好む行動様式であり、その点、日本の学校は中学校辺りから顕著に女社会化すると言える。その原因としては、この中学の年齢は、ちょうど生徒たちが第二次性徴期に入る頃であり、性差が大きく出て来る時期である。すなわち、男社会、女社会の特徴が大きく出て来る時期であり、日本は女子の方が勢力が強いので、この頃から急に学級が女性の性徴の発現に合わせて女社会化すると言える。中学校辺りから生徒間の先輩後輩制がきつくなるのも同様で、女社会化の表れである。
日本の滅私奉公社会では、夫婦のどちらかが、職場ムラで100%余力を残さず働き、もう一方がその生活の全面サポート、管理に回ることを余儀なくされ、性別役割分業が必然的なものとなる。専業主婦か専業主夫のどちらかの存在が必須。この構造を壊すには日本社会の滅私奉公指向を消滅させるしかない。
日本社会の伝統的な慣行である滅私奉公こそが、日本社会のジェンダーギャップ指数を押し下げている根本要因。（男女不平等になること。）日本社会のジェンダーギャップ指数を上げること。（男女平等にすること。）そのためには、滅私奉公の社会慣行をなくすことが必須。
女流の気配り指向が日本社会を生きにくくしている。職場とかで一人だけ先に帰るのは抜け駆けでありダメだとか、残った人の仕事を手伝わないとダメだとか、典型である。
日本の男性差別反対の男性運動家は、自分たちが社会的強者の側に立っていると信じている限りは、運動に失敗するだろう。自分の置かれている立場を再検討すべきだこと。
いくら日本男の社会的地位が高くても、しょせん日本男は、母の独占支配物。日本では子育てを母が独占しており、母子の関係は親分子分で、母が息子を支配する。母の方が息子よりも社会的地位が高い。
日本男の社会的地位＜日本母の社会的地位。

日本社会で、子育てを女性に託す慣行が、日本女性が我が子を通じて社会で大きな勢力、権力を振るう原因になっている。
稲作農耕は、女性、母親の強い社会を生み出し、マザコン男性女性を量産する。
女流の日本には、全体主義的民主主義の開発が必要。
日本の職場村が、男性が主要な地位を占めているにも関わらず、同調圧力や一体感、和合の重視と、女流の雰囲気をかもし出すのは、高地位高収入の男性たちも含めて、男性たちをずっと育てて生きた彼らの母親が、男性たちを精神的に支配しているからだろう。男性たちの母親の空気が、日本の職場村を覆う。
日本の職場村で、女性が管理職昇進をためらう、避けるのは、もし自分だけ昇進すると、今まで同僚で同じ地位だった職場の他の女性たちから「出る杭」扱いされて疎外されるのをとても恐れるかららしい。対策としては、女性たちがみんな仲良く一斉に昇進するようにするのが正解だろう。これは同期が横並びで出世する日本の高級官僚の昇進と図式が一緒。
女社会って、北朝鮮と似ているのでは？。
欧米フェミニストは、何でも自分の社会の基準（女性が社会的に劣る。）で理論を考えて、それを日本のフェミニストに強引に押し付けること。そのため、本来、姑、母が強く、女権拡張では先を行っているはずの日本社会のフェミニストが、欧米フェミニストの作った理論をひたすら真似る事態になっている。
欧米を席巻するポリティカル・コレクトネスでは、男女性差を明らかにする研究は、性差別扱いされて総攻撃されるようだが、父性と母性の差を明らかにする研究はどうなのだろうか？。
日本のフェミニストは、女権拡張を目指したいのではなく、欧米『出羽守』になって上から目線で日本の庶民を啓蒙して良い格好がしたいだけ。女権拡張の先進国＝女が強い国ならベトナムとか、稲作農耕民社会～国家にいくらでもありそうなのに、それらの存在は完全無視。
日本の宮内庁が天皇陵の発掘を許可しようとしないのと、日本のフェミストが女社会の解明をしようとしないのは、共通している。自分たちに不利な結果が出るからだ。
日本では戦後、女性と靴下が強くなった（女性は戦前は弱かった。）と言われるが、母と姑は戦前から強かったのでは。戦後強くなったのは嫁。
日本の人は、学校で教えられた「日本社会＝男社会」説を素朴に信じている人が多い。あと、「社会的地位＝職場での地位」と信じていること。
日本の核家族化は、姑と同居したくない嫁の手によって進められた

側面が大きい。
日本夫が滅私奉公で残業しまくりになるのは、専業主婦の妻の自由時間と趣味に費やすお金を確保するため。
母子癒着育児の結果としての日本男の父性喪失を問題視する人がいないのは問題だ。
日本男は、社会的地位が高いとされる高級官僚も大企業の社長も、皆、日本母の操り人形、小間使い、奴隷である。強力な母子癒着がそうなる原因である。かつ、日本母は、日本女の部分集合。ということは、日本男は、社会的地位が高くても日本女の支配下にあるということである。これは、日本の子持ちの夫婦の離婚で、親権が専ら日本母に行くこととも関連しているだろう。日本母は日本の隠れた権力者なのだ。
日本男は日本女から小遣いをもらう立場ではなく、日本女に小遣いを渡す立場を確立すべき。そうでないと、日本女の使い走りの犬の地位から、いつまで経っても脱却出来ない。
恋愛で、日本男が考えたり提供したデートコースや食事を厳しく査定して評価する日本女は、「恋愛管理職」だ。日本女のやっていることは、会社で部下の成果を査定する管理職の上司と変わらない。デート中一生懸命サービスする日本男を上から目線で一方的に評価するのが日本女だ。
日本男が日本女に家庭の財布の紐を渡してしまうのは、日本男が日本女に無意識のうちに心理的に依存している証拠。日本男は、日本女に自分を管理して欲しいと思っているんだ。女尊男卑の典型だと思うが、日本男も日本女もめったに話題にしない。現状を変える気持ちが無いということだ。問題だと思うこと。
日本男に投げかけられる「ワンコイン亭主」という言葉とか、女性に使われると「ワンコイン奥さん」になると思うんだけど、日本の家庭の７割が妻が家計管理権限を握っている状態だと、「ワンコイン奥さん」はほとんどいないのだろう。「ワンコイン亭主」は日本男に対する蔑称であり、男性差別だ。
女性が弱い牧畜民のフェミニズムと、女性が強い農耕民のフェミニズムとは、あり方が根本的に違うと思う。
日本人が肯定する価値観である、「僕稼ぐ人、私使う人」は男性の道具視につながっており、男性差別である。
日本の職場村への女性管理職登用の増加に伴い、キャリア局（つぼね）の問題が顕在化するだろう。キャリア局は、今までの平社員局に比べて公式に使える権力が格段に増えているから、周囲の誰も彼女の専横を止められなくなる確率が高くなっている。
女流の日本村社会は、女性による男性支配の世界的象徴である。
フェミニズムの発展のためには、日本のようなマザコン社会の世界

的拡張が必要である。日本の伝統的な村社会は、母や姑が支配する社会である。子供たちは、息子も娘も、母に対する依存心や甘えの意識を強く持っており、その点、日本村社会はマザコン社会と呼べる。このマザコン社会を全世界に向けて拡張していくことを、世界のフェミニズムは目指すべきである。日本~東アジアのフェミニズトはその旗振り役をすべきである。
日本社会におけるプライバシー欠如の原因と母子関係とは大きな相関がある。日本村社会におけるプライバシーの欠如は、日本の家庭における母子間のプライバシーの欠如が原型である。日本村社会の人間関係の原点が母子関係にあることの証拠であり、母が社会的に強いことの証拠である。
日本のブラック労働の原型としての嫁の仕事に注目すべきであること。日本人の過労(長時間労働が当たり前で、全人格を仕事に捧げる。)の原型は嫁の過労である。上司、先輩が姑で部下、後輩が嫁である。姑配下の嫁の仕事は本質的にブラックである。女流の上下関係に基づく仕事はブラックになりやすい。これらは無くす必要がある。
日本社会の遅滞、癒着の原因は女性にある。遅滞は、自己保身のため新しいことを一番手でやろうとしない女性の性質がもたらしている。癒着は、相互一体化、まとわりつき、グループ化が好きな女性の性質がもたらしている。
女流の気配り指向が日本社会を生きにくくしている。一人だけ先に帰るのは抜け駆けでダメ。残った人の仕事を手伝わないとダメ。これが日本に長時間残業をもたらしている。
日本フェミニズムは西欧北米的家父長制の真似事、お勉強会である。表面的コピーペーストは上手くやっているが、しょせんは真似事なので日本社会の本質的部分は変えることができない。どうしても地の日本村社会=母権社会が出てきてしまう。
日本社会では、他者に対する謙譲、謙遜の態度を取ることで、周囲の他者による女流の嫉妬システムの駆動を回避させることができる。

日本村社会の理想型としての母子関係

日本人は、生まれた時から急速に村人になって行く。
子供は、まず、母親に強力な一体感をもって癒着され続け、排他的な母子連合体を形成する。他者との一体感の維持を母子関係で習得

すること。そして、小さな子供の時分から周囲とお揃いの制服とかを着て、周囲との一体行動を学習すること。日本の子供は、幼少であっても既に村人である。
更に、中学校や高校の長時間部活とかで、自分の所属する集団（学校）に完全に一体化して全ての時間を捧げて活動することを最優先とする考え方を身に付けること。これが、学校を卒業して官公庁や会社で滅私奉公の長時間労働を当たり前とする考え方につながっていく。
日本の村人の対人関係の基本、理想型は母子関係にあるのである。日本の村人は母子癒着育児が生み出している。日本の村人を生み出す主役は母親であり、女性である。日本村社会の主役、真の支配者は女性である。一生子供と母子癒着して成人後の子供（特に息子）に対しても強力な影響力、支配力を行使し続けることが日本の女性による社会支配のやり方の基本である。
一方、男性は、この母子癒着育児の過程で父性を失い女性化して一生子供扱いの弱い立場にランクダウンしてしまう。男性は、生得的には個人主義、自由主義の人間であり、相互一体感と統制、相互監視を重視する稲作農耕民社会の日本村社会では環境適応的に不適格な、人権の無い、村人としては劣った存在なのである。
かつては、男尊女卑が日本男性の人権の弱さを補償し、日本男性は姑の傘の下で威張っていたが、嫁による姑の家庭からの非同居化による排除と、欧米からのレディーファーストの導入で男尊女卑は否定され、子供の親権も嫁に行ってしまい、母子にとって便利なATM扱いされ、社会的弱者の地位に落ちてしまっている。
なお、母子癒着状態で育てられた子供は、母親との強い一体感により、母親の言うことを汲んで行動するようになり、その存在が母の操り人形、母のおもちゃ、母の競走馬状態に置かれる。要するに、子供は母による社会的自己実現の道具であり、競走馬として動くことを要求されるようになる。子供がビジネスでのライバル同僚との競争で早く走って成果を出して、役職上、経済力上の昇進を図るとそれがそのまま母親の社会的地位の向上となり、母親は、そのために子供の尻を叩いて昇進競争に向かわせるのである。日本の職場村で威張っている日本男の管理職や先輩面の社員は、実際のところは、自分のお母さんが騎手役になって搭乗して、ひたすら出世に向かって鞭打たれて走る競走馬だ。つまり、お母さんの奴隷だこと。だからこそ職場村の雰囲気が、男性ばかり多いのに、集団行動重視、和合重視、年功序列、事なかれ主義で女性優位になる。
要するに、日本では、子供は母親の社会的昇進のための道具、ツールなのである。日本の職場村で働く男性は、多かれ少なかれ自分の母親の競走馬の立場に甘んじている。日本の職場村は今まで男性が

多く配置され、男社会とされて、フェミニストによる男女差別反対運動の批判にさらされてきたが、実は、男性たちの母親による自分たち母親の社会的地位向上のための激しい競争の場、代理戦争の場となっているのである。職場村の主人公は実は男性たちの母親である。
日本の職場村の慣行が、男性が大多数を占めているにも関わらず、集団行動の重視、年功序列、相互監視とプライバシーの欠如といったような女社会みたいなものになっていて、男性にとって実際には不利になっている。日本の男性は母親との母子癒着育児によって父性を失い、母親によるメンタルの支配のもとで、知らず知らずのうちに女性優位行動や女性優位慣行を強要されているのであり、ある意味、男性差別の象徴である。だが、育児での母子癒着の快感が忘れられないため、母の側に付く日本の男性は、その事実を無意識のうちに無視し、母親の小遣い役として、子供的な存在のまま、女性優位な日本職場村慣行に慣れて行き、母性による支配を受け入れる存在となるのである。
日本の職場村で威張っている日本男の管理職や先輩面の社員は、実際のところ、ほぼ自分のお母さん（、あるいは奥さん）が騎手役の、ひたすら出世に向かって鞭打たれて走る競走馬だ。つまり、お母さん（奥さん）の奴隷だこと。だからこそ職場村の雰囲気が集団行動重視、和合重視、年功序列、事なかれ主義で女性優位になる。日本男社会は、実質的に女社会なのだ。
男性の専業主婦の妻も、男性の母と同じように、男性の社会的昇進を媒介として自分の地位を上げていくのであり、男性の長時間残業を、自分が管理する家計収入の額を増やす面でも、男性の昇進を媒介として自分の社会的地位を向上させるためにも大いに奨励しているのである。日本男の妻は、日本男の母に代わって、騎手として日本男の上に搭乗し、競走馬の日本男の尻を鞭で叩いて出世競争させるのである。日本男の職場村での長時間労働の原因のかなりは、日本男の母と妻にあると言っても良いのである。日本男は、無意識のうちに妻に対して心理的に母親代わりに依存しているので、母や妻の、息子や夫の長時間労働への要望をひたすら聞くようになってしまい、滅私奉公のブラック労働をするしかなくなってしまうのである。
日本の子供は、息子も娘も一生、母の所有物、奴隷だ。日本の子供は母の支配から抜け出ることが出来ない。日本の村人は、男性も女性も一生母親の支配下に置かれ、その支配従属関係が世代を超えて連鎖している。
男は仕事で女は子育てと思っている時点で、日本男は日本女に負けている。親権を日本女に取られ、子供は日本女の操り人形になる。

男性に有利な社会的性差もあれば、女性に有利な社会的性差も沢山あるはず。特に稲作農耕社会の日本では、女性に有利な社会的性差がたくさんあるのではないか。場の空気を読んで同調、迎合するのが得意なのは女性だとか。東京一極集中社会で高密度分布が得意なのは女性だとか。
男尊女卑とレディーファーストは共通している。男尊女卑社会では女性が社会の実権を握り、レディーファースト社会では男性が社会の実権を握っている。家計管理や子育て主導権を握る者こそが社会の真の実力者だ。社会的に優先されている者が社会で実権を握っているとは限らない。
戦前日本の男尊女卑社会を欧米並みの家父長制社会だと信じている日本の男性差別反対者は考えを改めた方が良い。根本的に間違っていること。威張ることと社会的実権を握ることとは乖離しているのだ。戦前の日本男は、母親の操り人形、おもちゃが大きな顔をしていただけの存在だ。日本男性の地位が戦後になって低下した訳ではない。戦前から日本男は女流でダメな存在なのだ。
日本の男性権利拡張運動家は、女性専用車両やレディースデイ撤廃みたいな瑣末な事象ばかり叩いているが、それでは勝ち目はない。本当の敵は伝統的稲作農耕がもたらしている日本社会の女性化、母性化だ。これを根本的に打破する必要がある。

日本村社会における「転村の自由」「非村人の入村の自由」「村内先輩後輩制の廃止」の必要性

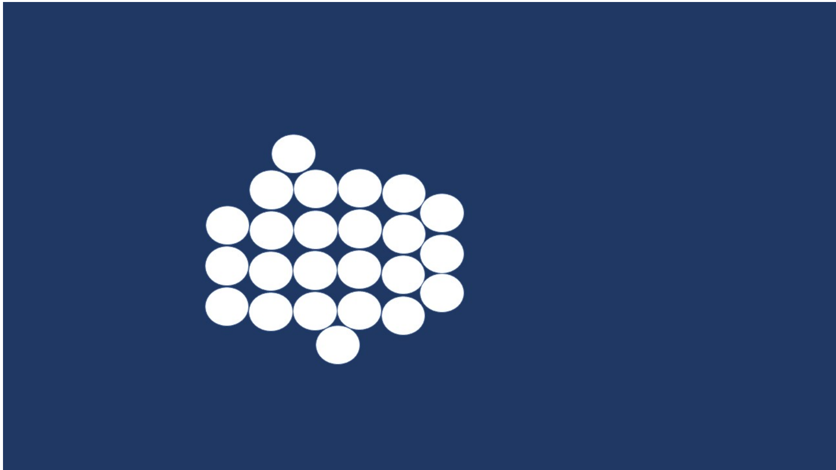
労働条件が悪いのに、日本の村人たちが今いる職場村を簡単に辞めることが出来ないのは、辞めると、職場村を裏切ったと見なされて悪い評価が付き、次の職場村になかなか入れてもらえなくなる度合いがとても上昇するからである。また、職場村を辞めて非村人になっていた期間が長いほど、職歴の断絶 = 村人歴の断絶と見なされ、再就職に不利になってしまうのである。職歴も村人であった時期にやっていたことしか評価されない。
これら職場村の慣行は、その大元が女社会にその原型を持っていると考えられる。女社会は自らの保身、安全確保のため、閉鎖的、排他的集団を作ってその中で生きるが、そうした女集団では、集団の中で絶えず主導権争いの派閥抗争が繰り広げられ、その中で浮くと、集団内の調和を乱すとして仲間はずれにされて、かと言って他

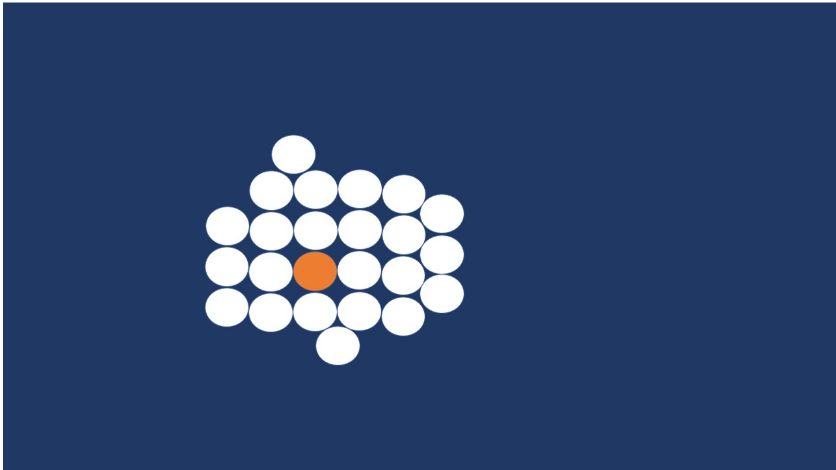
の集団に入れてもらうことが難しくなってしまう。そのため女性は、自らの保身のために、必死で所属集団にしがみついていなくてはならず、所属集団内部で生き残るには、所属集団の有力者の出す理不尽な条件（＝実質上のいじめ）をひたすら呑まざるを得なくなること。
日本の職場村で人権が保証されないのは、従業員の村人が職場村を出ると、その時点で、前の所属職場村で対人関係とかで上手くやって行けなかった無能の村人であるという評価になったり、村を出ていくなんて職場村への裏切り者であり、信用ならないという評価になったり、転村回数が一定以上増えると、村人としての信用が無くてどこにも行き場が無くなったりするから、そうした弱みを利用して廃人になるまで使い捨てで長時間労働、残業させようと経営層の村人が考えるからだと思う。
あるいは新規一括採用の若者の所属しているのが職場村だったとして、職場村での残業代不払いとか、長時間サービス残業に対して声を上げることができなくなってしまう。声を上げると、職場村から追い出され、転村先が見つかる保証が無いため、長時間労働で条件が悪くても必死に今の職場村にしがみつき、経営者からの搾取を受けっぱなしになるのを許容せざるを得ないのである。
転村不可こそが、日本の非人道的な職場慣行の原因であり、転村の自由こそが日本の労働者の村人層が権利として勝ちうるべき日本の村社会の新たな規範なのである。
これは非村人層（非正規雇用者）＝流民層にも適用されるべきである。ある村人が、子供が生まれて子育てが忙しいとか当座の生活資金が溜まったとか今いる職場村でサービス残業が横行しているとかいう理由で、いったん職場村を出て、非村人になって、しばらく育児とかライフワークとか休養をして村人としての職歴にブランクを作った後、また別の職場村に入ろうとすると、前の村を勝手に飛び出した村の裏切り者、非適応者扱いされ、かつ非村人であった期間が長過ぎて、村人としての信用度が低下しているため、とても入村を許可することが出来ないとかなってしまい、非村人のパートタイムとかの臨時雇用の地位に固定化されてしまう。いったん非村人になると再度村人になるのが難しくなってしまう。非村人の期間中に資格とか取っても職場村の職歴にはカウントされず、村に入れてもらうことが出来ない。
こうした非村人、流民の再入村不可の慣行は、事実上の村人と非村人の間の身分差別になっており、社会的不平等の度合いが大きいため、一定期間以上、村人の立場から離れていて非村人になっていても、能力や人柄次第で非村人を村人として迎える「非村人の入村の自由」を確保すべきである。新規一括採用で職場村の村人になれな

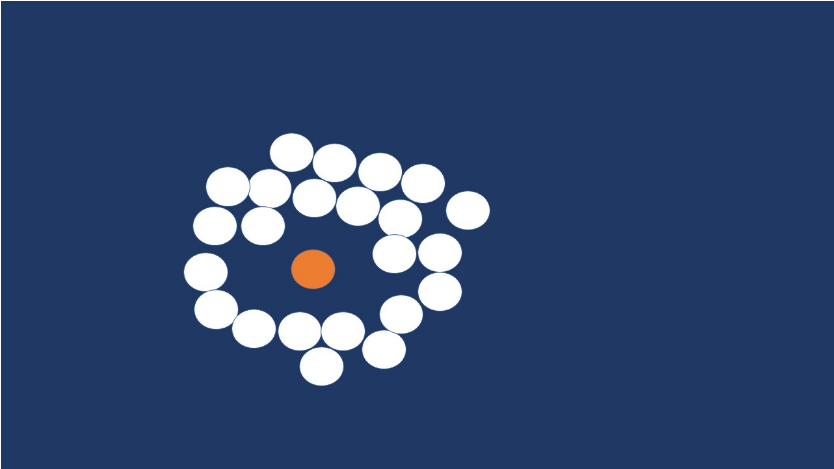
かった既卒者の非村人（就職氷河期世代とか）も、この文脈で入村を認められるべきである。
また、日本の村社会、女社会で、新入りの村人や、中途採用の村人（いわゆる後輩）に対して、古株の村人（いわゆる先輩）が、自分たちが昔から先んじて村にいるというただそれだけの理由で、後輩に対してやたらと威張ったり、嫌がらせを行ったりすることを当然視する「先輩後輩制」は、明らかに年齢差別であり、人権侵害につながっている。この背後には、「村の前例、しきたり」は村人にとって絶対不可侵であるという強い信念があるのである。新しい文化への適応力は明らかに若い人の方が優れており、古株は置いていかれるのだから、いい加減、日本村社会、女社会では、「村内年功序列」「村内先輩後輩制」を廃するべきである。○○さん付けで名前の呼び方を統一するとかすべきであること。（これについてはすでに実践している日本の会社もあるらしい。）
また中高年の歳を食った人が転村しようとしても、職場村の中にちっとも入れてもらえないのは、日本の職場村において、年齢の高い人は、管理職として部下の仕事のマネジメントをすべきという考え方が強く浸透しており、上司より部下の方が高齢者という、年功序列に反する人員配置が忌避される慣行があるからである。現場の作業は中高年の管理職はタッチせず、若い下っ端の村人や下請け村にやらせるという慣行があり、それに反する中高年でかつ現場指向の人々は、なかなか自分の居場所が見つからず、結果的に職場村を去っていくことになる場合が大きい。これに対しては、村内年功序列上位者＝管理職という固定した見方を止めるべきである。
こうした硬直した日本村社会の考えが、現代日本社会が衰退している大きな原因になっていることは明らかである。村社会の規範を見直すときが来ているのだ。その為にも、日本村社会、女社会の掟のどの箇所をどのように変えると効果的かの研究が必須である。

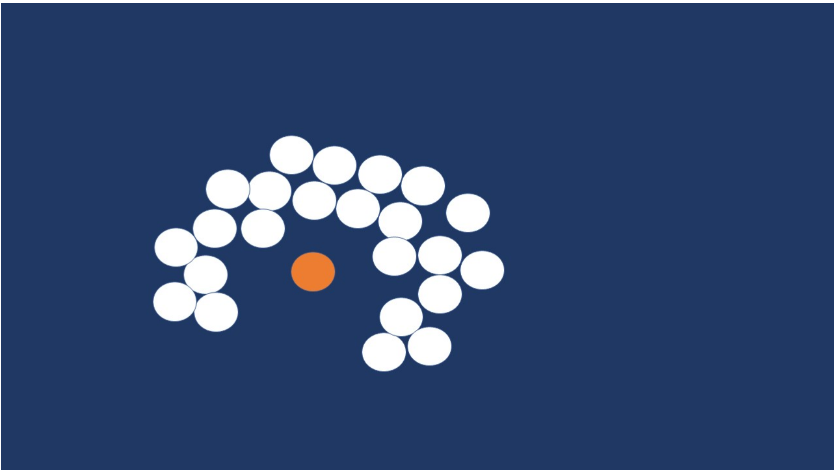
「村八分」の解消が必要。

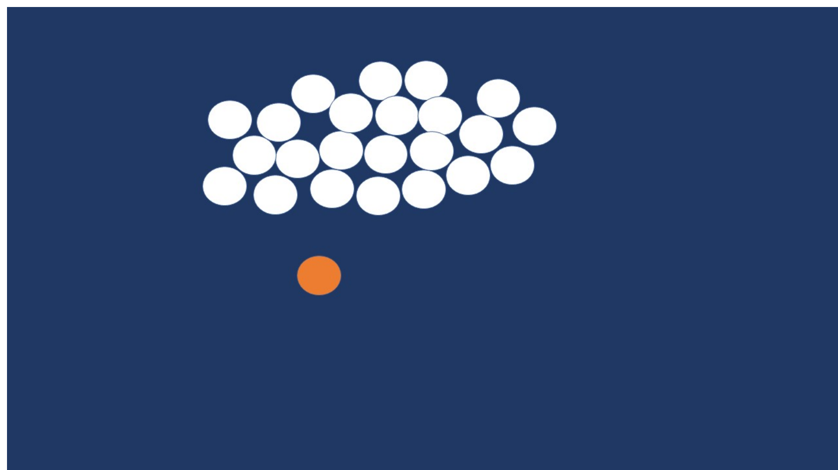
日本村社会とかの農耕民社会、女社会で頻発する村八分を何とかする必要がある。重大な人権侵害行為だからであること。
村八分は以下のような経過をたどる。


初期状態では、全員が同じ色の村人の集団が存在する。


村人のうちの一人が周囲と不同調を起こし、異質な存在となる。


すると、不同調を起こした村人の周囲の村人たちが、不同調の村人から距離を取る。その結果、不同調の村人は周囲から浮いた存在となる。


不同調を起こした村人は仲間外れにされる。



最期に、不同調を起こした村人以外の村人たちが初期状態と同じ形でまとまる一方、不同調を起こした村人は村から追い出され、流民化する。
日本の職場村（官公庁、企業）とか、建前上は終身雇用だけど、村の空気に合わない、周囲に同調しない、浮いた態度（一人だけ長時間残業せずに定時帰宅するなど）をちょっとでも見せると、いじめられたり叩かれたり無視されたりして、うつ病とかになって村八分扱いで追い出されるので、油断がならない。職場村で終身雇用扱いになるのは、村の空気（その時々の職場村の有力者、経営者の意向、あるいは村益とみなされる行動様式）にずっと自分を滅私奉公で合わせられた成員だけであることに注意する必要がある。
日本の学校村、学級村では、特に女子生徒とか、閉鎖的な仲間グループを作り、グループ内輪で周囲の空気に絶えず合わせて行動しないと、いじめられ、仲間はずれ＝村八分にされ、他のグループにも入れてもらえない。村八分は、特に自己保身のため集団所属を強く求める女子の場合に深刻になる。
村八分は、特に田舎の農村に限った話ではなく、都会のママ友とかの間でも村八分が起きる。また、日本だけでなく、ベトナム社会とかでも見られる慣行であること。稲作農耕民社会、女社会に普遍的に見られると考えられること。
村八分の慣行（ある村からいったん追い出されるとその村に二度と入れてもらえないこと。ある村を追い出されると他の村にも入れてもらえない。一人ぼっちになってしまい生きて行けないこと。）こそが、日本社会を、ひたすら周囲に同調しなくてはならず、生きづらくしている根本原因である。村八分は、人権上大きな問題であり、直さなくてはいけない。
集団内外の区別、差別がある液体分子運動型の社会（女社会、農耕

民社会）では、村八分は発生が不可避である。
村八分は、女社会が起源と考えられる。女社会では、成員が自己保身、安全確保のため、護送船団方式で閉鎖的、排他的な集団、団体を作って互いに守られることを指向し、みんな一緒に調和して一体化して行動することを指向する。そして彼女らは、集団内部で出る杭になったり、遅れたり、失敗したりして調和を乱す成員を、集団にとって有害であるとして仲間はずれにして追い出す。成員は、ある集団から追い出されたことで、他の集団でも有害になるとして受け入れて貰えなくなり、行き所が無くなり、生きていけなくなる。これが村八分の原型であり、女性が強大な勢力を持つ農耕民社会に受け継がれている。
対策としては、村八分になった人を無条件で受け入れる互助組合、村八分に遭遇しても生活していけるセーフティネットが社会的に必要である。学校村、学級村では、学校の保健室あるいはフリースクールがその役割を果たしている。こうしたセーフティネットは、職場村や大人の女性集団（ママ友）の場合も必要である。ネット上に村八分を受けた者同士の互助組合、村八分に遭遇した時の駆け込み寺、相談窓口を立ち上げるとかする必要がある。
性格的に、周囲に同調するのが苦手で村八分に遭遇しやすい人たち（発達障害者とか）の人権を守る必要があり、社会的な取り組みが必要である。
社会的に村八分による人権侵害を無くしていく取り組みが必要である。例えば、ある人が前の職場村で村八分に遭遇して転村（転社）の回数が増えても、ネガティブに見ないようにする職場村の人事担当者の意識改革、人権教育が必要である。あるいは、日本語の会話だけでほとんどやっていける、出る杭になりやすいことが逆に個性的であるとして長所として受け入れられる、牧畜民外資系の、村社会では無い職場集団を積極的にたくさん作るとかの改革が必要である。
村八分に遭遇した人の救済は、職場村とか、そもそも村に最初から入れてもらえなかった人（就職氷河期世代の既卒の非正規雇用者とか）の救済と共通の側面がある。
あるいは、犯罪を犯した前科があって、どの村にも入れてもらえなくなった人の救済と共通の側面がある。
村八分なんて怖くない、村八分に遭遇しても、村に属さなくても問題なく生きていけるというようにするべきである。人々が安心して村八分を受容し、村のしがらみを超えて気分をプラスにして再出発することが出来るように社会を変革するべきである。

負の体験の次世代連鎖の断ち切りが必要。

日本人は、自分がした負の体験の次世代への連鎖が大好きである。嫁姑関係の体験も、学校PTA役員の体験もそうである。自分が、一つ前の世代の先輩格の年代の人たちから強引に、所属集団の迷惑な因習を押し付けられて苦労させられた後、次は自分たちが次世代の後輩格の人たちとかに教えることになった場合、自分たちが押し付けられた因習から負の部分を取り去って明朗な中身にして後輩に渡して、負の体験の連鎖を自分たちの世代で終わらせることは決してせず、自分たちが苦しめられた因習の負の部分を後輩にも味わせようとして、後輩たちをしごき、いびることになりがちである。

これは、起源は女社会にあり、自分たちが、前の世代の人たちのせいで味わったマイナスの体験を、他の世代の人たちがしないで済みそうだという事実や、マイナスの体験をしないで済みそうな人たちに対して、「あの人たちばかり良い思いをして、ずるい」という強い嫉妬心が起きて、自分たち以外にもマイナス体験を味あわせたい、良い思いをしそうな人たちの足を引っ張って、自分たちと同じ苦労をさせたいという強いマイナスの欲求が湧くためである。日本社会がいつまで経っても明るくならず、因習に囚われて陰湿な暗いままなのは、日本社会を実効支配する日本女たちの強い嫉妬心によるところが大きい。「男が陽、女が陰」と言われるのは、これと関係あるだろう。

この問題を解決するためには、日本女の嫉妬心、マイナス思考を何とかして取り除く必要がある。負の体験をした彼女らに美味しいものを食べさせて、負の体験を心理的に昇華させるとかであること。あるいは、例えば嫁姑関係なら嫁と姑を別居させて物理的に離すことで、嫉妬心が物理的に働かない、無効になるようにして、連鎖を強引に断ち切るといった方法が考えられる。

日本村社会の論理の実態

以下、日本社会において村社会の論理が隅々まで行き届いている実態について短文での説明をまとめてみた。

現代の日本社会では村の論理が引き続き貫徹している。
日本村社会では、村に途切れなく連続して所属することが求められる。（所属の連続性。）職場村に新卒で入ったら、途中で退出すること無く最後までずっといないといけないこと。途中で村を出ると、他の村では余所者扱いされて入れてもらえず途端に生きていけなくなる。
社会のレールに乗りたいところからいつでも誰でも乗れて、好きなところでレールから降りて、好きなことをして、いくらかブランクが出来た後、再び社会のレールに乗れるような社会に、日本がなって欲しいと思う日本人は多いと思うが、村社会の原理がそれを許さない。育児退職や病気退職をして、新卒一括採用でのレールからいったん外れた人が、もう一度乗れるような社会に変えないと、日本の格差社会は是正できない。そういう点では村社会のルールの抜本的な変更が必要だ。
日本の職場村は、いったん退職すると二度と入れてくれない。入れるのは原則として新卒の子飼いだけだ。中途採用は、ある会社の正社員から別の会社の正社員に即戦力として即時に切り替わることしか想定されていない。所属の経歴にブランクがあると、村の空気を忘れた、失ったと見なされ、中途採用してもらえない。
日本の会社における子飼い雇用（新卒一括採用）と終身雇用はセットになっている。子飼いで自社の色に社員を染め上げげようとするため、他の会社の色の付いている人を雇用しないことが、雇用の流動化がいつまで経っても起きない原因となっている。
日本は、連続労働強制社会である。
・朝から夜遅くまで一日中ずっと働き続けないといけないこと。
・一度ある会社に入社したら、引退するまでその会社でずっと働き続けないといけないこと。
日本の学校の生徒たちが学校部活を土日も無く休みなく続けさせられる状況は、「労働者は、絶えずお国、会社のために土日も休みなく労働して搾取されるのが当然だ」という考えに洗脳されるための訓練なのだろう。人権侵害で恐ろしいことであること。
自分の所属する社会を批判すると「出て行け！」と言われ、かと言って追い出されると生活できなくなるので、それを恐れて皆批判することが出来ないのが、今の日本である。そこには言論の自由な

んか元から存在していない。
自分の所属する村に滅私奉公させられる日本の村人たちは、村の奴隷、より詳しくは村の有力者、資本所有者の奴隷である。日本の村人たちは、職場村であれば、経営者や会社大口株主の奴隷、地域村であれば、大土地所有地主の奴隷である。血縁村であれば、父は母子のATM奴隷である。
日本の村人たちは、村内の既得権益者によって休みなく働かされ搾取されることが当然とされる存在である。しかも、日本村社会は女社会なので、村人同士が互いに休まないように相互監視し、ある村人が楽をしようとすると、それを嫉妬して皆で集中的に叩いたり非難するようになっている。また、既得権益者側の村人に対して絶対服従で批判の声を上げることがそもそも許されなかったりする。天皇家に対してストライキが出来ない下級役人とか典型的である。
日本の村人が日本の職場村とかで転村しようとしても次の入れてもらえる職場村が見つからなかったり、日本の社会保障制度が希薄なのは、国民が勤務先の会社＝職場村を辞めることをちゅうちょさせ、一生一つの会社＝職場村の奴隷として働くように仕向けて、会社＝職場村の支配者、既得権益者である株主や経営者をますます富ませるために意図的に行われている。
日本の村社会は、職場村の大規模なものになったりすると、発注元～元請け～下請けの階級構造を内包し、上位の強者（元請け）が下位の弱者（下請け）を金銭的に搾取するようになること。支配する村（元請け）と従属する村（下請け）が出来る。
日本では所属村の意思と関係なく個人行動すると、全て自己責任とされ、所属村は助けてくれない。日本村社会では個人行動は厳禁である。他国に一人で出かけて武装勢力の人質になったりすると、自己責任扱いで助けてもらえないこと。
日本村社会では、原発事故とかで所属していた村を出て行くと村を捨てたとして裏切り者扱いされてしまう。村から出て避難することは浮浪人になったのと一緒で、引越し先に親戚がいないと、そこの村には入れてもらえず、ずっと浮浪人になってしまい、人権が無くなる。なので、村人として扱われるには、嫌でも原発の近くの元の所属村に戻らざるをえない。日本村社会原理に従って原発事故での自主避難住民は存在を否定される。

日本村社会では、。
・正規雇用者＝村民
・非正規雇用者＝流民
であること。
村民が流民化するルートはあるが、流民が村民化するルートが無い

のが、日本村社会の根本的な問題。村民⇒流民の片道切符になっていること。
日本史の概説書で、室町時代の村落についての記述を見たら、今の日本の村社会と瓜二つで驚かされること。永原慶二「下剋上の時代」とか、近世日本村落における村民と流民の対比が分かりやすい。
日本村社会は、数百年前の中世室町時代からちっとも進化していない。
村民による流民差別と、村民による流民の村民化拒否を何とかしないと日本村社会では今後も人権は確保されないままだろう。
流民の立場に置かれている人たちの人権をどう確保するか名案を出すことが、現代の日本村社会にとって喫緊の課題である。
日本村社会では、村八分が村民の流民化につながっている。

日本の学者村に欧米『出羽守』が多いのは、。

・欧米の権威を笠に着て威張ることが出来、自分の意見を通しやすくなるから。
・独自学説を打ち出して、出る杭と周囲から見なされ叩かれるよりは、互いに同じ欧米『出羽守』としてお仲間で居た方が、周囲から叩かれる心配が無く自分の保身に有利だから。

であること。

日本の職場村で、あまり村の稼ぎに貢献しない村人が、他の意識高い系の村人から嫌がらせを受けるのは、日本の国家村で、生活保護を求める村人が、他の一生懸命働いているぞ系の村人からバッシングされるのと構造は同じである。

日本社会の国家村では、健常な村人の足を引っ張る障害者や生活保護受給者が叩かれている。また、少し自由に動いて失敗すると「自己責任」呼ばわりで大声で非難されること。日本国家村の村人たちは、自分たちが払った税金の役人による無駄遣いにはほとんど無頓着だが、生活保護受給者や障害者が税金に頼って生きようとすると「オイラの支払った血税で生活するのはけしからん」と怒る。天皇家や役人も税金で食べているが、強い者の味方の村人たちは怒ろうともしない。

日本人が長時間残業するのは、職場が村社会で、自分だけ先に帰ると他の残った村人たちの機嫌を損ねて村八分にされてしまうという

恐怖感があるからだろう。一番居残りをする人に皆が合わせることになる。日本の村人たちにとって、生産効率の向上は二の次で、職場村に長く居残ること自体が自己目的化している。

日本の職場村で昇進して管理職になる、経営者側に回るには、常日頃、村人らしく振る舞ったり（上司部下関係、先輩後輩関係を円滑に維持する、村のために長時間残業で尽くしている・・・）、望ましい村人の規格（結婚している、持ち家がある・・・。）に合致していないとなれないこと。
日本の職場村で、最初の新規一括採用時、経営者側に回る村人と奴隷労働側に回る村人とを明確に区別せず、働き次第でどちら側にもなり得るように仕向けるのが、労働する村人たちに経営者視線で物事を考えるようにさせて長時間残業を職場村のために是認したり、村人間で成果競争をさせてより多く自主的に働かせる原動力となっており、経営者や株主といった既得権益者側の村人を何もしなくても富ませる濡れ手に粟のような巧妙な仕掛けとなっている。
日本の村人たちは、しきりに村のために働け、働かないのは悪だと主張するが、実は、既得権益者側の村人、特に門閥、閨閥によって守られた特権階級の村人たちとか、首都圏の賃貸マンション経営の地主の村人たちとか、何も働かなくても多額の株式配当とか家賃とかの収入が得られ、遊んで暮らせているのであり、そのことは日本の村人たちによって触れられたり批判されることは無い。日本の村では、既得権益層はひたすら守られるのである。

日本の官公庁、企業の正社員＝職場村の村人は疑似家族の身内扱いである。
身内のために汗を流せ、ひたすら働けというのが日本村社会の掟である。

こうした疑似家族制度、非血縁家族制度を公式に国家レベルに拡張していたのが戦前日本だが、今の日本でも自民党とか復活させようと画策している。日本が国家村を公式に復活させたら大変である。
国民全員疑似家族、非血縁家族となること。
完全に北朝鮮と同じになること。相互監視と団体行動の強制が待っている。
日本は、今でも事実上は国家村だけど、欧米の手前、自由主義者、民主主義者の振りをして隠している。

同じ日本人だからと言って、勝手に日本国家村の身内扱いされ、
「身内のために滅私奉公せよこと。休むなこと。ずっと働けこと。

さもなくば非国民、出て行け！」と言われるのは嫌なものである。

日本国内にいたままで村社会から独立するには、村人との人間関係を全て断って引きこもりになるかしか無いのだが、収入をどうするかという問題が立ちはだかる。そのままでは食べていくのが難しい。解決は、個人事業主の動画制作者やスマホアプリ開発者、同人誌制作者等になることだが、動画間やアプリ間、同人誌間の競争が激しく食べていくのが大変な点だ。

所属する村（会社、官庁、学校・・・・）に完全に呑まれないこと、一体化しないことが、日本村社会で自分自身の精神の自由を確保するためにとても大事である。村内、社内での出世はほどほどにして早く帰宅し、自分の時間を持てるようにすることが重要である。

日本の村人たちにとって、日本村社会アンチ＝反日であること。

日本では、。
・正社員＝村人
・非正規社員＝一時的に雇う浮浪人、旅の人
非正規社員から正社員になるのが難しいのは、これが原因である。

日本ではどこかの村社会の身内になっている村人でないと人権が保証されない。職場村の非正規雇用者は非村人なので、例え村人の正社員以上の働きがあっても、労働的に人権が無く、低賃金と不安定な雇用に苦しめられてしまう。

日本の会社の理想型が中央官庁＝国家村で、中央官庁では終身雇用も年功序列もブラック労働も維持されている。日本の民間会社で終身雇用、年功序列が維持出来なくなっているのは民間会社を取り巻く生存条件が厳しくなっているからで、民間会社が今でも新規学卒一括採用を維持しているのは、自分たちを取り巻く条件が良くなれば再び終身雇用、年功序列にしたいと考えていることの現れである。日本の会社＝職場村の労働形態、働き方を変えるには、中央官庁の労働形態にまず手を付ける必要がある。

日本社会に適合するには、周囲に対して、苦しんだり、苦しむ振り

をしないと駄目。

日本の地方に皆移住したがらない理由、日本の地方の人口が増えない理由は、古株の先住民の村人たちが、移住してきた新入りの新住民を見下したり、差別したり、嫌がらせするから。姑と嫁の関係と同じこと。

絶えず異分子をいじめて排除することを繰り返すのが日本村社会。人権なんて無いこと。

日本は、左翼も右翼も村人。主張は正反対だが村人という点では共通している。

日本の職場村は、体調を崩して長期休職とかすると、休職期間内に体調を戻せないと、強制的に退出させられ、余所者扱いされて、二度と入れてもらえなくなる。国家公務員なら累計３年で強制退出の扱いを受けること。日本の職場村は所属条件について厳しい。日本職場村の村人として暮らせるのは健常者か、休まないでいられる障害者だけ。うつ病患者とか統合失調症患者みたいな良く休む精神障害者の人間は不適格者扱いで追い出される。

日本には職場村とか学校村とかいろいろ村があるが、その最大のものは国家村だ。日本人を全員強制的に国家村の村人とみなし、村の身内のために苦労しろ、働けと言ってくる日本人はとても多い。生活保護受給者が叩かれるのは、彼らが身内のために働くのを怠けているように見えるからだ。皆で働かずにベーシックインカムを貰うとかの方が生活に余裕が出来て良さそうなのに、なぜかそう考えようとせず、働くことをひたすら美徳としたがるのが日本の村人である。

日本の村人の排他性は酷いものだけど、村人内輪での陰口、悪口での叩き合いも酷いものだ。我慢できなくて村を出る人は相当多い模様。女職場の保育園とか典型。

強制力のある、就職年齢制限無しの既卒者の正社員採用制度が日本には必要。一度退職して職歴にブランクある人も、非正規雇用では無く、いつでも安定した仕事に就けるために必須。

収入得るために働いて、収入がたまったら働くの止めて自分の好き

なことを十二分にやって、お金が無くなったら、また収入を得るために働いて、収入がたまったら働くの止めて自分の好きなことを十二分にやって、の繰り返しが出来ず、ひたすら連続して働き続けなければいけないのが日本村社会である。

知識量のストックの豊富さで偉ぶるのが日本人みたいな農耕民。自分自身で切り開いて得た知識の新規性、斬新さで偉ぶるのが西欧人みたいな牧畜民。

就活で自分の一生所属する職場村を選んで、入った後は追い出されないように一生しがみついて行って、その間に結婚し子供を育てて、年功序列のエスカレーターで上に昇り、定年までリストラされないように無難に勤め上げるのが、日本人の男女の理想的な人生コースになっている。

日本文化の特殊性を主張するのが日本人は大好き。日本文化を真に理解できるのは日本人だけと考えてしまう。所詮は、稲作農耕民文化の一類型に過ぎないのに、馬鹿げている。日本人の閉鎖性、排他性と独善性の現れ。

日本人がテレビでディズニー映画とかを観るのは、学校や職場や近所付き合いで、次の日、皆と同じ話題を共有して、自分だけ仲間はずれにならないようにするため。映画自体を楽しむのは二の次。周囲から爪弾きに会いたくないという対人的緊張感から観ていること。

欧米とかのスーパー上位者によって高い評価を受けた作品について、盲目的にこれは良い作品だと何も考えずに見て、高い評価を付けて絶賛するのが日本人の通例である。仲間同士で互いに絶賛しまくることで仲間内から外されずに済むこと。ディズニーの「アナと雪の女王」とか、植民地映画であり、日本人は映画の内容が素晴らしいと言わないと、アメリカ植民地の被搾取者としての態度をわきまえていないとして、日本人から非難され、差別される。

何かと他人と自分を比較して、相対評価を持つのが好きな日本人のハマったのが偏差値教育である。他人と比較して、自分が相対的にどこまで有利かを知るのに必須。なのに文部科学省はセンター試験受験者の偏差値を公表しない。受験産業に偏差値を計算させて官僚が天下るための取引に使われていることは明らかである。

日本では、仕事を長時間していないと真人間と見なされない風潮がある。村社会由来だと思うこと。労働時間短縮で、みんなで楽しようという感じにちっとも行かないこと。

日本の会社員や学生の良く言う「ウチは」という言葉は、その人の所属する会社や学校が閉鎖的で内向きな同調圧力の強い体質を持っており、その人もその体質に染まっていることを示している。その人とは気を付けて付き合ったほうが良い。

日本人は、他人に批判されるのが大嫌い。精神がソフトで傷つきやすい。なので、誰からも批判されることのない天皇陛下みたいな存在に自分を一体化して、批判から逃れようとする。

曖昧言葉の多い日本語は、喋る人が明確な責任を取らずに済む責任回避言語である。

同じ税金を支払う~使う日本人同士に身内意識があって、他の誰かが生活保護とかで税金のお世話になろうとすると、その分税金を支払った自分が損をすると考えて、自己責任論を唱えて反対するのが、日本人である。保険会社の保険料支払いと同じ構図なのに、なぜか税金だと反対すること。国家村の同じ村人という意識がそうさせている。

リア充=日本村社会に適応した人間。村人の理想形であること。

日本人は、自分が村人だという自覚をもっと持ったほうが良い。欧米流になっているのは見かけだけで、後は先輩後輩制度や統制同調大好き、陰口大好き、官尊民卑とか、欧米とは似ても似つかぬ社会になっていることを自覚すべき。ディズニーランドに行ったら欧米的になれたとか、一番馬鹿げた勘違いであること。

日本の稲作農耕は現状一毛作なので、年に一回しか収穫のチャンスが無く、失敗すると飢餓、死が待っている。そのため、日本では、何事にも失敗が許されず、退嬰的で無難な事なかれ主義がはびこり、人生で一度失敗すると後が無い再チャレンジ不可の社会が出来上がっている。その点、日本社会は、「一回性」社会と呼べる。人生のやり直しが難しい。日本人がとかく失敗を恐れ、無難を好み、事なかれ主義になるのは、稲作が単作で、年に一回の収穫に失敗すると、もう後が無いので、その点心理的な余裕に根本的に欠けてい

るからだろう。一回勝負を強いられるので、失敗が出来ないのだ。年に何回でも収穫可能な東南アジア稲作諸国との相違点だろうこと。

牧畜民（アメリカ）に実効支配されている農耕民の社会、それが日本。
口先では実効支配者の牧畜民に向かって盛んに媚びて、牧畜民のイデオロギーの自由民主主義の自己着用をアピールするが、実態は昔ながらの農耕民。自分たちが農耕民であることを社会的に明言するのは支配者の牧畜民に逆らうことになるのでタブー。

日本の農耕民社会は、表面的には牧畜民社会を装っているが、実態は、農耕民の社会的伝統に固執し、決して変えようとしない。内側から変化を試みる者は村八分にあって排除されるか、足を引っ張られ束縛される。疑似牧畜民社会、日本。

日本の現状は、米尊日卑・欧尊日卑と、日尊華卑・日尊韓卑である。

日本人は、自らが稲作農耕民、村人であることを克服しないと牧畜民的な立憲主義、法治主義に行き着けない。

日本人は、日本国のことを盛んに先進国だと触れて回るが、その先進性のほとんどは欧米諸国のおかげで、日本は欧米技術を小改良して最先端に行ったと主張しているだけ。最近は、中国、韓国も日本と同じことをやっていて、すっかり日本に追い付き追い越してしまった。日本の技術はもう余り先進的でない。

日本社会の同期横並び原則が、同期の人たちの中でより出世しそうな人に対する嫉妬心を爆発させ、足を引っ張る結果につながっている。これは社会的損失だ。同期横並び意識そのものを日本社会から無くすべきこと。

会社別ではない、職業別の大きな組合を非正規雇用者のために樹立し拡大することこそが、日本の格差社会を解決するだろう。

年功序列、先輩後輩制は、日本の若者の人権を無視する極悪制度。特に将来ある若者は、早く制度の弊害に気付いて打破するように動いた方が良い。

権力者に対する滅私奉公が無くならない限り、ブラック企業もブラック部活も健在で、日本は悪社会のまま衰退するだろう。

日本社会の村八分は人権問題。この問題を広く世界中に広めようこと。

日本の正社員の長時間残業は、自分が他の社員と比べてどれだけより長時間ムラに居続けるかの競争。長時間ムラに居続けるほど、ムラの権力者による評価が高くなる。仕事の効率など考慮されないこと。

農耕民のまま、牧畜民になろうとしているのが日本人。

日本人は、自分の身内には滅私奉公で尽くすが、身内以外の余所者にはとても冷淡だ。余所者を人間扱いしないのは、職場村の正社員による非正規雇用者への扱いを見れば一目瞭然だ。これは深刻な人権問題なんだけど、伝統的な稲作農耕の村社会のルールが起源なせいか、日本人は誰も直そうとしない。

少子高齢化が進む日本社会は、財政的、社会人口的な余裕がなくなり、病気や高齢化によって社会の役に立たなくなった弱者に対して、今後どんどん冷たくなり、苛酷になっていくだろう。社会的に役立たずで有害な病人や高齢者をどんどん切り捨てていくだろうこと。安楽死やガス室送りが横行するだろう。

日本人が欧米人並の個人主義者、自由主義者、民主主義者になるには、稲作農耕から脱却して、大規模放牧とか始めないとダメ。

職場村に入れてもらえず非村人のままになってしまっている日本人たちを経済的、社会的に救済し、生活を保証する政策が必要。

日本でtwitterとかの言論が自由なのは、まだアメリカの影響力が

残っているからで、アメリカの影響力が消えたら、日本は即北朝鮮化するだろう。

日本社会の活性化には、伝統的な村社会の解体が必要。
・余所者を拒絶する強力な閉鎖性、排他性。新入りいじめを平気で行う人権なき組織風土。
・身内に対して滅私奉公と苦役を強いて、長時間労働が当たり前。従わない者は村八分。
・とても嫉妬深く、すぐ人の足を引っ張る陰湿さ。
とっとと潰すべきだこと。

身内には滅私奉公、周囲の空気を読んで付和雷同、上位者には絶対服従。これらが日本社会でブラック労働、ブラック部活を生み出す原因の根本心理だ。無くして行かなければならないこと。これらの心理は女由来だと思うので、事態を解決するには日本女（特に母や姑）の社会的影響力を断て、ということ。

日本人の職場村や学校村への滅私奉公のメンタリティ、発生メカニズムを研究し、どうすれば日本人の頭の中で、滅私奉公の掟が発生するメンタリティを解決し、定時退社が当たり前にすることが出来るかを研究する必要がある。

「日本は自由民主主義国家であり、基本的人権を重視する」と言う言説そのものが、実は政府の大本営発表なのだ。実際の日本人は、自由よりも、他者と足並みを管理統制で揃えて、心理的に一体化して、他者と同じところを仲良く回るのが好き。人権とか、天皇や官邸や役人からの一時的恩寵に過ぎないこと。

稲作農耕民に共通な社会心理の解明が必要。

日本は官庁や企業の人員採用とか処遇で、身内と余所者の区別を撤廃すべき。身分の正規、非正規の区別、差別そのものを禁止するとかすべきこと。村八分を、社会的いじめの一種として規制すべきこと。

「所属組織に100％滅私奉公せよ」という日本村社会のルールは、ブラック労働、ブラック部活を生み出すだけで、まともに機能しなくなっている。今後は、4時間、6時間あるいは8時間交替制の労働

にして、残りの時間は、所属組織にしばられない自由時間を得られるようにすべき。

先輩後輩制が日本社会の諸悪の根源。皆「○○さん」付けで統一し、年齢や組織への所属年数での上下関係を　無くすべきこと。

欧米上げと日本落とし。上から目線で中韓見下しこと。今の日本のインテリの言論はこんな感じ。

日本の公教育は、高級役人登用のための適性検査の連続と見ることができる。

強者による弱者搾取を法律で禁止出来れば良いんだけど、日本の立法府の人間たちは、搾取する側の人間ばかりなので、実現するのが難しいという課題がある。

知育重視の子供と、体育重視の子供とに分けて教育することが、日本の学校の部活問題を解決するだろう。一人の子供に知育も体育もと欲張ると、教員が部活指導で長時間労働になってしまう。

日本の会社員は、しょせんは株主の使用人に過ぎない。高級官僚はスーパー上位者のアメリカや天皇の使用人に過ぎない。

日本村社会をマクロな視点で捉えたものが「世間」に当たり、ミクロな視点で捉えたものが「村」である。

稲作以外の主食確保方法を見つけることが日本人が村社会から解放される最も有力な方法である。

日本社会で村に入らずに生きる方法としては、自営業の起業とかが必要である。あるいは外資系の企業で働くことが考えられる。

上媚下虐の日本社会

日本社会は、上媚下虐というか上位者に媚びへつらい、下位者を虐める社会になっていて、そのままでは生きづらい。上位者をたしなめるのが難しいのであれば、せめて上懐下愛というか上位者に懐き下位者を愛する社会への転換が必要である。
これは詳しくは、対上位者、対下位者で、本心かうわべか、取る態度がプラスかマイナスかの三次元で分析することができる。例えば媚びは、対上位者で、うわべで、プラスの態度である。批判やたしなめは、対上位者で、本心で、マイナスの態度である。

没落したアイドルとしての日本

日本は没落アイドル型国家と呼べる。日本人の振る舞いは、以前大いに脚光を浴びていたアイドルが、隣人（隣国）にその座を奪われて没落したが、以前のちやほやされていた時の快感を忘れられずに、自分自身を盛んに持ち上げたり、周囲に対して自分を持ち上げるよう盛んに要求したりするのに似ている。

空気を読んで動くことは日本社会独自か？。

日本社会では人々はその場の空気を読んで行動することが必要とされ、これが西欧北米にはない日本社会の独自性として捉えられてきた。
しかし、実際には、。
・牧畜民＝西欧北米＝個人主義、自由主義、民主主義の空気に反する言動をすると制裁されること。
・農耕民＝日中韓、東南アジア＝集団主義、同調主義、上位者の支配の空気に反する言動をすると制裁されること。

であり、その社会の空気を読まずに行動すると制裁されるのは全世界人類共通であり、日本に限ったことではないのではないだろうか。

日本村社会の生きにくさ、生きづらさの根本原因

村社会の生きにくさ、生きづらさは、村加入後の追い出しの有無と密接に関わっている。追い出しが無いと生きやすく、追い出しがあると生きにくい。
すなわち、村社会には、加入した村への永久帰属を保証するタイプと保証しないタイプがある。保証するタイプは、例えば中国や韓国のような純血縁タイプの村社会であり、村への加入が出生によるものであり、血縁があれば追い出される心配は無い。一方、保証しないタイプは、日本のような準血縁～非血縁タイプの村社会であり、村への加入が白紙状態の新人への入村儀式によるものであり、村の意向に反することをすると村から追い出されてしまう。日本村社会は、一度加入した村への永久帰属を保証せず、追い出しの可能性が絶えず存在するため生きづらいのである。また、いったん村から追い出されると他の村になかなか入れてもらえないことも生きづらさを加速している。
日本村社会における村からの追い出しは、村八分とか、村の有力者による口頭での「出ていけ」呼ばわりによって行われる。日本の村人たちは、追い出されないように、村の有力者への忠誠競争を絶えず行い、村の有力者や他の村人から嫌われないように必死でしがみつく、懐くこと、村と絶えず一体化して動くこと、村人同士つるむことを強いられる。これこそが、日本村社会の生きづらさにつながっているのである。
あるいは、村から追い出される代わりに、村のメンバーから徹底的にからかわれ、いじめられ、潰される、自殺に追い込まれるというパターンも相当数存在する。要するに、村の中にいながらにして存在自体を消去されるということであること。これも日本村社会での生きづらさの現れである。
要するに、日本村社会では、絶えず村の他のメンバーになつき、同調し、忖度し続けないと、村から存在を消去される可能性が絶えず存在し、村内での永遠の生命の存続が保証されないのであり、生きづらさの根本原因となっている。
・村の外に追い出されること。

・村の中で潰されること。
の2パターンあるということであること。どちらも人権上問題ある行動だが、人権を理解しない日本の村人たちはこれを平気で実行するので、日本村社会は生きづらいのである。
こうした生きづらさは、血縁関係と婚姻関係の対比で見ることも可能である。実子や親戚の関係は遺伝的同一性が確保されるので、関係が先天的であり、維持が根本的に容易だが、婚姻関係は、もともと赤の他人同士の面があり、関係が後天的であり、維持のためには互いの絶えざる協調や妥協が必要で、そのままでは関係を維持するのが難しい。日本村社会の対人関係は婚姻関係に似ているところがあり、関係維持のため絶えず周囲と後天的な同調、協調が必要であり、それが生きづらさにつながっているのである。日本の会社への就職とか、会社の村人たちとの婚姻になぞらえることが可能である。

休まない、休めない日本人

日本社会では、中高生の部活のように、常に動き、働いて休まないのが理想とされている。休むのは甘えであり、どんなに疲れていても体調がわるくても休まず頑張り続けるのが望ましいとされている。これは村内で雇用者を使う村の所有者の考え方である。
日本の村人には、村の所有者の立場の村人と、その正規の使用人、雇用者の立場の村人がいて、その外側に非正規雇用の流民扱いの非村人が存在する。正規雇用の村人が非村人に転落しないためには、村の所有者を絶えず担ぎ上げ、喜ばせないといけない。台風とかでもすぐ村に駆けつけ定時出社して休まないとか、村にくっつき、全人格的に忖度し、忠誠心を見せることが絶えず要求される。村の中で有利な立場を目指したい、中枢部に入りたいと考える村人たちは、必死で村の所有者の機嫌を取ろうとして、絶えず演技をする必要があり、その最有力の一つが休まないことなのである。

日本村社会の今後の課題

以上、筆者は、日本村社会の特徴、その中で生き抜くための処世術をまとめた。日本村社会は女性優位な性格が強く、女性のペースで動く社会であり、「（日本的）村社会＝女社会」と捉えることが可能である。

太平洋戦争でアメリカに負けて７０年、必死に欧米化を進めてきたはずの日本社会が村社会を維持してきたことは驚きである。社会の基層が、外部からのイデオロギー直接導入では変わらないことの格好の一例である。異文化受容は表面的に留まり、伝統的な社会構造が続いている。

こうしたことの原因は、日本家族関係の不変性に求めることが出来る。今も昔も母子関係が第一であり、あらゆる社会関係、人間関係が母子関係の延長となっている。稲作農耕民は、人員の一斉集団作業を重んじる、相互一体感偏重の女性優位の社会を作り、それを次世代に継承する際に、母子癒着を利用するのである。

西欧、アメリカと違い、日本の母子関係はとても強固で、父親は割って入ることが出来ず無力な存在と化している。そして、父親は育児の過程で強烈な母子癒着によって父性を失っており、子供のままである。母子関係が子供が大人になっても切れず、ずっと続くのが、稲作農耕民社会であり、日本村社会はその典型例である。

では、中国、韓国、東南アジアといった他の稲作農耕民とどう違うかと言えば、日本では血縁の無い者同士が、白紙状態の新入りの成員（嫁、新卒社員）を自分たちの集団の色に染めることで、血縁者同様の疑似家族を形成することが出来る点にある。この非血縁家族集団社会が日本村社会なのである。

日本村社会は、西欧人、アメリカ人には、とても息苦しく自由の無い社会として感じられる一方、強い母性によって形成された文化が異質で魅力的に映る。また、家庭の財布の紐を西欧、アメリカのように夫が握るのでは無く妻が握っていることも大きな驚きとして感じられる。夫婦共働きでも家庭の財布の紐は妻が握るのであり、女性の経済的権力が強いことを伺わせ、女性が強いことを印象付ける。子育ても女性が独占している。そのため、日本の子供は、息子も娘も一生、母の所有物、奴隷だ。日本は女社会であり、女権拡張を目指す世界のフェミニズムの先進国である。

日本村社会は、明治維新後の日本の国際的躍進や、太平洋戦争後の日本の高度経済成長、経済大国化のバックグラウンドとなった社会であり、それなりに優れた大きな長所を持つと言える。そういう点では、日本人は、村社会、女社会に自信を持って良い。

もっとも、その村社会、女社会の本質が、中国、韓国、東南アジアの稲作農耕民の国々と大きな差が無いので、現状、それらの国々との経済面での競争で差別化出来ず苦戦しているのも事実である。また、バブル崩壊後、村社会のせいで若い人、若かった人が結婚したり子供を設けたりできず少子化がどんどん進んでしまい、村社会の存在が日本社会が衰退の一途を辿る原因ともなっている。あるいは村社会が女性の雇用を妨げている面も見られる。

・新卒で職場村に正社員として入れなかった若者たち（いわゆる就職氷河期世代）
・出産、育児でいったん正社員を辞めて所属していた職場村を出てしまい経歴にブランクのある女性たち
を、職場村の一員として受け入れることを一貫して拒絶して低賃金労働で身分の不安定な、子育て費用を十分賄えない非正規雇用の状態に置き続けたこと。村をいったん出て経歴にブランクのある人を、信用ならない浮浪者扱いして、再び正規の村の成員として村に入れることを拒絶する村の論理がそうさせているのである。
また、中高年で介護等の事情で職場村を辞めた正社員の雇用者たちの管理職以外での再就職が難しく、この場合、他の村人と一緒にすると年功序列に乱れが生じて扱いにくいので、職場村の中に入れようとしないという村の論理が働いている。
就職氷河期世代を生まないためにも、日本の職場村は、既存の正社員の給与を削っても良いから、就職氷河期世代の彼らを全員正社員として雇うべきだったし、非正規雇用状態の就職氷河期世代の人々を途中から再び正社員として雇うべきだったが、村社会の論理で拒絶してしまった。また、職場村は、子育てが完了した女性を正社員として雇わずパートとしてばかり雇うことで、男女の賃金格差を広げることにつながっている。職場村への所属期間にブランクが生じると当人の社会的信用が低下するとみなして村の中に入れようとしない村社会の論理が原因である。
実質、村から追い出されている旅の人状態である、非村人の非正規雇用者同士が、相互に連帯して新たに協同組合という形の組合村を作って入り、組合村の村人となって社会的発言力を確保するのも、社会問題解決のための一つの方策である。従来の生活協同組合と似たやり方であること。日本社会では村人でないと人権が保証されないため必要である。非正規雇用者同士の連帯を促進する会食の場とかを、貧困な子供向けのこども食堂同様設けるとか、ネット上につながりの場を設けるとかであること。もっとも、職場村の正社員の村人の滅私奉公の慣習が嫌で、精神面での自由が欲しくて正社員を辞めている非正規雇用者も相当いるので、非人権的な職場村の掟の二の舞いにならないよう形成される労働慣行に注意すべきである。従来の村よりも緩い連帯を目指すべきだ。
また、職場村、学校村とかで男女共に滅私奉公、長時間残業を要求するため、男女の一方（主に女性）が仕事を止めて他方のサポート係に回らざるを得ないか、男女とも忙しすぎて結婚、子育てできない。男女共に職場村で終身雇用で１００％滅私奉公することが、日本人の目標となっている以上、家庭や子供は日本人にとって不要、邪魔な存在と化している。少子化と家庭の崩壊が、職場村や学校村

といった日本村社会の論理によって進んでいる訳である。
日本の村人には、何も働かなくても株式配当とか賃貸不動産の賃料のような高い収入が入って来て遊んで暮らせる資産家とか、世襲で高い社会的地位をキープできる皇族とか議員とか医者とか、門閥、閨閥とかの特権階級の村人と、彼らに全人生滅私奉公を強いられる雇用者の立場の、実質的に奴隷の村人がいる。高級官僚みたいに、一見社会的地位はとても高いが、実は天皇家の実質的奴隷の村人もいる。また、村人になれない、村から追い出された非正規雇用者＝非村人たちは、人外の扱いをされ、人間らしさを保証されない苦しい生活を強いられている。
日本村社会は静的なため、そのまま放置すると身分が固定され、社会が停滞しやすい。日本の村人は女性優位で自分の保身を優先するので、既存の社会体制を自ら変えるリスクを冒そうとはせず、むしろ、そうした社会体制の強者に惹かれ、なびき、自分たちも社会的強者、既得権益層の一員に入れてもらおうと必死になる。皇族崇拝とか、公務員採用試験への殺到とか、その典型であること。そしてたまったストレスを社会的弱者叩きで紛らわせること。同じ働かない人でも、生活保護受給者は叩くが、世襲の資産家は叩かない。そうした日本の村人たちの、社会的強者に迎合する女性優位態度が日本村社会の既得権益層の維持、再生産につながっている。自分からは変われないのが日本村社会の特徴である。日本村社会が変わるために、個々人がより自発的に動き回ることが出来、社会を自主的に変革させる度合いの高い、西欧、アメリカのような男性優位牧畜民社会との連携、同盟が必要な所以である。
また、村内の一体感を重視する余り、村内で周囲から浮いた成員を集団で異分子扱いして、いじめたり、追い出したり、自殺に追い込んだりする人権抑圧が恒常的に起こってしまうことも問題である。
学校村内の学級村でのいじめとか、日本の子供たちも所詮は陰湿な村人の集まりであることを考慮に入れる必要がある。
そういう点では、日本村社会は、その本質を受け継ぎながらも、大きな変革が必要であり、日本人にとっては、今までのように存在を隠すのではなく、その存在を表に出して公の議論の俎上に乗せ、村社会、村の掟自体の改良をしていくことが早急に求められると言える。また、日本村社会の抱える諸問題の原点は女社会のあり方にあるのであり、日本女たちは、隠蔽している女社会の内実を表に出して、その改革をすべきである。

おしまい！ここまで読んでくれてありがとうございますこと。

日本の町とその古い体質

説明。日本の町。

（１）総論
町は、様々な物資や人間関係の集積地、交易地として捉えられ、人付き合いが一時的、流動的、匿名的で、村のような人間関係の煩わしさがあまり無い。
日本の町は、一見、バラバラな無関係な人が動き回り、個人主義、自由主義の近代的な移動生活中心社会のように見えながら、その人々は、様々な異なる社や、社の社主や社員の寄せ集め、あるいは学校の生徒や学生、教員等の寄せ集めになっている。あるいは、人々の中には、村からの出身者も多い。そうした人々の社会心理は、例え、町に住んでいても、伝統的な社や村、学校の社会規範に縛られた女流の古めかしい煩わしい存在になっている。それは、異なる後天的定住集団メンバー同士の寄せ集めと一時的な近居である。
あるいは、町に古くから居住し続けている定住地主の人間関係は、地縁ベースになっていて、村と似ているため、定住居住生活がもたらす女流の古めかしい煩わしいものになっている。それは、典型的な後天的定住集団の生活である。

（２）商業地
商業を営む社の社主や社員以外に、アルバイト、非正規社員の流民が多い。
定住地主の不動産物件の大家と、一時的賃貸人の店子の支配従属関係がある。定住地主の人間関係は、地縁ベースになっていて、村と似ている。
店子には、商業施設を借りる社の店子と、住居を借りる正社員、非

正規社員の店子がいる。
商業施設の社主、社員と、買い物のため、方々から一時的に来訪する顧客、あるいは商業施設に物品を届ける物流業者が入り混じって動き回る形で存在する。

（３）工業地
その土地に定住的居住か、あるいは不在の、土地、生産設備所有の工場の社主と、そこに他の土地から通勤して、勤務する正社員、非正規社員がいる。

（４）住宅地
町の住宅地の住民は、同じ場所に住みながらも、それぞれ所属、勤務する社とかがバラバラであるため、一見まとまらず個人の自由で動いているが、実際は、住民各自は、彼らが所属、通勤したり、出身地としている、日本の社とか村の持つ伝統的な古めかしい煩わしい社会規範を身に付けており、その規範を肯定していることが多い。あるいは、古くからの定住地主も数多く存在する。そのため、日本の町の住宅地の社会的体質は、新しめの多様性に富んでいる見た目と違って、旧態依然になりやすい。

（４．１）戸建て
戸建ての土地建物所有者、地主になった者については、古参者の旧住民と、新たに引っ越してきた新参者の新住民がいて、古参者の旧住民が支配的で上位者になる。
古くからの住宅地のみならず、新興住宅地においても、人々の持つ伝統的稲作農耕民社会の社会規範を反映して、土地所有者の住民の人々の定住生活指向がそこそこ強い。ゴミ出しや町内会役員当番とかの生活上の相互扶助関係もそこそこ強くなり、住民たちが長期間定住を続けると、村に近い存在になるが、住民間で所属する社とかが違うため、村ほどの相互一体感は生まれない。
都市部の都心近くの住宅地では、不動産投資目的のアパートとかの部屋所有者の地主も多く、居住の流動性につながり、部屋所有者自身非居住で、居住者の賃貸者化による居住の一時化が起きる度合いが高い。

（４．２）マンション、団地
マンションや団地は、分譲の場合、戸建てに似て、部屋を所有する人々の定住生活指向がそこそこ強く、古参者の旧住民と、新たに引っ越してきた新参者の新住民がいて、古参者の旧住民が支配的である。一方、その他に、不動産投資目的の部屋所有者も多く、居住

の流動性、部屋所有者自身非居住で、居住者の賃貸者化が起きる度合いが高い。マンションや団地は、賃貸の場合は、居住が一時的、流動的で居住者の匿名性が高い。

（５）リモートワーク
町の住宅地の住民たちのリモートワークは、異なるバラバラに存在する住居に住む同じ社の社員同士が、相互にネットでつながった、伝統的な社の人間関係として捉えられる。勤務中の社員のプライバシーが確保しやすい。社員が社のオフィスに通勤が不要である。社員の社への物理的拘束感が薄い。

日本の社と終身奴隷労働

本文

※この文章はエッセイであり、どこからでも自由に読み始め、読むのを中断することができます。

////

日本人は会社とか村の神社とか自分の所属する「社（やしろ）」の奴隷、社奴か社隷であること。社に対して100%の滅私奉公と同調を要求される仕組みになっていること。応じないと社から追い出されること。
////

村は生活共同体だが、社は何かの実現目的を持った生活の糧を稼ぐための目標組織体だ。社は企業だ。村の対人関係は損得勘定を抜きにした慣れ合い、助け合いの関係だが、社の対人関係は、利益計上、売り上げに左右され、損得勘定が前提となる。社の対人関係は、村の「何事も結果平等」の対人関係に比べて、「仕事ができる、できない」の職務面での能力主義、あるいは「取り入りがうまい、下手だ」のコミュニケーション面での能力主義になり、社会面での格差を生みやすい。その点、社の人間関係は、村のウェットな

情緒的な人間関係に比べて、非情でドライな性質を含んでいる。

////

日本人にとって社を追い出されること、社を失うことは生計を立てる手段を断たれることを意味し、極力避けなければいけない。

////

社の所有者（社主）と社の使用人（社員）がいて、ほとんどの場合、社員は社主の言う通りに一方的に働かせられる社主に絶対服従の奴隷的存在だ。社のサラリーマン経営者も社員の一種。ここに日本の階級社会が存在する。社員は社主の奴隷だ。

////

さらに正社員と非正規社員の差別が存在し、そういう点で、次のの四つの階級がある。
・社主
・社長（サラリー経営者）
・正社員
・非正規社員（流れ者）

////

日本では村落部でも都市部でも共通に社（やしろ）があり、日本人はそれらの社のどれかに滅私奉公で所属して生活するというのが普通だろう。これは日本社会の農村～都市の連続性、共通性を示すまたとない証拠である。

////

日本の農村で、地主と小作人の労働関係は社と同じであり、地主が社主、小作人が社員相当で、村よりも社と捉えるのが妥当である。日本の社の原型は地主と小作人のいる日本農村にある。日本の農村が村社会として生活共同体の側面をひたすら強調されるようになったのは、戦後の農地改革で、大規模地主が存在を潰されて、小作人が小規模自営農家となることで、大規模な社の存在が薄くなったから。大規模農家化や地主、企業による土地集積が進めば、日本の農

村で、社の側面が復活する。

////

日本では、ゲマインシャフトや、コミュニティが、村である。日本では、ゲゼルシャフト、アソシエーション、オーガニゼーション、カンパニーが社である。

////

社（やしろ）では社の株や設備、不動産の所有者である社主と、対外的経営者の社長（対外代表社員）が区別可能。

中小企業とかに多い同族会社では、社主と社長は共通の同一人物か同一血族であることが多い。

////

日本の社（やしろ）の中の上下関係は、上から順に。
・社主（株主、所有者）
＜越えられない階級差＞
・対外代表正社員（社長）
・肩書付き正社員（管理職、専門家）
・無肩書の正社員（平社員）
＜越えられない階級差＞
・非正規〜臨時社員

////

日本の国も大きな社（やしろ）と捉えられる。
・社主＝天皇家
・対外代表正社員＝首相官邸
・肩書付き正社員＝高級事務官、高級技官
・無肩書の正社員＝ノンキャリア公務員
・非正規雇用の公務員

最上位の社＝上位者の社となっていること。この下に上位者の社への御用聞きの下々の社（民間の社）が林立している感じ。社にも格上の上位社と格下の下位社がある。

////

サラリーマン経営者の場合は社長は社員の一種で、社主にはなれない感じ。

////

日本では社畜という言葉も広く使われており、これは、社（やしろ）で社主に外に逃げ出さないように精神的首輪をつけて飼われている労働搾取対象の家畜扱いの社員＝人畜ということであること。

////

社員は選手とその生活世話管理係のマネージャーに分類され、選手が滅私奉公で社のために尽くし、それをマネージャーが支え管理する体制になっている。
日本では夫、息子が選手になり、妻、母がマネージャーになる性別役割分業を取っていることが多い。社では選手のマネージャーの妻、母も社員扱い。

////

日本の社会は、家（血縁視点）、村（地縁視点）、社（仕事視点）で分けてみるのが、上手く整理できて良いだろう。

////

家（血縁視点）、村（地縁視点）、社（仕事視点）も、いずれも後天的定住集団である。加入に、血縁関係は必須ではない。新参者は、どの集団組織にも加入していない真っ白な状態であることを、古参の上位者に対して示すことで加入を許される。社の場合は、新卒であることが、加入条件として、重要視される。いったん加入して定住民となると、他の定住民の集団メンバーと、絶えず一体化して同調行動をして、上位者に忖度し続けることが求められる。社の場合、定住民の社員は、周囲と行動を合わせて、周囲が帰宅するまで自分も帰らない居残り残業や、上司や古参メンバーに逆らわず、隷従することが求められる。また、定住民の社員は、社の収益計上に貢献するために、有能さの発揮が求められる。そこから外れた行動を行うと、集団メンバーからいじめられ、集団内で孤立し、最終的には、集団追放を受ける。社の場合、左遷によって、人事面で冷

たい仕打ちを受け、解雇によって、上位者である社主から追い出しを食らうこと。
////

日本では農村集落にも社があり、そういう意味では農村は純粋なゲマインシャフトの共同体ではなく、ゲゼルシャフトの目標達成組織の側面があると言える。農業で生計を立てていて、収支を黒字にする必要があるので、社の出現は不可避である。農業村落の住人は共同体の村人であると同時に、農業で収益を上げる目標を持った社の社員でもある。

////

村（むら）というと後進的な農村地縁社会を連想してしまうので、大都市の会社とか官公庁とか、社（やしろ）という言葉を積極的に使った方が、近代産業社会の中を生き抜く伝統日本社会がとらえやすくなるかもしれない。

////

日本の企業城下町の社宅に住んでいる正社員の妻とか、夫の社内での身分の上下関係に従って妻同士で支配従属関係で行動しているので実質社員扱いなんだと思うこと。

////

神社と会社は同じ社（やしろ）で同じ行動原理、行動心理で動いていると言えること。

////

・国の社＝宮（みや）
・国の社主＝宮司、宮様（天皇）
かなこと。

天皇家の人たちが〇〇宮と名乗るのはここら辺と関係ありそう。

////

ここら辺、日本と他の東アジア、東南アジアの国との比較も気にな

るところ。

////

日本の社会学者は社主（しゃしゅ）の立場の人たちの既得権益の実態を分析、暴露したほうがいい。より下の社員の立場の人たちへの調査研究ではわからない本当の日本の階級社会（上級国民と下級国民の区別、差別）のあり方を明示化できるから。

////

日本社会では、。
・社主＝上級国民（社の所有者）
・社員＝下級国民（社の使用人）

////

社主と社員との関係は、家主（家の所有者）と借家人の関係とも似ている。
社における給与の社主によるピンハネ強制と家における家主による家賃の支払い強制とは仕組みが同じ。

////

あるいは地縁の共同体（村）と事業の共同体（社）で、両方ともゲマインシャフトの面を持っているとも言える。

////

「社」と「組」の違いが分かりにくい。どちらも特定目的達成のための組織を表す点では同じ。日本の会社には「〇〇社」だけでなく「〇〇組」という名称の会社もそうとうあるのだけど、社員はまっとうな印象があるのに対して、組員はやくざ色に染まった印象になってしまう。

////

日本人にとっての「社（やしろ）」＝自分たちが持つ共通目標実現、目標維持に向けての自分たちの精神的統合を象徴する精神的、物理的な構築物、構築体。

この構築物、構築体に自分たちが信仰する神が宿ると神社になる。

////

現代中国語での社の意味を調べたがだいたいこれと似たような意味だった。古代中国語だと神の依り代となるところという感じで、日本語と似ていること。日本は中国文化を取り入れたので似るのは当然か。

////

日本では「社」はとても重要な漢字キーワードだ。「入社」も「社」だし、「会社」も「社」、「出社、退社」も「社」。社は日本社会を解明するうえでとても重要な概念だ。というか「社会」という言葉にも「社」が使われているし。就職よりも「就社」が重んじられるのもあるし。

////

ただ、どうしてもわからないのが「会社」(営利企業)の文字の並び順を入れ変えただけの表現の「社会」がかなり違う意味合い(人間、生物の心的相互作用を伴った集まり)で使われていることで、考えれば考えるほど混乱すること。代替表現もないみたいだし、困る。

////

「組」と「社」の使い分けの基準は、。

社＝自社ビルの建物とか神社の建立物みたいな構築物、シンボル、依り代を伴う人々の相互作用、ネットワーク。神を伴う宗教的存在。

組＝特定のシンボル、構築物、依り代を伴わないその時々の変幻自在な人々の相互作用、ネットワーク。神を伴わない非宗教的存在。

////

社、組と村との違いは、。

社と組は、何らかの目的があって人為的に発生し構築された人間同士の集団。
村は、特定の目的を持たない自然発生の、互いに共通、同一属性を持った人間同士の集団。

////

日本の俳句結社、社中では、結社が発行する雑誌が神の依り代、シンボルとして働いていると言える。

////

この点で日本人にとって会社は神がかった宗教的存在であると言える。社の神は、天照大御神に代表されるような女性、巫女である。
社を中心として回る日本人の対人関係が女流なので、社の精神の供給源は女性、巫女であると考えられる。

////

社の村化が日本の官公庁や企業で顕著に見られる。目的集団の無目的化が頻発している。あるいは社の存続それ自体が目的となった時点で社は村化する。

////

日本の社（会社、官公庁・・・）は村人が構築するので、どうしても村化しやすい。

////

日本では就職という言い方を止めて就社という言い方メインに切り替えた方が社会の実態に合っている。

////

日本で何か文科省とかトヨタ自動車とか、官公庁や大企業が、箱物的な構築物の実体があるように思えてしまう感覚が「社＝箱物感

覚」である。

実際は、官公庁も大企業も、単にその時々の人々の集合体に過ぎず、箱物的実体はないのだけれど、思わずそう感じてしまうのが日本の「社＝箱物感覚教育」洗脳の実態である。洗脳はテレビとかで自社ビルを繰り返し放映することで行われる。

////

〇〇社という箱物に入社するというのが日本人の入社感覚である。この「社＝箱物」感覚が日本社会を特徴付けている。

////

日本の官公庁も企業もみな「社」だ。

会社＝利潤追求企業だけが「社」だという考えは誤りだ。

会社という用語の出来が悪い。「社」は、民間企業に限ったものではなく「官」の世界にも広く見られるからだ。

農村にも集落ごとに「社」がある。「社」は都会に限ったものではなく、村落にも普通にある。

////

官公庁、役所も「官公社」と呼ぶようにした方が、官僚、役人の世界が持つ「社」の特徴を示すうえでは望ましい。

////

「公社」という呼び方はすでにある。〇〇県住宅供給公社など。

////

「官公庁」よりは「官公社」とかの呼び方の方が「社」っぽくていいような気がする。

////

日本の農家も、自分たちの住んでいる集落に建立した神社を担いでいる場合は、社員とみなされる。

日本の社員は会社に限った存在ではなく、官公庁、地域の自営業者等に広く見られる普遍的な存在である。

////

そして社が神の依り代として宗教的な意味合いを持つことから、日本で社員と言われる人は、何らかの形で全て神社宗教 = 神道の信者として扱うことができる。

これが、日本神道の本当の威力であり、日本人が日本を神の国呼ばわりする根拠である。日本神道は社を通じて日本国民を普遍的に支配している。

////

日本人が作りたがる社は、全て日本神道と深く結びついた存在であり、その頂点に天皇家が統べる神宮がある。

宮 = 日本の最高権力者である天皇家が営む社。

////

日本人は社を作って社主になったり、社の社員になったりすることで宗教者として活動しているのである。

日本人は無宗教では決してなく、社を信じる宗教者なのである。日本人は『社教』の教徒なのである。

////

日本で無職の人、引きこもりの人、非正規社員が嫌われるのは、彼らがどこの社にも正式に属しておらず、無宗教者であり、『社教』から外れたアウトサイダーだからである。

どこかの由緒ある社に正式に属していることこそが日本人にとって相手を信用する根本的な決め手となるのである。

////

日本では、社に属さない人は人間扱いされない。

社員であることが、日本社会で生きていく上で根本的に重要である。

////

日本で社に属することは神道を信ずる宗教者であるのと同義であり、神道は社という存在を通じてキリスト教国家やイスラム教国家みたいに、日本国内で普遍的宗教として君臨する。

////

会社での業務は社務であり、宗教的な任務なのである。自社ビルの中に神社が置かれることが多いのも、会社が神がかった存在であることを示している。日本人にとって会社とかへの出社は神社へのお参りと感覚が同じで神聖な行為なのである。

毎日定時に会社とかに出社することにこだわる日本人の姿は見ていて不気味だが、定時出社が『社教』の宗教的教義、宗教的義務行為の一つなのだと考えれば納得が行く。

定時出社の根本には稲作農耕民の水田稲作作業での集落社員一斉招集がある。

////

その点、日本における会社業務は潜在的にすべて宗教がかった行為であると見ることができる。

日本人が長時間残業しがちなのは、社の信徒としての信仰宣言としての意味合いを持っている。なるべく長時間、社のために働くこと、自分のプライベートをひたすら無にして何でも社のために尽くすことがより社への信仰が篤いと見なされ称賛されて、日本人の社への宗教心を満足させる。

社員たちが社主や社長を担いで練り歩く神輿、これが社の業務の本

体である。

////

長時間残業するほど、その社への信仰心が篤いことを示すので、社員はここぞとばかりにこぞって残業するのだ。

逆に短時間業務で帰社してしまう社員は所属する社への信仰心が薄いと見なされ非難されることになる。

育児休業や障害者雇用で所属する社に負担をかける社員も社の運営の足を引っ張る邪魔者として嫌われる。

////

日本ではある社の社員になるには厳格な構成員適格性チェックがなされるのが普通である。

また、新たに社員になる人は今までどこの社にも正式に属したことのない新人が優先される傾向がある。

////

日本では社を通さない業務は正式な業務と見なされず、無視される。

書籍出版で出版社の編集を通さない自主出版書籍が、それだけの理由でまともな評価を受けず文壇から無視されがちなのはこの一例である。

////

学生は社員ではない。

社は何らかの生業を営むところであり、そのためには何らかの金儲けや税収のような収入を得ることができることが社員である前提条件になる。

学生はまだ生業をして稼いでいないので正式な社員扱いされないのである。

////

専業主婦は夫の勤務する社経由で社員扱いされる。

専業主婦が、一見無職の人間と変わらぬ存在でありながら、社会的に大きな顔をしていられるのは夫という社員の生活管理者として、夫が属する社の一員だからである。

////

日本は神道を頂点とする社信仰の宗教社会である。日本人は無宗教ではなく、あまねく『社教』の信者である。

////

日本国という大きな社の社主、それが天皇家だ。

////

日本の仏教施設は寺社と呼ばれ、日本的な社の一種とみなされる。

日本的な社をベースに仏教をはじめとする外来宗教の信仰がその上に乗っかっているのが寺社である。

日本人が言う寺社には仏教のみならずキリスト教、イスラム教の教会やモスクも含まれる。

////

日本の新興宗教も見かけは派手で一見従来の宗教と異質だがやっていることの内容は従来の社と共通な面が多いのではないだろうか。

外来宗教も日本人に浸透すると全て社化するのである。

////

社員は、所属する社への無限定な信仰、帰依が求められる。

これを悪用したのがブラック会社で、社員の社への信仰心を逆手に

とって、社主や社の管理職社員が一般社員をひたすら労働力として搾取するのである。

////

山本七平が指摘する日本教と、当方の主張する日本の社信仰、『社教』への指摘とは、ともに日本社会を宗教社会とみなす点で大きな関連があるのではないだろうか。

違いは、。

山本七平の言う日本教は、キリスト教、イスラム教のような一神教を受け入れないと考える。
当方の主張する社信仰、『社教』では、社をベースにその上に仏教、キリスト教、イスラム教といった外来宗教が上部に仮住まいのかたちで乗っかる形で日本社会で社会的に受容されていると考える。

////

キリスト教が日本であまり信者が増えないのは、権力者による大弾圧の歴史が、日本人に信じるとひどい目にあう怖い宗教という認識を広めてしまったのが原因で、もしも過去に弾圧されていなければ『社教』の上部構造になる形で普通に受容されていただろう。日本で共産党の党員が増えないのと同じ原因である。

////

日本社会において、社員は社の宗教的信者である。

日本の会社は、単なる営利企業を超えた宗教的存在なのである。

////

日本社会で、社会研究者をやるには、どこの結社にも入ってはダメ。

社に入った時点でその研究者は宗教者化して、客観的、科学的視点が失われるためである。

////

欧米牧畜民による外資系企業は、日本的社とは振る舞いが大きく異なり、正式には社ではない。

日本では、Youtuber、Google Adsenseブロガー、個人事業主は社員扱いされず、社会的信用があまりない。正式な社に入っていないからだこと。

////

村はゲマインシャフト、生活のベースとなる共同体であり、社はその上に成り立つ特定目的を遂行する組織体であると言える。

村が基盤構造、下部構造であり、社は上部構造である。

////

日本で非正規社員の待遇が悪いのは、正式な社員ではなく、社会的信用が薄いためだ。

////

日本では大きな社の社主か社員であることが、社会的信用を得て、社会の中で昇進したり生き抜くための必須条件になっている。

日本では属する社が大きくて安定度があるほど、その社主、社員の社会的信用度が増す。日本で公務員の社会的信用度が大きく人気なのは、官公庁が日本で一番大きくて安定した社だからだ。

////

天皇家は昔から今に至るまで日本の社主だ。

////

社にも支配的な権力を振るう社（支配社）と従属的社（従属社）があり、官公庁は支配社でそれに統治される民間企業は従属社だ。

日本人が公務員になりたがるのは、支配社の社員になって威張るこ

とができるからだ。

////

日本の官邸は、もともとは日本の社主の天皇と、日本の社（日本の国の維持発展を目的とした仕事をする結社）の上級正社員の官僚との間に割り込んで入った、終身でない取り替え可能な臨時の非正規の中間支配者みたいなものであること。
しかし、近年、官邸メンバーが官僚の人事権を握ることによって、メインの日本社主＝天皇に次ぐサブの日本社主の地位に就くようになって、その社会的地位を大きく向上させたと言える。

////

日本において、社と国がどういう関係にあるかを明らかにする必要がある。

国とは統治機構とその地域をまとめた称名で、統治の目的を遂行するために結成された人為的な組織結社が、国レベルの「社」＝「官」と言える。

日本の社主のメンバーが「宮」である。「官」は日本の社主に従属する社員である。

////

所属する社を持たない人を、従来の無職の人に代わって「無社の人」と呼べばいいのではないか？。

食い扶持を得る収入源を持たない人が無職の人なんだけど、日本ではその用語の使い方がどこの社にも所属していない浮浪者、浪人の意味合いで使われることが多く、本来の意味と乖離しているので。

ただし、「無社の人」だとフリーランスで稼ぐ人も含むことになる。無職の人は稼げていないのでそこが違いになる。

////

日本における社会人とは、。
（１）社会的に自立できる能力を持った人

（２）生計を立てるためどこかの社に所属している人（社主か社員であること）
の掛け合わせで使われることが多い用語だと思う。

社に属さないフリーランスの人は（１）のみを満たすこと。
社にしがみつく無能社員は（２）のみを満たすこと。

上記の（１）でも（２）でもない人が「無職」の人。

////

日本での社会的信用度は、。

社主＞社員（とその主婦か主夫）＞実績のあるフリーランサー＞実績があまりないフリーランサー＞無職。（生計が立てられない人。）

これは、社の規模や安定度、ホワイト度にも左右されるが、同じレベルのアウトプットを出している場合、社員の方がフリーランサーより信頼される。

////

日本の大学を社として捉えると、
・社主＝理事長
・社長＝学長
・正社員（有給）＝常勤の教授、准教授、助教
・非正規社員（有給）＝非常勤講師
・社員付き見習い者（無給）＝学生、院生

常勤（正社員）と非常勤（非正規社員）の間に大きな身分的格差がある。
有給の社員と無給の社員付き見習い者の間に大きな身分的格差がある。

日本の大学では、常勤正社員以外は期限が来ると追い出される。非正規社員は雇い止め、社員付き見習い者は卒業か退学だ。

////

日本の会社、官公庁では、出社＝出勤だが、退社は退勤か退職かの判断が難しかったりする。社からの退職については、学生の卒業同様に、卒社とかいう言葉を使った方が良いのではないか。
////

日本の人たちは優秀な社員になろうとするけど、それだと一生使用人のままで、社主にこき使われる人生になる。

日本の人たちは社主を目指した方が良い。

////

日本人は自分が参画している社＝自社の規模や安定度、威信、自社から得られる収入の多さをひたすら自慢する。また、自社への自分の寄与度を重視し、自社の発展にひたすら尽くそうとすること。自社に魂を奪われ、自社のために自己犠牲すること。自社のこと以外は何も考えられず、頭の中が白紙状態になっている。社員は、所属する社のために働くことが生きがいで、社主や上級社員から何か仕事をもらわないと生きていけない感覚に襲われるようになる。社内で仕事がないこと、社のために仕事をしないことを悪とみなすようになる。これが社員たちが社の仕事中毒になる原因である。社の持つ中毒性＝社毒の仕業であること。

////

この自社を自国に置き換えるとそのまま日本の右翼や戦前の日本軍、戦後の官僚の考え方になること。また自社を自分の会社と捉えると、長時間残業や台風時の出勤を当然とし、全てを自分の勤務する会社のために捧げる会社人間的な考え方になること。

////

自社が自分の全てであり、自分のことを無にして自社の発展のために尽くそうとするのが日本人の典型である。

////

自社が全ての考え方は、フェミニズムとかリベラルとかの日本の思想結社についても言えて、自分の結社＝自社のために全てを捧げる

生き方が称賛される。

////

日本の公務員とか多くの会社員とか、自社＝自分の勤務する社以外にリソースを割く副業や、自社のために働く労力をセーブする休業が許されない。日本人は、社主も社長も社員も、自社に自分の人生を全て捧げることを互いに強要し、それを破ったものは社から追放される。

////

日本の学校の部活で生徒たちが自校の名誉のために練習を頑張ることを強要されるのも、学校を社の一種あるいは就社への準備機関と考えれば、至極当然のことである。日本人は社員や社員見習いが自社の名誉のために我が身をなげうって自己犠牲するのを称賛する。戦中の特攻隊が称賛された理由もこれと同様である。

////

問題は、社の上層部（社主や社長、管理職社員）の私的な名誉や利益のために社の下層部の社員たちが一方的に奴隷のように働かされることが、上層部の社主社員だけでなく、下層部の社員たちや非正規社員たちも当然のように見なしている点である。将来、年功序列で下層から上層へと昇進すること、あるいは正社員になれることを夢見ているからであること。

////

日本では右翼だけでなく、左翼も自社＝自分たちの結社の利益を、自分自身の私的な利益よりも優先させることが求められる。自社の利益＝自分個人の利益とみなすことが日本で生きていくためには必須である。たとえそれが、社の上層部による下層部への一方的搾取であったとしても当然視され許される。

////

日本の社においては、有給休暇とかも、社員たちが社に尽くすための英気を養うための気分転換や休養の機会として専ら必要とされる。社員が自社の発展維持に寄与しない私的なライフワーク実現の

ために社の休暇を使うことは歓迎されない。それらは社を引退した後の余生で実現することを社から要求される。

////

日本の社は、その依り代として、何かしらのかたちで建物を要求することが多い。出雲大社の建物とか典型だし、日本の会社で自社ビルを建設することが好まれるのも、このことと関係ある。自社ビルに神社があるのも、自社ビルの持つ宗教性を表している。

////

自社中心主義が日本人を覆うイデオロギーになっている。それは参画している社を持っている人たち = 社主、社員には都合が良いが、社主、社員でない人 = 参画する社が無い人（フリーランサー）、参画する社を能力的に持てない人（障害者とか）には一方的に不利益な考え方、仕組みとなっている。

////

一人一社主義 = 自分の社を自分で持てるようにすること、他人の社に社員として隷属しなくて済むようにすることが、日本社会を生きやすくするうえで必要かもしれない。

////

日本の社では、自社発展に対する各社員の貢献度の査定が相対評価で行われ、社を前進させた有能な社員と足を引っ張った無能な社員との両方を生み出す。社内で有能とされた社員が無能とされた社員にマウントする。無能社員への社内いじめが頻発する。一方、有能すぎても嫉妬され、出る杭として打たれる。

////

社内の対人関係の雰囲気は社風と呼ばれ、楽に社の発展維持を実現できる社の社風はおっとりのんびりしたものとなる。一方、ワンマン社主や社長とかが自社 = 自己の栄誉のために社の目標、ノルマを必要以上に高く設定することで、社員にとって苛酷な社風となるこ

とも多い。

////

社員は、社内の一体性を維持するために、何らかの形で、社の上層部が一方的に決めたその社独自の規格、型に当てはまった振る舞いをすることが求められ、それが社則である。学校の場合は校則となる。社内で使う用語とかが社毎に違い、使う用語でその社の正当な社員かどうかが分かる。

////

日本の社は閉鎖的、排他的で、異なる社間でのやり取り、融通の度合いが薄く、社毎に他社と自社を差別化するために他社とコンパチビリティの無い独自の規格を持とうとする傾向が根強く、これが規格の標準化に乗り遅れるガラパゴス化をもたらしている。かつての日本メーカー製造の携帯電話がこの典型である。

////

社の規格から外れた社員は、規格外の不良扱いされ、社を追放される。

////

日本の社会の仕組みが、人々がどこかの社の社員であることを前提に組まれていることが、社をリストラで追い出される人々や、どこの社にも正式に入れない人々（非正規社員）の急激な増加に伴って、社会の生きづらさを生み出していること。

////

日本の社の仕組みが、人々が一つの社に新卒で入社したら引退までずっとい続けるエスカレーター人生、社員人生を前提に組まれていることが、人々の転社、中途入社を困難にし、社内の換気を悪くし、最初に誤って入った社にそのまま飼い殺しになって人生の無駄遣いをする人たちを数多く生み出している。

////

人生の後戻り、やり直しが二度とできない一方通行のモノレール、ベルトコンベアーみたいな仕組みを日本の社が内蔵していて、それが日本社会の生きづらさにつながっている。社が用意するレールから外れると転落人生が待っているとみなされ、チャレンジや失敗を恐れる事なかれ主義を生み出している。

////

日本の人たちは鉄道が好きだけど、それは人生の走行経路をレールとして用意してくれることを社に対して望む日本人の深層心理を反映しているのではないか。

////

日本人は、社への自分の人生を投げうっての無私の貢献と、その見返りとしての社内での高い地位や高い収入を得ることを望み、また他人にもそれと同じことを求める。ところが、日本人は前者の社への無私の貢献を、社内昇進の望めない非正規社員のアルバイトにも求めるようになっている。これは見返り無しの無償労働の強制であり、おかしい。

////

日本人には社からの精神的自由、解放が、日本社会を住みやすくする上で必要である。社への無私の貢献はほどほどにして自分の私的な人生やライフワークを楽しめる雰囲気づくりが社会的に必要である。心を全て社に捧げるのではなく、一定の私的領域を確保する自由が社会的に求められる。

////

最近進んでいる社での時短勤務とか育児休業とか、社からの自由につながっており、日本人が社の束縛を逃れて、精神的に余裕を持ち、楽になれているので、日本社会的には望ましいことである。

////

一方、女流の日本人には、自己保身への願いが強く独り立ちが不安で、絶えずどこかの社に頼りたい、所属していたいという心理が強いので、これが社への所属への欲求、正社員になりたい欲求を生み

出している。これが結果的に日本人の社への隷属、社からの精神的自由の無さにつながっている。

////

現代日本では、社の束縛がきつすぎる。一つの社に一生を捧げる生き方、今いる社に全時間を費やす生き方は、それに対する社からの見返りが得られる保証が無いのであれば、保険金の降りない保険への強制加入みたいなもので、人生の損につながる生き方であり、望ましくない。

////

だが、こうした、社員は社に全てを捧げるべきだとする生き方を自分だけでなく周囲の他人にも当然のこととして要求する日本人が多すぎる。社の先輩からそう強要されたから後輩にも同じことを要求しようとか、周囲の社員はみなそうしているから自分も同調しないと追い出されるとか考えているのだろう。

////

夫婦が共働きで夫婦そろって社員とかだと、夫婦とも社に全てを吸い取られ、家庭を運営したり子育てをする精神的余裕がなくなる。そうかと言って社を辞めて子育てとかに専念すると、社への所属歴、貢献歴にブランクが空くと、次の社に入社しにくくなり、家庭の経済面で危機を迎える。日本社会の少子化の原因はそうした社の深層構造にある。

////

日本社会に精神的余裕をもたらすには、日本人が自分のいる社との付き合いを限定的にすること、他人に社への全人格的没入を要求しないことが求められる。

////

日本の社は目標達成のための一時的組織のゲゼルシャフトであり、生活共同体的ゲマインシャフトの村と違って、本来限定的な付き合いで良いものである。ところがそうした社に、村のような無限定的な全人格的付き合いを持ち込もうとする傾向が日本人には強い。新

卒入社や終身属社へのこだわりとかその典型だこと。

////

日本の学校は社員になるための訓練、社員見習い候補生、新入社員候補生育成の場所だ。学校の部活が社員になるための心得を叩きこむ場になっている。部活に土休日を含めた全生活時間をつぎ込む学校の生徒たちは知らず知らずのうちにメンタルが社員化しているのである。学校の教師はその先導役だ。

////

学校から社への白紙純真無垢状態のままでの転生、就社（白紙転生）が日本の新入社員には求められ、その深層には新入社員の新卒採用、新卒入社への日本の社主、社員たちの宗教的なこだわりがある。生徒たちの品行面での神聖な白紙純真無垢状態を保つことが学校には求められ、それが日本の学校教師が聖職とみなされる所以である。

こうした新卒入社者の神聖な白紙純真無垢状態への信仰は、自分以外の男性を知らない無垢な処女への信仰と似たようなものである。新卒入社者の処女性を日本の社は暗黙のうちに求めているのだ。日本人にとって入社は新入りの時の一回のみなのが望ましいとされており、転社は処女性を失い他社経験済みの中古状態になるので好まれない。

あるいは、新卒入社の時点で、新入社員の未経験の穢れを知らない子供の、無垢性、白紙性、純真性が、その社を経験することで失われ、その社独自の色に色づけされて、他社転用が効かなくなり、一生その新卒入社した社で過ごさざるを得ないような信念を日本の様々な社が同時に持っており、またその信念を社員に植え付けることで、社員の一つの社への一生奴隷化を正当化している。

////

日本人にとっては最初に入った一つの社で一生を過ごすこと、生涯一社、生え抜きの生活が理想となっている。日本の社員には、一生を一つの社主の支配下で奴隷状態で暮らすこと、自分の一生を社主に捧げることが積極的に求められる。社員は社主の私的なおもちゃである。その点、日本の社は、社会全体を広く覆うマゾヒズムの供給源である。社員にとって、一つの社主に生涯の忠誠を誓うこと、社主や上級社員に逆らわずにひたすら忖度することが理想的なふるまいとされる。社員は社主に逆らって社主の機嫌を損なうと社から追い出されてしまい、行くところがなくなって生きていけなくなってしまうのが当然とされる。社主＝上位者への反抗は厳禁であり、

言論の自由は存在しない。

////

日本の社は社員らによる修行の場として位置づけられている。社員が入社~出社したら、休んだり、怠けたりすることは禁物で、絶えず社のために汗水流して働くことで、それが即人格向上の修行とみなされるのである。そうして社員が勝手に頑張ってくれるので、社主は何もせず、働かず、安穏に暮らすことができる。
この典型が日本国民（日本国の社員）と天皇家（日本国の社主）の関係であること。日本では労働の義務があるのは社に隷属する社員だけで、社主は働かなくてよい。社主であるというただそれだけで尊敬され、社員が社主のために自発的に仕事をしてくれる。

////

日本において社主は社員にとって現人神だ。国レベルの社の社主である天皇は戦前現人神扱いされていて、戦後長期間経過した今でもその基調は続いている。その下々に林立する民間の社でも社主はプチ現人神として反抗禁止の存在として君臨する。社員は自主的に社主=プチ現人神への奉納として奴隷労働を進んで買って出てくれて、社に勝手に一生を捧げてくれるので、社主は内心笑いが止まらない感じだろう。

////

日本社会では、社員格の人が働かないでいると無職扱いされて、非難、軽蔑の対象となるが、社主格の人は働かなくても何も言われず、むしろ社主の一員であるというだけで、ただ存在するだけで尊敬の対象になったりする。天皇家や財閥の子息が典型例だ。先祖代々特権的な社主の地位が受け継がれているのだ。人間の平等や人権思想に反する考え方だが、『社教』に洗脳された日本人は誰も問題にしない。

////

日本の官公庁や企業で、新規学卒一括採用を禁止して、職業教育に基づく免許制による採用を義務づけることが、日本の年功序列による老害による「社」支配や終身雇用による転社不能性を打破する有

力な方法である。医師や看護師の免許制を全職種に広げるべきこと。まずは官公庁のキャリア職で手本を示すべきこと。

////

日本の中央省庁の意味不明なジョブローテーション制度が、社員の一社への生涯隷属を引き起こす諸悪の根源だ。専門の職能を身に付けることを根本で否定しているので、一つの社を超えた職業スキルを身に付けること、転社をすることが不可能になる。これを止めて医師や看護師みたいな汎用性のある職能が身に付く免許制を日本の中央省庁に根付かせるべき。
中央省庁で根付けば、上位者信仰の強い日本の民間企業も右に揃って免許制を導入するだろう。
日本の広範な職場への免許制の導入で正規雇用と非正規雇用の格差をなくすことができる。有資格者が適切な職場にあてがわれるようになる度合いが増加し、日本の職場の生産性が向上するはずである。
また、免許制の導入で、一社への帰属意識が不要となり、社員は、一生を一つの社にしばられず複数の社を渡り歩くことができるようになる。要するに一社専用社畜の状態から解放されるのだこと。
免許制の導入により、そもそも正規雇用と非正規雇用の区別、差別が消えるはず。

////

全ての時間を自分の隷属する社のために自発的に捧げることを要求され、自分を社のために犠牲にしたことが美談として語り継がれるのが、日本の伝統的な社員のあり方で、教員もその典型。社員が自己犠牲を拒否すると、社員を追い出すための社主や他社員からの陰惨なお仕置きが待っている。
人間の社への隷属をなくすことが日本社会のクオリティーを上げるために必須。つまり社員制度をなくすことだこと。
日本社会から社員をなくし、すべて労働組合員にすれば、社員の社主への隷属が無くなり、日本社会はもっと生きやすくなる。
日本の社員制度は、個人の自由を重んじる人間から見ると社員生涯にわたる社への奴隷制の制度化とその正当化、美化を両方とも実現していて、最低最悪の環境だ。

////

日本社会分析単位

・家人（血縁共同体の成員）
・村人（地縁共同体の成員）
・社人（職縁共同体の成員）

・国人（国家共同体の成員）

・旅人（故郷の共同体の外に一時的に出てあちこち動き回る人）
・流人（どこかの共同体に属したいが入れてもらえず漂流する人。）
・外人（日本の国家共同体に入れてもらえない人）

////

ネット掲示板を見ると、新型コロナウィルス感染拡大防止のためのテレワーク勧奨をリストラ勧奨とみなしてショックを受ける正社員がいるようだ。
テレワークは怠け者の劣った勤務形態で、職場に満員電車で定時出社が最高とみなす感じ。
日本社会の限界は、ハードできつい思いをすることが最上で、そうしないのは怠け甘えで否定の対象になることだ。
どうみてもテレワークの方が勤務の自由度が高くて待遇良さそうなのに、日本人は、それを否定してわざわざ苦しい出勤労働を選んで、そのことをドヤ顔自慢する。筆者はそうした日本人には付いていけない。
職場出勤労働は、新型コロナウィルス感染とかの危険も高いのに、危険を冒してでも社へ忠誠心を見せるのが日本的には最高なの？。
また、業務上の都合でテレワークできない部署の社員が、テレワークしている部署の社員に関して「あいつらは不当に楽をしているから、給料を減らしてほしい」と訴えたりしているようだ。自分の部署の給料割り増しを主張すれば良いのに、社主や上級社員に訴えるのが怖くて、代わりに他の社員の足を引っ張り、待遇を下げようとするのだ。日本の社の社員の陰険さが伺える。

////

日本の社の社員って不気味だよねこと。
社主の奴隷に過ぎないのに、自分が社主になった気分で社の経営の

ことを一生懸命考えるんだもんね。
何でそこまで社のことを考え、社主に尽くそうとするの？
分からないこと。

////

・会社とかの経営と共同体との分離ができている社会＝西欧北米、中国、韓国。
・会社とかの経営と共同体との分離ができていない社会＝日本。
なのかな？
分離できている方が経営改革がしやすく発展しやすいのでは。

////

社を村化、共同体化させないこと、社から村的要素、共同体的要素を取り去ることが日本再生の条件だ。

////

製品の良し悪しについて、〇〇社の製品だから大丈夫って言う人と、製品の出来不出来は担当者によるので〇〇社によるくくりは信用しないっていう人の２通りいる感じ。
日本では前者が優勢なのではないだろうか。後者だと日本国内ではおいてきぼりになる。

////

日本の社が副業が禁止するのは、社員の「一社専属」の規範が日本社会に存在するからである。社員が副業をすることは、複数の社を掛け持ちすることになって、一社専属の規範に違反するからである。一つの社への専属奴隷となることが、日本の社員には求められる。

////

日本女は食虫植物にそっくり。誘いを出して、やってきた日本男を落として精神的に身動きできなくした上で、その日本男の一生を経済的に消化し尽くすのだこと。日本女は結婚に当たって、日本男から家計の財布のひもを取り上げげて小遣い制を敷いて、日本男を経済的に身動きできなくするというのもある。

日本の社（官公庁、企業）も食虫植物に似ている。誘いを出して、やってきた学生を落として、社員として終身隷属の縛りで精神的に身動きできなくした上で、その学生＝社員の一生を経済的に消化し尽くすのだこと。
この点、日本女と日本の社は相似の関係にある。

////

感染症対策での会社の固定資産税ゼロ政策とか、日本政府は社単位の活動についてはお金を気前よく出すが、社から離れた個人単位の活動についてはお金を出し渋る傾向がある。日本の社会が社中心で回っていて、社主と社員のみが厚遇されて、個人単位で動く人たちは冷遇される。これは社会的差別であり、無くすべきだ。
日本政府の援助は、大きな社に手厚く小さな社には薄い。大きな社の代表格が公務員や大企業。日本政府自体が特大の社だ。
日本人は、みな自分の属する社内のことにばかり関心が行くため、社外がひどい状況になっていても気付かないか、気付いても他人事のように冷淡に振る舞う。社の持つ閉鎖性、排他性が、社外者差別を引き起こしている。

////

日本の社では、社員は、社に直接所属する直接社員と、直接社員の生活を管理するマネージャーとしての間接社員。（直接社員の母や妻とか）とに分けることができる。
直接社員が直接社員として社に滅私奉公していられるのは、間接社員の存在があればこそである。夫婦共働きとかで間接社員役をやる人が家庭内にいなくなると、日本の家庭は崩壊し、子供が生まれなくなる。それに伴って日本の社も崩壊する運命をたどることになる。

////

日本では、フリーランスの非社員や非正規社員の立場の人が困り事を起こして、あるいは困り事に巻き込まれて助けが必要になると、困りごとを勝手に起こした者の自己責任だとして、誰も助けてくれない。彼は善意のある第三者の助けを待つしかない。

一方、日本では、社員が困り事を起こして、あるいは困り事に巻き込まれて助けが必要になると、それが社用のみならず私用であっても、マスコミのニュース報道では「〇〇社の社員の〇〇さんが〇〇の事件に巻き込まれました」とか社名入りで報道され、社の責任だとして、自己責任扱いにはならず、社から助けの手が差し伸べられる。
社員は私用時間中でも社員として扱われ、それゆえ社員は24時間ずっと社員として落ち度のない恥ずかしくない振る舞いをする必要があるのである。
ただし、困り事を起こして、あるいは困り事に巻き込まれて、社の手を煩わせた社員は、後になって、社主や上級社員、同僚社員から、社に余計な負担、迷惑をかけたとして悪口を言われ、不始末を起こしたことでの社内処分、けん責を食らうことが多い。そして、そのことは、社の人事部局の帳簿に記録され、かつて困り事の前例を引き起こした要注意人物として永久に記録され警戒され続けることが多い。
不始末を起こした社員が社主や上級社員たちのお気に入りだった場合は、不始末の発生は無かったことにして当面もみ消される。一方、社員がお気に入りではなかった場合、社の皆に迷惑をかけた不出来な者、あるいは社の名誉に泥を塗った不届き者として懲戒処分になり、社内昇進の道を閉ざされ、退職を迫られることが多い。
日本の社では、その社内で、社主や上級社員が困り事を起こした場合は、その責任は社内では一切問われない。社主や上級社員は無謬な存在、絶えず正しい存在として取り扱われ、彼らの不始末の責任は末端の社員がかぶることになる。末端社員の自殺は社主、上級社員の不始末のもみ消しのための自己犠牲が原因である。このことを社員の遺族とかが刑事告発すると、社の上位者に反旗をひるがえす反乱を起こした者として、元の社のみならず、日本社会の世間的にも冷遇される。

////

日本の社では、社員たちは嫉妬の心理で動いており、自分より不当に良い思いをしている、あるいは楽をしている他の社員の待遇を自分と同じ待遇になるまで引き下げる「足を引っ張る」行為が公然と認められている。それゆえ、社員は、他の社員に自分が楽をしていると思われないように、必死で苦労しているように見せようと演技するか、苦労の伴う行為を自己犠牲的に本当に実行する羽目になる。日本の社では、社員が社のために苦労すること、自己犠牲することが最上の業として美談としてたたえられる。こうした社内の嫉

妬のシステムが、日本社会で社員の待遇がいつまで経っても少しも上がらない大きな原因となっている。

////

日本における反社会的集団すなわち反社集団は、「正常な」社の存在を脅かす集団のことであり、それ自体が結社であることが多い。その主義主張によって右翼的だったり左翼的だったりすること。やくざのように社会的に逆機能で暴力を伴う行為を常に行うことが多い。
日本人にとって、自分が所属する社、すなわち自社が正常で、自社の邪魔をする存在はもれなく反社扱いになる。ただし、暴力団のように自分たちの病的側面を自ら認識している場合は、その組員は自分たちのことを積極的に反社扱いし、そのことを武勇伝として自慢する。そうした反社の存在であることのの自覚のある反社集団は、社ではなく組と呼ばれる。そうした反社集団の構成員は、社員ではなく組員と呼ばれる。社が本来持つべき神聖さ、宗教性を失っているため、社と呼ばれる資格を失っているから、組と呼ばれるしかないし、そのことを自覚しているのである。
ただし、建設会社のように、日本には「組」と名乗る反社でない社会集団も多く存在する。また、ブラック企業のように、やっていることが反社会的そのものでも、その自覚がない社会集団は「社」を名乗っている。反社集団のターゲットとなる社が日本国の場合、反社集団は反日集団と呼ばれる。

////

日本の社における就社、すなわち社員の採用は、手つかず状態の新卒者のみを、各社一斉に、一括で採用する点が特徴である。学生は学校に籍があるうちに、どこかの社に採用されないといけない。学生は卒業とかで学校の籍を失うと、既卒扱いになって、どこの社からも採用してもらえなくなってしまう。

////

日本の社では、新卒入社で、社へのブランク期間無しの「連続所属」「皆勤」ができており、社の主要業務を担当する花形部署で勤

務しており、職務遂行上失敗や減点が無く、コミュニケーション能力や忖度能力が高くて社主や上級社員の覚えが良く、年齢相当に年功序列で社内昇進して、相応の社内的地位の高い役職の肩書を得ていることが、社員の模範とされる。

////

日本の社では、転社は、新卒以降、どこかの社に在籍期間の切れ目なくきちんと正社員として在籍し続けてきているほど、年齢が若く新卒に近いほど、今までの転社の回数が少ないほど、転社の条件が良くなる。
日本の社では、転社は、既卒だったり、社への正社員としての在籍期間が途中で途切れていたり、年齢を重ねているほど、今までの転社の回数が多いほど、転社の条件が悪くなる。

////

日本の社では、正社員採用に年齢制限を公然と設ける社がほとんである。特に中央省庁とか特徴的であること。社内で年功序列の待遇を敷いているためであること。年齢が高い者を社員として新たに採用すると、社内でエスカレーター昇進してきた他の社員との間で、処遇の混乱が生じ、社内での年功序列の調和が破壊され、社内全体が混乱に陥るとして、歓迎されない。

////

日本の社では、社員の中途採用は、中途採用社員の予定する業務が、よほど社の現行業務を上手く補完して社の業績拡大につながるというのでなければ、年功序列の和気あいあいとした社内の雰囲気を乱すとして、基本的には忌避される。入社を許されても屈辱的な新入社員扱いをされることが多い。

////

日本の社は、経済的に不景気が来ると、新卒採用者の数を大きく絞ったり、ゼロにする。その結果、その年の学生たちは、どこの社にも正社員として採用されずに、臨時雇用扱いのアルバイトや非正規社員としてひたすら正社員より低い待遇で働き続けないといけない。そして、日本の雇用者にとっては、この非正規雇用状態から、社への正規雇用状態に移行するのが至難の業である。非正規社員と

しての職歴は、正社員の職歴とは一切カウントされず、正社員としての在籍歴が無いと見なされ、正社員採用面談で落とされてしまい、いつまでも正社員になれず、経済的に困窮したままとなる。これが就職氷河期世代の日本人たちの社会的切り捨てとして大きく批判を浴びているが、日本の社は直そうとしない。

////

日本の社は、新規学卒一括採用の時に新入社員として、社員として産声を上げ、その後、ジョブローテーションを繰り返しながら、次第に上司に可愛がられて、社内で昇進していく。一般社員は上司に可愛がられないと、えこひいきされて昇進の途を閉ざされる。また、途中で失敗しても減点主義のため、そこで社内出世の途が閉ざされることが多い。

////

日本の社では、社員は、社員として一社にずっと連続所属し続けることが必要である。社員資格も持った人による社内外への転社による出入りの増加が好まれないためである。そして社員は、社の用意したジョブローテーションを繰り返しながら、昇進のエスカレーターに乗って社内で出世していく。

////

日本の社では、官公庁とか、社員を一生涯自社に所属させつづけることが多い。社員の人生のレールを社側で用意し、社員がそれに従っている限り、社が社員への厚生福祉を提供し続ける。一方、定年到達時とか、功労金兼用手切れ金の退職金が支払われ、その後は社は社員の生活に関与しない。ただし、社によっては定年後も旧社員を見放さずに、嘱託扱いで、旧社員に補助的な有償の仕事をあっせんし、提供することが多い。また、定年に達した社員が役員とかの上級社員である場合、OB、OGとして社内に院政を敷き、現役の社員たちを公然と支配し続ける場合が多い。

////

日本の社では、社の業務遂行上、業務廃止で要らなくなった社員たち、あるいは社内を混乱させたり社風を乱す厄介者の社員たちを、リストラで強引に待遇の悪い部署に転籍させたり、勤怠が悪い社員

は降格したり、早期退職制度で退職金割り増しで、リストラ部屋に押し込んで、圧迫面接を繰り返し、自主退職に持ち込む。

////

日本の社では、社員がメンタルの調子を崩すと、産業医経由で何らかのメンタルヘルス上の病気（うつ病とか）にかかっているとして、休職させられたのち、休職期間満了で、退職に追い込まれること。復職しても、周囲の社員たちに冷たい扱いをされ、メンタルを崩して再び休職状態になり、退職になるパターンが多い。

////

日本の社では、同一年次入社の複数同期社員のポストが不足する場合、能力の劣る社員の方を、今後、能力のい優秀な方の社員と顔を合わせなくて済むように、温情によって、社の外局や下請けの別の社に天下りさせる。天下りは官公庁ならず大企業でも、日本の社ではどこでも行われている。

////

日本の社では、社内に派閥同士の抗争で社内政治が存在し、若手社員も中堅社員も、人事権での影響力を持つ社主や上級社員に取り入って、社内政治上少しでも有利な位置にありつこうと熾烈な忖度合戦を繰り広げる。その手土産として社員の上げた成果が利用される。ただし、就ける役職の数は限られていることから、その限られた役職への就任を巡って争いが繰り広げられ、勝者の社員は敗者の社員を、自分の地位を脅かすライバルとしてひたすら冷遇したり左遷したりする。日本の社の社内政治とそれに伴う派閥抗争のあり方は、完全に女流だ。

////

日本の社では、障害者は、新卒入社後に病気での障害を発症した場合は、そのまま閑職に回され、役立たずとして定年までひたすら飼い殺しになる。社毎に障害者雇用の必要定数を「上位者」から指導されるので、ほとんどの場合は、前記の買い殺し障害者社員をその定数に充当するが、それに従って、もしも定数を割り込んでいる場合は、オープン採用で障害者を、障害者向け専用子会社に採用したりして、単純作業に当たらせることが多い。

////

日本の社での社員の人事評価は基本的に重箱の隅つつきの減点主義であり、一度失敗すると挽回が難しい。一度失敗するとその風評が社内のどこまでも付いて回り、陰口や嘲笑の対象になるので、社員としては失敗は一切許されないとして、悲愴な覚悟で仕事に臨まざるを得ない。社内の社員の成果評価は、基本的に上級社員に仕事での成功やゴルフとかでの接待を含めて上手く取り入った社員が、その取り入り具合を上級社員たちの評価会議で偏差値評価される。評価は相対評価となる。評価が悪いと降格になる。

////

日本の社は、社員の勤怠に異様にうるさい。社の業務を神がかった神聖なものとして取り扱うからであること。特に出社時刻に関しては、社の業務は皆で一斉に開始して助け合って行うことが前提となっており、遅刻は厳禁である。例え1秒遅れてもダメであり、勤怠履歴に残る。社での昇進を考える社員は、勤怠履歴に傷が付かないように、遅刻した日は有給休暇を取って、かつ仕事をしたりする。また、長時間残業の多さが社への忠誠心を図るバロメーターとして作用しており、官公庁とかの上位社から就労時間制限が設定されない限り、24時間を社のために戦えますか？と社への滅私奉公を真顔で要求されるのが恐ろしい。

////

日本社会は、女性の社会進出に伴うキャリア女性の増加や、個人の単独収入の減少を補うための夫婦共働きの増加で、夫婦が別々の社に属しつつ血縁一家を形成するように変化している。家の中に社員の生活の管理役、子育て役がいなくなっているので、祖父母を活用して何とかしのいでいる。

////

日本の社は、伝統的に、母親や妻といった日本女性が、稲作農耕での一か所定住生活社会における、生得的に移動生活社会向きなため、定住生活社会にとっての社会的不適合者で社会的に有害な厄介者である、息子や夫といった日本男性たちの精神を、育児の過程で強制的に女流化した上で、家庭から職場へと社会的に強制隔離の形

で送り込み、女流の、相互束縛性のひたすら強い、男性が本来指向する個人の自由独立性を排除した人間関係をひたすら強制して、終身奴隷労働をさせ続け、そうして男性が労働で稼いだ利益を一方的に取り上げて女性の管理下で貯め込み、使い込むために利用する、女性による、女流男性専用の社会的隔離と強制使役の場所、男性にとっての一種の家畜小屋、男性の人間的尊厳を否定し続ける非人間的な場所として機能してきている。日本の性別分業の本性は、これである。日本の正社員の男性たちは、役人たちも含めて、そうした終身奴隷労働の象徴のような不気味な存在である。
ところが、最近の日本の社では、欧米社会における性差別撤廃の社会的風潮の導入で、こうした性別分業の否定と、女性の職場進出やキャリア女性の社での活躍や役職就任がひたすらもてはやされるようになり、女性も、社の中に留まり続けて、男性並みの終身奴隷労働にひたすら従事するように、慣行が変化してきている。日本の社は、もともと女流の人間関係で出来ているので、女性向きである。日本の社では、今後は、キャリア女性の正社員たちが、あたかも従来の平社員の『お局様』が、どんどん昇進して管理職化してパワーアップした感じの、スーパー『お局様』となって、スーパー台風並みの猛烈さで、日本の社の内部を席巻し、強烈に支配するようになると考えられる。日本男性は、社の中では、ますます肩身が狭くなるだろう。
一方、女性が社に本格的に進出すると言うことは、女性も社でひたすら終身奴隷労働をするようになる分、女性にとって家庭が手薄になることであり、日本男性の社から家庭への活躍の場の移行が望まれるようになっていると考えられる。しかし、現状では、男性も終身奴隷労働状態のままなので、このままだと、日本の家庭では、男性も女性も夫婦の両方とも社で終身奴隷労働をするようになって家庭にいられなくなり、子供を作る余裕が無くなって少子化が進み、生まれた子供を家庭の中で育児をする余裕も無くなって、その生育は、完全に外部の保育所や学校任せになると考えられる。つまり、日本の社で正社員の制度がこのままの形で男女共に存続すると、家庭機能の、家庭外部の社や学校への完全吸収と無効化が進み、日本の家庭は実質的に機能停止すると考えられる。

////

将来的には、日本社会の衰退で、日本の社が男女の正社員を雇い続ける経済的余裕が無くなり、非正規社員の低賃金労働にもっぱら頼ることになることが考えられる。つまり、男性も女性も、そのほとんどは正社員でいることが出来なくなり、ひたすら、さらに待遇の

悪い非正規社員化、社会的流民化が起きると考えられる。日本の社は、少数の、一見、上流階級扱いだが実質的には終身奴隷労働の正社員と、大多数の、そもそもまともに日本社会の構成員扱いされない、さらに扱いが非人間的な、完全に使い捨ての社会的流民相当の下流階級の非正規社員に分離すると考えられる。日本社会では、日本の社の所有者、支配者である社主たちの社会的独り勝ちと、さらなる特権階級化、超富裕化が進行するだろう。

日本の学校と、伝統的師弟関係

本文

日本の学校は、社会的前例、しきたり、知識、経験の伝授と習得、専攻のための教育、研究機関扱いの社会集団である。存在としては、社と似ているが、経済的に収入を得るために、社員となって社主のために働くことが主目的となる社とは区別される。小学校、中学校、高等学校、大学、大学院。専門学校。社に入社する前の学力選抜、社会に出て役立つとされる学習内容の勉強暗記、女流の基本的社会規範の習得の場であること。学内では、社における上司部下関係の社会規範の習得の場が用意されていないため、師匠も弟子も、入社経験の無いまま、学内に留まっていると、いつまで経っても、社にそのままでは活用できない人材扱いされて、いわゆる「社会人」扱いされない。
学内と学外の区別が厳格である。高校や大学、大学院は、入学試験が課される。
学内の人たちは、。
（１）弟子。社会に出る前の人。教員から前例、しきたりを授かり勉強する人（生徒、学生）こと。一般社会に出ずに学内に留まって、学的集団の中で、学問的な業績を上げたり、集団上位者の教員に取り入って、学内や他学でのアカデミックポストでの昇進出世を目指すか、専門知識を元に、学外の社に正社員とかで入社して好条件で働こうとする人（大学院生）こと。

（２）師匠、先生、教授、教諭。学究ポストや教育ポストに就いている正規の教員。一時的助っ人扱いの臨時の非正規の教員。
（３）事務、工務等の職員。雇用面で正規と臨時の非正規がいる。教員に仕事が割り当てられることもある。
に分類されること。
弟子も先生も、学内で、全時間、空間的な拘束状態になる。例。中学校や高校で、学校の部活で毎日の丸一日をひたすら消費する生徒、学生と、教員。
学校は、後天的定住集団である。学校は、血縁関係が無くても加入できる。学生、生徒は、新入生として、真っ白な状態で、加入して、教員や先輩と縁を結んで、学閥に入る。学生、生徒が、いったん学校に加入すると、その学閥の関係は、卒業後も一生続き、抜けることは困難である。
教員（師匠、先生）と弟子（生徒、学生）の関係は、女流の、反論や口答えの余地無しの一方的支配隷従の教授と勉強の関係である。大学教員とかの師匠は社会的に権威ある肩書付きの存在として丁重に扱われ、発言が信用される。弟子は教員に勉強学習目的、学究目的で無償労働力扱いされる。弟子は師匠の教員に、心理的懐きや取り入り、永続的忠誠のような伝統的師弟関係を強いられる。師弟関係は、弟子が学校を卒業しても、ずっと永続する。弟子は師匠を恩師呼ばわりする。師弟関係は、女流の派閥と人間関係が基本的に相似する。弟子は常に上位者の師匠と心理的に一体化して動き、師匠同士でライバルで仲が悪いと、その弟子同士も仲が悪くなる。師匠同士の連携があまり無く、各研究室や講座で、閉鎖、排他化、たこつぼ化が起きやすい。学内で師匠の立場の絶対化が起きやすく、上級の師匠の個人的興味を満たすための、社会にとってあまり役に立たない、社会的ニーズの無い、独善的な研究や教育が行われやすく、チェックもされにくい。その結果、そうした師匠から教育を受けた弟子の社会的行き場、活用の場が無くなり、高学歴ワーキングプア扱いになる。
大学とかの研究機関では、教員の研究にいったん入った専攻の道をひたすら究める専門化が起きる。教員は専門家扱いされる。その点では、職人と似ている。専門家の教員は、社会的に融通が効かない存在とされ、蓄えた前例知識や経験とかが学識経験者扱いで尊敬されるものの、実際的な社会的地位は見かけほどは高くない。専門家の教員は、一般的コメンテーターの能力に優れていると、マスコミや出版で重用され、専門外の意見も求められる。
教育機関の教員は、何でも屋のゼネラリスト扱いされる。部活指導とか、専門性を問われず、やらされること。雑用が多く、本来の教育指導やその準備の時間が取りにくい。

弟子相互の間に、毎年一斉入学の発生による学年制に伴う、その学校での前例習得の度合いの上下に従って、先輩による一方的支配と後輩の一方的隷従の厳格な反抗不可の、女流の先輩後輩関係が存在する。同学年の弟子、生徒、学生同士は、学級内やゼミナール内とかで、相互の同調行動、心理的和合の維持が常に要求され、足手まといの者や逸脱者、反抗者は、いじめや排除の対象になる。
学校所有者と、学校経営者、学校教員、学校の生徒、学生、それぞれの間に埋められない、超えられない身分的格差と一方的上下関係がある。学校所有者は、常に自分たちが正しい立場に立てる無謬性を確保する。
正の教員間の関係に、女流の一方的な支配隷従の上下関係が存在する。教員間の先輩後輩関係、上司部下関係（校長と一般教員）や、上級下級関係（教授と准教授、助教）こと。
学校の存在を許認可する、あるいは学校に研究、教育予算を付けてくる、あるいは学校での学習指導要領を策定してくる国や都道府県、市町村の役所と、学校との間に、根本的な一方的上下関係が存在する。
教員の人事や採用については、学校所有者が学内の人事権を掌握する。公立小中高校とかでは、学校を所有する国や都道府県、市町村の役所の教育委員会で決まる。あるいは、大学とかでは、学校所有者、学校経営者と学内の正規の上級教員同士の会議で決まる。
学校での学習経験は、社での経験としてはカウントされない。学校の弟子が、社に入社すると、大学院生で、長年研究を続け、歳を取っていても新入社員扱いになる。
学校の教員が、社に入ったり、逆に社の経験者が、大学とかの学校の教員としてスカウトされることはある。

日本社会の権力構造と言論統制

一人一人の日本人の意思が、天皇制を生み出していること。

日本人は、天皇制によって一方的に支配されているのではない。

以下の（１）の人々は、以下の（２）の行為を、実行する。
それは、以下の（３）の内容に基づく。
それは、以下の（４）の内容を、その目的とする。

（１）
日本人の一人一人。

（２）
以下のような存在を、心の底において、求めること。

彼自身か、彼女自身のことを、守ってくれる存在。
彼自身か、彼女自身にとって、頼れる存在。
そうした存在としての、上位者。

（３）
彼ら自身が持つ、女性優位な本質。

（４）
彼ら一人一人が、各自の保身を、より確実なものにすること。

以下の（１）の人々は、以下の（２）の行為を、実行する。
それは、以下の（３）に対して、実行される。

（１）
日本人の一人一人。

（２）
懐くこと。
忖度すること。
隷従すること。

それらを、積極的に行うこと。

（３）
彼ら一人一人にとっての、上位者。

日本国内における最高上位者が、天皇家である。
日本政府は、その下で、実務を取り仕切る。

日本国外に存在する、日本にとってのスーパー上位者。
それは、アメリカや西欧である。

女性優位な日本人は、以下の二つの上位者に対して、同時に隷従している。

（１）
日本政府。
天皇家。
日本国内における、上位者。
普通の日本人は、そうした日本国内の上位者に対して、隷従する。

（２）
アメリカ。
西欧。
スーパー上位者。
それは、以下の人々よりも、更に格上の存在である。
日本国内における上位者としての、日本政府や天皇家。

日本国内の上位者と、普通の日本人。
彼らは、スーパー上位者に対して、隷従する。

以下の（１）の内容は、以下の（２）の行為によって、生み出されている。
以下の（２）の行為は、以下の（３）の内容に基づいている。

（１）
天皇制による、日本社会の支配。

（２）
日本人の一人一人が、それを、自主的に構築していること。

（３）

女性優位な日本人。
彼らの一人一人が持つ、自己保身への強い意思。

女性優位な日本人。
彼ら一人一人が、上位者に対する隷従を、日常的に行っている。
そして、同時に、彼ら一人一人が、下位者に対する専制支配を、日常的に行っている。

例。
（１）
親に相当する者が、子供に相当する者のことを、専制支配すること。
親子関係。
親会社と子会社との関係。
会社における、上司と部下との関係。

（２）
前例を保有する者が、前例を保有しない者のことを、専制支配すること。
師弟制。

（３）
古参者が、新参者のことを、専制支配すること。
先輩後輩制。
年功序列制。

（４）
上位者との間における、高度な血縁関係。
それを持つ者が、そうでない者のことを、専制支配すること。
門閥。
閨閥。

（５）
上位者との間における、高度な経済的癒着関係。
それを持つ者が、そうでない者のことを、専制支配すること。
官公庁と、民間との関係。
大企業と、中小企業との関係。
元請け企業と、下請け企業との関係。

（６）
定住民が、流民のことを、専制支配すること。
企業の内部における、正規メンバーと、非正規メンバーとの関係。

日本政府による、日本国民への専制支配。
そのルーツは、一人一人の、女性優位な日本人である。

以下の（１）の人々は、以下の（２）の行為を、実行する。
それは、以下の（３）の内容に基づく。

（１）
日本人。

（２）
（２－１）
スーパー上位者としての、アメリカや西欧。
彼らによる専制支配。
彼らによる強圧的な指導。

それらの受容を、好むこと。

（２－２）
スーパー上位者としての、アメリカや西欧。
彼らに対して、隷従すること。
その実行を、好むこと。

（３）
日本人一人一人が持つ、自主的な自己保身の意思。

日本人は、スーパー上位者であるアメリカに対して、隷従する。
日本人は、盛んに、欧米諸国の民主主義を、美化する。
日本人は、その内容を、丸暗記し、一斉唱和し続ける。

日本人は、欧米諸国の民主主義に対して、隷従する。

そのために、日本人は、以下の事象の発生を、必死になって抑止する。
彼ら自身が持つ、女性優位な本質。
それが、スーパー上位者であるアメリカに対して、露出すること。

そのために、日本人は、自主的な言論統制を、日常的に行う。
それは、以下のような内容である。
///
彼ら自身が持つ、女性優位な本質。
それを、隠蔽すること。
そのことで、彼ら自身を、あたかも男性優位であるかのように、見せること。

（初出2021年2月）

定住集団社会を国ぐるみで隠蔽しようとしている日本　-「欧米『出羽守』」と言論統制　-

日本は、政府も国民も、自分たちは、欧米流の自由民主主義を身に付け、欧米先進国の一員になったのだと、強く自負している。
そのため、本当は、社会の基盤部分が、今なおウェットで旧態依然とした、伝統的稲作農耕民型の定住集団社会であることを、政府、国民一丸となって、必死に隠蔽しようとしているかのように見える。
定住集団社会は、古い、すでに消えつつある社会のあり方であり、我々は、ドライな欧米の文化と積極的に一体化して、率先して取り入れ、社会や生活は、欧米化を達成した、という考え方が日本では支配的である。
西欧かぶれの日本人は、自分が定住民だという自覚が無い。西欧の一員だと思っていること。
日本の社会学のあり方にしても、日本の定住集団社会は、遅れた封建遺制であり、現代の日本社会は、欧米並みに近代化して、自由民主主義を身に付けたのだ、あるいはそうなりつつあるのだ、という前提で、教科書とか組んでいるのである。定住集団社会のことは、社会の教科書とかにはほとんど出てこない。

そう考えないと、というか、日本社会の基盤が昔ながらの定住集団社会であることを外部に公式に露出させて認めてしまうと、日本は、欧米先進国の仲間では無い、異質な存在だということを認めざるを得なくなり、欧米先進国の一員ではいられなくなってしまう、欧米先進国から村八分、仲間はずれになってしまうという恐怖感、不安感が、日本社会に根強く存在し、それが、日本社会の基盤の定住集団社会の存在を国ぐるみで隠蔽しようとする大きな要因となっているような気がする。
欧米は牧畜民社会で、個々人がバラバラに分離して別々の存在になっている社会なので、日本のような村八分の思想を持っているかどうかはかなり疑問である。むしろ、白色人種と黄色人種との人種差別の方が、日本を仲間から外す原因になりそうである。
日本はダブルスタンダードの社会である。口先では欧米流に動くべき（民主主義が、自由が等々。）と盛んに唱えるが、実際の行動は伝統的な定住集団社会に合致したものでないと非難され、いじめられ、村八分にされる。見かけに騙されてはいけない。
日本学者村の定住民なのに、何事も西欧、北米理論経由でないと論じられないのが日本の社会科学者である。
日本人は、大日本帝国憲法派も、日本国憲法派も、どっちも欧米『出羽守』、欧米事大主義者である。
日本は、西欧、北米諸国の言うことを聞いて、西欧、北米諸国基準での「職場でも家庭でも性別分業の無い男女平等の国」に一生懸命なろうとしている。自分の国がもともと女、母の強い社会であることは無視して、ひたすら西欧、北米基準での「女が社会進出を果たした国」になることしか頭に無い。
あるいは、日本は太平洋戦争でアメリカに敗退して、アメリカの実効支配を受けているのが現状で、日本の定住集団社会は、アメリカの自由主義、民主主義に反する「反米」の存在になってしまっており、強い存在に対して逆らえない、批判できない日本の定住民たちは、とりあえず日本定住集団社会の存在を表向き隠蔽することで存続を図っていると見ることも出来る。
中国とかと違って、日本では表現の自由が認められているとか、盛んに日本人は主張するが、実際のところ、日本人が自由を信奉するのは、自分たちより上位の宗主国のアメリカが、自由主義、民主主義をやたらと主張するため、とりあえず強者のアメリカの言うことを聞いていれば、身の安全が図られ間違いがないという、アメリカの権威に頼る、女性優位な権威主義から来ているのであり、アメリカが日本を支配している間の一時的な現象だと考えられる。日本人は自由を心の底から体得している訳では無く、自由主義が権威、権力があるから、自分も従ってみるかとかいう感じなのである。

その証拠に、日本社会は、会社とかで、やたらと周囲との和合や協調性を求め、一体、一丸となって団体行動し、個々人は、会社組織の中に溶けて無くなることを求めるのであり、プライバシーも存在せず、個々人は会社に全人格的に拘束され、行動の自由が無いのが当たり前だったりする。個々人の自由行動が保証されやすい遊牧民に近い欧米社会とは、社会のあり方が農耕民的で根本的に異なり、かつそのことを世界に向けて公に認めることが出来ない立場にあるのが今の日本社会である。
もともと上位者に絶対服従の日本人は、日本が軍事的、文化的に勝てそうにないスーパー上位者のアメリカや西欧に対して絶対服従であり、自分からは欧米の社会体制に反することを欧米に対して主張することが心理的に怖くて出来ない、難しい。
家父長制社会アメリカの支配の下で、自分たちの社会を変えたくなかった日本人は、母権社会の日本定住集団社会の存在を徹底的に隠蔽し目立たないようにする作戦に出て、今でもそれが続いている。母権社会、定住集団社会のことを明言することをタブーとしたのだこと。
日本定住集団社会は、その存在自体がアメリカ流の自由民主主義に反し、反米である。日本の定住民たちが定住集団社会の話を避けるのはこれが原因である。同様に、日本の女社会、母権社会は、その存在自体がアメリカ流の家父長制に反し、反米である。日本の女性たちが日本の女社会の話を避けるのはこれが原因である。日本人はスーパー上位者のアメリカの意に叶う自由民主主義社会と家父長制社会、男社会の話しか怖くて出来ないのである。まさに、「スーパー上位者恐怖症」、「アメリカ恐怖症」あるいは「欧米恐怖症」であること。
日本の定住民が欧米を恐れるのは、江戸時代末期に、圧倒的武力と先進的西欧近代文化を背景に西欧列強に強制的に開国させられて不平等条約を結ばされたり、アメリカに太平洋戦争で特攻隊みたいに死に物狂いで抵抗したにも関わらず完全に打ちのめされて敗北し、国を占領され、異文化の日本国憲法等の法律を一方的に制定され、その後も在日米軍の強力な武力で日本の国家村自体がアメリカの言うなりにならざるを得なくなっている歴史的状況が、日本の定住民たちにとって強いトラウマ、恐怖心の源となっているからである。
伝統的日本定住集団社会も、伝統的日本女社会も、アメリカに実効支配されている今の日本人にとってタブー、隠蔽、批判、表面的せん滅の対象となっている。
公に日本社会が定住集団社会であることを認めることが出来ず、社会ぐるみ、国民ぐるみで隠蔽しようとすることは、言い換えれば、日本社会が定住集団社会であることを主張する言説を無視する、亡

き者にする形で公認されないように規制することになっており、そういう点では、現代の日本社会は、言論の自由が存在しない言論統制、規制社会であると言える。
日本では、明治時代から、実質、欧化主義が、現在に至るまでずっと続いている。確かに、欧米の文物を導入し、それらを改良して、世界に向けて売りまくることで、大いに儲けて経済的に成功したのは、選択としては正しかったといえる。
しかし、日本国や日本人がいくら心身ともに欧米化を進めようとしても、そのやり方が、欧米との心理的情緒的一体化に基づく女性優位、母性的なものであるため、欧米社会本来の個々人の自己責任と独立、バラバラさを許容し、積極的にリスクを取って、率先して未知の領域を切り開く男性優位、父性的な精神を、日本人が心の底から体得することは決してできないのである。
敗戦後７０年間、アメリカの実効支配を受けて、日本人の国民性も変化したのかと思ったら、戦前のままだったようだ。
日本は、日米同盟最強と盛んにアメリカとの仲の良さを強調するが、その実態は個人主義、自由主義重視のアメリカ社会とは正反対の、団体行動最優先で、個人を長時間統制拘束し、自由、プライバシーの無い定住集団社会、女社会を頑なに維持する反米社会である。
日本人は欧化主義推進にとって都合の悪い事象をことごとく表に出ないように隠そうとしている。面白いのは、表向きは一生懸命否定し隠すが、表から見えないところでは昔ながらに絶対的に従っていることだ。日本定住集団社会の掟や姑の存在はその典型だ。
日本人が自分たちの定住集団社会や女社会を必死で隠蔽して欧米『出羽守』ばかりやるのは、よほど欧米が怖くて逆らいたくないのだと考えられる。日本人は、反欧米と見られることがそんなに怖いのなら、定住集団社会、女社会であること自体をさっさと止めてしまえば良いのに、それはなぜか全力で死守しようとしているところが矛盾している。
日本の社会学者が欧米社会理論の輸入と啓蒙に明け暮れるのは、日本社会を欧米化していると表面的に見せかけることで、反欧米的特質を持つ日本定住集団社会、女社会、母権社会の潜在的永続を欧米社会に対して隠すための戦略である。日本のフェミニズムとかその典型であること。
日本定住集団社会、女社会の反欧米的特質を指摘されると必死で否定、無視し、日本は民主化していますと釈明するのが日本人である。スーパー上位者の欧米にお仕置きされたくないから、定住集団社会、女社会を必死で隠して事なかれしようとすること。
日本の定住民たちは、反欧米的な本性がバレてスーパー上位者の欧

米に攻撃されないように、必死で欧米的な行動を表面的に導入して、見た目を取り繕おうとしている。それが日本社会で欧米『出羽守』が量産される真相である。欧米理論の紹介、導入に明け暮れる日本社会学も、その一類型である。欧米『出羽守』の日本人が目立つが、最近は、その亜種の国連『出羽守』の日本人も目立つ。
日本女性は、自分たちが日本社会の中で強いことを認めてしまうと、反欧米になってしまうので、「日本の女性は弱い！差別されている！」と必死になって叫んで取り繕いを行っている。日本の女性学、フェミニズムは、スーパー上位者の欧米を懐柔するための日本女たちの戦略である。
アメリカ追従をする日本人は２通りいる。どちらも見かけ上欧米『出羽守』になるので見分けが付きにくい。
・アメリカが強くて怖いので、とりあえず従っておくかという権威主義的な伝統的定住民。
・伝統的日本定住集団社会、女社会の統制の強さ、相互監視の強さ、自由の無さに辟易している、つかの間の自由が欲しい隠れ自由主義者。
両者の区別は、日本定住民度判定テストの結果で行うことが出来る。
日本人は、欧米の文物をしきりに有難がって、身につけようとする一方、中国や北朝鮮、韓国を敵視して馬鹿にする。
だから、日本の高校の地理学の教科書とか大学の社会学の教科書とか、農耕民と遊牧民の社会のあり方の根本的な違いとか、一切教えずに無視するのだと思うこと。もしも教えると、日本は、欧米のような遊牧系に近い社会からかけ離れた稲作農耕民の社会であると教えることになってしまい、自分たちが心理的に一体化しようとしている欧米社会からは距離が遠くなり、自分たちが避けたいと考えている中国、朝鮮と一緒のカテゴリーになってしまうからである。
現代の日本人は、対欧米従属、反中韓になっている。欧米の言うことは絶対で事大主義的に従う。一方、中韓には敵意をむき出しにして馬鹿にする。日本の国民性が欧米よりも中韓に近いという意見は無視する。
日本が欧米しか見ていない（中韓は見下す。）のに対して、中韓は欧米、日本の両方を見ている。これが、製造業で日本が中韓に勝てない理由である。中韓は、日本のものを更に改良するので、競争力が日本のものよりも強くなる。日本定住集団社会は、中国、韓国、東南アジアの社会と大差ない。欧米追従のスタート時刻がたまたま他の東アジア諸国より早かったので成功しただけである。
日本政府やそのブレーンたちが、男女の心理的性差や、女性優位性格と日本社会の国民性との相関、男性優位性格とアメリカ社会の国

民性の相関とかについてきちんと教えずに、男女の性差をひたすら無視しようとするフェミニズムや男女共同参画社会構想とかに向けて突っ走るのも、日本社会が女性優位だと認めてしまうと、男性中心の家父長制の欧米社会と、超えられないギャップが認識されてしまうから、都合が悪いためであると言える。
また、日本の女性優位社会、母権社会の存在自体が日本を実効支配するアメリカの家父長制社会に反する「反米」の存在であるため、存在を隠す必要が出てくるのである。日本社会を男社会と必死になって主張するのも同根である。日本の嫁の地位の低さは論じられるが、母や姑の地位の高さはちっとも論じられないのも同じである。
河合隼雄の日本＝母性社会論が例外的に受け入れられたのは、彼が、西欧に留学して、ユングの精神分析の理論という、西欧で権威が確立された理論を土台にした自分の理論を提示するという形でライフワークの展開を行ったため、日本人の欧米の文物をこぞって取り入れようとする、欧米の文物を上位に置いて有難がる権威主義的な心理的傾向、ルートにうまく乗っかることが出来たからである。
この仕組を利用して、例えば少数の日本人が欧米に留学したりして、欧米人の一員としていったん成果を出して認められた後、そこから日本定住集団社会の社会システムを克明に分析、論評し、中国、朝鮮社会といった他の農耕民社会との対応付けや、アラブ、ユダヤ、トルコ、モンゴル、欧米といった遊牧系、牧畜系社会との性格比較を行っていくことが、欧米文物に弱い日本人に、自分たち日本人が欧米とは異質な定住集団社会であることを世界に向けて公認せざるを得ない状況を作り出す条件になるのではないだろうか？そうなれば、大きな日本社会の変革、改革につながるだろう。
ともあれ、現状の日本社会学のような、アメリカに逆らうことを怖がって、日本定住集団社会、女社会の実態を隠蔽し、欧米理論の日本社会への強制輸入と当てはめに奔走している「欧米『出羽守』」状態は、欧米社会の真実は知ることが出来るかも知れないが、日本社会の真実を知るには不適切であり、社会の真実を解明する社会科学のあり方としては間違っていると言わざるを得ない。日本人、日本の社会学者の「欧米恐怖症」が、その間違いの原因である。日本の大学の文科系が役に立たないと言われる原因も、この「欧米恐怖症」と大いに関係あるだろう。
その時々の強い者（今は欧米列強。）に逆らうのが怖くて、保身のため、強者に従順で迎合して、コロコロ自分の学説を変えたり、強い者（欧米列強）の意見に沿った学説を日本国内に役立つか事前検証せずに一方的に直輸入して人々に機械的に押し付けてしまうのが、日本の社会科学が税金の無駄遣いで、役立たずでダメな根本原

因である。
欧米『出羽守』や、「スーパー上位者」の欧米、国連を利用して日本国内の「上位者」(官庁、役所)を支配しよう、動かそうとする態度自体、強者に惹かれてなびき、一体化して、利用しようとする女性優位な態度であること。
その点では、日本女の存在が、日本の社会科学をダメにしている。
日本の社会学が科学になるには、日本定住集団社会、女社会をきちんと解明するように方針転換することが必要である。日本の社会学者は、存在が反米だから、アメリカから圧力がかかるからと言って怖がって研究を尻込みせずに、勇気を持って現状の日本定住集団社会、女社会の実態解明をすべきである。日本の社会学者自身も所詮は日本の定住民なのだから。
もっとも、日本の社会学者からは、アメリカのようなその時々の強者に惹かれ、なびき、従い、媚び、反逆しないのが日本定住集団社会、女社会の掟であり、自分たちはそれに従っているだけで、日本の定住民として当然の行為であるとされるだろう。
日本の社会学者からは、むしろ日本定住集団社会、女社会の解明が村の内部告発とみなされ、自分たちが国家村や学者村から村八分の対象になりかねないので日本の定住民的には不可だという反応が
返ってくるだろう。日本の定住民たちや女性たちが、日本定住集団社会、女社会のことを語りたがらないのは、語ると村の内部情報の漏洩、村の内部告発になってしまい、自分が村八分や仲間はずしの対象になってしまう危険性があるからだ。
その点、日本定住集団社会、女社会解明を妨げる真の敵は、。
・日本人の「欧米恐怖症」
・日本定住集団社会、女社会自身の、内部告発者に対する「村八分」「仲間はずし」の掟
であること。
こうした日本定住集団社会や女社会からの「村八分」「仲間はずし」の脅しに屈すること無く、日本定住集団社会、女社会の内部の真実を追求し続ける勇気を持つことが、日本の社会学者には求められると言える。
また、日本定住集団社会、女社会の国際的な位置付けのためには、東アジア(中国、韓国、北朝鮮)、東南アジア(ベトナム、フィリピン、インドネシア、タイ・・・)の他の稲作農耕民社会も共通に視野に入れることが必要であり、研究の国際協調が求められると言える。日本定住集団社会、女社会は、日本だけに特殊な性質の社会では無く、稲作農耕民社会の一類型として捉えるのが適当だと考えられるからである。(これはこれで、経済的に自分たちを追い越した同類の中国、韓国が嫌いで、東南アジアを未だ発展途上国と見下

し蔑視する日本社会の広範な層の偉そうな定住民たちから反発を招きそうであるが。）

強者に惹かれる日本定住集団社会の女性優位性質と「欧米『出羽守』」

一般的に、女性には、その時々の強者に惹かれ、なびき、従う性質がある。それは、女性の、自分が強者との間に子供を設けて、自分の遺伝子が、強者の遺伝子との統合によって環境に適応しやすく、将来的に生き延びやすくしたいという傾向の表れである。
日本定住集団社会は女社会なので、当然ながら女性の上記の性質を社会的に引き継いでいる。すなわち、その時々の強い勢力に惹かれ、なびき、一体化、神格化したがるのが、日本の定住民の性質である。これは国内向けにも、国外向けにも当てはまることである。
この女性優位心理を象徴するのが、「上位者」という概念である。「上位者」は、日本定住集団社会を支配している最上部の権力者に対して日本の定住民たちが付けている敬称である。「上位者」の実態は具体的には、天皇家と、その使用人の役人たちである。
日本の定住民たちは、日本国内向けには、「上位者」の天皇家やその使用人である高級役人を神格化して、「天皇陛下万歳！」と叫んでペコペコ頭を下げている。
この日本の定住民の、その時々の強者に惹かれる性質が、国外向けに発揮されているのが、欧化主義である。日本人が自国への欧米の社会制度や文化の導入に一生懸命で、欧米文物を強く愛好し、欧米『出羽守』になりたがるのは、国際的に強い勢力である欧米列強＝スーパー上位者に心理的に惹かれ、なびいて、一体化しようとする女性優位な欲求の現れなのである。これは、日本定住集団社会が女社会であることの一つの証拠である。
アメリカ主導で制定した日本国憲法の条文が神格化され、護憲派によって長年字句の変更を拒まれてきているのも、日本の定住民たちの「上位者、スーパー上位者の無謬性」の信仰、すなわち、上位者やスーパー上位者のすることに間違いはない、安心して従っていれば定住集団社会や自分たちの安寧が図られるという信念が強固だからだろう。

欧米諸国から「村八分」にされるのを恐れる

日本定住集団社会と「欧米『出羽守』」

稲作農耕民社会の一種である日本定住集団社会は女社会であり、集団一斉行動を好み、相互の一体感を何よりも重んじる。なので、村内に異質で浮いた人間がいると、寄ってたかっていじめたり、無視して仲間はずれ、村八分にする。日本の定住民たちは、村の外に放り出されると生きていけないので、村八分にならないように、仲間はずれにならないように、必死で村内の空気を読んで、他の定住民と和合、協調しようとする。
日本人は、この日本定住集団社会、女社会の感覚を、国際関係にそのまま何も考えずに持ち込んでしまう。つまり、欧米列強諸国間の関係を、日本定住集団社会と同様な関係である＝諸国の間で相互の一体感、同類感、同調感を重んじていると勝手に思い込むのであること。日本は欧米諸国から離れて一人東アジアに位置するが、戦後の高度経済成長で欧米諸国同様社会の近代化を達成して先進国となり、欧米諸国の仲間、身内になったと思っているのである。Ｇ７会議出席とか、その典型であること。
日本人は、その状態で、日本が、他の欧米列強諸国から異類と見なされ浮いてしまうと、欧米列強諸国の共同体から無視され、村八分、仲間はずれにされてしまい、国際的に孤立して生きていけなくなると思い込む。（日本は東アジアで中韓と仲が悪く孤立している。）こと。そして、欧米列強諸国に対して、日本は皆さんと同質、同類になります、一体化します、どうか村八分、仲間はずれにしないで下さいと必死になってアピールする。
そのアピールが、日本による、欧米列強諸国の社会制度や文化を、必死になって輸入し盲目的に導入する社会的行動として現れる。それがすなわち日本における欧米『出羽守』の行動である。欧米『出羽守』の日本の定住民たちは、欧米社会の真似と表面的な同一化、一体化を必死に行い、見かけは欧米諸国と変わらない社会的、文化的外観を身に付けることを達成し、これなら欧米諸国の身内に入れてもらえるだろうと考えるのである。日本の欧米『出羽守』の行動には、欧米諸国から仲間はずれ、村八分にされることへの恐怖心が無意識のうちに反映されているのである。
ところが、欧米諸国は、牧畜民社会、男社会なので、相互にバラバラ、異質なのが前提で、そもそも日本定住集団社会、女社会では当たり前な「身内、内輪の一体感」「仲間はずれ、村八分への恐怖感」の概念とか特に持っていないと考えられる。個人主義、自由主義の牧畜民は、所属集団による成員への締め付けが弱く、仲間はずれ、村八分の恐怖とは無縁の存在と言える。あと、欧米諸国は黄色

人種の日本と違い、白色人種がほとんどで、地理的にも日本の位置する東アジアとは全然関係の無い大西洋側の位置にいるのである。なので、日本が必死に片思いするほどには日本には関心も親近感も持っていないと考えられる。
日本の欧米『出羽守』の定住民たちの欧米諸国に対する、「欧米諸国の身内に入れて」「村八分にしないで」というひたむきな片思いは、その必死さと裏腹に、欧米諸国にはあまり伝わっておらず、実効性にも乏しく、近年は日本と同類の中国の台頭と相まって、欧米諸国にとっては日本は影の薄い、ますます遠い存在となっているのが実情では無いだろうか。
その点、日本は、欧米諸国の仲間に入れてもらおうとして欧米『出羽守』ばかりやっている現状をそろそろ見直した方が良いのではないかと考えられる。日本が国際的に孤立しないために、仲の悪い中韓との関係を修復したりとか、考えるべき時期に来ているのではないだろうか。

脱亜入欧の国策からの脱却と親亜親欧の国策への転換が必要。

日本の明治維新以来の国是が脱亜入欧である。東アジアの社会秩序から脱出して西欧北米の仲間入りをするというものであること。この考えは現在にいたるまで強く日本人に受け入れられており、日本社会の根幹を決める考え方になっている。
東アジアの中韓は西欧北米に比べて社会が弱く遅れており、西欧北米列強の植民地政策のターゲットになってしまうので、日本が国の独立を維持するには、従来の東アジアの文物を捨てて、西欧北米の文物を急速に導入する必要がある。またそうすることで日本は従来の中韓中心の東アジアの社会秩序を破壊して、新たに東アジア社会の盟主となり大東亜共栄圏の中心的存在として君臨できることが予想され、日本はそれを実現するために今まで必死に脱亜入欧してきた。
例えば、日本が西欧北米諸国の一員であることを明示するＧ７国際会議とかの存在を日本人は大きく自慢する。西欧北米が世界的に一番強い存在であり、日本もその仲間入りしていることを日本人は誇りに思っているのである。日本＝西側と捉える見方が日本では一般的である。
この脱亜入欧の考え方が現在に至るまで日本人を強く支配している。日本の社会学の分野では、西欧北米の社会理論の導入が今でも

最優先されている。社会の西欧北米化が急がれている。日本ムラ社会の存在、あるいは日本社会を支配する母や姑の存在と日本が女社会であることの明示は日本の西欧北米化に反するものであり、潜在的には強力に維持されつつも表面的、顕在的には意図的に隠蔽されており、その存在を明示的に指摘することは社会的なタブーとなっている。
脱亜入欧指向の日本の社会学、例えば日本のフェミニズムにとっては、社会支配者としての母や姑の存在の明示はタブーである。あるいは日本社会の支配者が母や姑だと主張するのが日本のフェミニズムにとってタブーだ。西欧北米は家父長制で父が強く、日本はそれに合わせたくて必死である。日本で母、姑が強いことになると、日本は家父長制ではないことになり、家父長制の西欧北米の仲間入りができなくなってしまうから、そのことを公に認めるわけにはいかない。脱亜入欧する＝西欧北米と同質化するためには日本社会の強者は父でなくてはならず、それに反して日本社会で母姑が強いことを認めると、家父長制の西欧北米とは異質になってしまい、脱亜入欧できなくなるから、近代日本の国策に反することになるのでタブーであり、日本人はそのことを必死で無視しようとする。
東アジア、東南アジアの女性の強さについての指摘も日本のフェミニズムにとってはタブーである。東アジア、東南アジアの女性が強いことを認めると、世界的に普遍的に女性が弱くて西欧北米のフェミニズムが世界に普遍的に適用され、日本は西欧北米フェミニズム導入の先進国として東アジア、東南アジアに影響力を持てるとする日本の国策に反するからタブーである。あるいは、日本が東アジア、東南アジアの稲作農耕民社会の一員であるという考え方につながり、日本が蔑視する東アジア、東南アジアと日本が同質で日本は脱亜入欧できないという結論に達し、脱亜入欧を推進する日本の国策に反するからタブーである。
日本が西欧北米とは異質なムラ社会であることの指摘も、ムラ社会が東アジア、東南アジアに広く分布するという指摘も、そのままでは日本の脱亜入欧が不可能、日本は欧州でなく東アジア、東南アジアの仲間であるという結論を導き出し、脱亜入欧を推進する日本の国策に反するからタブーである。日本＝ムラ社会を主張すると、日本の脱亜入欧の国策の足を引っ張ることになり、邪魔者、非国民扱いになること。
あるいは日本＝ムラ社会論＝稲作農耕民社会論は、日本が自分たちが格下とみなす東アジア、東南アジアと同格という結論を導き出し、高慢な日本人のプライドを傷つけるのでタブーである。
また、日本で男女の性差を主張すると、欧米で主流のネオリベラリズムの考え＝「性差別はいけないことだ」に反することになり、日

本の脱亜入欧の妨げになるので忌み嫌われ無視される。
西欧北米の牧畜民社会では農耕民的な社会主義、全体主義、集団主義、同調主義は受け入れられないとして避けられている。受け入れる自由が無い。なのでそれらの性質を持つ稲作農耕民の日本では、脱亜入欧するためにそれらの考えは表向きは否定の対象になっている。
日本の家族は厳父と慈母の組み合わせで捉えられることが多いが、それは欧米的な家父長制にいちばん見えやすいからだろう。日本社会の実態としては厳母がとても多いと想像されるがそのことは伏せられている。
女性が西欧北米流民主主義と相性が悪いのは、西欧北米における女性への待遇の悪さを見れば一目りょう然である。家計は夫に握られて妻は夫から小遣い貰って生活するしかないし、子育ては夫主導で妻は疎外されている。日本はそれをスタンダードとみなし、母姑優位の日本社会のあり方を表面的に必死で否定、無視しようとしてきた。日本社会では女性が家計の財布のひもを握り、子育てで主導権を握り、男性＝息子を操り人形に仕立てて社会を支配する最高権力者として君臨しているが、そのことは明示的に無視されてきている。脱亜入欧の考え方と相いれず都合が悪いからだ。
女性はアメリカ的自由主義、民主主義、個人主義＝男性優位牧畜民的行動様式の敵である。女性は日中韓露・東南アジアに広がる集団主義、統制主義、同調主義の源であり、農耕民的行動様式の源である。女性は脱亜入欧の考え方の阻害要因であり、そのため、日本は日本女性の社会的強さを必死で否定してきた。
日本が真に脱亜入欧するためには、日本社会の潜在的基盤となっているムラ社会的考えを崩し無くす必要がある。
年功序列は日本だけでなく東アジア、東南アジアの稲作農耕民社会に広く分布している。儒教圏外にも分布している。前例やしきたりの絶対視であり、未踏分野に踏み込むことをリスクが大きいとして嫌う女性優位な考え方だ。年功序列社会では女性が権力を握っている。日本が脱亜入欧するためには年功序列を否定しないとダメ。
日本男性が母や姑による支配に十分抵抗できるだけの力を持つことが日本社会での男性地位向上、家父長制化、ひいては脱亜入欧のために必須。
日本人は脱亜入欧したかったら父親の育児参加の時間をうんと増やさないとダメ。そして子育ての主導権を父親が握るようにしないとダメ。家計の財布の紐も父親が握らないとダメ。そうしないと日本社会はいつまで経っても西欧北米並みの家父長制にならない。
しかし、これらの考えは日本では心からは受け入れられていない。日本で代わりに受け入れられているのは和魂洋才という言葉であ

る。和魂洋才という言葉に賛成する日本人＝定住民である証拠であること。見かけは西欧北米の文物を導入しながら、根底では日本ムラ社会を維持し定住民でいようとする思想である。
日本人は心の底では定住民でいたいのであり、それは日本人が従来通り稲作農耕で食べていくためにも必要である。
昔も今も日本人が脱亜入欧にこだわるのは、日本が東アジアで一番の地位につきたいから。既存の東アジアの秩序だと一番の地位は人口の多い中華になってしまい、日本はそのままでは一番になれない。そこで日本は脱亜入欧で西欧北米の力を援用することで東アジアの盟主になろうとしてきた。
日本は明治以降明示的な形で中韓に負けたことがない、日本の方が中韓より格上だと日本人は思っていて、中韓が日本の残虐行為を批判すると、あたかも下位者（中韓）が上位者（日本）に楯突くと感じて、中韓に対して差別感情丸出しで激高するのだこと。
なぜ日本人は日米安保条約の存続に必死なのか？日本からアメリカが去ると、日本は自分より強くなった中韓に頭を下げざるを得なくなり、かってひどいことをした報いで陰惨な報復をされ続けることを何よりも怖れているからだろう。みな日本人が自分で蒔いた種。自分たちで何とかする必要がある。
東アジアで中韓の社会的発展が著しくなり、西欧北米や日本の世界的プレゼンスが低下している現状では、日本の従来の脱亜入欧は時代遅れの思想となりつつある。あらたに中国が世界の盟主となりつつあり、日本の脱亜入欧の考え方はその現実に適応できていない。日本は脱亜入欧の考え方が妥当かどうかをもう一度考え直す局面に来ている。
脱亜入欧の考えは、欧米諸国が一方的に強くて東アジアでそれに追随して強くなったのが日本一国だけだった明治～戦後しばらくまでは有効だったが、最近のように中韓が大きく躍進して勢力的に日本を追い越した現状ではもうあまり意味が無い。
日本は脱亜入欧の考え方とは別の考え方を導入する時期に来ているのではないか？。
東アジアを無視して西欧北米ばかりを見ようとする従来の行き方ではなく、親亜親欧といった感じで東アジアにも西欧北米にも両方に目配りして親しく付き合おうする行き方が新たに求められているのではないだろうか？。

日本での欧米流フェミニズムの隆盛と脱亜入欧

今の日本を支配する明治政府は、江戸時代の日本のあり方をことごとく否定して無化する政策を取っている。廃藩置県で江戸時代の地方諸藩の名前を徹底的に潰して、新しい県名に変えたとか一例だけど、この江戸時代の政策否定の伝統が今までずっと続いている感じ。
日本社会の現代の社会政策は、今なお江戸時代の否定の色が強い。
日本の明治政府＝今の日本政府は、江戸時代を否定する。江戸幕府は彼らの政敵だったからである。
明治政府は、江戸時代の外交方針を否定する。江戸時代の外交方針は、西洋、西欧を向いた洋学者と、東アジアの中韓を向いた漢学者、儒学者の二面追随、二面対応であった。
明治政府はこれを、西洋、西欧北米追随に一本化し、中韓追随を否定した。理由は、西欧列強による日本の植民地支配化の可能性があったからだ。その点、西欧北米は恐怖の対象であり、明治政府を突き動かしたのは、西欧北米が鎖国日本に与えた強烈な開国インパクトと西欧北米への強い恐怖心だった。
西欧北米追随への一本化と、他への追随を否定、無視する、この明治政府の政策は、西欧北米に勢力的に負けた中韓への否定、嫌悪、軽蔑に結びついた。
日本は、明治政府の方針により、脱亜入欧以外の外交パターンを否定、無視し、欧米一辺倒になった。
日本人は、日本が強い欧米諸国の仲間に入る、近づくのを歓迎する一方で、中韓に近づいたり、日本を中韓と同一視するのを嫌うようになった。日本は、中韓のことを、欧米に比べ、弱い、格下だ、劣っているとみなすようになった。
日本は、西欧北米にならって、自分たちの社会が家父長制化するのを熱望するようになった。日本は自分たちの社会が母権社会と見なされるのを、日本と中韓との同一視の一環と考え、嫌うようになった。そして、日本は、自分たちの社会の母権社会からの脱却を希望するようになった。
日本の明治政府の同盟相手は、戦前はイギリス、戦中はドイツとイタリア、戦後はアメリカという感じで、欧米諸国ばかりである。
日本は、欧米のフェミニズムを導入して、日本社会を家父長制社会と見なすのを好むようになった。日本における欧米フェミニズムの

興隆は、日本が脱亜入欧したこと、日本が欧米をまねて家父長制社会になったことを前提としている。その前提は、今の日本では疑うこと自体を社会的に拒否される。
一方、日本は、自分たちを中韓と同類とみなす考えを全て否定、無視するようになり、中韓叩きを盛んに行うようになった。日本人は、日本と中韓との同質性を前提とする日本＝母権社会論や日本や中韓における母性の強さを世界のフェミニズムの模範とする母性的フェミニズム論とかを全て否定、無視する。
日本人は、日本社会を江戸時代から変わらないと見なす、日本定住集団社会論とかを、江戸幕府が明治政府の政敵であり、江戸幕府の考え方は明治政府によって完全否定されたとして否定する。日本人は、江戸時代の社会と近現代日本社会が根本が同一で連続していると主張する日本定住集団社会論を全て否定、無視する。これは現代日本社会が戦前、戦中と変わらないという指摘が、日本社会が太平洋戦争での日本のアメリカへの敗戦とアメリカによる日本占領で根本から覆され、民主化されたとする主張と相容れないとして批判されるのと根が同じである。
日本人は、日本社会が欧米化したこと、脱亜入欧が進んだことをに賛成する考えのみを受容する。日本社会民主化論とかがそれである。あるいは、日本人は、日本社会で欧米流の自由主義、民主主義を進めることを前提とした考えのみを受容する。
女性優位な日本人にとって、明治政府は上位者で絶対服従の対象であり、批判することは許されない対象である。そのため、日本人にとっては、明治政府の国策に沿った考えをすることが第一で最優先であり、考えの科学的正しさは後回しになり、考慮されない。
日本人は上位者の国策に反対する言論は、科学的なものも含めて全て無視する。日本人に科学は通用しない。日本政府の脱亜入欧の国策に反する言論は、科学的根拠があっても否定、無視の対象になる。
日本人が社会の家父長制化を強く望んだにも関わらず、日本社会には、女性優位な母権的日本定住集団社会が強烈に残存し、存続している。つまり日本人は脱亜入欧に失敗し続けているのだ。
その理由は、日本の自然の気候風土がモンスーン的で稲作農耕の水耕に適しており、日本人は、欧米的家父長制の前提となる牧草地の放牧に基づく牧畜には向いていないからだ。日本人は、今のところに住み続ける限り、牧畜では食べていけず、食べていくには稲作農耕をやるしかないのだ。そして稲作農耕は社会の女性優位化、母権化をもたらし、それは結局、日本と中韓との社会の同質化につながる。
日本には本格的な脱亜入欧や社会の家父長制化は、日本の置かれた

気候風土的に不可能であり、無理である。日本人は稲作農耕民でいるしかない。日本人は女性優位で、中韓の同類でい続けるしかない。
日本の脱亜入欧的フェミニズムは、日本社会の家父長制化アピールのためのツールである。しかし、その日本社会の家父長制化はうまく行っていない。そのため、日本のフェミニストたちは、日本社会の女性優位な側面をひたすら攻撃する。日本のフェミニストたちは、旧来日本女性優位社会の象徴である「母」の存在をことさらに無視したり、姑を名誉男性とみなして攻撃する。あるいはオタク男性向けのアニメ、コミック、ゲームの女性ばかりが出てくる女性優位な表現を攻撃する。
日本社会は現在もなお、ずっと昔の明治政府の方針にしばられたままであり、明治政府の国策に大きく影響され続けている。太平洋戦争後も明治政府の政体が解体されずに温存されているためである。見かけはスーパー上位者のアメリカによって大きく変ったかに見えるが、アメリカは旧来の明治政府の上に、スーパー上位者として乗っかっただけで、上位者の明治政府は、その下でそのまま生きながらえている。
日本は、黒船来航に代表される欧米来襲の心理的インパクトを今も強く受け続けており、これが日本社会で脱亜入欧が強い原因となっている。
明治政府が脱亜入欧を強力に推進し、、日本人もその国策に忠実に従ってきた。これが日本における欧米フェミニズム受容が隆盛する背景になっている。

脱亜入欧一辺倒からの脱却が必要だ。

明治以来の日本の脱亜入欧の国策は、中韓が強くなって日本を優越してしまった以上、時代遅れで有害な国策だ。江戸時代みたいに、欧米を追うチームと中韓（～東南アジア）を追うチームと分けて二方面作戦を取るべきだこと。
中韓の強大化で、日本の従来の脱亜入欧一辺倒の政策が難しくなった。これは、日本による、中韓への無視や攻撃、あるいは欧米へのすり寄りを一層強めることにつながっている。それは日本が他に進むべき道を見つけられずにいるからだ。

日本が欧米、東アジアの二面対応するようになるためには、欧米一辺倒の政策を続ける明治政府を倒すしかない。明治政府を倒さない限り、日本は中韓に負け続ける。
日本で脱亜入欧を推進してきた明治政府の存在意義が疑われるようになるのと同時に、従来の欧米『出羽守』フェミニズムも存在意義が大きく失われるはずだ。代わりに中韓、東南アジアとの女性優位な同質性を重んじる東アジア～東南アジア『出羽守』フェミニズムが勢力を伸ばすだろう。
日本は明治政府になってから脱亜入欧とその一環としての社会の女性優位性の一掃と家父長制化を目指してきたが、女性優位な中韓が強大化したことで、日本社会の家父長制化を目指す必要性は大幅に減少した。日本社会は女性優位なままでいいのではないかという意見が今後増えてくるだろう。

日本人が定住集団社会論、女社会論を無視する理由。

なぜ日本人は日本＝定住集団社会論、女社会論を無視するか？それは、日本定住集団社会論、女社会論の主張が、日本が脱亜入欧に失敗していることの具体的な指摘に当たるため、心情的に許容できないためである。
「現代日本は、定住集団社会のままである」という主張は、日本における定住集団社会の存在を指摘、肯定することにより、日本が脱亜入欧に失敗していることの指摘であり、それはすなわち明治政府＝上位者への批判に当たり都合が悪いのである。上位者に絶対服従の女性優位な日本人には、日本における定住集団社会の存続の表立っての指摘は、相容れないのである。
かといって、誰かが日本定住集団社会それ自体を良くないものとして批判、否定すると、日本人にとっては、自分たちの長年続けてきた稲作農耕民としてのアイデンティティを根本的に否定されるので、心情的に受け入れられず都合が悪いのである。
つまり、「日本＝定住集団社会」論は、その指摘自体が、肯定の場合も否定の場合も、日本人にとってはどちらも都合が悪いのであり、日本人は、どちらの指摘もひたすら無視することになる。
これは、「日本＝女社会」論についても同様である。日本が今なお

女社会であり続けていることを指摘すると、日本が脱亜入欧、すなわち家父長制化の国策に失敗していることを認めることにことにつながり、日本人には到底容認できない。そうかといって、日本が女社会であることを否定するのは、自分たちが精神的に依存する偉大な「お母さん」の否定につながり、日本人は内心としては耐えられない。なので、日本人は、日本社会が女社会であることを指摘されても、反応せずひたすら無視し続けるのである。

日本の社会学はインチキだ！ - 脱亜入欧という病 - 。

日本の社会学は、明治政府以来の国策である脱亜入欧のイデオロギーによって、日本社会の知覚への意図的な歪みを生じさせている。それは、欧米崇拝と東アジア～東南アジアの軽視、蔑視、および日本定住集団社会、女社会の人為的隠蔽である。脱亜入欧の国策により意図的な歪みを生じさせている点、日本の社会学はインチキである。
日本の社会学は、脱亜入欧の国策を担う御用学者による御用学問の立場から抜け出せていない。
世界社会の列強である西欧近代の持ち上げ、崇拝に終始しており、西欧近代との同化、日本の西欧社会との同一視をしきりに行う一方で、中韓や東南アジアの蔑視、無視を平気で続けていること。
また、西欧のような牧畜民スタイルの生活に似合わない農耕民的な性格を持つ日本定住集団社会やその基盤となる女社会の存在を必死で隠蔽し続けていること。それは日本の脱亜入欧の国策にとって表向きは邪魔な存在だからだ。
日本の社会学の教科書や学術書は、西欧近代～現代の社会理論とその日本社会への当てはめばかりであり、西欧理論を教条的、啓蒙的に上から取り入れるスタイルとなっている。
日本の社会学の教科書や学術書を書いている人は、大学村、学者定住集団の定住民たちであり、脱亜入欧的な内容を執筆することで、定住民として認められるようになっている。
日本の社会学をインチキでなくすには、日本の社会学者が、西欧近代～現代を理想郷とみなして崇拝するのをいち早く止めて、日本と中韓、東アジアや東南アジアと日本を対等視すると共に、日本社会

の本体、本質である日本定住集団社会とその基盤である女社会の明示的取り上げをするようになることが必要である。
日本の社会学は、東アジア、東南アジア社会の発展や、東アジア、東南アジア諸国が日本を追い越したか追い越しつつあることに対応する社会理論を生み出せていない。
脱亜入欧国策に従い続ける限り、日本の社会学は、日本社会の真実を見通すことが出来ず、インチキなままである。
日本の社会学者は、何事も自分たちが理想とする西欧近代~現代人の視点で分析しようとする。すなわちユニバーサル、グローバルな視点で社会を分析しようとすること。それは西欧社会学者の視点に偏っており、歪んでいる。彼らは、格好良くて先進的な最新の西欧北米しぐさを必死で真似ようとする。
日本の男性学、女性学とか、欧米風のレディーファーストを理想とする、欧米で社会的弱者であるキャリア女性の職場社会進出の視点ばかりで社会分析をしていること。
日本の社会学者は、自分たちがふだん生活している定住集団社会の視点では決して社会分析しない。しても西欧社会集団内における日本特殊論を振り回すだけである。日本が本来所属しているはずの一般的な農耕民社会である中韓や東南アジアの視点を決して取らない。こうした視点は暗闇扱いされ、社会分析の対象としてブランク、盲点となっている。
日本の社会学者は、今後は、この農耕民視点をもっと取るべきである。いわば脱亜入欧から親亜親欧への転換を図るべきであること。
かつて日本の社会心理学で東アジア、東南アジア的集団主義が取り上げられたことがあったが、それも西欧北米の社会心理学者のH.Triandisの学説が有名になったからであり、もし有名にならなかったら日本の学者は取り扱わなかっただろう。
従来の日本の世界観は、島国日本を中心にして、その周囲に上位者である西欧北米諸国と、下位者である中韓~東南アジア諸国、その他のロシア、ユダヤ等の国々が周囲に順不同で並んでいる感じである。日本vs海外の諸外国、先進国~後進国の位置づけであり、世界社会の把握に劣っていること。
こうした世界観は、移動生活の国と定住生活の国、あるいは、遊牧系の国(ユダヤ、アラブ、トルコ、モンゴル・・・)、牧畜系の国(アメリカ、イギリス、フランス、ドイツ・・・)、農耕系の国(中国、韓国、日本、ベトナム・・・)に再編成して捉えるべきであること。これこそがあるべき世界観であり、各国の位置づけである。
西欧近代は確かに優秀だったし、今後もそうであり、見習う必要があるのは確かだが、日本をどんどん追い越している東アジア、東南

アジア社会のことを説明できる世界視点の社会理論が、日本の社会学では新たに必要である。日本の国策の根本的転換が必要である。
脱亜入欧思想への洗脳のための全体主義的統制の只中にいるのが日本人である。洗脳は子供の頃から始まっている。脱亜入欧を全体主義的、集団主義的、同調主義的に実現しようとしているのが日本人である。
日本社会では、主義主張の脱亜入欧度が高いほど社会的地位が高くなる、向上する傾向があり、脱亜入欧度が高いほど、周囲に対してマウントが取りやすい。
例えば、フェミニズムでは次のようになっている。西欧北米では女性の社会的地位が低く、女性の地位向上を主張し、自力で稼げるキャリア女がより優位である。これを日本国内で、欧米における主義主張の原型を保ったまま、そのまま主張すれば社会的優位者になれること。
日本で欧米文化を身に付ければ付けるほど、脱亜入欧度の向上によって社会的上位者になれること。
あるいは、放送メディアとかでは、映像や写真に欧米人の姿を紹介すればするほど社会的地位が上がる。
西欧北米社会における主張とその受容の裏付けがない限り、日本社会で同じことを主張しても何も相手にされない。その主義主張が西欧北米社会で主張されているということを証拠づけるエビデンスが、主義主張が日本で受け入れられるために必要なのである。
日本で主義主張を通すには、主義主張の内容自体は重要ではなく（流行で廃れることもあるため。）、その主義主張が欧米でメジャーないし先端的に言われているという証拠を示すことが重要である。日本では、その時々の欧米での主義主張の流行を先陣を切って紹介することが重要である。
脱亜入欧は欧米への媚び、甘えであり、欧米への素朴な信頼心の現れである。欧米理論の即時的反射的機械的導入、コピーがその結果である。欧米理論以外の日本独自学説や東アジア、東南アジア学説は無視される。あるいは、日本では、脱亜入欧の国策に合わないか反対する仮説、学説は無視されて、消される。
西欧の社会理論を世界的流行ということでそのまま導入すれば、牧畜民的思考と農耕民的思考の矛盾に突き当たること。牧畜民的な個人主義、自由主義と農耕民的な集団主義、反自由主義とは互いに相いれないのである。
社会問題には、人類共通の社会問題と、農耕民固有の社会問題、遊牧民～牧畜民固有の社会問題が存在する。
日本が、東アジア、東南アジア社会と基本的なところが同質で能力面で大差ないことから目を背けてきたことが日本社会の大きな敗因

の一つである。東アジア、東南アジアが日本と同じことをやってきて、日本は追いつかれ、追い越されたのである。
稲作農耕民社会は互いに社会のあり方や個々人の能力のあり方が基本的に似ている。すなわち和合、同調の重視、製品の作りの微調整の能力と最終完成度が高く国際競争力がとても強い点であり、まさしく女性優位である。
いったん追いつかれても独創性があれば引き離せるが、独創性の無いコピー文化の社会同士だと引き離せず抜かれてしまう。これが日本が中韓、東南アジアに負けた～負けつつある根本理由である。対処法は、再び真似て追い抜き返すしかない。
女社会の農耕民は、男社会の遊牧民、牧畜民に、リスクが大きいチャレンジを一方的にさせて、その成果をすぐにコピーして横取りし、改良を加えて完成品にさせ暴利をむさぼる。これが牧畜民社会である西欧北米の、農耕民社会の日本や中韓への不満である。
マクロに強くミクロに弱いのが男性優位遊牧民、牧畜民社会である。
ミクロに強くマクロに弱いのが女性優位農耕民社会である。
欧米文化のコピー導入は日本だけの専売特許ではなく、東アジア～東南アジア社会では皆やっている。西欧、ユダヤ産の共産主義理論の流行とかその典型であること。コピーの初動が日本だけ少し早かっただけで本質的差が無いので日本は東アジア～東南アジア社会に追いつかれ、追い越されたのである。
現代日本は、以下の傾向がみられる。
・懐古趣味（昔の昭和時代とかの勢いの良かった頃の日本の姿に浸ろうとすること。）
・脱亜入欧と、東アジア、東南アジアの無視
・排外と韓国、中国叩き
・対西欧北米へのなつき、甘え、追従や盲従
・その他の国への無関心
・日本上げ、中韓～東南アジア下げのマウント取り
・内向き、前時代への逆行
すなわち、東アジア、東南アジア諸国の躍進の事実を素直に受け取ることができず、目を背けようとする指向が見えるのである。
現在の日本社会は、中韓～東南アジアに社会的に負けた～負けつつあることを自覚できていないか、自覚していても先の太平洋戦争における大本営発表のように、日本の東アジア～東南アジアにおける根拠の無い優位性をひたすら主張するだけになっている。日本の東アジア～東南アジア諸国に対する経済的敗戦、陥落は、もう目の前に迫っている。それが明確になった時は円通貨の暴落とかが起きるだろう。それにより、日本は脱亜入欧の国策を放棄せざるを得なく

なるわけだが、それと同時に図らずも日本経済は国際的競争力を再び取り戻すと考えられる。
脱亜入欧に囚われない新たな社会学が日本に必要である。日本における伝統的な脱亜入欧の国策は東アジア、東南アジア諸国の台頭により転換点を迎えている。今後の日本では、他の東アジア、東南アジアのような親亜親欧が必要である。

日本社会における表面的規範と実際的規範と脱亜入欧

日本人は、女性優位な社会規範はしっかり生かしている。というか実際には日本社会では女性優位で動かないと村八分に会って社会から追い出されてしまう。
日本人は、表面的規範としての家父長制的規範と実際的規範の女性優位、母性的規範とを無意識のうちに両方使い分けている。日本人の表面的主張は家父長制だが実際の行動は女性優位である。
大日本帝国憲法と日本国憲法は、両方とも日本社会における脱亜入欧のための表面的規範をなしている点で本質は大して変わらない、大きな違いはない。どちらも西欧牧畜民社会における実際的規範の日本向けの焼き直しである。日本人はこれらの憲法を表面的には崇めているが、実際は無視して違うことをやっている。それが女性優位な定住民的な行動である。
日本人は、二重規範、ダブルスタンダードの使い分けで社会的主張～生活している。脱亜入欧の西欧流フェミニズムは表面的規範である。
こうした生き方は和魂洋才と関係がある。和魂洋才は、日本古来の精神、考え方を保ちつつ、西洋の知識、技術を導入、活用し、両者を調和させる生き方である。
男性流（見かけの規範）と女性流（実際の規範）の正反対の規範、行動様式を同時に所持していることの自己矛盾による精神の分裂、狂いがなぜか起きない。その仕組みは、衣服の着せ替え、例えば大きく異なる色や模様同士の上着の着替えと同じである。人間の心理には、表から順に、表層、間接化層（表層と深層が直接接触したり

くっつかないようにする空気のような層。）、深層（基層）の3つの層がある。
日本人は、西洋的規範について、表面的には賛成しているが心の奥底では反対している。脱亜入欧は表層心理に止まり、深層、基層心理においては女性優位な日本ムラ社会の精神がそのまま保持されている。

人間の衣類は、上着を着替える時、下着も一緒にくっついてしまうと面倒なので、そうならないように工夫されている。人間の心理も同様になっている。人間の心理では、すなわち平常から表層が深層とは離れているようになっていて、うわべの表層を取り替える時、深層はその影響を受けず、元のままの内容を保つのである。それを可能にするのが間接化層の働きである。人間の脳に間接化層に対応する生理的仕組みが存在するはずである。
日本では西欧列強の襲来以前は、中国を模範としてその真似をする和魂漢才であった。和魂漢才が和魂洋才に変わったのである。変わらない和魂の部分が深層、基層心理であり、衣服で言えば下着である。漢才から洋才へと取り換えが起きた部分が表層心理であり、衣服で言えば上着である。こと。そして深層、基層の和魂の部分を傷つけずに表層を漢才から洋才へとはく離、取り換え可能にしたのが間接化層の心理であり、衣服で言えば、はく離素材の上着裏面と下着表面での使用である。
こうした流行に伴う表層思想の次から次への着せ替えが得意なのは女性であり、苦手なのが男性である。つまり、心理的に間接化層が発達しているのが女性であり、それに劣るのが男性だと言える。
あるいは着せ替えの代わりに、色、模様付きの表層を水できれいに洗い流して白色無地の深層、基層に戻せるようになっているとも言える。この場合、表層を水等の溶液で溶かし深層、基層を無傷、無変質のまま洗い流せる機能を深層、基層の表面に付与するのが間接化層である。
あるいは間接化層の実体は、ローションで表すことができる。互いに重ねられた傷つきやすい面をそれぞれ持つ表層と深層、基層の間を円滑化して互いに傷つかないようにする液体のローションの持つ機能こそが間接化層の機能である。
（初出2019年9月）

日本のフェミニズムはインチキだ！。

日本のフェミニズムは、要約すると、。
・日本社会の西欧北米化のための国策学問であり、そこにはおのずと内容面で限界がある。（人為的な社会操作のための理論であり、自然な理論でないこと。）
・スーパー上位者である西欧北米社会への忖度のツールとして成り立っていること。
・理論の主要な担い手である日本女性に強烈な被害者意識があり、自分たち女性を社会的弱者とみなして一歩も譲らず、「攻撃は最大の防御なり」とみなしている。
・脱亜入欧最優先と、それに都合の悪い真実（日本社会における母の強さ）の隠蔽を行っていること。
・証拠積み上げの科学より、日本女性が言いたい放題の女性独裁社会を作る運動を優先している。

日本フェミニズムは、さらに言えば、。
・日本国民を脱亜入欧へと洗脳する国策ツールの一環であること。
・強い国々（西欧北米）に自分を合わせて表面的であるにせよ変化しようとする動きであること。
・西欧列強の家父長制社会、国家に女性優位な日本を合わせるための道具理論であること。
・社会的に強い日本女性を弱くみせるための隠蔽工作の道具であること。

日本のフェミニストは、次のことを行う。
・日本社会を家父長制らしくみせようとすること。
・日本男性を強く、日本女性を弱くみせようとすること。
・日本社会を「男装の麗人」社会にしようとすること。日本社会の見かけを男性優位にするとともに、日本社会の女性優位な実態を隠すこと。
・男尊女卑を強調すること。
・日本女性の強い側面を全部無視し、弱そうな側面をことさらに取り出して強調すること。日本女性が弱く差別されていて解放が必要であることを強調する。
日本女性の強い側面は、以下の内容である。
＞母や姑の側面（子供を出産した後）
＞日本の国民性、社会風土が女性優位であること。（情緒的、非合理的、根性論や精神論の振り回し、相互一体感や同調行動の強制）
＞一家の財産管理と出納の許認可、夫や子供への小遣い制の権限所有
＞自分の子供の所有物化、私物化と一生支配、親権の独占、子供の

教育の主導権を把握
であること。これらをひたすら無視すること。
一方、日本女性の一見弱い側面は、以下の内容である。
＞娘や嫁の側面（子供を出産する前）
＞財産所有権がなかったこと。（自分の支配下にある息子に委託）
＞選挙権がなかったこと。（自分の支配下にある息子に委託）
＞企業等における女性管理職の少なさ（専業主婦として管理職男性のマネージャーになることで間接的に社会を支配すること。）
であること。これらをひたすら強調すること。
・従来の日本男は外回り＝外働き、日本女は内回り＝家庭で、外回りの方が価値があると、西欧女性を引き合いに出して洗脳する。日本女性の社会進出＝外働きを理想とみなし、家庭に留まっているのをＮＧとする洗脳を行うこと。（西欧女性は、実際は家庭の主導権を男性に握られて居場所が無くて仕方なく外回りを選択せざるを得ない。）

日本のフェミニズムは、以下のことを行う。
・日本が女性優位な稲作農耕民社会であることを無視する、隠蔽する。（指摘しても回答、反応しない。）
・東アジア、東南アジア（稲作農耕民）を下に見て蔑視し，西欧（牧畜民）を上に見て崇める、媚びる政策の一環であること。下位者を見下し、叩き、上位者になびく女性優位な態度、考え方であること。
・日本を西欧北米のような牧畜民らしくみせようとする、表面的に牧畜民と同化させること。（肉食礼賛とか。）
・日本ムラ社会を隠蔽するが、決してなくそうとはしないで温存する。自分たちの実体が定住民だから。

日本のフェミニズムは、以下のことを行う。
・脱亜入欧型フェミニズム（西欧女性を標準、理想とするフェミニズム）を国策としてもっぱら推進すること。
・在亜型フェミニズム（女性、母性の強い日本ムラ社会＝東アジア社会の一環に合ったフェミニズム）は脱亜入欧に都合が悪いので、指摘があっても無視して消去する。
脱亜入欧は上位者の国策なので標準日本人は反対できない。
日本人は、男は強い、女は弱いと公教育で繰り返し西欧家父長制の洗脳を受け、それが正解だと思い込んでいる。日本人は日本社会が家父長制社会だと本気で信じており、それに疑問を投げかけると怒り出したり、無反応を決め込む。
マルクス主義やそれに基づく社会革命による共産党政権の樹立も入

欧政策の一種である。東アジア、東南アジアも実はある程度日本と同じ入欧政策をやっている。西欧植民地化から抜け出す方策の一環であること。
日本のフェミニズムやジェンダー論は脱亜入欧の方向へと意図的、人為的に歪められた内容となっており、内容は恣意的であり、科学的ではない。その点インチキであること。
非科学的な根性論を振り回す標準日本人は女性優位。日本の体育会系的思考は女性優位。非合理性、情緒性のかたまりだこと。こうした非科学性、感情優位性が日本のフェミニズムにもしっかり受け継がれている。
女性の自己愛、保身、責任転嫁、被害者意識の強さは、男性と比べて遺伝的性差ありで、これがフェミニズムにも強力に反映されており、「女性＝弱い被害者」という誤った公式を生み出す原因になっている。
（初出2019年9月）

日本のフェミニズムが無視する日本女性の強さ。

日本女の自分の家計管理権力独占（夫の小遣い制）や子供の教育権の独占、家族人員の管理とメンテナンス権独占こそが日本母に代表される日本社会の最終権力者を生み出すもとになり日本社会全体で女性や母性を優遇しているのに、日本のフェミニストたちがそれを無視してキャリア女の話ばかりする理由は何でなのか？。
それを言うなら就職した正社員に対する24時間の滅私奉公を要求する日本企業の姿勢を正すのが本来であろう。男女両方24時間滅私奉公だと結婚、家庭生活は成り立たない。どちらかが長時間奴隷労働をしてもう一方はそのメンテナンス管理を行う羽目になる。これが日本の性別分業の源だと思うので。
あと、日本の男女の賃金格差は、女性が出産、育児で退職し履歴にブランクができることにより、日本の企業の正社員への応募者に対する経歴履歴ブランク差別として生じている。この差別は何も女性に限ったことではなく、男性でも就職氷河期世代で大量に生まれていて、根は同じで、男女差別は副産物である。
また、母親や妻になる日本女性は少数派であると日本のフェミニストは主張するがそれは本当なのか？専業主婦にあこがれる若い日本女性が多いことはどうなるのだろうか？人間が未来の子孫を残すには結婚して子供を夫婦共同で作るしかないのであるが、男性も女性

も結婚せず自分の子孫を作らない社会はどのような結果をもたらすか分かっているのだろうか？。
そもそも日本の会社所有者経営者への滅私奉公型の労働環境が正社員の夫婦同時に強制されていて夫婦双方が家事、育児をする暇がなくなり結婚生活の破綻につながるとか、日本のフェミニストたちはきちんと読めておらず、夫婦とも勤務先の会社ムラ、職場村に心理的に24時間隷従しつづけることを前提とした家事や育児の制度を作ってしまっている。そういう点で、日本のフェミニストたちは典型的な定住民だ。
日本社会で女性の学歴や労働キャリアが高くなくても確固とした主婦の地位につけるのは事実上の女性優遇である。日本女性は学歴面や労働キャリア面で特にこれといった努力をしなくても、お気軽で家庭の財布の紐を握って家計の決定権を掌握ができて経済面での権力者になれたり、自分の子供の教育権や親権を独占できる社会教育面での権力者に簡単になれる。日本男はこうした権力者になりにくいのが問題だし、そもそも日本男が見かけ上社会の高い地位につこうと努力するのも男性の母親の自己実現の道具にすぎなかったりする。日本社会で一番強いのは母親一般であり、そのことを無視する日本のフェミニズムは社会理論としては片手落ちの存在だ。
母子癒着の終生持続と母による子供の永続的支配が日本の母が日本社会で最高権力者であることの根拠である。
日本の父は母子の強力なユニオンに割って入るだけの実力が無く、自身の経済的甲斐性を必死に宣伝するにとどまっている。
日本の母を批判する、叩くことが日本社会のタブーになっている。
（初出2019年9月）

社会と家庭と日本のフェミニズム

日本のフェミニストは社会と家庭は分離していると真剣に信じている。
しかし、社会における家庭の影響を否定することは、社会における血縁ベースの子育ての影響を否定することと同じであり、間違っていると思う。
つまり空母なしに戦闘機が飛行できると思っているようなもので馬鹿馬鹿しい限りだ。
日本のフェミニストは「女性全員が結婚して子供をもつわけではないのに、どうして母親や妻になる女性の話ばかりするのか」という定型的反論を持ち出すが、男女の結婚難に基づく日本社会の少子化

という社会政策の失敗を正当化、隠蔽する内容になっており問題だ。
こうした日本のフェミニストの言説は、生物として結婚して後世に子孫を残す人間としての男性、女性の本性を否定する内容になっており、それも問題だ。まるで遺伝的子孫を残すのは悪だと主張するようなものだからだ。その主張は人間の生物としての本性に反している。
あるいは、日本女性が結婚して母親になると社会的な立場がむちゃくちゃ強くなるという、日本の脱亜入欧を難しくする社会現象を臭い物に蓋をする形で強制的に隠そうとするもので、これも問題だ。
あるいは、結婚しようとしない女性という社会的少数派のことばかり取り上げて、結婚して生まれた自分の子供を一生支配するという多数派の日本女性のことをひたすら無視するのは、少数派尊重という美辞麗句に媚びて日本社会の大局を見失っている証拠だ。
日本のフェミニストは、欧米流のキャリア女をやたらと賛美し持ち上げるが、そもそもそうした欧米キャリア女は家庭からも子供からも疎外された欧米女性の置かれた厳しい社会的立場のことをちっとも考慮していない。キャリア女賛美は日本社会の脱亜入欧政策の道具に過ぎない。
伝統的な日本女性の社会的支配戦略は、自分の子供たちへの支配を通じて日本社会を支配するというものである。これを肯定すると日本社会の脱亜入欧が難しくなるので、脱亜入欧のリーダーを自認する日本のフェミニストたちは必死で無いことにしようとする。
日本の伝統的性的分業は、。
・空母＝家庭＝戦闘機の帰還場所、メンテナンスと管理の場所＝女性
・戦闘機＝家庭から社会、学校に出撃する男性、子供たち
であること。
なぜ、空母の存在の社会的支配力の大きさを指摘すると日本のフェミニストは無視したり、女性差別だと怒り出すのか理解不能だ。
日本の家庭空母が社会的に大きいことは女権拡張に結びつき、フェミニズム的には良いことなのと違うのか？女性差別でなくて戦闘機の矮小化という男性差別に結びついていると思われるのにそれを指摘しない日本のマスキュリズムも問題だ。
日本のマスキュリズムも脱亜入欧指向なので、東アジアや東南アジア社会の「女性＝巨大家庭空母の支配者」という図式をあからさまに無視し、社会的に矮小な欧米的キャリア女的女性のことばかり取り上げようとする。
日本のフェミニズムにおいてもマスキュリズムにおいても日本社会の把握のあり方が脱亜入欧流に大きく歪曲されている。日本の社会

学が科学になり切れない大きな原因だ。
西欧北米フェミニズムのコピペしかできない日本のフェミニストたちは早く日本の大学から出て行くべきだ。
ていうか、日本のフェミニストたちは、欧米フェミニズム学説にひたすらペコペコして東アジアや東南アジアの女性の強さを無視し続けるのを今すぐ止めるべきだ。
現状の日本のフェミニストたちと日本のマスコミは、欧米にひたすらすり寄って、東アジアや東南アジアのことを無視し続ける点でそっくりだ。
日本で伝統的な稲作農耕を続ける限り、日本社会の支配者の役割は女性が担い続けるだろう。
天皇家の人たちが毎年の田植えと稲刈りの儀式を行う限り、日本は女性優位な稲作農耕社会であり続けるだろう。
無能な男性に代わり自ら稼ぐために戦闘機のように素早く小回りをもって動き回れる機動性に富んだ、ふだんはコンパクトに存在を折りたためるキャリア持ちの巨大家庭空母 = 社会的強者としての役割が東アジア、東南アジアの女性には求められて実現してきたし、今後もそうだろう。
日本女性もこれを見習うべきだ。弱者の欧米キャリア女の真似ばかりしていてはダメだ。
（初出2019年9月）

日本社会の腐敗と女性

日本社会は腐った日本女たちが支配する。
安倍官邸も腐った日本母たちの産物である。
日本のような女性優位な農耕民社会は放っておくとコネクションの癒着で腐敗して衰退する。発展させるには定期的に現状の社会を破壊して更地にする必要がある。
破壊方法としては人為的な革命や戦争、自然の力による地震とかがある。
日本社会の定期的破壊と再生には、大きな地震が有効である。
女社会の日本は前例追認で現状がそのまま改められることなく続きやすい。また姑的、お局的なリーダー、権力者が権力を手放さず、自身の責任転嫁をしながら好き放題やり続けるので、自身ではなかなか自体が好転しにくい問題がある。
その点、日本の安倍首相の独裁的な治世は中国の西太后と似ている。外的勢力に田んぼや畑をすき返してもらう必要があり、それが

日本社会では先の太平洋戦争によるアメリカによる日本占領だったと考えられる。
（初出2019年9月）

日本のフェミニズムと、モンスター化した日本の女性たち

女性が弱い社会である移動遊牧民、牧畜民社会（西欧、ユダヤ・・・）における女権拡張のための社会理論を、女性が強い社会である定住農耕民社会（日本）に導入したら、日本女性がモンスター化して、暴力的な言論をほしいままにして、強力過ぎて暴走して、誰も手をつけられない存在になってしまった。
（初出2019年10月）

世界のフェミニズムはインチキだ！。

女性は被害者意識、弱者意識の塊であり、自分の加害者性、強者性を決して認めようとしない。日本を含む東アジア、東南アジアにおける強い女性の存在を認めようとしないこと。
彼女らは、遺伝的性差を認めない非科学的、非合理的存在である。
彼女らは、自分たちに対する反論を無視したり、無反応を決め込んで、事態の鎮静化を図ろうと必死である。
（初出2019年10月）

日本のフェミニズムとお勉強会

日本フェミニズムは西欧北米的家父長制の真似事、お勉強会である。表面的コピーペーストは上手くやっているが、しょせんは真似事なので日本社会の本質的部分は変えることができない。どうしても地の日本定住集団社会＝母権社会が出てきてしまう。
（初出2019年10月）

御用学問としての日本のフェミニズム

日本のフェミニストは、女性優位な日本社会を家父長制社会に見せる演出家である。
日本政府は、母権がのさばる日本定住集団社会を表向き家父長制社会に見せかけて、自分たちの脱亜入欧に向けて欧米諸国を懐柔する作戦を国ぐるみで取っている。
日本のフェミニストたちはこの作戦の実行部隊である。伝統日本定住集団社会の母権的、女権的要素を全て否定、抹殺する言質を取ったうえで、日本が家父長制社会であり、その演出された家父長制の枠内で日本女性がどんなに苦しんでいるかを舞台演出の演劇形式で必死にアピールする。
東アジア社会秩序において中韓が優位に立って日本が劣位で孤立していることが、日本を脱亜入欧に駆り立てる。脱亜入欧実現の条件として、女性優位な日本が家父長制社会に見かけだけでも良いからなることが必要で、それが日本の「欧米『出羽守』」フェミニストたちが社会的にのさばる原因となっている。
日本女は、日本社会を今まで通り自分たちが強者として思うままに支配したいが、その責任は取りたくない。その戦略として取られているのが「女は弱者だ、被害者だ！」と、欧米フェミニズムに合わせてひたすら大音響で叫びまくることだ。弱者の日本男にはなすすべがない。
この戦略は、日本の脱亜入欧のために、日本社会を見かけ上家父長制社会に見せかけ、稲作農耕民の日本社会が根本的に持つ母権、女権社会の本性を隠ぺいするために極めて効果的だ。
日本のフェミニストは、表面的には左派の面をしているけれど、実際にやっていることは、日本社会支配層の脱亜入欧国策を忠実にトレースして、日本社会があたかも家父長制社会であるかのように見える状況を実現しようとしている点、政権体制寄りのバリバリの右派であると捉えることができる。
日本のフェミニズムは、少なくとも体制派の御用学問であることは確かだ。女性には、自己保身のため、既存の上位者。（日本国）、あるいはスーパー上位者（欧米）の体制に順応して生きようとする本性がある。今の日本のフェミニズムは、脱亜入欧国策を推し進める上位者の日本政府と、女性を弱者と説くスーパー上位者の欧米のフェミニズムの両方に同時に順応している。その結果、伝統日本社会、あるいは東アジア～東南アジア社会での女性、母性の強さを故意に無視していること。これは社会的事実の意図的な歪曲であると言ってよく、科学的見地からは明らかにマイナスである。
日本人が中韓に対してひたすらヒステリックに罵倒の言葉表現を極めるのは、それだけ中韓への心理的なコンプレックスが強いことを意味している。日本人はこの深層心理レベルのコンプレックスの存

在をもっと自覚した方がいい。日本のフェミニズムも、脱亜入欧を目指している点、このコンプレックスで動いている面がある。
もしも日本が東アジア社会秩序において中韓と同じような対等な立場を取れていたら、日本人がこれほど中韓に対してやっかみ半分のヘイトスピーチを暴発させ繰り返す事態は起こっていないだろう。日本人は中韓からの「小日本」「日本鬼子」呼ばわりを強く根に持っており、これが脱亜入欧の原動力になっている。
日本のフェミニズムの資金の流れは、国や地方の役所の税金を集めて、国や地方の役所の男女共同参画の部局からフェミニストの大学教員たちとかに渡り、そこから活動家の末端フェミニストに流れているのではないかと筆者は想像する。末端のツイッターフェミニストのツイッター書き込みもこの一環で、安倍官邸擁護のネット右翼による書き込みと根が同じで、国策になっているはずだ。日本のフェミニストたちは税金で食べているのだ。
日本のフェミニズムが外見的に自分たちが社会的弱者だと主張して伝統日本社会を批判して社会体制改革を主張しつつ、その内実では日本政府の脱亜入欧国策に協力する体制派の社会的強者の御用学問となっていることは、取っている態度に大きな矛盾があり、徹底的に批判されなくてはならない。
日本女性は、嫁娘だと弱者、被害者の面も否定できないが、母姑になると一気に社会的強者、加害者の側に回るのだ。この点を日本人はほとんど無視してしまう。脱亜入欧イデオロギー公教育で日本は家父長制社会にならないといけないと洗脳され、日本女性の弱い面しか見れなくなるからだ。
日本の女性は、実態とかけ離れた強烈な弱者意識、被害者意識の持ち主で、強国(欧米諸国)に媚びる権威主義の持ち主なので、男性が女性と対話しようとしても、これらの偏った意識を女性に一方的に振り回されるだけで男性の負けで終わってしまう。男性が勝つにはそれらを否定する性差に関する科学的証拠を繰り出す必要がある。
日本のフェミニスト女性たちの、自分たちの気に入らない相手、対象を集団で寄ってたかって徹底的にリンチして潰す能力の高さには恐れ入るばかりである。さすが日本定住集団社会の支配者だけはある。日本のフェミニストたちと日本の右翼とは、その行動原理は、集団暴力であり、同じである。
日本のフェミニズムは、日本の国レベルでの脱亜入欧の実現とその一環として日本社会を疑似的に家父長制社会に見せかけるための、上位者のバックアップを受けた御用学問で権威主義の産物だ。
日本のフェミニストたちが盛んに日本の女性萌え絵的表現(動画、音声を含むこと。)を攻撃するのは、女性萌え絵が女性優位日本の

象徴であり、日本を家父長制社会に見せかける上での大きな障害になっているからだ。日本のフェミニストたちによる、最近開業した旅客鉄道駅であるJR東日本の高輪ゲートウェイ駅に導入された女性AIへの攻撃もこの一環だ。
日本のフェミニストたちによる女性萌え絵叩きと、日本人による中韓への罵倒とは、双方ともに日本社会の脱亜入欧の実現という点で共通の根を持っている。
中韓メインの東アジア世界から脱して欧米諸国の一員になる、そのために見かけだけでも家父長制社会になるという日本の国レベルでの目論見が日本のフェミニズムの強大化につながっている。
しかし、その目論見は、劣っていたかに見えていた中韓が世界的に興隆を果たし、日本と日本の宗主国アメリカを脅かすようになって、大きく崩れている。
ちなみに、中韓でも日本の女性萌え絵表現は広く受け入れられている。（それは、女性優位な社会なので当然である。）それは、本家の日本をしのぐ勢いになっていること。
日本のフェミニズムが女性解放の建前とは裏腹に強い家父長制への指向を持っているのは、日本の脱亜入欧、すなわち伝統的な東アジア的女性優位社会から欧米的家父長制社会への転換を見かけだけでも実現するための手段である以上、当然のことである。
日本のフェミニズムは、日本を家父長制社会に見せるための社会的な道具なのだ。
なので、日本のフェミニスト、あるいは脱亜入欧指向の日本人は、日本における母性の強さや女性優位な側面を強調する言説が現れると、ひたすら無視を決め込んだり、「日本は家父長制社会だ！」と言って攻撃してくるのである。
社会的に母性が強いこととか社会が女性優位であることは、女権拡張のフェミニズム本来の理想的到達点のはずなのに、それを攻撃する日本のフェミニズムは狂っている。日本のフェミニズムが狂うのは、日本のフェミニズムが女権拡張ではなく日本社会の脱亜入欧を最終目標としているからなのだ。
「日本女性は強い、日本女性は社会的に主流の存在だ」と主張している限り、日本の脱亜入欧は永遠に実現しない。なぜなら、それだと日本は家父長制の欧米諸国の仲間にいつまでたっても入れないからだ。なので日本国は脱亜入欧的フェミニズムを使って、日本女性は弱い、差別されていると盛んに声を上げるよう、日本人全体を動員している。
日本のフェミニストたちが、ジェンダーギャップ指数を取り上げて日本女性が性差別されていると盛んに強調するのも、この一環だ。
彼らは内心では、性差別解消ではなく日本社会の見かけ上の家父長

制化と脱亜入欧の実現を目的としている。実際のところ、日本のフェミニストたちは日本社会の性別役割分業制を無くそうとは考えていない。性別役割分業が日本の伝統的な定住集団社会の滅私奉公の慣行に基づくものであり、おいそれと変えられないこと、あるいは性別役割分業が解消されると彼ら自身が失業することを認識しているからだ。
日本の脱亜入欧的フェミニズムは、日本社会の男尊女卑指向と根本的なところで相性が良い。双方とも、日本社会を見かけ上家父長制社会と見せることに適しており、日本の脱亜入欧の実現に適した言説だからだこと。両者は表面上は敵同士だが、実際には仲間同士なのだ。
日本のフェミニズムが、欧米諸国による、ポリティカルコレクトネスの一環での日本コミック、アニメ、ゲーム表現への攻撃に積極的に同調するのも、日本社会に内在する女性優位表現への指向の側面、あるいは欧米文化への違和感のある側面を潰して、日本社会の脱亜入欧を実現したいという強い意欲の表れだ。
伝統的女性優位日本の否定と、欧米的家父長制社会の肯定が、日本の脱亜入欧的フェミニズムの基調となっているのだ。日本のフェミニズムによる日本の女性優位萌え絵表現の否定、あるいは日本女性優位社会論、日本母性社会論の無視といった現象は、この視点に立つことで容易に理解することができる。日本の脱亜入欧的フェミニズムは欧米的家父長制社会を内心では肯定しており、女権拡張に反する存在となっている。

（初出2020年3月）

日本の脱亜入欧と、日本男、日本女

日本の2020年春アニメテレビ新番組表を見たが、相変わらず欧米的な世界を舞台にした作品が多い。
それか純粋日本の学校部活かこと。
登場人物は日本人か欧米人かの二択。
日本が作ったアニメで、中国人や韓国人がたくさん出てくる作品はほぼ皆無。

こんなに内容が偏ってしまっていていいのかな？筆者は明治政府の脱亜入欧国策の社会的影響力の強さを思い知らされる。

日本では、「脱亜入欧」が、明治時代以来現在まで、ずっと国策になっていて、それに反する言論は実質統制状態に置かれていて、誰かが脱亜入欧に反する話題を出してもひたすら無視されるか、罵声を浴びせられるかのどちらかだ。

日本のフェミニストたちが威張っていられるのも、日本のフェミニズムが、日本の脱亜入欧の国策を推進するための御用学問だからで、日本のフェミニストは体制派の上級国民で社会的強者なのだ。

「主人」という言葉の使われ方を調べたら、日本では明治時代より前に使われた形跡が無い。
日本社会における「主人」の概念は、明治政府による脱亜入欧政策とそれに伴う女性優位日本社会を家父長制に見せるためのでっち上げの概念に過ぎない。
脱亜入欧が時代遅れとなった今、家父長制の芝居を止めて、夫に対して主人という用語を使うのを止めるべき。

「亭主」という概念だと江戸時代からあるみたいだけど、この「亭主」という概念は、お母さん主導で育てられ、一生お母さんの付属物、所有物で、お母さんのおもちゃに過ぎない日本男が、お母さんから「お前は結婚して一家を代表するほど大きく立派に成長したね。
お前は偉いね。
」と褒められ、おだてられて、思わず誇らしくなって得意気な顔をするための道具としての概念になっていると思うこと。
一生、自分のお母さんの精神的支配下に留まりつつ、お母さんの精神的後ろ盾に支えられて表向き一家の代表を務めて大きな顔をするのが伝統的な日本男のあり方だ。
日本男が女性優位でありながら日本社会の代表者として君臨し威張ることができる仕組みはこの延長だ。
女性優位な日本社会における真の支配者である母、姑による息子への精神的後ろ盾の用意と、息子への尻叩き、息子の気持ちの奮い立たせこそが、女性優位な日本男を日本社会の表舞台に強迫的に立たせ続けているのだ。
女性優位な日本社会において、本来弱く頼りない日本男が一家の代

表、あるいは社会の代表として、ひたすら威張る日本の男尊女卑の本質的な仕組み、原点はここにある。

日本の男尊女卑制もフェミニズムも、脱亜入欧のための明治政府による日本国民に家父長制の振りをさせるための演技指導の一環として捉えることができる。
日本の家父長制は、脱亜入欧のために欧米諸国に対して日本社会の女性優位な本質を隠すための社会的メッキに過ぎず、日本社会の社会的急所を触ると、すぐに剥げてしまう。
妻から夫への小遣い制とかその一例だこと。

以前、筆者は、ツイッター上で、日本のフェミニストたちが、日本社会における妻から夫への小遣い制を無くすべきだと真剣に議論しているのを見た。
筆者は、彼らはフェミニズム本来の女権拡張の意味を理解できていないと思った。
筆者は、彼らは頭が本当に悪いんだなと思った。
筆者は、彼らのことを馬鹿だと思っていた。
だが、日本のフェミニズムの主張において女権拡張が見せかけで脱亜入欧が本丸であることを理解すれば、日本のフェミニストたちのこうした主張は至極納得の行く発言だと思うようになった。
しかし、彼ら日本のフェミニストたちが女権拡張を真剣に目指していない点、彼らのことをフェミニストと果たして呼べるのか、呼んでいいのかという根本的疑念が生じる。
明らかに偽物フェミニズムだこと。
そして日本社会の家父長制もインチキだ。

日本社会の家父長制は、明治政府の国策レベルの作り話で社会的偽物、社会的まがい物だ。
日本の家父長制が偽物である証拠は、今なお強固に続く伝統的日本定住集団社会と女社会との特徴の照合をすることで、日本社会が根本的に女性優位であることを示すことによって得ることができる。

ジャニーズは日本の女性優位男性の象徴であり、マスキュリズムの視点からは忌避すべき存在なんだけど、日本のマスキュリズムの人たちは何も反対せず沈黙を守っているね。

日本のマスキュリズムの力は、女性優位な日本社会解体のために使われるべき。

それは、女性優位な社会秩序から男性を解放することにつながる。

日本のような女性優位社会では、男性の行動の自由、思想の自由は女性の力によってことごとく潰されている。
日本男に押し付けられているのは、社員としての奴隷生活であることが大半で、自由なチャレンジャーとして男性らしく生きる道は日本国内ではほぼ閉ざされている。

新型コロナウィルス対策でのテレワーク浸透で、日本の家庭における男性の存在感が強まるというメリットが出てきているのではないかと思う。
日本男性の家事や育児に携わる時間が格段に増えて、日本男性が、これまで日本女に独占されてきた家庭内での主導権を握れる本格的チャンスがやってきた。

日本のフェミニストは、自己保身で動き、自己愛が強く、社会的強者のくせに、責任転嫁の自己弱者、自己被害者アピールを大音響で行って、気に入らない相手を集団で寄ってたかってののしり、叩き、いじめて潰す。
同じ人間とは思えない。
まさにブスの化け物、キモフェミだこと。
女性としての魅力は全く感じられない。

日本男性による日本女へのセクハラは、姑による嫁いじめ、嫁いびりの息子版である。
日本男性をそういうセクハラ男に育てたのは、女性フェミニストと同じく姑という女性なんだよね。
日本男性を批判するフェミ女たちも自分の息子を育てると、息子は姑同様に嫁相当の女性に上から目線で対応する存在になることをお忘れなく。

新型コロナウィルスが原因で死去した志村けんによるセクハラも根は同じで、原因は嫁いじめを行う姑的子育てだ。
志村けんは、むしろそうした姑による子育て方針の犠牲者なのだ。
そのことを隠ぺいするため、同じ女同士でかばい合おうとする日本のフェミニストには志村けんのセクハラを批判する資格なんかない

んだよ。

日本男性による日本女へのセクハラの親玉は姑で、姑が息子経由で嫁や嫁相当の女性たちを支配し、いじめていると捉えるのが正解だ。
姑の後ろ盾が無いと、日本男にセクハラをする精神的な勇気は出てこない。

日本男性による日本女へのセクハラは、明治政府による脱亜入欧のために日本社会を家父長制に見せようとする動きも絡んでいるだろう。
この動きは、男性を日本社会の支配者に見せかけるために、男性の性的専横を許可するとともに、それを男性による女性の性的搾取であると日本のフェミニズムが主張できるようにして、日本の家父長制がまがい物であることを隠すこと、日本のフェミニストたちが御用学者として食べていけるようにすることに成功しているのだ。

日本政府による国民の新型コロナウィルス感染の隠ぺいは、女性の化粧と発想が同じ。
自らの持つ内在する難点を対外的に隠ぺいし、見せかけをよくするために行っていること。
日本の心は女心だ。

女性性と奴隷制とは大きな関連があると思う。

女性は、上位者にひたすら媚びて平伏して上位者の奴隷のように行動する一方、下位者に対して自分の奴隷となって動くことを当然のように要求し、従わないとその下位者を集団で袋叩きにして潰す。

日本社会が奴隷制になっているのは社会で女性が強いからだ。

日本社会を奴隷制化している安倍官邸も女性優位なんだと思う。
アメリカみたいな世界の強国に対してペコペコしてひたすらご機嫌取りをする一方、国内の下々に対しては独裁者として振る舞い、自分たちに忖度しない下位者に容赦しない。

アメリカみたいな男性の強い社会でも日本とは別種の実質的な奴隷

制がそれはそれで今なお強力に息づいていると思うけど、向こうでは奴隷扱いされた下級労働者たちが自由を求めて公民権運動とかやっているのに対して、日本のような女性優位な奴隷制社会では、上位者にたてつくこと自体がもう一切許されない。
ひたすら忖度が要求される。

男性性による奴隷制は父による支配、女性性による奴隷制は母による支配がそれぞれ原型になっていると思う。
自分に刃向かう相手に容赦ない機銃掃射を浴びせるのが父による支配で、自分に同調一体化しない相手に機嫌を損ね、締め上げて窒息死させるのが母による支配だと思う。

その通り動けば成功する、出来合いの定石行動のコレクションをたくさん入手、暗記蓄積、改良することにもっぱら力を入れるのが女性優位で、日本の公務員とか典型的。

一方ひたすら失敗を重ね試行錯誤しながら何とか大ざっぱな定石行動の原型を構築して女性優位な人間に売りつけるのが男流で、アメリカのベンチャー上がりの企業とか典型的。

何か新しいことをする時に、女性優位な人々は、既に存在する先生や先輩の模範、前例を欲する。
男流の人々は、先生や先輩の模範、前例は要らない、失敗してもいいから自分の新しいアイデアでやろうと考える。

日本社会で先生、先輩が幅を利かせるのは、社会の仕組みが女性優位だからだ。

上位者を優先して助けて、下位者への援助は後回しにするのは女性優位。

下位者を優先して助けて、上位者への援助を後回しにするのが男流。

日本の感染症緊急政策で政府が上流者への援助を優先して、下流の庶民への援助を後回しにするのは女性優位な証拠。

女性優位は、上流者同士でなれ合い、下流者を締め出す。

日本は、昔も今も実質的に母親専制社会だ。
日本男は、母や姑の威力を借りる狐に過ぎない。

日本政府が、新型コロナウィルスで苦しむ大企業に１千億円出資する案を出した。
上位者も御用聞きも自分たちの内々のことしか眼中にないので当然の結果かな。
上位者を批判する人たちも、自分が上位者の立場になると同じ政策をやるだろう。

まさに日本人の女性優位思考の限界だこと。
内輪の上流で固まって外界の困窮者たちに関心が行かない。

日本男は、一生、日本女の奴隷＆養分扱い。
子供の時は母親の奴隷＆養分で、結婚してからは、それに加えて妻と子供の奴隷＆養分だ。

日本が本当の家父長制社会、母が無力な社会だったら、日本男にとってどんなに良かったか。
明治政府の掲げる脱亜入欧国策にだまされて、今の女性優位な日本社会のことを本気で家父長制だと信じている大勢の日本男たちを見ると、その頭の悪さに、正直馬鹿馬鹿しくなること。

日本男たちの、上位者の明治政府による脱亜入欧プロパガンダの前にペコペコ頭を下げてひたすら盲従する女性優位な感じが、何とも不気味だ。

日本男は母親に心の髄まで篭絡されているから、死んでも真の家父長制に目を覚ますことはないだろう。
個人主義と自由主義、これが家父長制の神髄なんだけど、女性優位な日本社会では実質的に禁忌の思想だよね。

科学も真の家父長制と関係あるね。
日本では科学は脱亜入欧の宗教扱いで信仰対象として表面的に崇められているけど、いざ日本人の誰かが真の科学者になると、科学的真実の前に、上位者に心理的忖度を一切しなくなるので、忖度大好きな標準日本人から嫌われ、日本社会から疎外される。

上位者にひたすら媚びて忖度しつづけないと潰されるのが女性優位な茶坊主国家日本に生まれた人間の宿命。
逆に言えば、上位者にメンタル面で取り入ることに成功すると立身出世がかなり可能で、みんなそれを目指して人間としての尊厳をかなぐり捨てているという面もありそう。

食えない民主制よりも、食える奴隷制の方がましという考えを日本の人たちは強く持っている気がする。

日本人は、建前上は民主制を支持しないとスーパー上位者のアメリカとそれに媚びる上位者の日本ににらまれるから支持しているだけで、上位者の日本は民主制では動いていないことはみんな知っている。

（初出2020年4月）

今の日本社会では真の言論の自由は存在しない。

「今の日本では、言論の自由は保障されている！」とひたすら叫ぶ日本人の左派と右派の皆さんに、当方がおお伝えしたいことがある。

実は、今の日本では、。
「今の日本万歳！」
と叫ぶか、
「今の欧米万歳！」

と叫ぶか、
両方か、あるいは、どちらか一方を必ず叫ぶ言論の自由しか社会的には許可されていないのだ。

今の日本では、例えば、。
「今の日本万歳！」
「今の欧米万歳！」
の両方を同時に叫ぶのは、政権右派、あるいは政治的中立の役人指向であり、日本社会では大いに歓迎され、もちろん許される。その理由は、この発言が、スーパー上位者の欧米にも、上位者の日本にも忖度、同調し、心理的一体化できているからだ。

今の日本では、例えば、。
「今の日本万歳！」
「今の欧米はクソ！」。
と同時に叫ぶのは、国粋右派であり、美しい伝統日本の上位者を称賛しているので、スーパー上位者の欧米を擁護する左派からは叩かれるが、上位者の日本の目には適って、何とか許される。

今の日本では、例えば、。
「今の欧米万歳！」
「今の日本はクソ！」。
と同時に叫ぶのは、左派であり、スーパー上位者の欧米に忖度して、上から目線で日本の上位者を叩く欧米『出羽守』なので、日本の上位者を擁護する右派からは批判はされるが、スーパー上位者の欧米に弱い日本の上位者は黙認し、場合によっては従うので、何とか許される。

しかし、今の日本では、。
「今の欧米はクソ！」。
「今の日本はクソ！」。
と同時に叫ぶと、実は、もう生きていけなくなってしまうこと。こうした発言のように、スーパー上位者の欧米と、上位者の日本の両方を同時に叩く言論の自由は、日本では全く認められていない。

このバリエーションで、今の日本では、例えば、。
「今の欧米はクソ！」。
「今の日本はクソ！」。
「今の中国万歳！」
と同時に叫ぶと、社会的に死んでしまうこと。この主張には、今の

日本人は、左派も右派も、「中国には言論の自由が無い！中国は全体主義の社会統制国家だ！中国は自由民主主義のスーパー上位者のアメリカ様の敵だ！お前は、日米同盟に異を唱える非国民だ！お前は日本から出ていけ！」とか言って激しく反発するだろう。

あるいは、今の日本では、。
「今の欧米で主流のリベラルはクソ！」。
「欧米リベラルの主張にひたすら賛成、同調する今の日本はクソ！」。
と同時に叫ぶのもダメな感じだ。
今の日本では、スーパー上位者の欧米で主流なリベラルの主張と、その主張に追随する日本の上位者の両方を同時に批判するとダメな感じだ。

このバリエーションで、今の日本では、同様に、。
「今の欧米の性差別反対運動はクソ！」。
「欧米に同調して、性差別反対を主張する今の日本はクソ！」。
と同時に叫ぶのもダメな感じだ。
今の日本では、スーパー上位者の欧米で主流な主張と、その主張に追随する日本の上位者の両方を同時に批判するとダメな感じだ。

あるいは、今の日本では、。
「今の家父長制社会の欧米はクソ！」。
「欧米に同調して、日本社会は家父長制だと主張する今の日本はクソ！」。
と同時に叫ぶのもダメな感じだ。
このバリエーションでは、今の日本で、誰かが「日本社会は実は女性優位で、ずっと女が支配しているんだぞ。家父長制じゃなくて、女権拡張が進んでいて、フェミニズム的にはいいよね！」とか主張するのも、この事例に該当する。この主張は、今の日本では、スーパー上位者の欧米の社会体制である家父長制にケチを付けて全面否定し、なおかつ、上位者の日本の、日本社会は欧米同様家父長制だという伝統的な主張も否定しているので、スーパー上位者と上位者の同時否定に当たり、ダメなのだ。この主張は、現状では、日本のネット掲示板とかにいくら書き込んでも、日本人からは、完全無視か、あるいはひたすら嘲笑の対象になり、社会的には、最初から存在しなかったことにされてしまう。
とにかく、今の日本では、スーパー上位者の欧米の社会体制と、その社会体制に追随する日本の上位者の両方を同時に批判するとダメな感じだ。

今の日本で、こうした言論統制の事象の発生する背景には、明治以来の日本伝統の脱亜入欧国策に、日本社会全体が、今なお、左派も右派も挙国一致でもろ手を挙げて賛成して、ひたすら従っていることがあると思う。
誰かが、欧米先進国と一体化し、中韓を見下すことをひたすら指向する、日本伝統の脱亜入欧国策に対して、異を唱えると、今の日本では、その主張者は、非国民扱いになるのだ。この傾向は、明治政府の頃から、今までずっと存続している。この傾向は、日本社会の価値観が大きく変わったかのように一見見えるアメリカ占領後もずっと存続しているのだ。最近は、台頭著しい中国のことをスーパー上位者のアメリカが盛んに敵視するようになっていて、このアメリカの動きに、上位者の日本が日米同盟でひたすらべったり追随するようになっていて、その結果、日本人が脱亜入欧の国策に精神的に入れ込む度合いは、ますます増加している感じだ。つまり、今の日本では、ますます言論統制が酷くなっているのだ。

当方の結論だこと。
今の日本は、日本人が大声でその言論統制の厳しさを批判、嘲笑する中国や北朝鮮と同様、実は言論の自由がちっとも無い。
今の日本では、言論の自由は、スーパー上位者の欧米が言論の自由の重要性を主張し、上位者の日本がそれに追随して同調する主張をしているので、一見あるように見えるが、実はちっとも無い。
今の日本では、スーパー上位者の欧米と上位者の日本の両方に同時に反対すると、社会的に死んでしまう。言い換えると、今の日本では、上位者の日本による伝統的な脱亜入欧の国策に反対すると、社会的に死んでしまう。
今の日本では、誰かが、スーパー上位者や上位者といった社会的上位者に忖度しないと、その人は、社会的にすぐに死んでしまう。
この上位者への忖度必須の日本の社会規範の存在は、まさに日本社会が女性優位であることの表れである。しかし、このことを主張する言論の自由が、今の日本には無い。と言うか、そもそも日本社会が女性優位だからこそ、日本社会では、根本的に言論の自由が無いんだと思う。
（初出2020年6月）

日本男性を助けて下さい！

世界の皆さん、日本社会で日本女性の奴隷状態になっている、男性としての人権を奪われた日本男性をどうか助けて下さい！
世界の皆さん！日本男性たちが、社会的に日本女性の完全支配を受けて、精神の女性化を日本女性から一方的に強いられて劣化女性扱いされ、個人の自由を完全にはく奪されてひたすら日本女性の奴隷状態として人間以下の生活を続けるしかない現実をどうか知って下さい！。
日本男性は、日本女性によって、男性本来が持っているはずの社会行動面での自由主義、個人主義といった男性らしさを消去、禁止されて、社会行動面での同調一体化、忖度を偏重する女性らしさを強制注入されています。
日本社会は完全に女性優位な状態にあり、ひたすら周囲への同調一体化と上位者への忖度、隷従、下位者の奴隷扱いを行う女性優位な社会行動様式が男性に強制されています。男性優位な自由主義、個人主義で振る舞うことは社会的にほとんど認められていません。
日本男性は家計管理の権限を完全に日本女性に伝統的に奪われていて、日本男性はどんなに稼いでいても、そのお金を日本女性に一方的に取り上げられ、日本女性からなけなしの小遣い制をもらって生きていくしかありません。
日本では、子育ての主導権は日本女性に握られ、子供は日本女性の手で精神を強制的に女性化され、日本男性は子供から精神的に引き離されて家庭の中で孤立しています。
しかもこうしたことについて声を上げることが日本国内で全く許されず、脱亜入欧の国策を掲げる女性優位な日本政府による「日本社会は家父長制だ」という偽りの日本社会の女性優位な実態に反するプロパガンダを毎日強制的に唱和させられて洗脳され、本当の窮状を知ってもらおうと声を上げようとすると女性優位な日本政府と社会支配者の日本女性たち、および精神を女性化され日本政府の国策に洗脳されて自分たちのことを家父長だと本気で信じ込んでいる無知で哀れな日本男性たちから国ぐるみで反社会的人間としての扱いを受けてしまいます。
日本男性が自分たちは奴隷状態で社会的に差別されていると声を上げようとしても、日本政府の脱亜入欧の国策に洗脳された日本人からひたすら無視、嘲笑され、日本人みんなが忖度して従っている日本政府の伝統的国策「脱亜入欧とそのための偽りの家父長制化」に異を唱えて日本政府に恥をかかせる非国民扱いされて日本社会の中に全く居場所がなくなってしまいます。
世界の皆さんは、日本男性の置かれた悲惨な現状をどうか知ってほしい。

（初出2020年5月）

日本社会と家父長制ごっこ

日本社会の家父長制は見掛け倒しの演技に過ぎない。
女性優位な日本社会では、家父長制社会であるスーパー上位者の欧米諸国と、脱亜入欧の国策による日本社会の家父長制化を推進する上位者の日本政府に対してひたすら同調、忖度、ご機嫌取りすることが必須なため、「日本男性が弱い」「日本女性が強い」と、日本社会が女性優位である実態をそのまま主張することが事実上禁止されていて、言論の自由が存在しない。
今の日本社会では、ひたすら「日本男性は強い」「日本女性は弱い」という、日本社会の実態が女性優位であることを全く反映していない、日本社会の家父長制化をひたすら推進する上位者の国策に無理やり合わせた主張を空しく連呼し続けることしか許されていない。

日本人は、明治時代以降、明治政府になってから、当時の政府の女性優位な上位者指導者の決めた国策を、上位者の設定したしきたりとしてひたすら忖度して従い続けて、実質世界支配者でスーパー上位者の家父長制の欧米諸国に迎合して脱亜入欧すること、欧米先進国の仲間入りすること、仲間入りしたと思われる状態を維持することに一生懸命になり、自分たちの社会のことを西欧北米流の家父長制に見せようと家父長制ごっこに必死になる。
この傾向は戦後のアメリカ支配後さらにエスカレートしている。
日本人は自分たちの社会が家父長制化したと必死になって思い込む。
日本男性は必死になって威張る。
日本女性は必死になって弱い振りをする。
日本人は日本社会の男尊女卑振りを必死で演技する。
日本女性が欧米フェミニズムの内容（女性は弱い、女性は差別されている。）をひたすら大音響でわめいて主張し続けるのも、日本女性を弱く見せようとする演技の一環である。
日本社会の家父長制は演技の結果で人為的、見せかけのものであり、日本人が演技を中断した瞬間に崩壊して、女性優位な本性（伝統的日本定住集団社会）がたちまち顔を出す。

日本人は、日本社会のイメージを女性優位な中韓と差を付けようと必死になる。

日本人は、自分たちの社会が本当は女性優位であることを外部に対して必死になって隠そうとする。
日本人は、日本社会に関する記述や歴史教育から、日本社会は女性優位であるとの文言や、姑や母の強さを指摘する文言を注意深く自己規制したり、省略したり、存在を無視する。
日本社会が女性優位とみなされないよう、国ぐるみで記録や記述の捏造をやっているのだ。
まさに社会的真実の封印だこと。
誰かがネット掲示板とかで「日本社会は女性優位である」と発言するとひたすら無視、排除を決め込んだり、発言者のことを嘲笑してすぐに話題を変えようとする。
日本社会が女性優位なままであり脱亜入欧に失敗していることが自分たちにも他国にも直ちに認識されてしまうことを恐れるからである。
日本人は日本社会が女性優位であると認識されることで、欧米社会から異質と思われることを恐れる。
あるいは、中韓と同類と思われることを根本的に嫌うこと。
日本社会で女性が強い、男性が弱いと主張すること、日本社会は家父長制ではないと主張することは、日本社会の上位者が体制批判不可な女性優位で、かつ女性優位な上位者が家父長制のスーパー上位者の欧米諸国に忖度するため、事実上禁忌である。
日本人は、日本女性がどんなに強烈な力や猛威を振るって日本社会を支配していても、ひたすら見なかった振りをして、ひたすら「日本社会は家父長制だ」と主張するしかないのである。
決して「日本社会は女社会だ」と暴露してはいけないのである。

日本人は、自分たちの社会が女性優位であることを日本国内で主張することを、必死になって回避する。
上位者の推進する脱亜入欧の国策、日本社会の家父長制化が上手く行っていないことを内部告発すること、批判することにつながり、恥をかいた上位者から非国民扱いされ、社会的に排除されることを恐れ、上位者の国策に必死になって忖度するからである。
日本社会の実態が女性優位なのに、女性優位と主張することが事実上社会的に規制されている。
日本男性が日本女性に支配されている実態を告発することが社会的に許されない。

日本人は、自分たちの社会で女性が不利であること、男性が有利であることを示すデータに必死になって飛びつこう、大きく報じよう、学校で教えようとする。
その逆の日本女性が有利で強いことを示すデータは無視する。
日本人は、欧米から日本社会における女性差別を非難されるとひたすら同調して大合唱し、家父長制の国民総出の演技がうまく行っていることを内輪で密かに喜ぶ。

日本人は、自分たちの社会が「男社会」であることを必死になって主張する一方、女社会の解明には及び腰で誰もやろうとしない。
女社会の内容が解明されると、日本社会が本当は「女社会」であり、日本女性が強いことが改めて判明してしまい、脱亜入欧の家父長制ごっこが大きなダメージを受けてしまうため、女社会に注意が向かないよう自己規制をしているのだ。

日本人は、近年の欧米ネオリベラリズムの性差別反対の思想に国ぐるみで必死になって飛びついている。
日本人は、男女の真の社会的性差が解明されて、日本社会が女性優位だという判定を得ることが起きないように、性差が存在するとする性差研究そのものを自己規制することに必死となっている。

日本人は、日本社会が女性優位で、日本女性のやりたい放題、支配し放題状態になっているのを毎日、村とか社といった伝統日本社会に暮らして実感しながら、そのことを指摘すること、異論を唱えること、その状態に手を付けることを国ぐるみで社会的に自己規制、禁止されているのと同じ状態に置かれている。
日本人は女性優位な日本社会で、日本女性にひたすら一方的に支配され続けるしかない。
まさに日本女性による独裁が日本社会では完成されていて延々と続いている。
日本女性による日本社会支配は、そのことへの批判が無効化され、実質禁止されている。
日本社会は日本女性による治外法権状態になっている。
日本社会や日本男性は、日本女性の支配する植民地である。

日本人にとって、欧米フェミニズム（弱い女性の地位向上を訴えるタイプのフェミニズム）は、日本女性を弱く見せる脱亜入欧や欧米への忖度のための国策スローガン、国策プロパガンダであり、自分たちが脱亜入欧し、家父長制社会になったという気分をその場で一時的に高揚させるためのセルフオナニーのツールである。

日本人が欧米フェミニズムを主張することで日本人の脱亜入欧の気分は高揚し、日本人は気持ちよくなるが、日本人の脱亜入欧はあくまで気分だけで、肝心の実態を伴っていない。
日本人がいくら欧米フェミニズムの主張を繰り返しても、日本社会の実態は女性が強い母権社会のままであり、理想とする家父長制にはほど遠い。
日本社会で欧米フェミニズムをいくら声高に唱えても、もともと女性優位な日本社会的にはまともに機能せず何の役にも立たず何も残らず、家父長制ごっこに必要なお飾り扱いで、時間と手間が無駄になるばかりでやっても貴重な人生をどぶに捨てるだけで、家父長制ごっこの胴元の日本の国に洗脳されだまされ利用されていただけである。
国家的にも単なる税金の無駄遣いである。
ただし日本女性にとっては、自らの強力な自己愛、自己憐憫、被害者意識を満足させるセルフオナニーツールとして効力がある。

社会的強者、社会的上位者が「自分は弱者だ、被害者だ、差別されている」と大音響で周囲に一方的に主張し説教することで、だれもがその社会的強者、上位者に刃向かう手段を失い、面と向かって反論できなくなってひたすら沈黙を続けるしかなくなる。
日本女性が欧米フェミニズムを主張しまくるのは、まさに社会的弱者、社会的下位者を一方的に沈黙させて、自分たちの社会支配をより盤石にするためにとても有効なのである。

日本のフェミニストたちは、「女性は弱者で、差別されている」とひたすら声高に主張しつつ、日本男性がその主張に対して「モテない男性も社会的弱者で差別されている」とか反論すると、直ちにヒステリックに激高して、自分たちのことを批判するな、ひたすら自分たちのお気持ちに配慮しろといった上から目線の態度を日本男性に対して取って、日本女性の持つ社会的上位者としての本性をむき出しにするのである。

日本のマスキュリズムは、「男性は世界中で普遍的に強者である」という欧米流の家父長制的信念にひたすら女性優位に忖度し、「家父長制社会において優位者である男性が性的に被っている部分的な不都合を告発する」という視点でしか、日本社会における男性差別を語ることが出来なくなっている。
日本のマスキュリズムでは、スーパー上位者の家父長制の欧米諸国と、その存在を模範視して日本社会を家父長制化しようとする日本の上位者への両方に必死で同調、忖度するすることが女性優位な日

本の社会規範的に必須なため、日本男性が女性優位で、社会的弱者であるという視点を取ることが、事実上不可能となっている。

日本社会における男性差別、女性差別を論じる人たちは、欧米的家父長制のことを世界に普遍的で支配的な社会規範であるとして、ひたすら女性優位な精神で忖度、崇拝しまくって、日本社会の社会的性差に関して、男性の地位が高く、女性の地位が低いとする視点を一方的に採用することしかできず、女性の低い地位を男性並みに向上させる男女平等の主張とか、女性の男性並みの社会活動の推進を、家父長制社会を前提とした視点によって論じることしかできない。
彼らは、それ以外には、せいぜい社会文化の差によらない男女間の生得的で、一般的、普遍的な勢力不均衡と思われる点についてのみ、互いに相手を批判することしかできない。
彼らは、「女性にモテない男性は、社会的弱者として酷い扱いを社会的に受けている」とか「女性は筋力が弱いので、男性から一方的に強姦されたり痴漢されることになり、これは女性差別である」とひたすら訴えることしかできない。
彼らは、スーパー上位者の欧米諸国による、性差別を無くしましょう、性差の積極的認識を抑止しましょうという主張をひたすら追認する方向でしか話をすることができない。
結局、日本での性差研究は、日本社会が上位者のスーパー上位者や日本の上位者への忖度、同調行動満載の女性優位社会であるせいで、男女の社会的性差の存在を積極的に認めたり、その存在を前提とした方向での研究が出来ない。
日本社会では、例えば、日本社会の女性優位性、日本女性、特に母親の社会的強さの研究とか、世界における男性優位社会と女性優位な社会の並立の現状に関する研究とかが困難になっている。

日本人は、「日本社会は家父長制だ」と主張しないと、脱亜入欧の国策に反しているのでダメ、あるいは、日本が欧米先進国から異質扱いされて仲間外れにされて国益を損なうのでダメと言われて、日本社会から追放される。
だからと言って、普段の社会行動を本物の家父長的な自由主義、個人主義の男性優位なものにすると、女性優位な稲作農耕民社会（日本定住集団社会）の相互一体感、気配り、先輩後輩制、上位者への忖度重視といった基本的な社会規範、社会秩序を乱す迷惑な反社会的存在として、日本社会では周囲から袋叩きでいじめられ潰されるか、追い出される。
日本男性は、見かけは家父長制的に振る舞い、実質は女性優位で振

る舞うことが要求される。
日本男性は、社会支配者の日本女性から盛んに家父長とおだてられて必死に威張りまくりつつ、一生を女性の独裁下で過ごす一見幸福だが実質男性優位人権を奪われたとても哀れでみじめな奴隷生活をひたすら送るしかない。
日本男性は、女性優位な日本社会では、生育過程で、母親や女性優位な学校教師に男性性を消去されて、精神を女性化され、男性器が付いた女性、劣化女性として一生過ごすしかない。
日本男性の精神の女性化は、母親による息子の生育時の独占子育て支配が原因で起きている。

今の女性優位な日本社会で生きていくには、「日本社会は家父長制だ」「日本女性は弱く、差別されている」「性差なんて存在しない」とみんなで仲良くひたすら念仏のように唱和し続けるしかない。
例えその主張がどんなに日本社会の実態とかけ離れていても、異を唱えずにひたすら唱和するしかない。
スーパー上位者と上位者の主張にひたすら同調、忖度し隷従し続けるしかないこと。
異を唱えると非国民扱いで、今の日本社会では生きていけない。
上位者への同調も忖度も隷従も、みんな女性優位な行動様式ばかりで、個人の自由独立を重んじる男性性を否定するものばかりなのに。

同様に今の女性優位な日本社会で、「日本では言論の自由が憲法で保障されている」と主張する人は、スーパー上位者のアメリカに忖度した思想警察であることが多い。
今の日本社会では「日本では言論の自由が憲法で保障されている」とひたすらみんなで仲良く唱和し続けることしか許されていない。
今の日本社会で生きていくためにスーパー上位者と上位者、あるいは周囲の日本人への絶えざる同調と忖度が必要で言論の自由が実質存在しないことを指摘すると、スーパー上位者と上位者に異を唱えることになって非国民扱いになる。

女性優位な日本社会において、日本男性は、日々日本女性による一方的な支配を受けているのに、そのことを指摘、告発、批判することが社会的に許されず、ひたすら「日本社会は家父長制」と念仏のように唱え続けながら日本女性のサンドバックになっている状態をひたすら甘受し続けるしかない。

いくら日本の外部から男性優位な牧畜民が支配しに来ても、日本のモンスーン的気候風土が牧畜を許さず、稲作農耕しかできない状態が続くのであれば、日本社会は永遠に女性優位なままであり続ける。
あるいは、いくら日本社会の上位者、支配者に欧米のような男性優位牧畜民社会が来ても、女性優位な日本人はひたすら忖度して表面的に合わせるだけ、家父長制という文言をひたすら唱和するだけで、男性優位文物の自由主義的、個人主義的な本質は理解できないまま、有効導入できないまま終わってしまう。
アメリカ主導の日本国憲法とかその好例であること。
女性優位な日本人に男性優位な欧米流の民主主義は永遠に理解できず、実質的な実効性のある導入も不可能である。
女性優位な日本人はひたすら上位者の支持者、上位者の政党、多数派に投票を繰り返す。

女性優位な社会は、自分たちの上位者、支配者が男流の社会になると、彼らに対して保身を図るため、女性優位な発想で彼らに同調、迎合、忖度、ご機嫌取りするために、自分たちが彼らとは異質な女性優位であること、女性優位社会であることを公言することを、社会的に抑制、統制、封印して、一切言えなくする。

なので、女性優位な社会なのに、自分たちは男性中心の社会だ、家父長制社会だと必死で主張するようになる。
自分たちの社会における男性の強さ、女性の弱さをしきりにアピールし、女性の強さを示すデータをひたすら隠ぺいすること。
本来女性優位社会の支配者である女性たちが必死で弱い振り、劣位者の振りをする。

日本人の家父長制が人為的な演技であることを暴露して一般日本人の洗脳を解くことで、日本政府の明治時代以来の強迫的な脱亜入欧国策に終止符を打たせることができ、東アジアと欧米の両方を重視する現実的な親亜親欧政策への変換がなされる。

これにより、日本社会において、偽りの男尊女卑問題、女性差別問題、家父長制社会問題から真実の女尊男卑問題、男性差別問題、女性優位母権社会問題への社会的関心のシフトを促進できること。
日本において暴力的な力を振るってきた欧米流フェミニストを撲滅できること。
欧米が押し付けた全世界で普遍的に性的弱者＝女性という単一認識から、性的弱者問題は社会によって女性が弱者のことも男性が弱者

のこともある、という新たな複眼的認識に進むことができる。

日本社会で、男性が有利で女性が不利であるデータしか主張できない、「日本社会は家父長制である」しか主張できないということは、見方を変えると、「日本社会では女性が有利である、女性が強い」という主張が日本社会では実質不可能であることを示している。
日本社会で女性が強く、女権拡張のフェミニズムの本場になれるという考え方は、確かに日本社会で強いのは女性なので潜在的に大きな可能性があるのは事実だが、スーパー上位者の欧米諸国の意向や脱亜入欧の国策を推進する上位者の意向を考えると、スーパー上位者、上位者への忖度が最優先になる日本社会では、実質不可能である。

女性優位社会、女性優位社会の構築を前提とした女権拡張型フェミニズムを発展させることは、今の日本社会では不可能である。
男性優位なアメリカ主導の視点で作られた今の日本国憲法の根本否定、破壊と女性優位憲法の新たな作り直しが必要になるからであり、根本的に反米的存在なので、日本国憲法策定を主導したアメリカがスーパー上位者の地位に君臨する限り、スーパー上位者的にも、その支配を受ける日本の上位者的にも一切許容できないからである。
また、日本の上位者は、脱亜入欧の日本社会を家父長制化する国策を引き続き推進している側面もあって、その側面も合わせて、女権拡張型フェミニズムの存在を許容できない。
女性の強さを前提とした真の女権拡張型フェミニズムは、今の日本社会では、スーパー上位者にも上位者にも異を唱えることになり、上位者への忖度最優先の日本社会では許容される可能性はゼロである。

なので、女性優位社会、女性優位社会の構築を前提とした女権拡張型フェミニズムを発展させるには、社会のトップに男性優位牧畜民社会を支配者として抱かない、社会のトップがそのまま女性優位農耕民社会である国、女性優位憲法を有する国を本拠地にして進めるのが望ましい。
本拠地は、欧米諸国の軍事的影響が少ない国、例えば、中国とか北朝鮮とかベトナムとかロシアが望ましい。

日本社会では、スーパー上位者の欧米諸国、中でもアメリカと上位者である日本政府の両方に忖度するタイプの意見（政権右翼）が一

番多数派である。
一方、スーパー上位者の欧米諸国に忖度して、格下の上位者を批判するタイプの意見（左翼）と、スーパー上位者を批判して上位者のみに忖度するタイプの意見（国粋右翼）はやや少数派だが、上位者への忖度に成功しているので何とか存続できる。
しかし、スーパー上位者と上位者の両方を同時に批判するタイプの意見（弱者日本男性を社会的に解放する意見、強者日本女性の力を更に強化する意見、中国の日本支配を支持する意見など）は、日本社会から出ていけとひたすら連呼されてしまうことになる。

このことと関連して、日本社会では、セックス面で女性が一般的、普遍的に男性より強い権力を握っていること、例えば女性が男性からセックス税を強制的に課税する権限を握る男性より優位な存在であることとかを表明することが事実上不可能である。
日本社会では、フェミニズムの主張において、ひたすら女性は性的に搾取される被害者、弱者だと連呼しなければならないのである。

（初出2020年5月）

スーパー般若としての日本女性

女性は、生理が来るため、精神的、情緒的に絶えず不安定であり、気分がくるくる変わるため取る行動が予測しにくい。
何をしだすか分からない反応の読めない怖さがあり、ひたすら腫物扱いするしかない。
彼女たちは付き合い続けるのが面倒くさく、忍耐が必要である。

女性は、メンタルがソフトで傷つきやすく、ちょっとした批判や些細な物事の成り行きでとても不機嫌になって怒り出し、対話を拒否したり、ヒステリーを起こして精神的に大爆発して、完全に手が付けられなくなってしまう。
その点、とても怖く恐ろしい存在であること。
周囲の人間にとっては彼女たちが引き起こす激高の嵐が過ぎ去るのをひたすら待つしかないのである。
また、彼女らが感情を害さないように、絶えずご機嫌取りや忖度を

しなければならなくて、とても面倒で大変である。
彼女らは、理屈による説得が通用しない厄介な存在だ。

女性は、それだけでも十分面倒で怖い般若だが、日本女性は、家計の財布のひもや子供を支配して社会を女性優位化して、社会を女性優位な慣行で動くようにコントロールして自分たちの思いのままに支配する社会的強者、社会的支配者、加害者としての側面を色濃く持っており、そこにこうした女性ならではの情緒の不安定性や、精神がすぐ傷つくことによる怒り出しやすさ、感情や行動の爆発性や制御不能性が合わさることで、とっても怖く恐ろしいスーパー般若として君臨する。

日本の家庭ではお金の出入りを支配するスーパー般若が上位者の財務省に相当し、男性は下々の納税者に相当する。

日本女性のスーパー般若の側面が母性に適用されると、厳母が生まれる。
日本の厳母は、子供を自分の完全所有物化して管理統制し、厳しくしつけしごく存在であり、教育ママゴンのように怪物扱いされる存在だ。

凶暴な残虐行為を繰り返した旧日本軍、あるいは軍隊のように人権感覚の欠如した厳しい規律で動く日本体育会系社会の精神的バックボーンが、日本のスーパー般若たちである。

女権拡張や女性による社会支配を目指す世界のフェミニズムの究極の到達点、理想的な目標形態が、日本のスーパー般若たちなのだ。
日本のスーパー般若は、世界の女性の鑑だ。

（初出2020年5月）

日本社会における日本国憲法の受容と民主主義ごっこ

女性優位な日本社会は、本質的に欧米家父長制社会の正反対の存在であり、欧米流民主主義を反映した日本国憲法の内容と完全対立す

る、日本国憲法の敵に当たる存在である。

アメリカは、女性優位な日本社会と正反対の社会規範を、日本社会の実質支配者、上位者となって女性優位な日本社会に押し付けたことになる。
一見すると、女性優位な日本社会から猛反発を受けるのが確実な感じである。
しかし、現実はそうなっていない。
女性優位な日本社会は、見た感じ、自分たちの社会規範に反する内容の日本国憲法をもろ手を挙げて受容しているかのように見える。
実際には何が起きているのだろうか？。
日本に限らず女性優位社会の人々は、新たな支配者が自分たちの社会を完全に打ち負かす形で完全制圧すると、自分たちの保身を最優先に図るため、怒涛のように態度の完全な手のひら返しをみんなで行って、今までの支配者のことを必死に否定し、新たな支配者に対して一斉に同調、忖度、ご機嫌取り、表向きの歓迎を始めるのが通例なのではないかと考えられる。
日本では徳川幕府から明治政府に支配者が交代した時、および旧日本軍の支配からアメリカ支配に支配者が交代した時とかにこの現象が起きた。
日本と同じ女性優位な中国の王朝交代でも同様のことが起きたとされている。
日本人の日本国憲法への全面的な賛成もこの文脈で起きていると考えられる。

また、日本社会における、女性優位な日本社会と本質的に相反する内容の社会規範である日本国憲法の受容は、まさに女性優位なやり方で、男性優位な日本国憲法の内容を完全に骨抜き、無効にする形で行われている。
すなわち、女性優位な日本人たちは、日本国憲法を、ひたすら女性優位な同調、相互一体化、忖度の対象とみなし、女性優位な社会で絶対服従の対象である伝統的な師匠に教わるのと同様の盲目的なお勉強による日本国憲法の内容の消化吸収をひたすら実行したのである。
女性優位な日本人は、日本国憲法が持つ自由主義、個人主義的側面を体得する精神的素質が全く無く、それら自由主義、個人主義的、自主独立的側面を無力化する、受け入れ対象への完全同調、一体化、媚び、隷従、忖度、反論不許可化の方法でしか、日本国憲法を受け入れることが出来ないのである。
つまり、男性優位な内容の日本国憲法は、女性優位な人間にはその

本質が全く理解、体得できないお経のような状態のまま、新たに出現したスーパー上位者の社会思想への完全従順の形を取って、女性優位な日本人に、その内容を表面的理解しかされていない状態で、ひたすら盲目的にウェットな愛情をもって受容されたのである。
女性優位な日本人がひたすら日本国憲法を受容するのは、受容することでスーパー上位者のアメリカやそれに同調する日本の上位者への忖度の度合いが飛躍的に上昇し、それは上位者への近さ、一体性を人物評価に当たって大きく重視する女性優位な社会規範を持つ日本社会の内部における、自分に対する世間的な相対評価の向上や社会的地位の向上につながり、社会的に大きな顔や支配力を持つことができるようになるからという面が大きい。
女性優位な社会は、自分がそれに従うと自己保身に有利になる上位者への忖度の度合いの大きさ、権威ある上位者の思想への精神的近さを本質的に重んじる。
日本人による日本国憲法の受容は、日本の社会学者たちが、女性優位な日本社会や、その一類型である日本の学界において、究極の上位者であるスーパー上位者の欧米諸国の社会思想を真っ先に上手に導入すると、スーパー上位者の権威や力を効果的に身にまとっているとして自分に対する周囲の日本人からの社会的相対評価を飛躍的に向上させることができ、社会的に有利な地位を築くことができるため、欧米諸国の社会思想をそれに対する強力で盲目的な心理的一体感を伴って我先に導入、紹介しようとひたすら競うのと同じ現象である。
女性優位な日本社会では、権威ある無謬性を身にまとっていると日本人が感じる日本国憲法への精神的忖度競争みたいなのが起きているのである。
日本において日本国憲法の改憲が進まないのは、それに対する無謬性信仰、うかつに修正してはいけないという信仰が、権威ある上位者の思想への絶対服従を重んじる女性優位な日本人の間に生まれているからである。
日本人は、こうした女性優位なやり方でしか日本国憲法の受容ができないため、個人の自由独立の重視、権力からの自立といった男性優位な日本国憲法の本質は、女性優位な日本人にとって、ひたすら盲従すべき、表面的にしか理解されていない単なるお題目の状態のまま、見えないままとなっている。
その点、日本国憲法の本質は日本人にとっては実質無効状態である。
アメリカは日本国憲法の導入による日本社会の本質的変革には失敗したままである。
男性優位社会は、女性優位な社会を精神的に支配しようとしても、

男性性そのものが女性優位社会の人々に全く理解、体得されないため、失敗してしまう。
女性優位な社会が、男性優位な社会による支配下でも、その支配の本質的な影響を何も受けずに、ひたすら容易に永続、持続できる本質的理由は、女性優位な社会が、男性優位な個人の自由、独立性を重んじる社会規範を、それへの女性優位同調、一体化、忖度、権威主義的服従でしか受容することができないため、男性性の本質を全面的に無効化できるからである。
これが女性優位社会の世界的強さの根拠である。
女性優位社会が、男性優位な自由独立精神にあふれた民主主義を正しく受容することは事実上不可能で、いくらやっても見掛け倒しで無駄なのである。
女性優位な日本社会におけるアメリカ的、男性優位な民主主義の運用は、いつまで経っても本質の抜け落ちた単なる民主主義ごっこのままになってしまうことが運命づけられている。
これは、男性に本格的に接することなく大きくなった女性がいくら男性に関する表面的な経験、理解を積んでも、男性の本当の気持ちがなかなか理解できないのと理屈が同じである。

しかし、日本社会の中には、日本国憲法の真の必要性を理解している日本人もかなり存在する。
それは、相互同調、一体化、忖度、ご機嫌取りをひたすら偏重する女性優位な日本社会にうまく適応できず、袋叩きにあっていじめられたり、冷たい村八分や差別を受けたりして疎外されている日本人たちである。
こうした日本人は、男性だけでなく、本来女性優位社会により適合的と見られがちな女性にも一定数存在する。
女性優位な陰険ないじめや村八分は女性集団の方が激しい感じである。
彼らは、女性優位な日本社会の中で酷い扱いを受けて窮地に追い込まれている自分たちを精神的に救ってくれる存在として、個人の自由独立を重んじる男性優位な内容の日本国憲法に熱い視線をひたすら向けるのである。
女性優位社会への不適合者は、男性優位社会規範の本質を理解し賛成しやすい。
本来、現代日本社会におけるメインの法律と位置づけられる日本国憲法の真の価値が、日本社会への不適合者、日本社会からの疎外者によってしか正しく理解されないのは大きな皮肉である。

日本国憲法を熱心に信奉しているように見える人にも二種類いて、

一つは日本国憲法を同調、一体化、忖度の精神でひたすら暗記学習して、権威あるスーパー上位者の思想として身にまとい、上位者による権威づけを重んじる日本社会の中で有利な立場を築こうとする、日本国憲法の真の精神を本質的に理解、受容不能な純粋女性優位な日本人である。
もう一つは、そうした女性優位な日本社会に上手く適合できず、ひたすら疎外された結果、女性優位な考えとは対照的な男性優位内容の日本国憲法に本質的理解を示して精神的救いを熱心に求める、女性優位な日本本流の価値観からの外れ者、落伍者の日本人である。

これは、欧米諸国に向かう日本人に、日本の会社や官公庁に上手く所属、適応した状態で、欧米諸国に存在する分社組織に職務ローテーションとかで送り込まれて駐在し、現地の日本人社会にそのまま溶け込もうとする純粋女性優位な日本人、あるいは、先進欧米思想を進んで身に着けることによる、自分自身への権威的な拍付けと、それを利用した日本社会における有利な昇進を狙う留学タイプの純粋女性優位な日本人、さらには、日本社会から疎外されて、あるいは日本社会のあり方に大きな違和感を感じて、逃げるように別天地での生活を何とか始めようとする女性優位社会不適合者の日本人がいるのと同様である。

（初出2020年5月）

欧米フェミニズムの日本社会導入がもたらした結果について。

欧米フェミニズムは、家父長制社会における不適合者でお荷物的存在、精神を男性化された劣化男性扱いの欧米女性たちを、何とか男性優位なやり方で活用することを目標としている感じである。
女性を男性並みの存在として何とか社会的に活用すること、そのために女性の職場進出を促したり、女性の管理職登用を推進するのが欧米フェミニズムの目標となっている。
そこでは、欧米社会における家父長制の維持が前提となっていて、欧米女性が女性性の本質に目覚めて、男性優位家父長制社会を全面否定、敵視するようになり、男性優位家父長制社会の存続を脅かすようになることを必死に回避することが隠れた目的となっているの

である。
欧米フェミニズムが性差別ばかりでなく、公平中立な立場のはずの性差研究を盛んに否定するのも、女社会の研究が進んで、欧米女性たちが真の女性優位社会のあり方を知ってしまうのを必死で予防しようとしているからという側面が大きいのではないかと思われる。

女性優位な日本社会における現状のフェミニズムは、こうした欧米フェミニズムを、そのまま先進国の権威ある反論不許可な思想として、ひたすら女性優位に同調、一体化、忖度して、盲目的に日本社会に導入している。
そのため、欧米女性が持つ男性優位女性像や、社会的弱者の欧米女性を欧米男性並みに社会の中で活用しようとする価値観を、女性優位な日本社会で既に強者、支配者の立場にいる女性たちに対して、有無を言わさず上から目線で強制的に押し付ける結果をもたらしている。
日本のフェミニストたちは、結果的に、性別役割分業の採用で男性と人生コースが別々になることが多かった日本女性を、男性と同じ人生コースを歩む存在にしようと懸命になって、家庭から日本男性や日本社会を支配してきた日本女性の新たな職場進出やキャリア女性化、管理職登用を必死に進めようとしている。

従来、日本女性は、大工道具相当の日本男性を、収入や社会的地位を確保するための道具、奴隷としてひたすらこき使う支配者としての大工のような存在ではあるが、今までは結婚相手の男性と不仲になったり離婚したり、死別したりすると、あたかも大工道具を失って、代わりの大工道具も当面見つからず、何もできなくなって経済的に困窮する大工になる問題を抱えていた。
それを、欧米フェミニズム適用で、新たに女性自身が大工道具化して自ら収入を確保する手段を得ることで、より経済的、社会的地位が安定し、かつ家計管理の権限とかは今まで通り保持して、社会的強者としての立場をより一層強くすることに成功している。
また、職場において管理職になる道が本格的に開けることで、従来の強力な平社員相当のお局様をはるかに上回る圧倒的な影響力を職場で振るえるようになる前提が整うようになった。
ただし、育児休業長期化による職場からの離脱と再雇用困難化の問題を抱えていたり、職場での仕事に忙しくて、従来握っていた子育ての主導権を祖父母とかに委託する必要に迫られる結果ももたらしている。

あるいは、嫁相当の日本女性は、フェミニズムの持つ男性攻撃の側

面を利用して、母親に依存的な日本男性をマザコンだとして強く攻撃し、マザコン男性とは結婚しないと盛んに主張することで、姑と夫を強制的に引き離すことに成功し、姑との同居や、それに伴う姑による嫁いじめを本格的に回避するとともに、姑を名誉男性と断定して、女社会の中の批判対象とすることで、姑の社会的地位を弱め、従来とても弱かった嫁の家庭における権力の飛躍的強化に新たに成功している。
このことは同時に、日本男性が「自分たちはお母さんが大好きだ」と自分たちの母親への心理的好感を社会的に宣言するとか、母親による日本男性支配を社会的に大っぴらに認めて肯定するとか、自分たちの母親への心理的依存がもたらす心理的快感を社会的に肯定するとか、あるいは逆に「自分たちは母親に支配されている！」と社会的に告発することへの口封じとして働いている。
日本男性がこのことを叫ぶと、当該の日本男性が姑の支配下にあることが、嫁相当の日本女性に知られて、マザコン男性であるとして、嫁相当の日本女性から付き合いや結婚を拒否されて、自分の遺伝的子孫が残せなくなる。
日本男性は、あるいは妻から離婚されて自分の子供を結婚相手の女性である妻に連れ去られてしまう。
つまり、日本男性にとって、支配者である母親との精神的一体性を社会的に肯定して主張したり、逆に、母親による支配を社会的に告発することは、人生上のダメージがとても大きいのである。
日本男性はそれを恐れて、声を上げることができなくなり、必死に沈黙するしかない。
日本男性が自分たちの母親との精神的一体性や母親による支配の心理的快さを積極的に主張できなくなることで、嫁相当の今まで弱いとされてきたタイプの日本女性の社会における強さ、支配力が向上し、「社会的に弱い女性を強くする」という、家父長制社会を前提とする欧米フェミニズムの主張内容に忖度できて、日本社会の脱亜入欧のイメージを促進することができた。
また、日本男性が自分たちの母親からの支配に抗議できなくなったことで、全体として、日本女性による日本男性支配は、より確固たるものとなっている。
これは女性優位な世界での生活を強制されている日本男性にとって、さらに由々しい困った問題である。
日本男性の反撃が必要だ。
日本の上位者やその意を汲んだ日本のフェミズムは、女性優位な日本社会で圧倒的な支配力を振るう母や姑の存在を、日本がスーパー上位者の家父長制の欧米先進国の仲間入りをする脱亜入欧国策を推進する上での障害になると見なし、必死になって、その存在を日本

社会の表舞台から見えなくする作業を行っていて、日本のフェミニズムによる日本マザコン男性への攻撃はその典型例なのである。

（初出2020年5月）

日本の右派。日本の右翼。女性優位社会の視点からの分析。

女性優位社会の視点からの日本の右翼の分類

基本的な思想

社会の現状維持か復古を望むこと。保守的であること。
こうした考え方は、男性的社会と女性優位社会とで共通に存在。アメリカにも保守派がたくさんいる。

復古のタイミングに関する視点

日本の伝統宗教である神道との関連　賛成すること。
日本の独立国家化、他国に対する非従属化との関連　賛成すること。
天皇制による日本社会支配との関連　賛成すること。
江戸幕府の漢学、洋学に対する国学。賛成すること。
江戸幕府の日本開国との関連　反対すること。（尊王攘夷。）
明治政府の神道の国家神道化国策との関連　賛成すること。
明治政府の日本の脱亜入欧国策（日本の欧米諸国の仲間入り、列強国化、先進国化）との関係　賛成すること。
明治政府の役人、軍人による直轄支配に対する政治家、政党制による支配。賛成すること。
明治政府の日本の国家勢力の軍事面での対外膨張国策（日本による他国支配）との関係　賛成すること。
敗戦と戦後のアメリカ支配（自由民主主義による支配）との関連　反対すること。（旧日本軍支持で、靖国神社に入れ込むこと。）
戦後日本の経済面での対外膨張国策（一時的経済大国化）との関

連　賛成すること。
欧米諸国による、経済面での日本の対外膨張潰し（製造業潰し）との関連　態度を明らかにしないこと。
戦後の再軍備促進、再度の軍事国化公認の実現促進との関連　賛成すること。
最近の中国の勢力拡大との関連　賛成しないこと。反対すること。

取る具体的な行動

１．
日本の右派は、自分の心理的な入れ込み先の社会集団である自国や自国の軍隊の、以前に勝利していた歴史的状況までひたすら戻る。
勝利していた歴史的状況とは、。
（勢力の拡張）
・社会集団の勢力が拡張し続けた。
（例）自国の勢力範囲の大きさを示す指標の一つである領土の広さが、ひたすら拡張した。旧日本軍により遂行された太平洋戦争の初期段階で、東南アジア方面への領土が著しく膨張した。
・社会集団の勢力が、何らかの事件発生をきっかけに明確に拡張した。
（例）自国が、周囲の他国の領土を併合して、領土的に大きく拡張した。日韓併合。

（能力の上昇）
・社会集団の能力が上昇し続けた。
（例）自国の世界の軍事能力、産業上の能力が、ひたすら上昇し続け、先進国、列強勢力の仲間入りを果たした。自国の脱亜入欧国策の推進による、軍艦製造能力や戦闘機製造能力の、先進諸国からの新規獲得と独自改良の実現とかこと。
（例）自国の能力の高さを示す指標の一つである製品輸出の総額や貿易上の黒字の総額の大きさが、ひたすら拡張した。戦後の高度経済成長。
・社会集団の能力が、何らかの事件発生をきっかけに明確に上昇した。
（例）自国が、周囲の大きな他国に、戦争で勝利し、自分たちが能力面で格上であることを、先進国の諸国に見せつけた。日清戦争。日露戦争。

一方、敗北に当たる歴史的状況は、都合よくひたすら無視する。あるいは、自分の入れ込む社会集団にとって都合の良い歴史的状況のみをひたすら頭の中でピックアップし続ける「歴史的な大本営発表状態」に陥ること。
（勢力の縮小）
（例）太平洋戦争末期の空域において、自国防衛圏の急速な縮小と喪失が見られた。
（能力の低下）
（例）太平洋戦争末期の海域において、軍艦が、敵国からの魚雷命中を避けられずに、どんどん沈没した。

日本の右派は、自分の心理的な入れ込み先の社会集団である自国や自国の軍隊が、以前に勝利していた状況までひたすら戻り、その勝利した状況をひたすら賛美するとともに、その後の負けた歴史状況を、頭の中でひたすら無かったことにする。
日本の右派は、自己や自己拡張先、心理的な入れ込み先の社会集団である自国や自国の軍隊が、以前に成功していた状況までひたすら戻り、その成功した状況をひたすら賛美するとともに、その後の失敗した歴史状況や歴史体験を、頭の中でひたすら無かったことにする。
一般に、女性は、何かの体験で自分が失敗すると、自分が以前に成功した別の体験までさかのぼり、その成功体験をひたすらもう一度やろう、反すうしようととする傾向がある。女性は、あるいは、その後の失敗した歴史的状況や歴史的体験を、頭の中でひたすら無かったことにする傾向がある。日本の右派がやっていることは、まさにこの女性一般と同じパターンである。このことは、日本の右派が女性優位思考で動いている何よりの証拠である。

日本の右派は、自分の心理的な入れ込み先の社会集団（自国や自国の軍隊）による、以前に成功、勝利していた歴史的状況の再現を予期、予感させる行動に対して、無条件で歓迎すること。
（例）日本国の再軍備と平和憲法改正への動きをひたすら歓迎すること。日本国の軍隊による将来の領土再拡張に夢をはせること。

２．
日本の右派は、自分の心理的な入れ込み先の社会集団（自国や自国

の軍隊）による、歴史的な失敗、敗北状況を確認、想起、受容することを徹底的に拒否し、失敗や敗北の原因になった社会集団内の人物や、その行動を徹底的にかばって、無謬扱いして、逆に神格化すること。
（例）太平洋戦争敗戦の責任をアメリカに取らされて戦犯扱いで死んだ国や軍部の人物たちを靖国神社に奉納してひたすら崇めること。

３．
日本の右派は、自分の心理的な入れ込み先の社会集団（自国や自国の軍隊）の体制、行動、行動予定に対する介入や批判を行う存在を徹底的に敵視すること。

（政策的成功や勝利）
日本の右派は、自分の心理的な入れ込み先の社会集団（自国や自国の軍隊）による、成功、勝利したと想定される行動のことをひたすら無条件に歓迎し、喜ぶこと。
（例）安倍政権によるグリーンインパルス戦闘機デモ飛行への賛美。

日本の右派は、自分の心理的な入れ込み先の社会集団（自国や自国の軍隊）による、成功や勝利が約束された行動や行動予定をひたすら無条件に歓迎し、応援する。
（例）安倍政権による東京五輪開催予定への期待と応援。

日本の右派は、自分の心理的な入れ込み先の社会集団（自国や自国の軍隊）による、約束されているはずの成功や勝利、あるいは過去に約束されていたはずの成功や勝利を、介入によって邪魔したり、潰した勢力（自国内部、他国）を、感情的になってひたすら叩くこと。あるいは邪魔をした勢力の破滅を、感情的にひたすら喜ぶこと。
（例）旧軍部の軍事費拡張に反対した蔵相を叩き、その暗殺をひたすら喜ぶこと。

日本の右派は、自分の心理的な入れ込み先の社会集団（自国や自国の軍隊）による、約束されているはずの成功や勝利、あるいは過去に約束されていたはずの成功や勝利を手に入れるために行った行動に対して批判を行った勢力（自国内部、他国）を、感情的になってひたすら叩くこと。あるいは批判を行った勢力の破滅を、感情的に

ひたすら喜ぶこと。
（例）自国の領土拡張に横やりを入れて潰した他国をひたすら叩くこと。

（社会体制）
日本の右派は、自分の心理的な入れ込み先の社会集団（自国や自国の軍隊）が構築した社会体制を、感情的になってひたすら無条件で賛美、崇拝する。
（例）天皇制の体制や天皇の存在を神格化すること。天皇を無条件で敬愛すること。

日本の右派は、自分の心理的な入れ込み先の社会集団（自国や自国の軍隊）が構築した社会体制のあり方を潰そうとした勢力（自国内部、他国）を、感情的になってひたすら叩くこと。あるいは潰そうとした勢力の破滅を、感情的にひたすら喜ぶこと。
（例）天皇制を転覆しようとした共産党の存在をひたすら叩くこと。そうした共産党幹部の獄中死をひたすら喜ぶこと。

日本の右派は、自分の心理的な入れ込み先の社会集団（自国や自国の軍隊）が構築した社会体制のあり方に対して批判を行った勢力（自国内部、他国）を、感情的になってひたすら叩くこと。あるいは批判を行った勢力の破滅を、感情的にひたすら喜ぶこと。
（例）天皇機関説を唱えた学者を、天皇制批判だ、天皇制にケチを付けたとして、ひたすら叩くこと。
（例）天皇制批判を行った民間展示会の主催者や、それを許可した自国の下部行政機関の責任者を叩くこと。愛知県知事を批判。

（閉鎖、排他政策）
日本の右派は、自分の心理的な入れ込み先の社会集団（自国や自国の軍隊）が取る対外的な閉鎖、排他状態を潰そうとしたか、潰した勢力（自国内部、他国）を、感情的になってひたすら叩くこと。あるいは潰した勢力の破滅を、感情的にひたすら喜ぶこと。
（例）欧米列強に対して開国をした江戸幕府を、弱腰扱いでひたすら叩くこと。江戸幕府の滅亡を喜ぶこと。
（例）他国との自由貿易に伴う他国への自国情報流出に反対すること。韓国への自国栽培いちご情報流出を叩くこと。

日本の右派は、自分の心理的な入れ込み先の社会集団（自国や自国の軍隊）が取る対外的な閉鎖、排他状態のあり方に対して批判を行った勢力（自国内部、他国）を、感情的になってひたすら叩くこ

と。あるいは批判を行った勢力の破滅を、感情的にひたすら喜ぶこと。
（例）黒船来航に対して、その存在を排撃する尊王攘夷運動を盛んに行うこと。あるいは運動を行ったこと自体を誇らしく思うこと。
（例）他国との貿易自由化に伴う他国産品の輸入自由化に反対すること。

（私的利用）
日本の右派は、自分の心理的な入れ込み先の社会集団（自国や自国の軍隊）による自分たち個人（下々）への資金等の便宜供与を、ひたすら有難がって、かしこまって拝受すること。
（例）コロナウィルス生活給付金の受け取り。

日本の右派は、自分の心理的な入れ込み先の社会集団（自国や自国の軍隊）による自分たち個人（下々）への資金等の便宜供与を、負担をかけて申し訳ないと思って固辞すること。
（例）コロナウィルス生活給付金の受け取り。

日本の右派は、自分の心理的な入れ込み先の社会集団（自国や自国の軍隊）による資金等の便宜を、個人的な利益のために利用していると想定した勢力（自国内部、他国）や自分たち個人（下々）の誰かを、感情的になってひたすら叩くこと。
（例）困窮者による生活保護申請をたかり扱いして叩くこと。

内面に保持する価値観

１．

自己保身の実現と維持。
自己保身の確実化のため、大きく確実な有力な伝統ある上位の存在との一体化を希望する基本的な感情（国家権力に近い特権階級の上級国民（天皇家との血縁関係がある門閥、閨閥の人たち。天皇家の役人、軍人かその子孫であること。自分は誇りある伝統ある天皇制の続く日本国家の社会的一員だ。）、あるいは一般庶民（自分自身は頼りない、ちっぽけな存在であり、何か大きな存在に頼りたい、そうすることで自分も大きくなったような気分になりたい。国内上位者の日本国家に頼りたいこと。それに加えて、世界的な上位者の欧米先進国にも頼りたい。））

２．

自己の尊厳の保持。
誇り、プライド、威厳、威信、体面の維持へのこだわり（自分が支持する対象が高評価を受けることを望む。低評価を受けるととても腹立たしいこと。日本国勝利の事実や歴史へのこだわり。日本国敗北の事実や歴史を受け入れられないこと。日本国家を評価する指標の数値が高いと喜び、低いと無視する。円高持続を、国家の経済的信用度の高さの表れだとして容認し、経済的競争力低下要因であることは無視。日本の財政はデフォルトしない。）

３．

（自国、国家へのこだわり）

自分自身の、上位者との直接的一体化の重視。自分と国内最上位者との直接的一体化の重視。上位者に反抗、批判する存在の敵視。
国内の上位の存在、上位者（天皇制や日本政府）、日本の国家勢力への無批判の賛成、心理的一体化、心理的依存、忖度と自主的な応援団化。上位者の臣民意識が強い。上位者への批判者を自主的に寄ってたかって潰す私的警察を指向すること。日本国民と非国民、反日的存在の区別。日本国家を敵視して批判する中韓が嫌い。台湾は日本国家と友好関係なので好き。好き嫌いの感情で動くこと。）
日本社会の最上位者である天皇による直接支配への強い欲求（政党による日本政府への介入が嫌いで、天皇直属の役人、軍人の直轄支配が好き。役人、軍人の人事権を握るようになった官邸（役人の総帥）の政治家による支配の積極的な容認。）

自分自身の重視。自分と国家との一体化による、国家の重視。
自分自身の体面保持の重視。自分の心理的に依拠する上位者の体面保持の重視。日本国家の独立国としての体面の重視（敗戦とアメリカの日本占領、日本支配を心理的に受け入れられない派閥（純情、直情派）こと。アメリカ支配に迎合しつつ、こっそり独立の道を探る派閥（現実的、実務的対応派）こと。）
自分自身の勢力膨張の重視。自分の心理的に依拠する上位者の勢力膨張の重視。国家勢力の対外膨張の重視（軍事的膨張と隣国への侵攻、占領支配の重視（過去の旧日本軍の一時的成功の歴史に浸るこ

と。日本の再軍備と、その公認のために必要な平和憲法改正を指向すること。）こと。経済的膨張の重視（過去の経済大国化成功の歴史に浸ること。欧米Ｇ７の一員であり続けることにこだわること。）
自分自身の成功体験の重視。自分の心理的に依拠する上位者の成功体験の重視。日本国家の過去の成功体験を美化してそれに繰り返し浸る、後ろ向きの自己美化感情の保持（軍事大国だったこと。経済大国だったこと。）

（世界の先進的、最上位的存在へのこだわり）
世界の最上位の存在との一体化の実現、維持と、国際的に身近なライバル的存在への心理的マウント取りへの指向。それ以外の存在への無関心と反感、排外心。親和的態度で接してくる存在との関係維持への指向。

脱亜入欧国策の存続への支持
欧米諸国との心理的一体感の重視（先進国の一員と呼ばれたいこと。）
中韓、東南アジア等への蔑視とヘイトの繰り返し（勢力面でどんなに追い越されても、新興国扱いで、先進国とは呼ばない。）こと。
台湾の特別視、友好視（敵視する中国本土への対抗者だからこと。過去の日本領土の住民で、目立った反抗をされなかったからこと。）こと。
その他の外国への無関心か潜在的反感（外国人は信用できない。トルコみたいな親日国とは仲良くしたい。日本以外は、全て海外として一括扱いで、分類とかしない。）

軍事的支配者であるアメリカとの同盟関係の維持、強化への支持。

４．
（自分と同質な存在への心理的一体化と、異質な存在の徹底排除）

自分自身と（血縁的、文化的に）共通、同質な存在との一体化、身内化。自分自身と異質な存在の排除、排外感情。自分自身を批判、攻撃する存在の排除。
自分自身と血縁的、文化的に共通、同質な存在として、民族の存在

を認識すること。民族へのこだわり。日本民族へのこだわり。同じ民族同士の一体感を重視。やはり日本人が良い。外国人が嫌い。外国でも欧米先進国の人たちとは仲良くしたいが、それ以外は排外。中韓とかは嫌い。脱亜入欧国策の持続との関連。

（自分と同質な存在が持つ純粋性、特別性への一方的な信仰とその性質を脅かす存在の徹底排除。）

自分自身の特別視、純粋視。自分の国や民族の特別視、純粋視。基本的な国粋主義感情（日本は他国とは違う特殊、特別な優秀な存在で、唯一性を持っている独立国である。日本への他国の文化的介入を許さないこと。他国文化の介在しない純粋日本文化への憧れこと。閉鎖的、排他的な女流の村落社会慣行との関連。）

日本の左派。日本の左翼。それらが抱える問題。女性優位社会の視点からの分析。

ツイッターで、自分が新たに日本国憲法擁護の内容の書籍を出版したことを恩師や先輩後輩たちにさっそく報告してきましたと、とても嬉しそうにツイートする弁護士の日本男性の事例を見かけたが、これが日本社会で欧米寄りの発言を繰り返す左派の実態なのだと思うと、筆者はかなり違和感を感じてしまう。

日本の左派の人たちは、良くも悪くも、スーパー上位者の男性優位アメリカや西欧に忖度して、上から目線で、女性優位な日本社会の実態の男性優位日本国憲法や欧米思想からのずれ、上手く合わせられていない点をひたすらチェックしまくって一方的に糾弾、告発し、欧米流への修正を要求する思想面での上位者面、支配者面をした陰険な思想警察なのだ。
かつての戦前の反戦思想を取り締まる特高警察と本質は同じだ。
反戦思想の取り締まりが、反欧米思想の取り締まりに変わっただけだ。
あるいは、嫁の不備な点、気に入らない点を上から目線でひたすら糾弾しまくる姑と同様だこと。

しかも日本の左派の人たちの大半は、自分たちは、伝統的な女性優

位な師弟関係や先輩後輩関係の中に安住し、そのことを何の疑問も抱かずそのまま無邪気に肯定している。
彼らは、自分たちの取っている社会行動が内包する自己矛盾に気付いていないし、気付く能力も無いのかもしれない。
日本の伝統的な師弟関係は、弟子による師匠への心理的一体化を伴う一方的な絶対服従を要求される典型的な女性優位な社会関係だ。
日本の伝統的先輩後輩制も、先輩に米つきバッタのようにひたすらペコペコ頭を下げて、甘え、懐き、忖度し、絶対服従すると共に、後輩に対しては、一転してふんぞり返ってひたすら威張り、精神的隷従を要求するもので、日本の家庭における嫁姑関係の世代間連鎖同様、女性優位な社会関係の典型であり、個人の思想の自由の確保を主張する日本国憲法の内容とは真逆だ。
日本の左派は、表向きは男性優位日本国憲法や欧米流民主主義の内容を盛んに主張して、それと異質な女性優位な日本社会の側面をひたすら探しまくって糾弾しつつ、実際には、自分たちが糾弾しているはずの女性優位な社会関係を、自分たちの身内では実際には何の疑問も抱かずにひたすら素直に受け入れ、肯定し、それにひたすら適応して、実際は女性優位な社会慣行にどっぷり浸かり、女性優位な社会行動を盛んに取り、スーパー上位者の権威、威光を盾に大きな顔をして、日本社会の中で社会的地位を確保しているのだ。
これは、他にも例えば、欧米フェミニズムを盛んに教条的に日本社会に導入して、それと適合しない日本社会の男女関係の現状を上から目線で攻撃しまくり、ひたすら自分たちの思い通りに欧米流に矯正させようとする日本のフェミニズムの主張者たちも、大学とかで女性優位な伝統的師弟関係のもとでひたすら欧米フェミニズムのお勉強や修行に励んでいる点、同様である。
彼らは、自分たちが実際のところ女性優位な伝統日本社会でスーパー上位者の権威を利用してメジャーな支配者の立場に立っている、実際は女性優位な考えに染まったままの伝統的日本人の一類型に属していることの自覚が無い。
ひたすら自分たちは日本流とは違う欧米流の先進的な考え方を身に付けたんだ、従来の女性優位丸出しの伝統日本人とは違うんだと思い込んでいる。
彼ら日本の左派は、権威あるスーパー上位者の欧米先進思想を崇拝、信奉することで社会的上位性を確保した特権的女性優位身内集団の構成員なのだ。
自分の考えが根本的に女性優位なまま、男性優位社会思想を女性優位なやり方で身に付けようとした結果、主張は男性優位だが、実際の社会行動は女性優位な、女性優位な左派日本人が誕生するのだ。
彼らの男性優位主張は、真の男性性、男性優位内実を伴っていない

偽物だ。

日本の左派の人たちの中には、自分たちの主張を日本国内でとにかく通しやすくしたり、自分たちの社会的居場所を女性優位な日本社会の中に何とか確保するため、あくまで目的実現のための手段だと割り切って女性優位な社会慣行をとりあえず一時的、暫定的に受け入れているだけの人もいるかも知れない。
しかし、それだと左派思想の本質である男性性が、女性優位な社会慣行の中で暮らし続けることで、心の中で次第に自然消滅してしまって女性性だけが残り、見掛け倒しの切れない刃物を振り回すだけの状態になってしまうと考えられる。

伝統的な女性優位な師弟関係や先輩後輩関係を素朴に肯定しているかどうか、その中で問題なく適応し続けているかどうかが、欧米寄りの主張を盛んに繰り返して伝統日本を攻撃する左派の人たちが、実際には女性優位かどうかを判定する上での大きな手掛かりになる。
日本の左派の中の一部には、女性優位な日本社会に本格的に不適合で、日本社会から引きこもったり、海外移住とかしながら、日本社会の女性優位性をひたすら憎悪し攻撃する、女性優位性から外れたタイプの人もいるからだ。
ただし、その場合も、日本社会不適合の彼らが欧米思想の先進性、権威を利用して、日本社会に対して上から目線になっている、隠れ女性優位な面があることは否めないが、自分自身の女性優位性の自覚が何も無いまま、女性優位な日本社会を上から目線で糾弾する女性優位左派の日本人たちよりはずっとましだ。

また、見かけ上女性優位な日本社会を肯定している人たちの中には、女性優位な日本社会の、周囲への同調、一体化、忖度をひたすら要求される人間関係のあり方に不適合な感覚や疲れる感覚や違和感を内心で抱きつつ、あるいは内心で女性優位な日本社会に自分は根本的に合わないと絶望しつつ、生活のために、何とか食べていくために、やむを得ず、そうした本心をひたすら隠して、学校や会社といった女性優位な日本社会に追い出されないように表面的にでも何とか迎合し続けるしかないと、悲壮な覚悟を決めて毎日必死になって一生懸命、女性優位日本社会への終わりない表面的適応を試行錯誤している疑似女性優位な日本人、潜在的な女性優位不適合の日本人も一定数いると考えられる。
欧米先進思想を身に付けて特権的優越感に染まった女性優位な左派の日本人たちは、そうした見かけ上日本社会にひたすら適応し続け

るしかない、疑似女性優位な日本人たちの辛い気持ちを理解できず、救済の手も打てない、見掛け倒しの役に立たない存在だ。
日本社会の女性優位性からの疑似女性優位な人々の解放を目指す、本質的な脱女性優位を果たすことを可能にする政策や、その実現を目指す社会運動が、日本社会には新たに必要だ。
あるいは、日本社会の女性優位性に対する批判がもっと公然となされることを可能にすべきだ。
日本の左派から女性優位性を徹底的に除去する方策を考えることも検討すべきだ。
日本社会の男性化の推進が、日本のマスキュリズムの目標の一つになるべきだ。
世界中に存在する男性優位社会に、女性優位な社会慣行に苦しめられている日本男性の救済を求めることも必要だ。

（初出2020年5月）

日本政府（上位者）は女性優位である。

女性の社会関係、あるいは女性優位な社会関係の基本は、上位者に対して、自らの保身を最優先して、異を唱えずひたすら同調、一体化、忖度、取り入り、ご機嫌取りをしてペコペコ一方的に隷従するとともに、自分が尊敬できると考える上位者には心理的にひたすら依存して、頼り、崇め、しきりに助けてもらおうとする一方で、下位者に対してはふんぞり返って威張りまくり、当然のように隷従を要求し、下位者が異を唱えると自分のソフトなメンタルがすぐ容易に傷ついて、取り乱して逆上して怒り、下位者に対して陰険で残忍で激しいいじめ、虐待、報復をしつこく行う、というものである。
女社会、あるいは女性の社会関係では、上位者と下位者の間の専制的な支配隷従関係の連鎖がひたすら起きている。

この女性優位な社会関係は日本の家庭における嫁姑関係に顕著に表れている。
上位者の姑は下位者の嫁に上から目線で一方的に説教しまくり、嫁に対して重箱の隅をつつくようなケチをつけまくってひたすら攻撃し続け、下位者の嫁からの異議申し立てを心情的に決して許そうとしない。

嫁はその姑からの仕打ちにろくに反論ができず一方的に隷従し続ける。
そして、嫁はいざ自分が姑の立場になると一転して、新たな嫁に対してひたすら高圧的でふんぞり返る態度を取るようになる。
姑による嫁の支配の世代間連鎖が起きている。

この女性優位な社会関係は、日本社会に広範に見られる先輩後輩制にもそのまま当てはまっている。
上位者の先輩が下位者の後輩に対して、ひたすら偉そうに高圧的に威張って、後輩が自分に隷従することを当然のごとく要求し、下位者の後輩は上位者の先輩にひたすら忖度し、取り入って同調し、甘え、懐いて必死に同調、一体化しようとする。
そしてその後輩は、さらに自分に対して下位者の後輩に当たる人間に対して、上位者の先輩としてひたすら上から目線で威張りまくるのである。
先輩、後輩の支配隷従関係が世代を追って連鎖している。

この女性優位な社会関係で動いているのが、日本社会における上位者で上位者である日本政府である。
日本の上位者は、自分より上位のスーパー上位者の欧米諸国、特に実効支配者のアメリカに対して、異を唱えることが怖くてできず賛成ばかりして、先進国だと持ち上げて、ひたすら忖度してペコペコ同調し一体化、従順の意思を表して、ご機嫌取りをして隷従しまくり、その主張にひたすら賛成しまくる。
一方、自分より下位者の日本国民に対しては、官尊民卑の特権者気取りでふんぞり返ってひたすら威張り、自分の政策を自分たちの身内だけで決めて国民に一方的に押し付けて反論は一切受け付けない。
国民を弱者扱いして一方的に隷従を要求すること。
女性優位な上位者は、下位者の国民が自由意思で動くことを、下位者が上位者の許可を得ずに勝手なことをやっているとして許さず、強力な社会統制をかける。
日本の上位者は、国民が自分の意志で行動して窮地に立つとすぐ自分勝手な行動をした報いで自己責任だと決めつけて、ちっとも助けようとせず、ひたすら放置する。
日本の上位者は、困っている社会的弱者に対してひたすら冷淡で、経済的困窮者の生活保護請求とかを下位者のくせに上位者にたかるのは厚かましいとして、なかなか応じない。
女性優位な日本の上位者は国民がその政策に異を唱えると心情的に容易に傷ついて、直ちに非情で苛酷な弾圧を始める。

日本国民はそれが怖くて仕方がないので、必死になって従順な態度を取る。
中には、上位者に積極的に忖度して、上位者の政策に従わない他の国民の存在を上位者に密告して、上位者に処罰させたり、自分たちで制裁を加えようと、積極的に上位者の手下として自主的に動く国民も多い。
上位者の政策をひたすら擁護して上位者の応援団、喜び組になる国民も多い。
日本国民が日本の上位者に対抗するには、唯一上位者に意見をできる立場であるスーパー上位者の欧米諸国の取る、日本国民の声を代弁する形の、日本の上位者を批判することに当たる内容の政策の実例を国際ニュース報道とかから何とか引き出して、それを引き合いに出して、上位者を批判して、上位者をスーパー上位者に従わせることによって日本国民の意見を何とか通す道しか残されていない。
そして、日本国民自体もしょせんは女性優位な存在なので、国民の中での上位者、優位者、上級国民がひたすら威張って大きな顔をして、下位者に対して一方的隷従を要求し、下位者はそれにひたすら忖度して、迎合して従っていくしかない。
事業発注の元請け会社と下請け会社の関係とか、会社における社主と社員の関係、師弟関係、上司と部下の関係、正社員と非正規社員の関係とか、すべて女性優位な社会関係に従っていること。
そして、いかにも女性優位らしく、上位者と下位者との間の専制的な支配隷従関係の社会的連鎖が当然のように起きている。
事業発注の一次下請け、二次下請け、三次下請けの支配隷従関係の連鎖とか典型的であること。

皮肉なことに、現状の女性優位な日本社会で、上位者を含めた日本社会の性格を女性優位と呼ぶことは、実質許されていない。
なぜならば、スーパー上位者の欧米諸国、アメリカは典型的な家父長制社会であり、自分たちの男性優位な社会体制を脅かす女性優位な考え方に対して否定的であるからであり、上位者の日本政府も日本国民もその意向にひたすら忖度して一方的に従うしかないからである。
また、上位者の日本政府が「脱亜入欧」の国策、日本社会を、遅れて弱い見下しの対象としての東アジアから脱出させて、欧米先進国の一員の地位に仲間入りさせようとする政策を伝統的に推進していて、その一環として日本社会が欧米諸国並みの家父長制社会に見えるようになることを必死で推し進めてきており、一方で日本の上位者と日本国民との関係が女性優位なまま維持されていて、上位者の上位者の決めたスローガンに下位者の日本国民が忖度、迎合して、

上位者と日本国民が一体となって「日本社会は家父長制である」「日本男性は強い」「日本女性は弱い」と同調して、その内容が女性優位な日本社会の実態に全く合っていなくても、ひたすら見て見ぬふりをして、ひたすら念仏のように全員で唱和し続けるしかなくなっているのである。
これに反する「日本社会は女権、母権社会である」「日本男性は弱い」「日本女性は強い」という主張をすると、上位者からも日本国民からも、スーパー上位者と上位者の両方に対して同時に異を唱えるとても危ない人、異端者という扱いを受けてしまい、ひたすら無視され、嘲笑され、存在自体を消されたのと同じ状態に置かれてしまう。
特に、この主張をすることで、上位者の上位者のスーパー上位者に反対することになってしまうことが致命的である。
上位者に忖度、隷従する日本の右派だけでなく、スーパー上位者に忖度、迎合して、その権威を利用して、返す刀で、スーパー上位者に対して相対的下位者に当たる日本の上位者を批判してきた日本の左派や、上位者に内心批判的な日本国民からも、スーパー上位者を批判するとは何事だ、とっても危なくて非常識な行為だということで拒否されてしまう。
日本では、スーパー上位者と上位者の両方に同時に異を唱えると、とたんに言論の自由が全く無くなってしまい、日本国内での居場所も失われ、引きこもり生活をするか海外逃亡するしかない。
つまり、スーパー上位者のアメリカが主導した日本国憲法で、日本では言論の自由が保障されていると表向きは必死に言われながら、スーパー上位者と上位者による「世界社会のスタンダードは男性優位な家父長制社会だ」「日本社会は既に家父長制だ」「日本社会は家父長制になるんだ」「日本男性は家父長で強い」「日本女性は家父長の日本男性に従属して弱く、社会的被害者で差別されている。性差別反対！」「弱い日本女性を日本男性並みに、その社会的地位を向上させよう」という公式スローガンを完全否定する、「日本社会は女性優位である」「日本社会は女社会である」「日本社会は女性が上位者で強く、男性は下位者で弱い」「日本女性が社会を支配している」「日本の母や姑は特に強力な社会的支配者である」と主張する言論の自由は存在しない。
、例えその言論の内容が社会の実態に適合していると思っても、一切口走ってはいけないのである。
上位者への批判を許容しない女性優位な日本社会では、事実上、何かを主張するには、その内容がスーパー上位者と上位者のどちらかには必ず忖度、迎合しないといけないという強力な言論統制がかかっている。

女性優位な日本社会では、社会関係が女性優位であるがゆえに、自らが女性優位であることを認める自由が実質的に消失している。

日本の上位者は「脱亜入欧」の国策と、それに伴う「日本社会は家父長制で、日本男性は強く、日本女性は弱い」とするスローガンを日本国民に対して盛んに掲げている。
しかしそれは、自由で公正な男女の性差研究に対する、国策による露骨な強制力を持つ介入であり、出てくる研究成果を一方的に歪曲し、男女の社会的性差に関する社会的真実への到達可能性を閉ざす、有害な内容で、社会的禁じ手であり、今すぐ是正されるべきである。
女性優位な日本社会で、社会的に弱いはずの日本男性がしきりに自分たちの家父長的性格、自分たちの社会的強さ、社会的優位性をひたすら主張してそれに安住し、一方、社会的に強く、支配者であるはずの日本女性が、ひたすら自分たちの社会的弱者性、社会的劣位性を主張している現状は、はた目からは、どう見ても異常な、狂った状態である。
しかもそのことに日本国民が上位者から洗脳されて誰も気付けないか、誰かが気付いて指摘しても、上位者の国策に女性優位な態度で同調、忖度する他の日本国民（右派、左派両方）から社会的にひたすら無視され、否定され、冷笑され続けるようになってしまっている状況は直ちに解消されるべきだ。
あるいは、日本にとってスーパー上位者の欧米諸国も、自分たちの社会の家父長制や、男性優位や女性の劣位性を前提としたフェミニズムや、性差別反対のスローガンのもとに自由な性差研究を勝手に抑圧するネオリベラリズムの、他国や世界社会への強引な押し付け、押し売りを直ちに止めて、世界が男女の社会的性差の真実や、より説明力のある学説にたどり着けるように、心を入れ替えて協力すべきだ。
世界には、男性が強い社会もあれば、女性が強い社会もあるということへの共通認識が、世界的に持たれるべきだ。
人間が男女の社会的性差についてより自由に深く探求できるようになることが、男女の相手に対する相互理解を促進し、世界の人類にとって真の利益につながるはずだ。

（初出2020年5月）

社会的性差と日本社会、世界社会

日本社会が必死に先進国、後進国の区別にこだわり、日本社会のことを、いくら落ち目になって没落しても必死になって先進国と呼び続け、あるいは中韓を新興国呼ばわりして、中韓が自分たちより優越しても先進国扱いを必死になって避けるのは、国々の間の相対評価、偏差値評価にこだわり、自分が周囲の中で相対的に上位にあるとして周囲にマウントを取ろうとしていることを示しており、まさに女性優位な思考である。
あるいは、日本がかつて劣等と認定した女性優位な中韓の日本追い抜きを認めることで、日本が中韓に対してマウントを取れなくなってプライドを傷つけられることを必死で回避する女性優位な行動である。
また、日本や中韓のような女性優位な社会が保身第一でチャレンジ精神に欠けているため、積極的に危険に対してチャレンジする男性優位な社会に先進性の面で絶えず先を越されやすく、ある意味絶えず後進的でそれゆえ弱体な性格を背負っていることへの負い目も感じられる。
かつての女性優位な中国が男性優位な欧米諸国の侵攻でいったん没落したのは、このことが原因だからだ。
日本が欧米諸国の文化の見境の無い必死の導入、物まねとその微調整や改良をひたすら行うという女性優位な行動を続けることで高い製品完成度を見せて、男性優位な欧米諸国に対して十分な競争力を付けて世界の強国となることができることを示したことが、日本以外の女性優位な諸国、特に中韓にとって、男性優位諸国を上手に攻略し優越するための世界的な先例、手本になっていることは確かである。
このことは日本にとっては誇るべきことだが、同時に今の衰退する日本にとって、実質過去の栄光となってしまっていることも事実である。

女性優位な社会や女性優位な国は、世界の強国になるために、日本みたいに必死に社会の家父長制化を女性優位なやり方で情緒的に目指して男装の麗人にならなくても、女性優位な素顔や姿をさらけ出したままで十分世界的に成功し、世界の覇権も十分取れることが、女性優位な中国の世界的な躍進で改めて判明した。
このことで日本社会が家父長制ごっこや男装の麗人を続ける必要性がもはや無いこと、意味をなさないことが明らかとなった。

男性優位社会規範の女性優位な丸呑みが、明治時代以降、日本では起きている。
ドイツ的な大日本帝国憲法導入がそうである。
あるいは、戦後の日本における実質アメリカ製の日本国憲法の受容がその典型である。
しかし、情緒的な丸呑みの過程で、本来の男性性が消失してしまい、その効力が骨抜きになって、意味の無い条文と化している。
女性優位社会日本の男性化は、実質的に全く実現できていない。

女性優位な日本社会は、昔ながらの上位者と下々の日本国民の関係、および新たにやってきたスーパー上位者の欧米諸国による日本の上位者と日本国民への優越、という形で表した方が、わざわざ欧米民主主義を表面的に持ってくるより、ずっと効率的、効果的に説明できる。

日本社会で、例え共産主義革命みたいなのが起きて、天皇制廃止とかが起きても、日本人は、しょせんは女性優位でしか社会行動できないので、革命後も新たな上位者がひたすら強圧的に威張って、下位者に向かって一方的に命令を下し、上から目線で説教をし、下位者はそれに対してひたすら忖度して、ご機嫌取りし、隷従するしかない、従来の上位者と下々の社会体制が再生産されるだけで、社会的に新味は特に何も無いだろうｊ。
社会を革命しても、社会を新たに統率する上位者が有能であるかどうかしか違いが無く、無能な上位者が新たに来る可能性もとても高い。
そして、革命が起きた後も、上位者や周囲への同調と一体化、忖度がひたすら横行する今まで同様の代わり映えしない、今までの社会体制の二番煎じにしかならない上位者の独裁状態の女性優位社会が続くだけだ。
革命するにしろ、しないにしろ、上位者、、指導者の有能性をいつでもきちんと確保できる社会的仕組みを、日本社会は早く作らないとダメだ。
前例、、しきたり暗記ばかりに長けている人を役人に登用する試験制度は問題があるし、議員になるのが世襲の既得権益になってしまっているのも良くない。
古くなった前例、しきたり、既得権益の固定化による社会の弱体化は、女性優位社会の欠点であり、何らかの形で、植物の根切りみたいに、くたびれた社会のしきたり、価値観や既得権益をその都度ばっさり切る措置が、女性優位社会を活性化するためには定期的に

求められ、日本も再びその時期が来ているのである。

女性優位社会による男性優位社会の支配は、以前から、例えば、ロシアによるモンゴルへの支配の仕返しとか、ロシア（ソビエト連邦）による東ドイツ支配とか北欧バルト三国支配とかいくらでも存在する。
世界が男性優位社会による一色支配で、男性が世界で普遍的に強く、女性が世界で普遍的に弱いという考えは、欧米諸国のような男性優位社会による自分たちの勢力をアピールするための広告宣伝に過ぎない。
脱亜入欧国策を推進する家父長制指向の強い女性優位な日本社会はその考えを何も考えず、女性優位な発想で勝手に鵜呑みにして盲信しているだけなのだ。
世界では、女性が強く、弱い男性を支配している地理的エリアも農耕民の主流なエリアを中心にたくさんある。

日本のような女性優位社会が、日本国憲法のような男性優位社会規範を、いつまで経っても実質的に理解できず、体得できず、導入できないまま、お経のような感じでひたすら暗記学習しているのは、女性が男性心理のことをいつまでも理解できないのと同じである。
同様に、男性優位社会も女性優位社会のあり方を本質的に理解することが難しいと考えられる。
男性が女性心理を把握しにくいのと同一である。
欧米諸国は日本社会や東アジア社会のことを権威主義的、集団主義的とは捉えているものの、日本社会や東アジア社会の表面的な活躍者が男性メインのこともあり、あるいは日本社会が家父長制の振りを盛んにしていることもあり、女性が日本社会や東アジア社会の真の支配者であることに気付くことがなかなかできないでいるのである。
このことは男女の社会的性差の存在を明示している。
この現実を男性優位社会に気付かせることが、世界の社会的性差研究の進展にとって重要である。

日本男性が、明治以来、長期にわたって家父長制の欧米諸国の男性優位社会規範にじかに接し、その内容の本質を理解、体得して、自らの心理を真に男性化して真の家父長として覚醒する機会がいくらでもあったのに、今なお相互同調、一体化、上位者への忖度といった伝統日本的な女性優位な社会規範にどっぷり浸ったままで、そこからちっとも抜け出ることができず、女性優位な存在であることを続けて、その状態に満足してしまい、これまた女性優位なままの日

本の上位者の脱亜入欧国策の後押しで、見掛け倒しの疑似家父長みたいな存在になって表面的に威張りつつ、母親とか日本女性への精神的依存を隠せずにいて、劣化女性みたいな存在のまま、日本女性の実質的な支配下にはいったままなのは、筆者としてはとてもふがいなく、情けなく感じる。
日本男性が、なぜ、生物的な性別としては男性で、女性に対する種付けの性的衝動とかは強く持ちながら、取る社会的行動がことごとく女性優位になってしまい、欧米諸国のような外部家父長制社会が上位者となってせっかく日本国憲法のような男性優位社会規範を直接的にもたらしてくれたのに、その内容の本質を理解、吸収できず、女性優位な存在のまま留まることになってしまった理由は何なのか、深く考える必要がある。
考えられる理由としては、日本男性が生育時に母親によって、強力な母子癒着状態を持続させられるとともに、その後の子育てを母親が独占することで、社会行動面での男性性を除去されること、、および日本の学校教育で、師弟制や先輩後輩制のような女性優位な価値観、社会規範を一方的に強力に注入され、男性優位な自由独立行動を取ると、協調性が無いとして女性優位な教師たちから強制的に矯正させられたり、既に女性優位化している他の生徒や学生から除け者扱いでいじめられるので、どうしても男性性を喪失せざるを得ない。
あるいは、会社や官公庁といった職場や、町や村といった地域社会の社会慣行が、どこもほとんど、所属集団との全人格的な同調、一体化、隷属を強制される伝統的な女性優位な前例、しきたりにひたすら従って行動することを要求されるため、何とか生計を立てて生活していくためには、精神を女性優位化せざるを得ない。
また、日本女性とのデートや結婚によって、相手の日本女性からは、経済力と筋力や下僕としての奉仕力みたいなのをひたすら求められ、家計管理の権限とか日本女性に握られて、妻から夫への小遣い制に甘んじて、妻に精神的に従属して生きることを強いられ、子育てからも疎外されて無力な存在のまま、表向きは家父長扱いされておだてられつつも、家庭内で女性優位か子供のままの感じで振る舞うことを強制される側面もある。
日本男性にとって、欧米諸国からの家父長制導入が、実際のところ、上から一方的に与えられた家父長制になっていて、真の家父長になることによって男性優位な自由独立性を発揮できる可能性が、日本社会で支配的な女性優位な社会規範によって社会的に否定され、閉ざされたまま、見掛け倒しの名目的家父長制、疑似家父長制としてひたすら表向き女性優位な日本社会を欧米先進国風に見せる看板みたいな役割しか果たしていないところが問題だ。

今のままでは、日本男性には、女性優位なままやたらと威張り、強がり、周囲に対して格好付けをして、粋がるだけの、ひたすら人生空回りの残念な道しか残されていない。
日本男性にとって、自分の母親は、実際のところ、自分の息子に対して付きっ切りで密着状態の子育てをすることで、周囲への同調、一体化、忖度の重視、事なかれ主義といった女性優位な精神を息子に対して強制的に植え付け、そのことで息子自身が持っているはずの自由独立の精神やチャレンジへの精神を強制的に消去、無効化し、息子の精神をすっかり女性化させ、劣化女性のような存在にさせて、女性優位社会における無能な社会的弱者、女性の社会的奴隷の地位に転落させ、息子を母親自身の自己実現の道具として、精神的に操縦し続け、一生息子に取り付いて精神的な支配を続ける存在であり、息子の男性優位精神の保持や男性優位人権保持という点では有害極まりない存在である。
ところが、そのように母親に自分の精神をすっかり女性優位化されてしまった日本男性は、そうした根本的な問題に全く気付けなくなり、かえって母親に対して強い愛着や依存心、懐き、慕い、甘えの心、母親が自分を付きっ切りで可愛がって献身的に世話して育ててくれたことへの恩義の心、感謝の心、母親への恩返し、親孝行の心、母親への忠誠心を強く持つようになり、母親の全面的支持者、母親至上主義者、母性への熱心な信奉者となり、「お母さん大好き！」とひたすら強く思うようになるのである。
女性優位化した日本男性は、その延長線上で、社会的に母親代わりになる存在をしきりに求めるようになる。
日本男性は、自分の姉妹とか妻とか娘とかの日本女性に対して強い依存心や自分のことを母親のように世話してくれることへの強い欲求を内心持ち続ける。
日本男性は、日本女性による日本男性への母性的可愛がりや世話焼きに否定的な、日本女性の精神の女性性の否定と欧米家父長制的な男性化、日本女性の欧米男性優位な社会的活躍を、スーパー上位者の欧米諸国への女性優位な忖度によって盲目的に推進する、日本社会の脱亜入欧と家父長制ごっこ推進の社会的象徴としての日本の欧米流フェミニズムに対して強い敵意を持って否定、攻撃の対象とする。
日本男性は、あるいは、会社のような所属集団のメンバーや、尊敬できる先生や先輩のような古参者、社会的上位者に対しても、男女を問わず、しきりに懐き、心理的に取り入ろう、気に入られようとする。
そして、日本男性は、日本社会は欧米先進国の一員を目指して、欧米諸国と同質化し、家父長制になるのだとする、女性優位な上位者

の人為的に設定した社会的建前にひたすら女性優位な態度で忖度し、必死に合わせようとして、自分が内心強烈に保持する母親や女性への依存心を、表向き必死になって隠ぺいして、欧米流の家父長になりきったような感じで、家庭内や所属集団内で女性に対して必死になってひたすら威張り、女性に対して居丈高な支配的態度を取るのである。
日本女性もそれに合わせて、女性優位な日本社会の主宰者、社会規範の決定者、社会の支配者という本性を必死になって隠し、日本社会が母権社会であることへの言及を表向きひたすら避け、男性に比べて表面上は下位者であるかのような社会的演技をひたすら取り続ける。
すると、自分たちが模範とするスーパー上位者の家父長制の欧米諸国から、日本社会は男性優位だ、女性差別的だ、もっと女性の地位を男性並みに向上させるべきだという、ありがたいお言葉と評価を受け、日本社会の家父長制化が見かけ上成功していることへの肯定的なフィードバックが得られて、日本の上位者も日本男性も日本女性も欧米的になれたと喜ぶ。
日本男性の母性礼賛、自分に対する母親や母性的存在による支配への根本的賛成、同意、積極的な受け入れと、表向きの家父長的社会行動を一生懸命取ることとの両立が起きる現象、そして日本男性は、本来男性なのにも関わらず、母親による支配で精神が女性優位化してしまうため、家父長制の本質の理解が不可能になり、個々人の精神の自由独立に基づく男性優位権力の行使能力を喪失して、女性優位な社会規範の下で、疑似家父長、偽物の家父長の状態で、社会的弱者として過ごす羽目になる現象は、こうして起きているのである。

ナチスドイツの男性優位な権威主義、全体主義は、日本の女性優位な権威主義、全体主義とは、一見、上位者への下位者の盲従、人々の行動の社会全体での一斉化の発生という点で共通だがその中身は大きく異なっている。
ドイツ社会に以前から官僚制のような形で存在する、下位者の上位者への合理性、論理性を伴ったドライで非情緒的、道具的な服従の心理をベースにしつつ、人間に対する冷徹で理性的、科学的なアプローチによる人間の人格を完全にコントロール可能にする公衆演説等の技術の生み出しと、その技術の現実社会への社会全体への適用がナチスドイツによる試みであり、まさに男性優位なやり方でのアプローチでの権威主義と全体主義の実現である。
このアプローチを採用したナチスドイツが強国化したことで、こうした人格コントロール技術の開発は、社会的にかなり成功した訳で

ある。
この試みは、ナチスドイツの敗戦で社会的に封印されたが、復活の余地は残されている。
日本のように、情緒的で非科学的アプローチで、女性優位な人々の、上位者も下位者も共通に持つ、メンタル面での感情的な相互同調、同一化傾向と異質者排除傾向の強さ、あるいは下位者による、自分が保身して社会的に昇進するために上位者への忖度、ご機嫌取り、懐きを行う傾向、あるいは反抗者を自主的かつ積極的に排除する傾向、自分より下位者に対して自分への一方的な隷従の強制を行う傾向の強さに全面的に乗っかって、日本社会全体をひとまとめにして動かすのが女性優位な日本社会の権威主義、全体主義である。
つまり、日本の権威主義、全体主義は、女性の行動様式が基本になっている訳である。
こうした女性優位な権威主義、全体主義は今なお、日本社会において、旧日本軍の敗戦によってその存在を表面的には否定されつつも、実際には強固に存続している。
日本社会のこうした面を、女性優位という表現は必死で避けつつも、今なお臆面もなく肯定する日本社会の右派ばかりでなく、日本社会のこうした権威主義、全体主義的側面を否定する日本の左派も、実際にはスーパー上位者の欧米諸国への忖度と同調と、日本の上位者その支持者たちに対する上から目線での批判、身内集団内での意見同調のための厳しい相互監視や規制と異論を唱える者の徹底的リンチ、排除を行っていて、まさに女性優位な権威主義者、全体主義者そのものなのである。
日本の戦前、戦中のファシズムは、ドイツのファシズムを必死に真似た面もあると考えられるが、ドイツのファシズムの男性優位本質は、女性優位な日本には結局理解不能なままで終わり、日本のファシズムは、ドイツのファシズムとは別物のままだったのである。

女性優位な日本男性は、上位者の脱亜入欧国策による日本社会の家父長制化推進の流れに乗って、家父長気取りで盛んに威張っている一方、本来持っている日本女性への心理的な依存心の対外的な発露、すなわち母親や妻、娘に公然と甘えること、女性に対して心理的に弱者、下位者のままでいること、子供っぽいままでいることを表明することを社会的に禁じられた形になっている。
日本男性が、こうしたことを表明すると社会的に一斉に非難を浴びてしまう。
日本男性が自身の弱者性を表明することで日本社会が引き続き女性優位であり、本当の支配者が女性であることが対外的にばれてしまうからだ。

また日本男性が伝統的に可能であった、自身の結婚後の母親との同居の持続も、そのことで不利益を被ってきた嫁相当の日本女性による猛烈な抗議のせいで実質不可能となってしまっている。
女性優位な日本男性は、日本政府の脱亜入欧国策によって、家父長制扱いされて一見社会的強者として振る舞いつつ、自身の抱える真の弱者性を周囲の社会に向けて告白することが出来なくなっている。
日本男性は、日本社会の中で、表面的にひたすら強がって見せるしかない。
日本女性の社会的強者性と、日本男性の社会的弱者性は、日本社会における暗黙の了解事項でありつつ、決して公表してはいけない公然の秘密なのである。

（初出2020年5月）

日本社会と役人支配

日本人の多数は政治的無関心である。
右派でも左派でもない無党派層である。
あるいは政党、政策への意見表明、支持表明を回避すること。
それは政治的中立指向であることを意味する。
日本人は、政府の政策決定における政党や政治家の介入を心の底では望んでいないのではないか。
脱亜入欧で欧米諸国の事例を一時的に導入しているだけだこと。
日本社会で政治的中立を指向する、日本政府を動かす存在といえば昔も今も役人である。
日本人は役人支配指向の人々である。
明治時代以降、日本では支配者の上位者と言えば、天皇家とその家来の役人である。
役人の人生は、前例、しきたりにひたすら従うリスクの無い事なかれ主義の人生であり、女性優位な人生の典型である。
役人の人生は、女性優位な日本社会の理想の人生である。
日本人は、何か主張しようとすると、いろいろな人に配慮して、結局、何も政治的主張ができなくなってしまう。
日本人のその傾向に政治的中立性を本質的に指向する役人による社会の支配がぴったり合致している。

日本は本質的に役人支配向きの社会である。
日本社会は、日本国民が何でも役人にお任せで、適当に上手くやってねの社会である。
日本では役人に対する社会の評価、信頼感が高い。
役人は日本人にとって理想の職業である。
日本の役人は、初発の給料が低めだが、社会的な影響力がたくさん持てる。
日本の役人は、上位者の一員として、社会的に威張れるし、天下りのような役得が多い。
日本社会では、役人になると、上級国民と結婚しやすく、社会階層の向上が期待できる。
上位者の権威に弱い日本人は、その点に憧れる。
日本人は自分も権威と支配力を持った上位者的存在になりたいと心の底で思っている。
日本政府を社に例えると、政治家はしょせんは非正規社員扱いだが、役人は正社員だ。
日本では、伝統的な高級役人輩出の大学が東京大学で、東京大学への日本人の信仰が根強い。
東京大学は、今なお日本国内で一番優秀な大学と見なされている。
日本では東京大学に合格したがる人やその親が今なお多い。
日本人は何のかんの言ってみな役人になりたがる。
日本における国会の答弁は役人の振り付けに完全に依存している。
日本社会では、国会議員みたいな政治家も役人ＯＢ、役人ＯＧが多い。
日本の政治家には、役人の直系子孫も多く、安倍晋三首相もそれに該当する。
安倍官邸の支持率が高めなのは、役人の人事権を持っている面もある。
安倍官邸は、日本人には、政治家というよりも役人の総帥と見えているのではないか。
日本において、かつての天皇制の栄光を支持する人は、天皇の家来の役人支配を肯定する。
政府与党の自民党も役人出身者が多い。
日本は昔も今も役人天国である。

欧米流の議会制民主主義が日本とかの女性優位社会で上手く働かない理由は何か？それは、欧米流の議会制民主主義が、クローズドな議場を強く指向する女性優位社会に対して、男性優位なオープンな議場を強制しているからだ。
オープンな議場は、男性優位な欧米諸国による世界支配の名残りで

ある。
女性優位社会がわざわざ合わせる必要は本来は特にない。
日本政府が脱亜入欧国策で一生懸命導入を試みているだけだ。
クローズドな議場を指向する女性優位な日本において、オープンな議場が今後も実質的に機能することは多分無い。
日本の国会でのオープンな議場は、社会的に有害なので本当は止めた方がいい。
日本のオープンな議場では、役人による表面的な答弁振り付けばかりやっている。
実質的な政治決定は飲食店とかでの密室談義が多い。
女性優位社会は密室談義が好きだ。
女性優位社会は秘密主義で非公開なのが好きだ。
女社会は本質的に秘密主義。
日本では、上手く働かないオープンな議場よりも、上手く働くクローズドな議場が良い。

日本政府の動きは一生懸命政治家主導に見せているが、結局は役人主導のまま。
今の政治家は、役人の人事権だけ握って後は実質役人に丸投げ状態で、あまり役に立っていないし、機能もしていない。
現状では昔ながらの役人独裁みたいなのが日本人には向いているのではないか。
役人選抜が実際のところ省益主導で、日本人の民意を何も反映しないのが、かなりの問題である。
役人がそのままでは独善的になってしまう。
民意を反映して選考される役人による支配、あるいは民意をその都度反映させながら役人が支配する社会が日本人向けには一番良いのではないか。
人々の意思を反映できて民主主義的でもあるし。
議員選挙とオープンな議論だけが民主主義ではない。
男性優位な民主主義と女性優位な民主主義があるはず。
人間はどっちにしろ上位者による下位者支配からは逃れられない。
社会的に上位者と下位者が適宜入れ替え可能になっていれば良い。
男性優位なオープン議場の議会制民主主義以外の他の可能性を考えるべきこと。
女性優位な日本社会は政党間の対立とかが無い大政翼賛的なのが向いている。
女性優位な日本社会では、政治家や政党が性格的に女性優位になってしまい、政治家同士、政党同士の対立、論争はどうしても感情的な言い合い、いがみ合いと、見栄の絡んだ重箱の隅つつきのマウン

トの取り合いになってしまい、うまく機能しない。
女性優位な社会で、政府が政策を上手く推進するには、政策決定に関わる人間同士の感情的対立回避のやり方が根本的に必要である。
役人を人工知能化するのでもよい。
役人の決定はどっちにしろクローズドであり、女性優位な日本社会との適合性が高い。
社会での役人支配が徹底するフランスみたいなのが向いているかも。
日本では、役人支配以外の選択肢には、クローズドな議場出の意思決定を前提とした政治家選定の道もあるかも。
ただし、政治的中立が好きな日本人にはやはり役人支配の方が向いているか。

今の日本では、政治家の有能さを日本人は選択できない。
日本の政治家は世襲ばかりが目立つ。
今の日本では、人気政策を訴えるタイプの政治家もいるが、能力の高さは未測定のままだ。
日本の役人は採用に当たって前例、しきたり暗記、理解能力しか測定していないが、何も測定していない日本の政治家よりはましなのではないか。
でもそれだけでは、前例が無い事態が発生すると上手く動けない。
政治家の無能力を排除できないこと、役人の能力発揮が前例ありきになっていることが、今の日本が新型コロナウイルス感染対応でダメになっている理由かもしれない。
日本では、政府を動かす人の登用向けに、もっと他の政治的能力も測定できる仕組み、その能力がある人だけが登用される仕組みを作るべき。

（初出2020年5月）

女性優位社会同士の支配従属

女性優位社会による、他の女性優位社会の支配はいろいろある。
中国に朝貢していた日本がそれである。
韓国、朝鮮による儒教指導を受けた日本がそれである。
韓国、朝鮮を併合支配した日本がそれである。
もともと日本の支配下だった台湾という存在もある。
女性優位社会と女性優位社会同士の支配従属は、上位社会による下

位社会への上から目線での一方通行の反論を許さない強権的、専制的な支配になりやすい。
日本は韓国、朝鮮支配において韓国、朝鮮の全面的な抑え込みに失敗した。
韓国人、朝鮮人の日本による支配に対する大きな感情的反発を招いたこと。
太平洋戦争の終結後、アメリカは日本の全面的な抑え込みに成功した。
それは、日本に脱亜入欧国策を続けていて、アメリカ支配を先進国による支配と捉えて受け入れやすい素地があったから。
韓国、朝鮮はもともと日本のことを感情的に見下していた。
女性優位社会同士の支配従属関係の全面的で急速な逆転、入れ替えは、マウントによる優越、劣等関係の急激な逆転とか、妬みとか恨みとか感情的な反発を生んで上手く行かない感じ。
女性優位社会同士の支配でも、中国への日本の朝貢従属は、長期的で安定していた。
あるいは、日本と台湾の上下関係逆転は緩やかで、そんなに目立っていない。

（初出2020年5月）

女性優位社会、男性優位社会と教科書信仰

女性優位で、自らの保身のために、主張内容の上位者による保証を求める日本人は、誰かが、スーパー上位者か日本の上位者が書いた、あるいは承認した教科書や論文の内容から外れた内容を主張すると、主張内容に上位者のお墨付きが無い、只の自分勝手な独自研究として完全に無視する。
日本人は自分たちのことを家父長制社会だと考えているのなら、男性優位に理論面での独自チャレンジするところをもっと見せるべきだが、リスク回避を基本とする女性優位な性格のため、おおむね不可能である。

日本人が、日本人ノーベル賞受賞者を激賞するのは、受賞者が、上位者の脱亜入欧の国策に基づく、日本が欧米先進国の一員であることを世界に改めて印象付ける国威発揚に貢献したことを褒めたたえているのであって、今までになかったチャレンジングな独創研究を遂行したことは評価していない。

日本人が研究の独創性を評価するのは、スーパー上位者の欧米先進国が独創性を評価するので、それを権威主義的に崇めて表面的に合わせているだけに過ぎない。
日本人にとって、独創研究のような個人の思い付きや試行錯誤に基づく自分勝手な独自行動は基本的に悪であり、社会的には排撃対象であるから。
また、日本では、チャレンジ実行者も危ない変なことをわざわざやる、社会的外れ者扱いになってしまう。
あるいは、日本社会では、独創研究は、女性優位な日本人が重んじる、既存の古くからの伝統的前例、しきたりや社会秩序を脅かす危険な成果や新知見をもたらす可能性があり、その点で、女性優位な日本社会では、本質的に忌避されるのである。
日本社会が欧米諸国の新知見を取り入れるのも、欧米諸国が世界的に勢力を持った権威あるスーパー上位者となっているからで、欧米諸国が衰退してその地位から転落すると、日本社会は、本来の女性優位な体質に忠実に従って、古い前例、しきたり偏重の状態に移行する可能性も高い。
日本社会は、せっかく成果を上げたノーベル賞受賞者をその研究から強引に外して、名誉ある広報係みたいのを勝手に押し付けたりしてしまう。
日本人のノーベル賞受賞者は、日本社会で粗悪な扱いを受けて日本社会に良い印象を持っていないことが多く、日本社会を批判する人も多い。

日本や中韓のような女性優位社会の人々は、結局、自分自身の保身が一番大事なので、ひたすら事なかれ主義の道を進み、リスクは自分からは決して取らず、新しいことへの未知の危険に満ちたチャレンジも極力避けて、その通りに動けば自身の身の安全が確実に保証される前例、しきたりの世界でひたすら生きようとする。
あるいは、自分の保身のため、その時々の自分の身の安全を保証してくれて、なおかつ人格的に尊敬できそうな権威ある社会的上位者に積極的に忖度して、慕い、懐き、ひたすらその上位者の言う通りに動こうとすること。
そして、そうした古くからひたすら伝統の形で蓄積されてきた前例、しきたり、あるいは権威ある上位者の言葉を、ひたすら学習、暗記しやすくまとめた文書が、すなわち女性優位社会の人々にとっての教科書なのである。
女性優位社会の人々は、伝統ある権威ある上位者のお墨付きののある前例、しきたりをそのまま慣行性を持って変えずにひたすら守り続けるのである。

女性優位社会では、以前から続いてきた前例、しきたりがひたすら生き続ける感じになる。

一方、欧米諸国のような男性優位社会の人々は、捨て身で積極的にリスクを負って、新たな未知の世界にひたすらチャレンジを試みる。
そうすることで、一挙に大きな新しい権益を一番先に独占できたり、既存の秩序を破壊して、自分自身のオリジナルな新秩序を世界全体に向かって一発で構築できて、新たに大きな世界支配力、影響力を得られたりして、失敗して転落するリスクも大きいが、成功によって得られるメリットがとても大きくてっ魅力的だと男性優位社会の人々は感じる訳である。
要するに、何も無いところから、チャレンジ行為によって新たな成功を得て、それが今まで世界を支配してきた古い前例、しきたりを破壊、無効化して、その代わりの新たな有効な前例として、世界全体にその名声と支配力をとどろかせて君臨するようになるわけである。
古い前例の書き換え、新たな前例の創出は、男性優位な社会の人々の独壇場になりやすい。
新しい知見の創出とそれに伴う社会の近代化は、捨て身で失敗覚悟でチャレンジをたくさん実行する男性優位社会が先行する。
その都度、危険を伴うチャレンジの積み重ねの最中にたまたま得られた成功によって新たに書き換えらたり、追加された前例を集めた文書が、男性優位社会の人々にとっての教科書である。
男性優位社会の人々の教科書の内容は常に新たな知見獲得による書き換え前提の絶えず暫定的なノウハウの集成体なのである。

自分たちの古い伝統的な前例、しきたりの順守を絶対視してきたひたすら尊大な女性優位社会の人々は、男性優位社会の人々のことを、自分たちの伝統ある権威ある世界の周辺部に現れる只の野蛮で粗暴な人々と見てひたすら馬鹿にしたり、見下したりするのだけれど、男性優位社会の人々の生み出す近代化された新知見や、今までの古い前例の有効性を一気に無効化する新しい次の前例を生み出す力に圧倒されて、最初は面倒臭そうに渋々と重い腰を上げながら、男性優位社会から受ける、あなたたち女性優位社会の世界を自分たち男性優位社会が支配するという圧力や実力行使に負けて、自分たちの古い前例、しきたりをすっかり無効になったと考えて打ち捨てて、必死になって男性優位社会の人々の書いた近代的な新知見に溢れた教科書の内容をひたすら物まね、学習、暗記、導入しまくる行動に出ることになる。

なので、その間、女性優位社会の人々の教科書の内容は、男性優位社会の人々の教科書に書かれた新知見のデッドコピーみたいな感じの内容でひたすら埋め尽くされることになり、女性優位社会は、知見面で、男性優位社会の植民地状態になる。

また、女性優位社会にとって、そうした近代的な新知見をもたらす男性優位社会そのものが、自分の身の安全を新たにアップグレードする形で保証してくれる今までにない新たな権威ある存在として魅力的に映るようになり、そうした男性優位社会のことを、旧来の自分たちの社会の上位者よりも更に上に立つ新たなスーパー上位者、先生扱いして、ひたすらペコペコ忖度してその意向に従いまくる日本のような女性優位社会も出て来るのである。

あるいは、前例、しきたり偏重のため、自分からは自分たちの社会を根本的に変革するアイデアを構造的に出せない女性優位社会は、男性優位社会が生み出す、社会変革のアイデアに関する新知見にこぞって飛びつく。
女性優位な中国、ロシアによる、男性優位ユダヤ的共産主義の社会革命導入とか、その典型であること。
しかし、それによって社会体制の変革が表面的に行われても、女性優位社会の人々の考え自体は、引き続き保身重視の、チャレンジを根本的に嫌う、前例、しきたり偏重のままなので、女性優位社会の本質である自己革新性の欠如、後進性、前近代的性格はそのまま持続する。
中には、男性優位社会の社会規範そのものをひたすら丸呑みして学習、導入し続けようとする女性優位社会も現れ、その典型的な事例が明治時代以降現代に至るまでの日本社会である。
今のところ、女性優位な日本社会の現状を見る限りでは、アメリカ主導の日本国憲法導入に見られるような、女性優位社会による男性優位社会の社会規範の丸呑み導入試行は、自分の保身のことしか頭にない、自分自身は決してチャレンジしない女性優位社会の人々には、男性優位社会の社会規範の基盤に存在する、個人の自由独立とチャレンジ指向の男性優位精神の理解、体得が本質的に不可能なため、見かけだけの導入に終わり、実質的な効果はほとんど無く、昔ながらの女性優位な体質はそのまま変わらずに保持される感じである。

しばらくの間、男性優位社会の教科書の内容のデッドコピーにひたすら明け暮れていた女性優位社会は、それに慣れて、だんだん精神的、経済的に余裕が出てくると　今度は男性優位社会のもたらす新

知見の内容を、互いに組み合わせて、器用な手先を使ったミクロな微調整や小改良、高品質化による、女性優位社会独特の、完成度や洗練度の格段に高い新知見の創出をどんどん進めるようになる。
これは、新知見を生み出すマクロで大胆なリスク対応力、チャレンジ力こそあるものの、基本的に粗暴で粗野で、ミクロな微調整が本質的に苦手な男性優位社会には不可能なことである。
女性優位社会がこうした高い完成度、高品質の新知見をこぞって出すようになると、今まで世界社会において大きな支配力、影響力を誇ってきた男性優位社会は、そのままでは低品質で完成度に劣る知見しか出せないため、出てくる知見の競争力の点で大きく負けてしまい、一転して一挙に劣勢に立たされることになる。
男性優位社会が、そのまま有効なマクロな革新的新知見をなかなか出せない状態が続くか、仮に何とかマクロな革新的知見を出しても、その内容を女性優位社会にすぐに検知され、物まねをされて、ミクロな改良版の新たな知見を出されてしまうことが続くと、男性優位社会は、女性優位社会に太刀打ちできず、沈んでしまう。
男性優位社会の天下は一時的なもので、細やかな神経な行き届いている、高品質で完成度は高いが、革新性に乏しく停滞した感じの新知見しか生み出せない、権威主義の女性優位社会が世界を支配する時代、女性優位社会の教科書が世界のスタンダードになる時代になるのである。
男性優位社会を欧米諸国、女性優位社会を中韓と考えれば、今の世界情勢に適合していること。

こうした点では、世界の歴史の移り変わりや、世界の様々な人間社会同士の勢力争いの情勢は、チャレンジが得意でマクロな大胆な新機軸の新知見を生み出して世界をリードしようとする男性優位社会と、チャレンジが本質的に嫌いで革新的で近代的な新知見を生み出す能力には根本的に欠けているが、男性優位社会の出す新知見を効率よくどんどん物まねして、それに対してミクロで器用な微調整と小改良をどんどん加えて、より完成度、洗練度、品質の高い、競争力に優れた新知見を怒涛の勢いで出力しまくって、粗暴で完成度の低い知見しか出せない男性優位社会の立場を劣勢へと一気に追い詰めて、代わりに新たに世界の覇権を握ろうとする女性優位社会とのデッドヒートの繰り返しになっていると言える。

一方、男性優位社会は、自らのチャレンジで生み出した新知見を女性優位社会に渡さないようにすることで、自分たちが保持する知見面での優位性を保ち、自分からは革新的な新知見をなかなか生み出せない構造的な欠陥を抱える女性社会の興隆を阻むことが可能であ

る。
しかし、そのことで世界社会は、男性優位社会の持つ低品質で粗雑な知見しか出せない欠陥に苦しめられ、女性優位社会の高品質で完成度の高い知見の創出にひたすら期待することになるので、結局、男性優位社会は女性優位社会に新知見を渡さざるを得なくなると言える。
こうした点で、世界社会の人々が自分たちの生活に完全に満足する知見を獲得し続けるには、男性優位社会と女性優位社会の両方が必要であり、男性優位社会と女性優位社会の相補性、世界的な役割分業が必要となる。

こうした分析は、男女の社会的性差の存在を前提として初めて可能になるのである。
その点、現在世界的に制限の動きが著しい男女の社会的性差研究の自由が、世界的に認められるべきである。

（初出2020年5月）

日本社会における言論の自由

明治時代以来、現代に至るまで、脱亜入欧国策支持で日本全体が全体主義状態、言論統制状態にある。
日本人は左派も右派も政治的中立指向派も、表向きすべて脱亜入欧国策を支持しており、目立った反対者が見られない。

今の日本人は中国の世界的な台頭で、中国の存在や世界支配を恐れて、対米一辺倒になっている。
日本人は、スーパー上位者のアメリカに対抗する中国をひたすら敵視するようになっている。
女性が、自分が慕う上位者の恩師の説をひたすら支持して、恩師のライバルの説をけなしまくるのと思考が同一である。
日本社会は女性優位と主張することで日本と中国の同質性を主張すると、日本とアメリカの同盟性、同一化、あるいは日本が欧米先進国の一員であることを熱狂的に支持する日本人から完全無視を食らってしまい、実質的に日本国内で言論の自由が無い。

日本では、表向き、欧米的言論が、言論の全てになっている。
日本人は欧米的言論にひたすら賛意を示して日本への積極的導入を

狂ったように主張する。
日本人は、日本ではアメリカ流の日本国憲法で言論の自由が保障されていると盛んに主張する。
一方、中国への言論は、中国は独裁的だ、言論の自由が無い、プライバシーが無いといった否定的なものがほとんどである。
日本の伝統社会が北朝鮮みたいに言論の自由が無いことを指摘する人もいるが、彼らは、言論の自由がある欧米化を日本社会に徹底させよう、あるいは日本社会全体の欧米的近代化の徹底を日本社会に対して行うべきと主張することになっていて、スーパー上位者の欧米の熱狂的支持をしていることには変わりない。

日本社会のことを女性優位と主張することは、日本と中国の社会的同質性、親近性を強く主張することになり、欧米一辺倒で中国を強く敵視する日本人には、感情的に許容しがたいものになってしまっている。
日本人は、ひたすら日本社会は欧米同様、あるいは欧米より強度の家父長制の男社会であり、女性は弱く差別されているという主張を、左派も右派も盲目的にひたすら繰り返す。
右派は家父長制を肯定、支持し、左派は男女平等、性差別反対を主張するが、左派も右派も思考が欧米一辺倒になっていて、日本は欧米流の家父長制社会だと考えているという点ではどちらも共通である。
日本は欧米流の家父長制の男社会であるとする以外の言論が、日本社会では実質認められていない。
日本社会を女性優位と主張しても、ひたすら無視されるだけである。
日本社会の女性優位性を肯定する主張、あるいは女性の強さと男性の弱さを示す主張は、せいぜい日本社会のことが嫌いで日本社会から出ていきたい、あるいはもう出て行ったという日本社会否定派の日本人たちしか支持しない。
日本の左派も右派も、日本社会を欧米並みに家父長制化しようとするか、日本は既に家父長制だという主張を肯定しようとする脱亜入欧国策は共通に熱烈に支持している。
この点では日本人は、上位者の政策への支持一辺倒になっている。

日本における欧米流議会制民主主義への支持も同様である。
日本人はこれをひたすら肯定しまくる。
日本人の政治家が密室政治を行っていることが報道されると、それはダメで、欧米的にオープンな議論をしなくてはならなくてはならないという、日本社会の慣行を欧米化することを促進すべきという

主張が日本人からはひたすら返ってくる。
日本人の政治家も、密室談義を公然と支持すること、支持の明言は避けて、口頭では欧米流議会制民主主義を支持する言動を取る。
日本社会が実質女性優位で動いていることを公言することは日本ではひたすら避けられている。

日本人は、スーパー上位者と上位者の政策を熱烈支持歓迎し、それ以外の態度を取ることを認めない。
日本社会では、日本と同じ女性優位社会の中国による日本社会との同盟化の待望の主張とかダメである。
日本人は、その点では、指導者のキム氏一族をひたすら熱烈支持歓迎する北朝鮮と精神構造が変わらない。
どちらも上位者（上位者としての存在）に必死で同調、一体化し媚を売りまくる権威主義的な女性優位という点では共通である。
日本社会は女性優位であるがゆえに、スーパー上位者や上位者が推進する日本社会の欧米化を盲目的、熱狂的にひたすら支持、忖度して、それ以外の言論が存在せず、そうした言論に水を差す異論を封殺しているのである。
日本社会は以前から女性優位なままで今なお変わっていないし、いくら欧米化を試行し続けても女性優位なまま変われないだろうとする主張も、今の日本国内では単なる異論扱いである。

日本では、表立っては、「言論の自由を支持する」言論の自由しか認められていない。
そして、皮肉なことに、日本社会の表向きでない、実質的な女性優位な社会規範においては、上位者への自由な言論の自由、反論の自由は存在しない。
ある意味、日本社会の社会規範が、上位者への自由な言論の自由、反論の自由が存在しない女性優位な社会規範だからこそ、日本人は、スーパー上位者の欧米という上位者に忖度して、言論の自由をひたすら主張するしかないとも言える。

（初出2020年5月）

日本社会至上論について

日本の右派では、日本の上位者のみにひたすら忖度する国粋右派も

それなりに多くの勢力を占めている。
日本の国粋右派は、伝統的な神道や神社を信仰し、日本社会の欧米化、スーパー上位者の欧米諸国による日本の上位者への支配とそれに基づく欧米文化の日本への強制に表面的には妥協して従いつつも、内心では拒否し、反対し続け、日本伝統社会の社会規範や価値観の重要性をひたすら主張する。
日本の国粋右派は、日本の上位者の内側での最上位者としての天皇制を心の底から肯定し、日本国民を天皇の臣民認定して、日本人を上位者と下々に分類し、下々の上位者への心理的一体化を伴う一方的恭順を推奨する。
日本の国粋右派は、上位者の天皇とその直系の家来である役人による日本社会の他家による混じり気の無い純粋的な独裁的支配を指向し、政党政治を否定する。
あるいは、日本の国粋右派は、日本文化が他国文化の混じり気の無い純粋的な文化になることを指向する。
日本の国粋右派は、日本社会の創造神や古代の指導者、支配者が女性であったことを肯定する。
そういう点では、日本の国粋右派は、日本社会の伝統的な女性優位性とその維持を主張、肯定していると言える。
ただし、彼らが日本の天皇が男性であることをひたすら重視、強調し、日本の天皇は日本国の家父長であり、日本の臣民はその赤子だという考えで動いている面もあり、その点では、スーパー上位者の家父長制社会の欧米諸国の考えと折衷であるとも言える。
日本の国粋右派は、その主張が昔ながらの国学派や尊王攘夷論の延長線上にあり、視野が日本国内限定になってしまい、日本社会が世界の中で最高の社会だと自画自賛する日本社会至上論、世界の中での日本社会の独自性、すなわち日本社会は外国、海外とは違う唯一的な存在なのだとひたすら主張して、外国、海外に対して心を閉ざして、日本国内の心理的一致結束を訴える、閉鎖的、排外的な日本社会完全独自論、日本文化の日本国内完結論、日本の文化的自給自足の主張になってしまっている。
そのため、日本の国粋右派は、世界社会を見渡して、世界の中には日本と同質、類似の農耕民タイプの女性優位社会がいっぱい存在し、その中の一類型として日本社会を位置づける広い視野を持つことができないでいる。
日本の国粋右派は、中韓のことも日本とは異質でかけ離れた社会とひたすら主張して、同じ女性優位として互いに似ていること、同質であることを認めない。

かつて大東亜共栄圏を目指していた日本人には、日本社会は、東ア

ジアや東南アジア社会とある程度同質だとする考え方があり、それゆえ日本社会は東アジア、東南アジアを同じ仲間として考えつつ、その中でリーダーの地位を獲得しようとしたのである。
彼らは、ある意味、日本が今まで支配者だった中華の代替になることを試みたわけである。
そうした点では、日本人の意識の根底には、日本は、東アジア、東南アジアと同質だという意識、日本は中国に代わって東アジア、東南アジアで主導的地位、上位者としての地位を築くべきだ、日本の伝統的社会規範を東アジア、東南アジアに流布、強制、定着させるのが理想だという意識が潜在的に生き続けているとも言える。
日本人が東アジア、東南アジアに対して上位者気取りで上から目線で偉そうに振る舞うのはこれと関係がある。
日本社会は世界の中で最高であり、日本の社会規範を周囲の他国に広げて一種の理想郷を作って日本がその中の中心的存在となるべきだと日本社会至上論という点では、国粋右派と共通である。
また、彼らが日本による支配を中国による支配の代替と考えていたとすれば、日本と中国の社会や文化の共通性についての認識がある。
大東亜共栄圏構想の実現遂行に当たって、東アジア、東南アジアと日本社会との社会文化的共通性の認識がある程度存在していたのではないだろうか。
ただし、そこに自分たちは同じ女性優位だという認識があったかどうかは、また別問題であるが、その可能性は感じられる。
ただし、大東亜共栄圏構想を実現する国策が、脱亜入欧の国策と同時並行だったのであれば、日本社会は欧米諸国同様の家父長制だという認識、前提で動いていたのかもしれない。

日本社会至上論は、自分のことが一番きれいで素敵で可愛い、大切で最高の存在だと考えて、ひたすらうぬぼれる女性優位な思考の延長線上にある。
日本人が他の国の人からひたすらちやほやされるのを望み、褒められると有頂天になりやすいのは、日本人が女性優位な自己愛感覚の満足への欲求を強く持っていることと関係がある。
日本社会至上論は、女性優位な自己愛思考の極致であり、女性優位な中国における自分が世界の中心なのだ、周囲の世界は中国に対してひたすらひざまずくべきだと尊大にうぬぼれまくって考える中華思想と似ている。
日本では京都の人に、京都が今なお日本の精神的中心で日本社会で最高、至上の存在であり、東京とかはしょせん下々に過ぎないとする、中国の中華思想と似た小中華思想みたいなのが、今なお強く存

在する。
そういう点では、日本社会至上論は中国の中華思想と同類の典型的な女性優位思考であり、日本社会が女性優位であること、同じく女性優位な中国とかと基本的な考えや基本的社会規範が似ていることの証拠でもある。
こうした自分最高という考えはユダヤ人の自分たちは天の父なる神から選ばれた特別な存在だとする選民思想とかと一見似ている。
しかし、ユダヤ人は天の全能の父なる神を信仰する男性優位な遊牧民社会の人々である点が、農耕民で女性優位な日本や中国と根本的に異なる点である。
人間社会では、男性優位社会も女性優位社会も自分たちは最高だとうぬぼれる性質が共通にある。
同じ自分のことを最高視するうぬぼれの意識を持つと言っても、男性優位社会と女性優位社会とでは様相が異なる。
男性優位社会は自分たちは何でもチャレンジ、実現できる最高に有能で、出来ないことは何も無い世界で一番強い存在で、周囲は一番有能な自分たちの言うことをひたすら採用すべきであり、それに対する反論の自由は許すが、容赦なく攻撃打破するとする全能感に酔いしれる。
人類をあらゆる生物の中で一番進化した最上位の存在だ、人類は自然環境を思うままにコントロールしていると位置づける考えもこの延長線上にある。
一方、女性優位社会は、世界がひたすら自分たちを中心に回り、自分たちが世界で一番大切で光り輝く高貴な素敵な存在で、世界はひたすら自分たちのもとにひざまずきひれ伏し奉仕する召使、下僕であるべきで反抗は一切許さないとする自己中心的な究極の自己愛の感覚にひたすら酔いしれやすい。
この違いを見ておくことが世界の社会の文化の違いを認識、分類する点で重要である。
男性優位社会の上位者と女性優位社会の上位者がそれぞれどううぬぼれやすいか、それぞれ自分たちが支配する下位者のことをどう見がちかを考える上でも重要である。

（初出2020年5月）

日本社会における社会的地位の性差比較の限界

ある社会での社会的地位は何によって測られるべきか？。
これについては、社会に存在する各種集団において他人を使役する役職に就いていること、集団を統率する代表者になっていることが社会的地位の高さであるとする考え方がある。

あるいは、社会的に影響力が強いこと、社会のみんなが自分たちの価値観や社会規範に従い、言うことを聞くようになっていること、社会的な支配力、影響力の強さが社会的地位の高さであるとする考え方も成り立つ。

あるいは、社会で生産活動を行う上で必須となる生産設備、あるいはそれらを容易に入手する資金、富をたくさん所有する資産家であり、経済的に裕福であること、またそうした資産の管理、使用許認可権限を有していることが社会的地位の高佐であるとする考え方も成り立つ。

さらに、そうした社会的地位の高さを持続できていること自体も評価ポイントになる。

こうした測定、評価ポイントを日本社会に当てはめると、今の日本では、集団、組織の役職者、代表者は男性が多い。
社会規範は女性が支配している。
資産管理は女性がやっていることが多い。

今の日本社会では、社会的地位は、もっぱら集団組織の役職、代表者への就任によって測られている感じである。
それは、果たして正しいか？。
同じ代表者でも、実権を持つ代表者と、お飾りの名目上の傀儡状態の代表者がある。
あるいは、対外的には代表者だが、集団内部では別の支配者の言うことをひたすら聞く存在になっている場合もある。

父系社会と父権社会が同一では無いのは、女性優位な父系社会では、男性は、対外的には、表に出向く一家の代表者だが、家庭内では、母や妻といった女性の言うことをひたすら聞く、女性の支配をひたすら受けている、精神が女性化した弱者だからである。

集団の役職者、代表者であることを社会的地位の高さとそのまま何も考えずに認識してしまうのは、女性優位な父系社会のことを考えると、不適切である。

あるいは日本の役所や企業で役職に就いている日本男性たちの行動が軒並み女性優位で、実質母親の精神的支配下にあることを考えると、もっぱら役職だけをもって社会的地位を決めてしまうのは危険であると言える。

今の日本社会の社会規範を日本女性が掌握しており、日本社会が女性優位になっていること、あるいは、家庭とかでの資産管理や資産使用の許認可を日本女性がやっていることが多いことを考えると、日本社会における女性の社会的地位の強さも十分主張できるはずである。

今の日本社会のフェミニズム研究のような社会的性差研究では、日本社会が家父長制であること、男性が社会的に強いことを見せるのに都合の良い指標のみを主張して、女性の強さを見せる指標を、都合が悪いとして意図的に隠ぺいしている。

もしも、上位者への忖度が起きていないのであれば、日本女性が強いとする主張はその気になればいくらでもできるはずで、現状、日本女性が弱いとする主張一色になっていて、日本女性が強いとする主張がほとんど無いのは、明らかに不自然である。
上位者に忖度するための自主的な自己検閲とそれに伴う自主的な言論統制が事実上発生しているのではないか？。
日本社会における父系社会と父権社会の混同の発生や、父系社会は家父長制だとする主張の発生も、日本社会の家父長制化を主導する上位者への忖度を目的として意図的に行われているのではないだろうか？。
脱亜入欧国策で日本社会の家父長制化を目指す上位者への忖度が、日本社会の研究者たちによって自主的に行われている。
研究者たちが女性優位だからだ。

上位者や上位者に気に入られるため、上位者や上位者の政策に研究結果を自然と合わせる、上位者や上位者の政策に都合の良い研究結果をひたすら社会的に提示しようとするのが女性優位社会の研究者の特徴である。

上位者や上位者の意向に反する内容の研究結果は、社会の現状を上手く説明する力がかなり強くても、却下して全て無かったことにしたり、あるいはそうした内容の研究の推進を自主的に抑制して、
もっぱら上位者や上位者に受け入れられやすい研究をして、上位者や上位者に気に入られて自分の立場を有利にしようとするのが女性

優位社会の研究者である。

（初出2020年5月）

日本の家庭生活と男女の勢力関係

日本女性にとって日本男性は、自分の子供を得るための一時的道具扱いになっている。
日本女性にとって、自分の子供が生まれたら、子育ては女性専属のものとなり、日本男性は基本的に不要となる。
この状態では、日本男性は、日本女性にとっては、経済的に収入をもたらす便利な道具、生活面での雑用をこなす便利屋、奉公人としてしか見られない格下の存在である。
これは、日本の家庭生活における男性差別である。

今の日本社会では、日本の妻は、夫からの妻への心理的依存欲求、夫が妻を母親代わりにすることを冷酷に否定する。
妻にとっては、夫が妻を母親代わりにすることは、夫の姑への心理的依存が続いていることの証拠になる。
妻は夫が自分のことを姑の代理扱いするのが許せない。
妻は姑との縁を切りたい。
夫が妻に心理的に依存するのは、夫が姑側の人間であること、夫が妻を姑の延長線上の存在として捉えていることの証拠なのである。

また、このように妻が夫を子ども扱いして母親的に生活の世話を焼く女性優位な生き方は、妻の夫に対する精神的優位性の現れであり、女性優位の思想で本質的に女性にとって都合が良いのだが、今の日本では否定の対象となっている。
妻が夫の生活の面倒を見る生き方が、女性が男性並みの社会的活躍をすることを主張する男性優位欧米フェミニズムの日本導入の影響で、日本では、社会的非難の対象となっている。
日本では、欧米フェミニズムの影響で、性別分業が性差別的だとして敵視される。
性別分業否定の風潮と、夫婦の一方を終身専属奴隷の社員として差し出すことを要求する伝統的な日本の社のあり方との不整合が生じている。

（初出2020年5月）

男性優位社会での言論統制と男性優位フェミニズムが日本社会にもたらす言論統制。

男性が世界で普遍的に強く、女性が世界で普遍的に弱い、女性差別が世界的標準であるとする考え方をスーパー上位者の欧米諸国が取っている。
女性優位な日本はスーパー上位者の言うことに盲目的にひたすら従うしかないので言論の自由が存在しない。

男性優位社会の欧米諸国でも、女性優位社会日本とは全く別の理由で、言論の自由が存在しない。
欧米諸国の社会的性差研究分野では、自由な仮説に基づく実証的な科学的アプローチの否定が起きている。
この分野では、自由思考の時代から、思考統制の時代へ移行している。
このことは、父性的思考に二側面が存在することを表している。
すなわち、一つは、思想の自由独立への指向、もう一つは、絶対者、あるいはその意を受けた宗教者の思想を信仰して精神の安定を確保することへの指向である。
男性優位社会では、この二つの指向が同時並行か、相互に入れ替わるようになっている。
男性は一人で独立して行動するのを好む分、基本的な個人行動の自由を確保しつつ、その間、絶対者の見守りや加護が絶えず欲しいと考える。
男性は、一人で独立して生きていきたいと強く願いつつも、もう一方では、一人で生きていくことが心理的にやはりどこか不安で困難で、自分を見守り加護し導いてくれる存在を心理的に絶えず必要とする点、人間としての男性の弱者性の現れが起きている。
男性が宗教信仰にのめり込みやすい理由がまさにこれである。
男性にとっては、自由を取るか宗教信仰を取るかの二者択一の必要性が絶えず生じる。
男性は、この二つの両立を基本的に図りつつ、どちらかをその時々に応じて優先させる。
現状では、男性優位社会の性差研究分野では、宗教信仰の時代が再び訪れている。
これは、従来のキリスト教信仰同様の父性的宗教的なアプローチで、信仰対象としての理論が宗教聖職者あるいは宗教的教祖みたい

な感じの社会理論家、社会運動家によって意図的に人為的に形成され、宗教的信仰対象思想として社会に広く流布、伝道され、それを父の言いつけを守る形で信仰しないと異教徒扱い、異端者扱いされて、社会的に抹殺される。
この点、宗教的思想統制アプローチが欧米諸国で強まっている。
これこそが父性的男性優位社会のもう一つの側面である。
欧米諸国では、自由な科学的アプローチ全盛の今も、それと同時並行で、父性的なキリスト教の敬虔な信者が多い。
これは、父性的思考の二面性を示している。
すなわち、自由思考の重視か、父性的思想統制の重視かであること。
同じく男性優位、父性的なユダヤ教のユダヤ人、イスラム教のアラブ人、イラン人、トルコ人も同様の傾向を持っている。
男性優位社会では、典型的な父性的な思想統制が起きている。
これは、言論の自由より優先される。
この状態では、父性的思考、宗教的思想統制の範囲内での言論の自由しか認められない。
これとは別に、男性優位社会では、男性優位社会規範を根本から脅かす女性優位な思考をする自由が認められない。
欧米女性には、女性優位な考え方を取ることが認められないし、思考が男性化されて女性優位な思考を受け付けなくなっている。
こういった男性優位欧米諸国の思想が、日本にスーパー上位者の思想として、批判者への上から目線の女性優位な思想警察が生じている。
日本の性差研究分野では、欧米諸国のフェミニズムの、父性的宗教的な思想統制に基づく自由な科学的実証ベース思考の制限への指向と、自分たちの社会の家父長制を世界標準の社会規範として捉え、女性優位な思考の根源的な不許可と女性が男性並みの存在となることのひたすらの推進という男性優位社会の社会規範の、日本社会における上位者の意向への忖度、隷従必須という女性優位な社会規範に基づくスーパー上位者としての欧米諸国からの思想の反論不可の一方的思想強制と思想警察の跋扈、そして、上位者の日本による脱亜入欧国策と日本社会の家父長制化の一方的強制という四重の思想統制、言論統制状態に陥っている。
日本を女性優位と指摘、主張する自由や、女性の男性に比較しての優位性の主張の自由が、スーパー上位者の欧米諸国の国内の段階でも、上位者の日本国内の段階でも全く存在しない。
性差研究は、欧米諸国でも、日本でも、自由発想に基づく科学的アプローチに基づく研究が衰退しているか、原則不可能になっている。

世界のどこに行けば、こうした研究の自由が確保できるのか検討が必要である。
今のところは、日本に留まっている限りは、欧米諸国の自由科学的アプローチが性差研究分野で巻き返してくれるのを待つしかない。

現状では、父性的宗教の一種として、欧米フェミニズムを位置づける必要がある。
欧米フェミニズムは、男性優位の社会規範が世界標準であるとする視点を持っている。
この視点に基づき、世界的性的弱者として女性を位置づけ、そうした弱者女性の保護と優遇のための下駄履かせをしきりに行っていること。
彼らは、性差別反対、性差の存在の否定、性差の存在を肯定する方向での自由な性差研究の否定を行っている。
これらの宗教聖職者目線で人為的に創作された思想へと信仰対象として従うことを父性的アプローチで強制され、信仰しないと異端尋問されるのであること。
欧米フェミニズムでは、かつてのキリスト教による異端尋問と同じ思考パターンがそのまま再現されている。

（初出2020年5月）

女性優位社会日本と科学

日本の科学は、女性優位である。
日本の理科系大学院とか、伝統的な、師匠の持つ前例を弟子が絶対視して必死になって勉強、継承する師弟制と、古参者が新参者に対して無条件で上位者扱いされる先輩後輩制度の牙城となっている。
女性優位な日本の科学は、スーパー上位者としての欧米諸国の研究スタイルや新知見に、ひたすら忖度、同調し、そうした研究スタイルや新知見を、ありがたき前例としてひたすら高く押し頂く女性優位な思考パターンでの研究が、日本の大学では行われている。
日本の大学で独創研究がもてはやされるのも、スーパー上位者の欧米諸国が推奨する研究スタイルだからであって、独創研究は基本的に未知領域へのチャレンジを基本とする男性優位な研究スタイルなので、何事も前例踏襲を最優先する日本のような女性優位な研究スタイルとは、相反する面がある。
もっとも女性優位な日本でも、前例のその時々の社会情勢の動きに

合った微調整や小改良がなされている訳であり、それは男性優位なマクロな大局的な独創とは一味違った、ミクロな細やかな独創と言える。
このミクロな独創は、男性優位な欧米諸国は苦手とするところであり、女性優位な日本や中韓とかが科学分野での競争力を発揮する強みとなっている。
欧米諸国で進められてきた科学では、研究対象を客体視する男性優位視点が必須である。
ところが女性優位な思考はこれを嫌い、研究対象との心理的一体化、愛情の対象としての包含みたいなのを、本質的に好む。
男性優位な科学思考は、女性優位な社会では本質的に理解されない。
今の日本における科学は、権威あるスーパー上位者の欧米諸国に対する忖度と心理的な同調一体化の産物であり、男性優位な欧米諸国が世界的に退潮すると、女性優位な日本では科学研究は消滅する。

（初出2020年5月）

日本社会の少子化問題解消と、日本の役所や企業の学閥依存体質との関連

日本社会の衰退の大きな要因になっている少子化問題の根本的原因は何か？その大きな原因の一つが、少子化に伴う大学全入化による学歴バブルの発生が引き起こしている教育費用の日本の国全体レベルでの凄まじい高騰と、その解消を根本的に阻害する日本の役所や企業の学閥依存体質の存在である。

日本社会では、少子化の進行で、大学全入のような子供全員の横並びでの高学歴化、学歴のインフレが当たり前になってしまい、どの企業も、それを前提に、全ての応募者に対して、大学卒業のような高学歴を横並びで要求するようになってしまっている。そのため、各家庭で、子供の教育費用がやたらとかかる。そのため、各家庭における、子供を経済的に自立させるまでにかかる経済的負担が大きすぎる。そのため、各家庭は、子供をむやみに作れない。経済情勢の悪化で、各家庭の稼ぎが少なくなっていて、経済的にもう子供が作れない。

結局、日本社会では、少子化が原因で、さらに少子化が進んでしまっている。そのことが企業で必要とされる学歴の更なるインフレを呼び起こすことになる。日本社会では、まさに学歴のハイパーインフレ化が進行中である。

日本の大学の講義内容や研究指導内容は、実社会では役に立たない、教員の自己満足のための飾り物ばかりである。社会の人々は、みんな大学卒業の資格が欲しいだけで、実際のところ、大学の講義内容は、今の内容のままでは、一部の技術系を除くと、誰も必要としていない無駄な内容なのではないか。

日本の大学は、欧米諸国とかの先進的研究成果の解析やその結果の暗記勉強による吸収と日本社会への一方的な応用しかやろうとしない。そもそも、日本の大学は、伝統的師匠と弟子の関係の重視による研究上の学殖蓄積偏重と、師匠と弟子の間の心理的な相互同調や、弟子から師匠への忖度の傾向が強すぎて、自分ではチャレンジングな先進的な成果が、構造的にちっとも出せない。

その点、研究成果の吸収とその教育は、こうした日本の大学に頼るよりも、直接、欧米諸国の大学から成果をネット経由で直輸入した方がコスト的に安上りで有利である。あるいは、日本よりも研究教育レベルが上位になった、中韓の大学の成果の直輸入の方が、成果内容をさらに小改良してある分、より効果があるかもしれない。

こうした点で、日本社会では、大学は、全般に社会的に役立たずで、あまり必要ない。日本の大学は、一部を除き、解体しても、研究教育内容の社会への役立ち度の点では、ほとんど実害が無い。この点では、抵抗するのは、既得権益者の大学関係者だけで、大学の高い授業料に苦しむ日本社会の人々は、逆に大喜びするだろう。

しかし、実は、こうした大学解体で大きな問題があるのは、大学の学閥の存在を前提で、その活用にやたらと執着する、日本の役所や企業側なのではないか？日本の役所や企業一般（つまりは、伝統的な「社」。）が、従業員の採用や、採用後の従業員の活用において、高校や大学における学閥、すなわち、伝統的な先輩後輩関係や、師弟関係の活用に対して、強迫的に依存し過ぎである。

と言うか、日本社会では、役所や企業における就職応募者に対する人物の採用上の評価が、履歴書の書式もそうだけど、「〇〇年、〇

〇大学〇〇学部卒業」を重視することが多く、「〇〇資格保持」はあまり重視されない。また、「〇〇大学卒業」が「〇〇学部卒業」よりも、着目上のウェイトが高い。あるいは、転職でも「〇〇年—〇〇年　〇〇社に勤務」といった役所や企業への所属歴が切れ目なく続いていることを重視して、資格保持は二の次だ。日本の役所や企業は、自分のところへの就職応募者が、どこの大学出身者か、どこの学閥に属しているかと言うのを重視する。

以下は、話題を、大学の学閥に限定する。

大学の学閥の存在やその企業内部での活用は、日本の役所や企業の業績向上の面で、本当に役に立っているのか？あるいは、日本の役所や企業による、そうした学閥への強迫的な心理的こだわりを生み出している、彼らが病的にこだわり続ける昔ながらの新卒一括採用の慣行は、企業業績の向上に、本当に役に立っているのか？実際のところ、効果がちっとも無いのではないか？。

多くのより有能そうな生徒や学生たちが、みんな、学閥を重視しない欧米や中韓系統の外資系企業に対して、優先的に就職の応募をしようとしていて、そっちの方が企業業績がいいのでは？彼らは、自分の就職応募先から学閥重視の日本の中央省庁も避けるようになっているし。

日本の役所や企業は、従業員の全人生、全時間を拘束する、ひたすら苛酷な終身強制奴隷労働制を従業員に対して強制する、役所や企業への従業員の終身雇用、終身隷属の慣行をとっとと止めるべき。実は、この慣行こそが、日本の役所や企業が持つ学閥依存体質の根源なのではないだろうか？というのも、学閥のような入学による自動加入、所属メンバー内での心理的一体化や相互扶助の永続をひたすら目指す集団のあり方は、日本の役所や企業の持つ、自分たちの集団への所属メンバーの集団内定住状態の永続、すなわち従業員の集団内永住を目指す、従業員の終身雇用、終身隷属の考え方と、所属メンバー間の人間関係の永続を共に目指している点で、根本的に、とても相性がいいからだ。

（この終身雇用自体が、従業員となった女性の育児休業対応への困難さとそれに伴う女性従業員の雇い止め、あるいは、終身、役所や企業の集団内に入れてもらえない非正規雇用者という社会的流民の大量発生とそれに伴う経済的収入の大幅減少や不安定化という社会

問題を生み出す元凶であり、日本社会における少子化問題発生の別の社会的悪玉になってしまっている、という問題もある。日本の人々が、高い教育費用を継続的に出せなくなっているのも、日本の役所や企業による非正規雇用化が進行しているからだ。）

日本の人々は、メンタル面での役所内定住、企業内定住が根本的に大好きなので、企業内部での苛酷な終身強制奴隷労働制もあっさり肯定してしまうんだよね。特に、日本の男性に対して、企業での長時間強制労働を生涯にわたって、ひたすらやらせることに、何の心理的痛みも感じずに、ひたすら彼らの稼ぎの多さや企業内での出世に固執し続ける日本女性たち（男性の母や妻）が、この問題の本当の大きな根本的な悪玉的存在なのだが、日本の人々は誰も問題にしないね。

そもそも日本伝統の稲作農耕のような一か所定住生活中心の社会集団の実質的支配者は、日本政府の明治時代以来の脱亜入欧国策による日本社会への家父長制導入以前の昔から、母や祖母、姑のような女性なのだし、そうした点で、所属集団内での永住を指向する日本の学閥は、実際のところ、女性優位体質で動いているのではないだろうか。日本の役所や企業の学閥依存は、そうした伝統的な母や祖母、姑たちの持つ女性優位社会心理が、その原点であり、日本社会の原点的に、消すのが非常に難しい厄介な代物なのかもしれない。

あるいは、日本の役所や企業の従業員採用の理想的モデルとなっている、日本政府＝「上位者」の中央省庁の伝統的な従業員採用や活用のあり方が、そもそも日本の役所や企業の終身雇用や学閥依存の社会慣行という社会的悪玉の頂点に君臨しているのである。しかし、当の中央省庁で働く人々は、このことについて、何も問題意識を持ってい無さそうなのが、学歴バブルがもたらす日本社会の少子化の根本原因の解消にとって、実は致命的なのではないいか。

日本の中央省庁で働く人々も、東京大学とかの大学の学閥の存在に完全に依存してしまっていて、大学の学閥の存在やその活用を前提で動くように、ずっとなってしまっているけど、彼らの東京大学とかの学閥のこだわりは、彼らの業務上の実務的成果を向上させる上で、本当に役に立っているのか？逆に、従業員間の変な馴れ合いや、先輩後輩の上下関係に基づく不要な忖度を生み出し、実務的には、大きな障害になってしまっているのでは。実際のところ、学閥依存で動く、日本の中央省庁の業務や実務が、ちっとも上手く動いていないことが、彼らの新型コロナウィルスへの対応の凄まじい悪

さで明るみに出てしまった。

学閥依存の従業員採用や活用を前提とする日本の役所や企業のあり方は、もう世界的に劣ったものになっているのではないか？学閥依存だと、どうしても学閥内の先輩後輩制に依存してしまい、それは結局は、その頂点にいる一番の古参者である老人による役所や企業支配を生み出し、役所や企業の意思決定の老化や、新しい科学技術の軽視による、役所や企業の実務能力の根本的低下につながってしまうからだ。日本の国全体の衰退もこの問題とつながっているはずだ。

日本の役所や企業は、実際のところ、従業員採用時の学閥依存をもう止めるべき。彼らは、従業員を国家資格の保持等の別の基準で採用すべき。従来の学閥依存体質の役所や企業は、もう業績的に全然上手く行っていないのだから、彼らの従業員の採用や活用は、学閥を前提としない、資格前提の運用とかへととっとと変えるべきだ。

以下は、日本の役所や企業による、こうした学閥依存体質の解消が一通り行われたことを前提とした話となる。

まず、日本の大学の関係者、すなわち大学の所有者、経営者や、働いている教員は、以下の内容に気付くべきだ。
（１）自分たちへの需要が、少子化に伴う学歴バブル発生による、単なる無意味なバブル景気状態にあり、社会の人々が欲しいのは、子供の学歴や学閥利用可能性そのもので、講義内容自体への需要は、実はちっとも存在しないこと、そのため、自分たちは、実際のところ、社会にちっとも貢献していないこと、。
（２）自分たちが、ひたすら高額な授業料の徴取によって、今の日本社会の人々の生活を無駄に苦しくしている最悪クラスの元凶、つまり社会的な少子化の根本原因の悪玉になっている、無駄に高コストな、社会的に有害な存在であること。
彼らは、大学経営、教育事業から撤退する準備をいち早く始めるべきだ。彼らの失職対策が社会的に必要で、日本の政府とか、今から用意すべき。

次に、日本の役所や企業は、無駄な高学歴の要求を、子供たちに対して行うのを止めるべき。彼らは、横並びでの要求学歴水準リセットの協定を、いち早く作るべきだ。

結局、現状の日本社会の学歴バブルを消失させるため、社会的に、

経済的ハイパーインフレ時の預金封鎖のような学歴のレベル封鎖、あるいは、役所や企業が応募者に対して要求しようとする学歴レベルの横並びでのリセット、学歴徳政令が必要である。そのことで、無駄な高学歴の取得にかかる、無駄にひたすら高額な教育費用を削減し、社会全体で、みんなが低費用で子供を経済的に自立させることを、再び可能とすべき。そうすれば、少子化の大きな要因の一つを消すことができる。やはり、人間は生き物なんだから、みんな、自分の遺伝的子孫は残したいものであるよね。

ここまで、話が進めばいいんだけど、難しいかもしれないこと。
（初出2020年5月）

Table of Contents

日本村社会における「転村の自由」「非村人の入村の自由」「村内先輩後輩制の廃止」の必要性
「村八分」の解消が必要。
負の体験の次世代連鎖の断ち切りが必要。
日本村社会の論理の実態
上媚下虐の日本社会
没落したアイドルとしての日本
空気を読んで動くことは日本社会独自か？。
日本村社会の生きにくさ、生きづらさの根本原因
休まない、休めない日本人
日本村社会の今後の課題

日本の町とその古い体質

説明。日本の町。

日本の社と終身奴隷労働

本文

日本の学校と、伝統的師弟関係

本文

日本社会の権力構造と言論統制

一人一人の日本人の意思が、天皇制を生み出していること。
定住集団社会を国ぐるみで隠蔽しようとしている日本 -「欧米『出羽守』」と言論統制 -
強者に惹かれる日本定住集団社会の女性優位性質と「欧米『出羽守』」
欧米諸国から「村八分」にされるのを恐れる日本定住集団社会と「欧米『出羽守』」
脱亜入欧の国策からの脱却と親亜親欧の国策への転換が必要。
日本での欧米流フェミニズムの隆盛と脱亜入欧
脱亜入欧一辺倒からの脱却が必要だ。
日本人が定住集団社会論、女社会論を無視する理由。
日本の社会学はインチキだ！ - 脱亜入欧という病 - 。
日本社会における表面的規範と実際的規範と脱亜入欧

日本のフェミニズムはインチキだ！。
日本のフェミニズムが無視する日本女性の強さ。
社会と家庭と日本のフェミニズム
日本社会の腐敗と女性
日本のフェミニズムと、モンスター化した日本の女性たち
世界のフェミニズムはインチキだ！。
日本のフェミニズムとお勉強会
御用学問としての日本のフェミニズム
日本の脱亜入欧と、日本男、日本女
今の日本社会では真の言論の自由は存在しない。
日本男性を助けて下さい！
日本社会と家父長制ごっこ
スーパー般若としての日本女性
日本社会における日本国憲法の受容と民主主義ごっこ
欧米フェミニズムの日本社会導入がもたらした結果について。
日本の右派。日本の右翼。女性優位社会の視点からの分析。
日本の左派。日本の左翼。それらが抱える問題。女性優位社会の視点からの分析。
日本政府（上位者）は女性優位である。
社会的性差と日本社会、世界社会
日本社会と役人支配
女性優位社会同士の支配従属
女性優位社会、男性優位社会と教科書信仰
日本社会における言論の自由
日本社会至上論について
日本社会における社会的地位の性差比較の限界
日本の家庭生活と男女の勢力関係
男性優位社会での言論統制と男性優位フェミニズムが日本社会にもたらす言論統制。
女性優位社会日本と科学
日本社会の少子化問題解消と、日本の役所や企業の学閥依存体質との関連

資料編

日本社会の分析。用語の置き換えの提唱。
日本村社会の調査方法

（資料）既存日本人論とドライ、ウェットな態度との照合
（資料）日本人の伝統的国民性:文献調査結果の詳細

私の書籍についての関連情報。

参考文献。
私が執筆した全ての書籍。その一覧。
私の書籍の内容。それらの自動翻訳のプロセスについて。
私の略歴。

資料編

日本社会の分析。用語の置き換えの提唱。

筆者は、従来の日本社会の分析について、用語の置き換えを提唱する。そのことで、以下が実現する。日本社会についての理論内容の、世界社会に向けての一般化、普遍化。
それは、以下の内容である。
（置換前。）／（置換後。）
村社会。世間。／　後天的定住集団社会。
村人。／後天的定住民。
よそ者。／流民。定住不可の人。
会社。社。／企業定住集団。
社主。／　企業所有者。
社長。／　企業定住経営者。
幹部社員。／　企業定住経営メンバー。
非正規社員。非正規職員。／　企業流民労働者。
正規社員。正規職員。／　企業定住労働者。
家。／　家庭定住集団。
姑。小姑。／　家庭古参定住民女性。
嫁。／　家庭新参定住民女性。

日本村社会の調査方法

日本村社会の真実を知るには、２ちゃんねるに代表される匿名掲示板や、ツイッターなどで、「日本人だけど日本のここが嫌い」スレッド等、日本社会のことを批判する人の意見を大量に見るのが手っ取り早い。
日本社会の現状に満足したり、より復古したいと考えている人たちは、日本村社会の現状については特に発言しないことが多い。また、日本社会は閉鎖的、排他的であり、日本の村人たちは村社会内部のことを内密にして公表したがらない。内部告発をすると、村八分等の陰惨な内部制裁が待っていることが多く、直接対面等で匿名

性が無い状態では、日本人たちはその実態を公表しにくい。農村とかに出かけて調査するのは調査対象者の匿名性が確保されないので駄目である。
日本社会に不満な人たちは、匿名性の確保されたネットメディアの上では鬱積した本音を自由に発言できることが多いので、その場で具体的な実例をあげて、日本社会の良くない点、改善すべき点を内部告発している。なので、それをたくさん閲覧することで、日本村社会の良いところも悪いところも忌憚なく判明すると言う訳である。
一方、今まで積み上げられてきた日本人論も、日本村社会を知る上では大いに参考になる。特に、欧米社会との対比で日本社会の特質や問題点を描いている書籍や論文、記事が役に立つ度合いが大きい。それも、学者の書いた、学者村の身内の学者同士でしか読まれないことを前提とした書籍に限定すること無く、海外在住経験のある一般人や他国の人が書いた日本社会に関する感想文を大量閲覧する方が日本社会の真実を知る上ではより近道である。
また、日本の官公庁や大企業などで勤務していた人たちや企業城下町とかに住んでいた人たちが書いた内情暴露本も、日本社会の内実を知る上では役に立つことが多い。
日本の政治家の語録、例えば、憲政の神様と呼ばれた尾崎行雄語録は、日本村社会の表向きの立憲制とは違う実情や日本の村人の考え方を知る上で参考になる。地方からの叩き上げの政治家である田中角栄語録は、日本村社会の中央と地方の連続性を知る上で参考になる。
筆者の以下の説明は、上記のような匿名ネットメディアのコメントや書籍、記事の大量閲覧に基づいて書かれている。
※参考文献(順不同)
(文献リスト総括)
南博「日本人論」岩波書店 1994
(官公庁の内情)
竹内直一　「日本の官僚—エリート集団の生態」社会思想社 1988
加藤栄一「日本人の行政—ウチのルール」(自治選書)　第一法規出版　1980
宮本政於「お役所の掟」講談社 1993
(民間企業の内情)
城繁幸　「内側から見た富士通「成果主義」の崩壊」光文社 2004
木下律子「妻たちの企業戦争」社会思想社　1988
(村落)

蓮見音彦（編）「講座社会学〈3〉村落と地域」東京大学出版会 2007
（都市）
佐藤文明　「あなたの「町内会」総点検 地域のトラブル対処法」３訂増補版（プロブレムＱ＆Ａ）　緑風出版　2010
（政治）
別冊宝島編集部(編)「田中角栄 100の言葉 ～日本人に贈る人生と仕事の心得」宝島社 2015
尾崎行雄「立憲主義の日本的困難――尾崎行雄批評文集1914-1947」書肆心水 2014
（海外との比較）
松山幸雄　「「勉縮」のすすめ」朝日新聞社 1981
石田英一郎　「東西抄」　筑摩書房 1967
山久瀬洋二(著), ジェイク・ロナルドソン(翻訳)「日本人が誤解される100の言動 100 Cross-Cultural Misunderstandings Between Japanese People and Foreigners【日英対訳】」(対訳ニッポン双書) IBCパブリッシング 2010
※参考サイト
５ちゃんねる　http://5ch.net
Twitter https://twitter.com
ガールズちゃんねる　https://girlschannel.net/topics/1209509/

（資料）既存日本人論とドライ、ウェットな態度との照合

対人関係のドライさ（乾燥している度合い）が、気体分子運動パターンと相関し、対人関係のウェットさ（湿潤の度合い）が、液体分子運動パターンと相関する。
対人感覚のドライ・ウェットさのうち、特にウェットさに関しては、従来から、日本人の性格・態度の特徴を表す、とされてきた。例えば、〔芳賀綏1979〕においては、日本人像のアウトラインとして、「おだやかで、きめ細かく、『ウェットで』（強調筆者）、女性的で、内気な」といったように、その中にウェットさを含めて考えている。あるいは、〔吉井博明1997〕においては、日本人のコミュニケーションのあり方の特質について、直接対面によるコミュニケーションの重視の現れを示すものとして、「ウェット」という

言葉を用いている。
そこで、こうした見方が果たして正しいかどうか、当調査において抽出した対人関係パターンを、従来提唱されてきた、日本人の伝統的な国民性を現すとされる、主要な学説と照合した（学説抽出に当たっては、〔南1994〕〔青木1990〕などを参考にした）。
その結果、以下の表が示すように、従来の学説で取り上げられてきた日本人の対人関係における特徴は、ほとんど「ウェットさ」を示している。したがって、日本人の伝統的な対人関係は、基本的にはウェットである、と捉えることができそうことが分かった。言い換えれば、「日本人の伝統的な行動様式は、（分子間力の大きい）液体分子運動パターンに似ている」ということになる。
また、以下の、日本人の国民性として列挙した文献データベース表は、内容的に十分網羅的である（日本人の対人関係上の特徴の大半をカヴァーしている）ことが考えられ、したがって、従来の日本人の国民性とされているものの大半を、「ウェット」というひとことで要約することができることになる。
〔伝統的な日本人論とウェットさとの関連：まとめの表〕
各論が発表された年代順にまとめてあります。
項目欄のリンクをクリックすると、その項目に関する文献情報に飛びます。

番号	項目	研究者名	要旨	抽出した次元 (ウェット)	対応する欧米文化	抽出した次元・欧米（ドライ）
(1)	恥の文化	R.Benedict(1946)	自己の行動に対する世評に気を配る。他人の判断を基準にして自己の行動の指針を定める。	反プライバシー、他律指向 (他者の目を気にする)	自分の行動の指針を定めるのに、自分自身の判断を基準にする。（罪の文化）	プライバシー、自律指向
(2)	家族的構成	川島武宣 (1948)	権威による支配。個人的行動の欠	権威主義、集団主義、規制主義、	権威への反逆。個人的行動の重視。	反権威主義、個人主義、自由主義、

			如。自主的な批判・反省を許さない社会規範。親分子分的結合の家族的雰囲気と、対外的な敵対意識。	同調指向、縁故指向、閉鎖指向	自主的批判、反省の許可。家族的一体感の欠如と、対外的な開放意識。	反同調指向、非縁故指向、開放指向
(3)	終身雇用、年功序列(日本的経営)	J.C.Abegglen(1958)	会社と従業員との間に終身的な関係がある。	定着指向（組織内定住）、前例指向	会社と従業員の関係が、契約的、一時的である。	移動指向、独創指向
(4)	タテ社会	中根千枝(1967)	「場」と「集団の一体感」によって生れた日本の社会集団は、その組織の性格を、親子関係に擬せられる「タテ」性に求める。	閉鎖指向、縁故指向、集団主義、非合理指向	組織が水平方向、フラットである。	開放指向、非縁故指向、個人主義、合理指向
(5)	静的育児	Caudill,W.,Weinstein,H.(1969)	日本の母親は、子供と身体的接触を多くし、子供があまり身体	静的指向、相互依存指向、密集指向	母親は、子供と身体的接触を少なくし、子供が身体を動かし、	動的指向、自立指向、広域分散指向

			を動かさず、環境に対して受動的であるように、子供を静かにさせる。		環境に対して能動的であるように、子供を動的にさせる（動的育児）。	
(6)	中央集権	辻清明 (1969)	中央集権的官僚制の強い拘束の前に、近代的な地方自治が完全に窒息せしめられていた歴史を持つ。	密集指向 (中央への権限の一極集中)	地方分権的である。権限が地方に移譲されている（地方分権）。	広域分散指向（権限の地方分散）
(7)	同調競争	石田雄 (1970)	所属集団に支配的な価値指向と行動様式に従う。他人と同じ行動を取る。	同調主義（大勢順応）、画一主義 (横並び)	他人とは別行動を取る（非同調）。	非同調指向、多様性の尊重
(8)	甘え	土居健郎 (1971)	日本人は、成人した後も、「母子」間での気持ちの上での緊密な結びつきと同じような情緒的	相互依存指向、集団主義 (一体感)	母子間の結びつきが薄い。母親に対して情緒的安定を求めない（甘えの欠如）。	自立指向、個人主義

			安定を求め続けて行く。			
(9)	間人主義	木村敏(1972)・濱口恵俊(1977)	対人面での相互依存、相互信頼、対人関係の本質視、という特徴を持つ。	人間指向(人間関係そのものを重視)	対人面で、相互自立を重んじ、対人関係を単なる手段として見る（個人主義）。	非人間指向（物質指向）
(10)	他律的	荒木博之(1973)	ムラ的構造の中にあって、個人がその個性を喪失し、集団の意志によってその行動が決定されて行く。	他律指向	個人が個性を維持し、集団の中においても、個人の意志によって行動を決定する（自律的）。	自律指向
(11)	集団主義	間宏(1973)	個人と集団の関係で、集団の利害を個人のそれに優先させる。個人と集団が対立する関係ではなくて、一体の関係になるのが望まし	集団主義	個人の利害を、集団のそれに優先させる（個人主義）。	個人主義

			い。			
(12)	母性原理	河合隼雄(1976)	「包含する」機能で示され、すべてのものを絶対的な平等性をもって包み込む、母子一体という原理を基礎に持つ。	人間指向(ふれあい)、集団主義(一体感)	母子の一体感が薄い。開放的な父性原理で動く(父性原理)。	非人間指向、個人主義
(13)	大部屋オフィス	林周二(1984)	日本のオフィス空間では、大部屋に多数の社員が机を向かい合わせに並べてがやがやと働いているのに比べて、欧米では社員は個室で働いている。	密集指向、反プライバシー(相互監視)	社員が大部屋ではなく、個室で働く(個室オフィス)。	広域分散指向、プライバシー尊重
(14)	権威主義、独創性の欠如	西澤潤一(1986)	欧米の権威者の説をあたかも自分の体験のように思い込み、批判したり	権威主義(欧米学説に追随したがる)、前例指向(自分からは未知	既存の権威秩序に反抗し、破壊し、新たな独創的知見を生み出そうとす	反権威主義、独創指向

			すると過剰に反応する。欧米の独創技術を自らは危ない橋を渡らずに拾い上げて集中的に実用化する。	の領域には進もうとしない)	る。危ない橋を進んで渡る。	
(15)	相互協調的自己	Markus,H.R.&北山忍(1991)	自己を相互に協調し、依存した存在とする。	相互依存指向、人間指向	自己を相互に独立し、自立した存在とする。（相互独立的自己）	自立指向、非人間指向
(16)	直接対面	吉井博明(1997)	対面コミュニケーションに過重に依存する文化を持ち、集中が集中を呼ぶ体質を内在させている。	密集指向(物理的に至近距離)、人間指向(親密さ)、反プライバシー(視線)	対面コミュニケーションを偏重しない。	広域分散指向、非人間指向
(その他)						
	根回し		交渉などをうまく成立させるために、関係方面に予め話し合	縁故指向、規制主義	交渉時、予め関係方面に話をせず、直接交渉を行う。	非縁故指向、自由主義

	いをしておく。			
談合	互いに相手の動きを、相手が自由な行動(安い入札価格の提示競争)を取らないように、牽制し合って、相互の取る動き(入札価格)を事前の話し合いで決めてしまう。	規制主義(自由競争を抑制)、同調指向(相談仲間を作る)	互いに事前の話し合いをせずに、自分の取る行動を自由に決める。	自由主義、非同調指向
政府による規制	政府が、行政指導などで、業界の動きを牽制・拘束する。	規制主義	政府が、業界の動きをあまり牽制、拘束しない。	自由主義
ＮＯと言えない	互いに相手に配慮して、相手の言うことを拒絶することができない。	人間指向(気に入られようとする)、集団主義(相互批判を許容しない)	相手の言うことを、きっぱり拒絶する。	非人間指向、個人主義

こうした、従来、日本的とされる対人関係の上での特徴は、決して、日本だけに特殊なものではなく、より一般的には、農耕、とくに高温多湿な東アジアに広く分布する稲作社会（集約的農業型社会）での対人関係上の特徴へと拡張して捉えることができそうに思われる。この点の根拠については、別項の環境のドライ・ウェットさとの照合についての記述を参考にしていただきたい。
現状では、研究者の関心が、日本対欧米という視点にしばられて、日本以外の東アジアの社会のあり方に対して向いていないため、日本の対人関係上の特徴を、（本当は東アジア稲作社会に共通であるのに）日本に特殊的と思い込みやすいのではあるまいか？

〔参考文献〕

青木保「日本文化論」の変容-戦後日本の文化とアイデンティティー-中央公論社1990 芳賀綏「日本人の表現心理」中央公論社1979 南博「日本人論 - 明治から今日まで」 岩波書店1994 吉井博明「情報化と現代社会」 北樹出版1996

（資料）日本人の伝統的国民性:文献調査結果の詳細

以下は、日本人の伝統的な国民性が、ウェットであることを示している、既存の日本人の国民性に関する文献の、大まかな一覧です。文献の順序は、発表が古い順に並べてあります。 記述は、(1)文献の著者名、題名などの書誌データ、(2)ウェットさに関連する部分の要約、(3)筆者が以前行ったアンケート調査項目との関連についての情報、から成っています。

1.〔恥の文化〕
(書誌)Benedict,R. The Chrysanthemum and the Sword : Patterns of Japanese Culture, Boston Houghton Mifflin, 1948 長谷川松治訳「菊と刀 -
日本文化の型」社会思想社1948
(要旨)日本文化は、恥の文化に属する。
悪い行いが「世人の前に露顕」しない限り、思い煩う必要がない
恥を感じるためには、実際にその場に他人がいあわせるか、そう思

い込む事が必要である
→ 他律指向
生活において恥が最高の地位を占めているという事は、..各人が自己の行動に対する世評に気を配ることを意味する
→人間指向
他人の判断を基準にして自己の行動の方針を定める → 反プライバシー

(アンケート項目との関連)↓
反プライバシー
B24 自分が他人にどう見られるかを気にする
他律指向
E26 周囲の他者の影響を受けやすい
人間指向
E18 周囲の他者に気に入られようとする
E22 周囲の他者によい印象を与えようといつも気にする

2.〔家族的〕
(書誌)川島武宣 日本社会の家族的構成 1948 日本評論社
(要旨)日本の社会は、家族および家族的結合から成り立っており、そこで支配する家族原理は民主主義の原理とは対立的のものである。家族的原理とは、
1 「権威」による支配と、権威への無条件的服従 → 権威主義
2 個人的行動の欠如とそれに由来するところの個人的責任感の欠如 → 集団主義、規制主義
3 一切の自主的な批判・反省を許さぬという社会規範。「ことあげ」することを禁ずる社会規範
→ 集団主義
4 親分子分的結合の家族的雰囲気と、その外に対する敵対的意識との対立。「セクショナリズム」。
→ 縁故指向、同調指向、閉鎖指向
である。
(アンケート項目との関連)↓
権威主義
D24 権威あるとされる者の言う事を信じやすい
E15 人付き合いで相手の身分・格式を重んじる

集団主義
A1 集団・団体で行動するのを好む
D29 ひとりで他者とは別の道を歩むのを好まない
B22 集団内での相互批判を好まない
規制主義
B15 一人の犯した失敗でも周囲の仲間との連帯責任とする
縁故指向
C24 人付き合いの雰囲気が家族的である
B14 人付き合いで親分子分関係を好む
同調指向
E36 意見の同じ者だけでまとまろうとする
閉鎖指向
B21 人付き合いで身内・外の区別にこだわる
D33 自分が属する集団内の人々としか付き合おうとしない

3.〔終身雇用、年功序列〕
(書誌)Abegglen, J.C.,The Japanese Factory:Aspects of Its Social Organization,
Free Press 1958 占部都美 監訳「日本の経営」ダイヤモンド社 1960
(要旨)日本とアメリカの工場組織を比較したときに直ちに気づく決定的な相違点は、日本における会社と従業員との間の終身的関係である(終身雇用)。→定着指向
従業員の給与は主として入社時の教育程度と勤続年数・家族数によって決まり、仕事の種類と仕事をした結果に基づく部分はほんの少しである(年功序列(賃金))。→前例指向

(アンケート項目との関連)↓
定着指向
D15 一つの組織(職場など)に長期間所属しつづけるのを好む(組織内定住)
前例指向
E12 年功序列を重んじる

4.〔タテ社会〕

(書誌) 中根千枝　タテ社会の人間関係 講談社 1967

(要旨)日本では、個人が社会に向かって自分を位置づけるとき、自分のもつ資格よりも「場」を重視する。自分の属する職場、会社、官庁、学校などを「ウチの」と呼び、一定の契約(雇用上の)関係を結んでいる企業体であるという、自分にとっての客体としての認識ではなく、「私の、またわれわれの会社」が主体として認識されている。
「イエ」は、「居住」(共同生活)あるいは「経営体」という枠の設定によって構成される社会集団の一つであり、そこでは「場」が重要性を持つ。「場」という枠による機能集団の構成原理こそ、「イエ」において、全く血のつながりのない他人を後継者・相続者として位置づけて疑問が生じない根拠である。
資格が異なるものが成員として含まれる日本の社会集団においては、集団のまとまりを強める働きをするのが、一つの枠内の成員に一体感をもたせる働きかけと、集団内の個々人を結ぶ内部組織を生成させて、それを強化させることである。それが、「われわれ」という集団意識の強調であり、「ウチ」と「ソト」を区別する意識とそれに伴う情緒的な結束感が生れる。→集団主義、閉鎖指向
「場」と「集団の一体感」によって生れた日本の社会集団は、その組織の性格を、親子関係に擬せられる「タテ」性に求める。→
縁故指向
集団原理を支配する強い情緒的一体感が見いだされる → 集団主義
「タテ社会」性が、日本人の「批判精神の欠如」、「論理性の欠如」を生じさせている→
集団主義、非合理指向

(アンケート項目との関連)↓
集団主義
A14 他者との一体化・融合を好む
B22 集団内での相互批判を好まない
閉鎖指向
B21　人付き合いで身内・外の区別にこだわる
縁故指向
B14 人付き合いで親分子分関係を好む
非合理指向
C6 考え方が非合理的である

5.〔静的育児〕
(書誌)Caudill,W., Weinstein, H., Maternal Care and Infant Behavior in Japan and America Psychiatry,32 1969

(要旨)アメリカの母親は、子供の自己主張を明らかにし、母親とは違う存在であることを気づかせ、子供をより独立的にさせてゆく必要があると考えている..日本の母親は、子供との間の相互依存的な関係を発展させ、他人に依存的で従順な子供になることを期待している。
アメリカの母親は、子供に対して声をかけ、活発に働きかけることで関係を持ち、子供がより身体を動かし、環境に働きかけていく事を期待している..日本の母親は、子供と身体接触を多くし、子供があまり身体を動かさず、環境に対して受動的であるように、子供を静かにさせる傾向にある
→相互依存指向、静的指向、密集指向
(アンケート項目との関連)↓
相互依存指向
D32 互いに依存しあおうとする
密集指向
E35 他者と肌と肌が触れ合うのを好む
静的指向
F36 静止しているものを好む

6.〔中央集権〕
(書誌)辻清明 新版 日本官僚制の研究 東京大学出版会 1969
(要旨)わが国は、地方自治法を制定するまでの数十年間、前近代的な中央集権的官僚制の強い拘束の前に、近代的な地方自治が完全に窒息せしめられていた
地方自治法の問題の所在について...「権力的統制」の強い残映をうかがうことができる。
第一..中央官庁による多元的拘束である。地方自治体に対する主たる監督権を掌握していた内務省の支配は廃棄せられたのであるが、同時にその他の官庁はいずれも多岐的な地方機関を保有増設し、地方団体の自主的機能を阻害しているとともに、さらにこれらに対して煩瑣な中央的拘束を加えている。
第二..人事権を通してなされる官僚制的拘束である。従来の地方官

吏は警察官を除いて地方吏員に切り換えられたのであり、したがって人事権は地方団体長に所属している。しかしながら、そのことは極めて形式的であり、今後依然として地方吏員の任免・転任などの実権を中央官庁が掌握していく危険ははなはだ大きい。現在、副知事や助役をはじめとして地方団体の幹部級が、ほとんど従来の内務官吏によって充当されていることは、これを裏書きする。地方団体長が実質的な強力な人事権を保有できないならば、地方自治に対する中央官庁の権力的統制は、今後といえども隠然として存続する..
→密集指向
(アンケート項目との関連)↓
密集指向
F24 中央集権を好む

7.〔同調競争〕
(書誌)石田 雄 日本の政治文化 -同調と競争- 東京大学出版会
1970
(要旨)同調と競争の複合..日本の歴史的発展の連続と変化を統一的に説明する上で最も便宜だと考えられる...この視角によって日本の急速な発展とそれに伴う困難とを同時に説明できる
同調 所属集団に支配的な価値指向と行動様式にしたがうこと、すなわち他人と同じ行動を取ること
集団内の強い同調が集団外のものに対する対抗意識を強め、あるいは逆に外からの脅威が集団内の同調を強めるという関係は日本近代のナショナリズムに最もよく示されている
集団内の競争と同調との結びつき....競争と同調との相互補完と相互加速の関係....忠誠競争(同調の中の競争)の結果が忠誠の度合いをいよいよ強め、それによってより強い同調性をもたらし、逆に今度はそのような同調性の中で、より激しい忠誠競争が行われる...
→同調指向
(アンケート項目との関連)↓
同調指向
B9 行動を周囲の人々に合わせようとする
C8 周囲の皆と同じことをしようとする
C34 周囲に同調したがる

E38 主流派の一員でいようとする

8.〔甘え〕
(書誌1)土居健郎 「甘え」の構造 弘文堂 1971 (要旨)日本人は、「母子」間の気持ちの上での緊密な結びつきを、生れてから「社会化」の過程において経験する。
日本人は、成人した後も、家庭の内外で、母親依存と同じような情緒的な安定を求め続けてゆく。
甘えの心理は、人間存在に本来つきものの分離の事実を否定し、分離の痛みを止揚しようとすることである。
甘えの精神は、非論理的で閉鎖的....甘えの「他人依存性」
→非合理指向、閉鎖指向、相互依存指向
(アンケート項目との関連)↓
相互依存指向
B2 互いに甘え合おうとする
A2 人付き合いで互いにもたれ合うのを好む
A15 依頼心が強い
集団主義
A14 他者との一体化・融合を好む

非合理指向
C6 考え方が非合理的である

閉鎖指向
閉鎖的な人間関係を好む

9.〔間人主義〕
(書誌1)木村敏 人と人との間 弘文堂 1972
(要旨)日本人が「自己」を意識して言う、「自分」とは、西洋人の場合と違い、確たる個人主体の「自我」ではなく、恒常的に確立された主体ではない

selfとは、…結局のところは自己の独自性、自己の実質であって、…selfと言われるゆえんは、それが恒常的に同一性と連続性を保ち続けている点にある。
日本語で言う「自分」は、自分自身の外部に、具体的には自分と相手との間にそのつど見いだされ、そこからの分け前としてその都度獲得されてくる現実性である
日本的なものの見方、考え方においては、自分が誰であるのか、相手が誰であるのかは、自分と相手との間の人間的関係の例から決定されてくる。個人が個人としてアイデンティファイされる前にまず人間関係がある
→ 人間指向
(アンケート項目との関連)↓
人間指向
E27 人間関係そのものを重視する

(書誌2)浜口恵俊 「日本らしさ」の再発見 日本経済新聞社 1977
(要旨)日本人の特性である「間人主義」は、個人主義の、自己中心主義、自己依拠主義、対人関係の手段視、という特徴に対して、相互依存主義、相互信頼主義、対人関係の本質視、という特徴を持つ。→
相互依存指向、人間指向
(アンケート項目との関連)↓
相互依存主義
D32 互いに依存しあおうとする

人間指向
E27 人間関係そのものを重視する

10.〔他律的〕
(書誌)荒木博之 日本人の行動様式 -他律と集団の論理- 講談社 1973
(要旨)ムラ的構造のなかにあって、個人がその個性を喪失し、集団の意志によってその行動が決定されてゆく他律的人間になりおおせていく

他律的精神構造が、日本人の行動様式決定の動かすべからざる要因として働いてきた
→他律指向、同調指向
(アンケート項目との関連)↓
他律指向
E26 周囲の他者の影響を受けやすい
E20 自分の今後の進路を自分一人で決められない
同調指向

E30 没個性的であろうとする
B9 行動を周囲の人々に合わせようとする

11.〔集団主義〕

(書誌1)間宏,日本的経営 - 集団主義の功罪,日本経済新聞社,1973
(要旨)集団主義とは、個人と集団との関係で、集団の利害を個人のそれに優先させる集団中心(集団優先)の考え方である。あるいはそれに道徳的意味が加わって、そうするのが「望ましい」とか「善いことだ」ところる考え方である。
集団主義の下で、個人と集団との「望ましい」あり方は、個人と集団とが対立する関係ではなくて、一体の関係になることである。ここから、西欧の観念から見て、個人の未確立の状態がでてくる。だが、集団主義の理想から言えば、個人と集団、もっと抽象的にいえば個と全体とは、対立・協調の関係にあるのではなく、融合・一体の関係にあるのが望ましい。個人(利害)即集団(利害)であり、集団(利害)即個人(利害)である。

(書誌2)Triandis H.C., Individualism & Collectivism, Westview Press, 1995
(要旨)集団主義とは、互いに近接的にリンクされ、自分自身を、1つかそれ以上の集団(家族、会社、...)の一部であるとみなす個人からなる社会類型のことである。

1)自己の定義が、集団主義では、相互依存的であるのに対して、個人主義では、独立的である。
2)個人と集団の目標が、集団主義では、近接しているのに対して、個人主義では、そうではない。

3)集団主義社会における社会的行動の多くは、規範、義務によって導き出されるのに対し、個人主義では、個人の態度や欲求、権利や契約によって導き出される。
4)人間関係を強調することを、たとえそれが不利益な場合でも、重視するのが、集団主義社会である。個人主義社会では、人間関係の維持が生み出すのが、利益か不利益かを、理性的に分析することを重視する。

日本では、...全体の25％が、水平的集団主義(内集団の凝集性や一体感を重んじる)、50％が、垂直的集団主義(内集団のために尽くし、内集団の利益のために自己を犠牲にする、とともに、不平等性や上下方向の階層を受け入れる)である。水平的集団主義が高いのは、日本では、他者と違う態度を取ることが、悪いことである、と考えられているからである。垂直的集団主義が高いのは、日本では、権威や上下関係についての感覚が強いからと考えられる。

12.〔母性原理〕
(書誌)河合隼雄 母性社会日本の病理 中央公論社 1976
(要旨)母性原理は、「包含する」機能で示され、すべてのものを絶対的な平等性をもって包み込む。それは、母子一体というのが根本原理である。→人間指向(ふれあい)、集団主義(一体感)
一方、父性原理は、「切断する」機能に特性があり、主体と客体、善と悪、上と下などに分類する。
日本社会は、母性原理を基礎に持った「永遠の少年」型社会といえる。
(アンケート項目との関連)↓
集団主義
A14 他者との一体化・融合を好む
B1 互いにくっつき合おうとする

人間指向
B3 他人との触れ合いを好む
C10 人付き合いのあり方が親密である

13.〔大部屋オフィス〕

(書誌)林　周二　経営と文化　中央公論社　1984
(要旨)開場前の図書館口の人の列や、バスを待つ行列などを観察すると、日本人の場合には、人と人との間合いが狭く、いささか押せ押せ的に並んでいるのに、西欧人の場合には、列を作る人の間合いがかなり広い
西洋人の場合、 一人の個人の周辺の空間距離が日本人の場合より一般に広く、個人住居でも一人一部屋で住む傾向がある
企業オフィスでも、欧米について調査してみると、社員一人当たりのオフィス面積は、日本の二倍近くある。日本の役所や会社のオフィス空間は、管理職は別として、いわゆる大部屋に多勢のヒラ社員が机を向かい合わせに並べて、がやがやと働いている。これに対し、西欧の会社を訪ねるとヒラの人たちでも概して一人か二人が一部屋にこもって働いているし、米国でも、社員は一人ずつブースみたいな空間を構えている。
欧米の会社では、社員の一人一人が、ヒラに至るまでそのような隔離空間で、自分に与えられた仕事義務だけにひたすら従事し、それを果たし終えれば、隣りの仲間がどんなに忙しかろうが、どんどん帰る習慣である…逆に、日本のように、ホワイトカラーの職場集団の、仕事を通じての一体感づくりが大事にされるところでは、大部屋空間法式が向いている…
→密集指向

(アンケート項目との関連)↓
密集指向

A16 多人数で大部屋にいるのを好む
E32 互いに一緒にいるのを好む

14.〔独創性の欠如〕
(書誌)西澤潤一 独創は闘いにあり プレジデント社 1986
(要旨)(日本の科学者は、)自分の目で確認し、実験をやって納得しようという、あるいはそういう研究発表をあるがままに受け止めようという、最低限の自然科学技術者としての基本的姿勢に欠けて…その代わりに本(定説)に頼る姿勢が極めて濃厚である。なまじっ

か、権威者が書いている形になっているから、ありがたくも本当のことのように、読み手のほうは思い込んでしまう。多くの人は、欧米の権威者の説だということで、あたかも自分の体験のように思い込み、批判したりすると過剰に反応する。時には、本人以上に強烈なしっぺ返しをしたりする。欧米の知性に、それだけ寄り掛かっているが故かも知れないが、まことに不健全な話である。→権威主義
欧米は、種子の段階から金を投入し、独創技術を根気よく育てようとしている。それだけ真の独創性の難しさを熟知し、敬意を払っているからである。ひるがえって日本は、官民共に危ない橋を渡ろうとせずに、欧米でうまくいっているかどうかを探り、工業化途上の大事なものを拾い上げて来て集中的に実用化し、改良の努力を傾ける。
→ 前例指向

(アンケート項目との関連)↓
権威主義
D24 権威あるとされる者の言うことを信じやすい
前例指向

D37 冒険しようとしない
C30 前例のあることだけをしようとする

15.〔相互協調的自己〕
(書誌)Markus H.R.,Kitayama,S.,　Culture and the self: Implications for cognition, emotion, and motivation. Psychological Review,
98, pp224-253　1991
(要旨)日本をはじめとする東洋文化で優勢な、相互協調的自己観によれば、自己とは他の人や周りのことごとと結びついて高次の社会的ユニットの構成要素となる本質的に関係志向的実体である。..自己を相互に協調し、依存した存在とする....相互に依存・協調し他者と密接に結びついた自己を確認する..→
集団主義、人間指向、相互依存指向

(アンケート項目との関連)↓
集団主義

B1 互いにくっつき合おうとする

人間指向
B3 他人との触れ合いを好む
相互依存指向
A2 人付き合いで互いにもたれあうのを好む
D32 互いに依存しあおうとする

16.〔直接対面〕
(書誌)吉井博明 情報化と現代社会[改訂版] 1997 北樹出版
(要旨)組織にとって重要度の高い情報は、不確実性が高く、多義性も高い、しかも外部環境情報であるため、最もリッチで、シンボリックな意味伝達能力の高いメディア=対面コミュニケーションに依存せざるを得ず、これが立地を最も規定していることがわかる。
情報通信メディアの発展は、皮肉なことに、情報通信メディアにのりにくい情報の希少性と価値を一層高め、情報中心地へのオフィス立地を促進しているのである。
複雑、かつ高度な相互依存の網の目で結ばれている日本の組織は、ウェットな対面コミュニケーションに過重に依存する文化を持っているのであり、日本社会は、全体として、集中が集中を呼ぶ体質(集中体質)を内在させているといえよう。
→密集指向
→人間指向(親密さ)、反プライバシー(視線)
もちろん、圧倒的な技術力を持ち、政府の規制や系列の制約を受けない組織が多ければ、このようなウェットな対面コミュニケーションへの依存度は低下し、集中の必要性が少なくなるのは言うまでもない。
(アンケート項目との関連)↓
密集指向
F24 中央集権を好む
A3 狭い空間に密集していようとする
人間指向
C10 人付き合いのあり方が親密である
反プライバシー
D27 互いに視線を送り合うのを好む
B7 互いに監視し合うのを好む

〔その他の、日本文化と関係の深い概念について〕
以上の文献以外で指摘されて来た、日本文化と関係の深い、ウェットさを表していると考えられる概念を、以下にいくつか列挙しました。説明は、なぜウェットと言えるかについて書かれています。
〔根回し〕
(説明)交渉などをうまく成立させるために、関係方面に予め話し合いをしておくことを指す「根回し」は、予め存在する縁故関係をたどって、そのネットワークの中にいる各人の了解を取り付けようとする行為である。各人が、関係を生成する相互間引力の只中にいることを、話し合いの機会を持つことで、再確認させる意味合いを持ち、根源的には、縁故関係とそのもとになる相互間引力の存在が前提となる行為である。
→縁故指向
相互間引力のある状態では、何か自分のやりたいことがある場合に、根回しが必須になる。相互間引力が働いている只中にいる状態で、何か新たに行動を起こそうとする個人は、事前に周囲に、自分はこれからこういうことをします、ということについて了解を取る、ないし根回しを行っておかないと、後で、本人の行動が周囲の他者をあらぬ方向へ(相互間引力の働きで)振り回した(あるいは、逆に、周囲が本人を、自由に動けないように、相互間引力によって拘束しようとした)ということで、互いに不本意な思いをする(互いの行動を非難し合うなど)ことにつながる。
→規制主義
〔接待〕
(説明)接待は、元々あまり近くなかった存在の者同士のうちの一方が他方に対して、より心理的に近づこうとして(相手に近づいてもらおうとして)、食事などの供与をすることを指し、その点で、相互間引力がより強く働く状態に持ち込もうとする態度の現れと言える。
→縁故指向
〔談合〕
(説明)官公庁の入札などの際に見られる談合は、互いに相手の動きを、相手が自由な行動(各自が自由に安い入札価格を提示し合って競争するなど)を取らないように牽制し合って、取る動き(特定の誰かが、高めの入札価格を提示すること)を事前の話し合い(相互拘束)で決めてしまう点で、相互間引力の産物である。
→規制主義
〔公私混同〕
(説明)公共物と自分のものとを混同することが、公私の区別が「あ

いまい」となることに結びつく。
→あいまい指向

私の書籍についての関連情報。

参考文献。

＝＝ 男女の性差。
/ 総説。

Bakan, D. The duality of human existence . Chicago: Rand-McNally. 1966.
Crandall, V. J., & Robson, S. (1960). Children's repetition choices in an intellectual achievement situation following success and failure. Journal of Genetic Psychology, 1960, 97, 161-168.(間宮1979 p178参照)
Deaux,K.: The Behavior of Women and Men, Monterey, California: Brooks/Cole, 1976
Goldstein, MJ (1959). The relationship between coping and avoiding behavior and response to fear-arousing propaganda. Journal of Abnormal and Social Psychology, 1959, 58, 247-252.(対処的・回避的行動と恐怖を誘発する宣伝に対する反応との関係)
影山裕子 : 女性の能力開発, 日本経営出版会, 1968
間宮武 : 性差心理学, 金子書房, 1979
皆本二三江 : 絵が語る男女の性差, 東京書籍, 1986
村中 兼松 (著), 性度心理学―男らしさ・女らしさの心理 (1974年) , 帝国地方行政学会, 1974/1/1
Mitchell,G. : Human Sex Differences - A Primatologist's Perspective, Van Nostrand Reinhold Company, 1981 (鎮目恭夫訳 : 男と女の性差 サルと人間の比較, 紀伊国屋書店, 1983)
Newcomb,T.M.,Turner,R.H.,Converse,P.E. : Social Psycholgy:The Study of Human Interaction, New York: Holt,Rinehart and Winston, 1965 (古畑和孝訳 : 社会心理学 人間の相互作用の研究,岩波書店,1973)
Sarason, I.G., Harmatz, M.G., Sex differences and experimental conditions in serial learning. Journal of Personality and Social

Psychology., 1965, 1: 521-4.
Schwarz, O, 1949 The psychology of sex / by Oswald Schwarz Penguin, Harmondsworth, Middlesex.
Trudgill,P.:Sociolinguistics: An Introduction, Penguin Books, 1974(土田滋訳 : 言語と社会, 岩波書店, 1975)
Wallach M. A., & Caron A. J. (1959). "Attribute criteriality and sex-linked conservatism as determinants of psychological similarity. Journal of Abnormal and Social Psychology, 59, 43-50(心理的類似性の決定因としての帰属的規準性と性別関連の保守性)
Wright,F.: The effects of style and sex of consultants and sex of members in self-study groups, Small Group Behavior, 1976, 7, p433-456

東清和、小倉千加子(編) , ジェンダーの心理学, 早稲田大学出版部, 2000
宗方比佐子、佐野幸子、金井篤子(編), 女性が学ぶ社会心理学, 福村出版, 1996
諸井克英、中村雅彦、和田実, 親しさが伝わるコミュニケーション, 金子書房, 1999
D.Kimura, Sex And Cognition, MIT Press,Cambridge,Massachusetts, 1999. (野島久雄、三宅真季子、鈴木眞理子訳 (2001) 女の能力、男の能力 - 性差について科学者が答える - 新曜社)

E.Margolies,L.VGenevie, The Samson And Delilah Complex,Dodd,Mead &Company, Inc.,1986(近藤裕訳 サムソン = デリラ・コンプレックス - 夫婦関係の心理学 - ,社会思想社,1987)

/ 各論。

// 男性単独。

E.モンテール (著), 岳野 慶作 (翻訳), 男性の心理—若い女性のために (心理学叢書) , 中央出版社, 1961/1/1

// 女性単独。

扇田 夏実 (著), 負け犬エンジニアのつぶやき~女性SE奮戦記, 技術評論社, 2004/7/6

// 男女間比較。

/// 1.能力における性差

//// 1.1 空間能力における性差

Collins,D.W. & Kimura,D.(1997) A large sex difference on a two-dimensional mental rotation task. Behavioral Neuroscience,111,845-849
Eals,M. & Silverman,I.(1994)The hunter-gatherer theory of spatial sex differences: proximate factors mediating the female advantage in recall of object arrays. Ethology & Sociobiology,15,95-105.
Galea,L.A.M. & Kimura,D.(1993) Sex differences in route learning. Personality & Individual Differences,14,53-65
Linn,M.C.,Petersen,A.C.(1985) Emergence and Characterization of Sex Differences in Spatial Ability : A Meta-Analysis. Child Development, 56, No.4, 1479-1498.
McBurney,D.H., Gaulin, S.J.C., Devineni,T. & Adams,C.(1997) Superior spatial memory of women: stronger evidence for the gathering hypothesis. Evolution & Human Behavior,18,165-174
Vandenberg,S.G. & Kuse,A.R.(1978) Mental rotations, a group test of three-dimensional spatial visualization. Perceptual & Motor Skills, 47,599-601
Watson,N.V. & Kimura,D.(1991)Nontrivial sex differences in throwing and intercepting: relation to psychometrically-defined spatial functions. Personality & Individual Differences,12,375-385

//// 1.2 数学的能力における性差

Bembow,C.P., Stanley,J.C.(1982) Consequences in high school and college of sex differences in mathematical reasoning ability : A Longtitudinal perspective. Am. Educ. Res. J. 19,598-622.
Engelhard,G.(1990) Gender differences in performance on mathematics items: evidence from USA and Thailand. Contemporary Educational Psychology,15,13-16
Hyde,J.S.,Fennema,E. & Lamon,S.J.(1990) Gender differences in mathematics performance: a meta-analysis. Psychological Bulletin,107,139-155.
Hyde,J.S.(1996) Half the human experience : The Psychology of woman. 5th ed., Lexington, Mass.: D.C.Heath.
Jensen,A.R.(1988)Sex differences in arithmetic computation and reasoning in prepubertal boys and girls. Behavioral & Brain Sciences,11,198-199
Low,R. & Over,R.(1993)Gender differences in solution of algebraic

word problems containing irrelevant information. Journal of Educational Psychology,85,331-339.
Stanley,J.C., Keating,D.P., Fox,L.H. (eds.)(1974) Mathematical talent: Discovery, description, and development. Johns Hopkins University Press, Baltimore.

//// 1.3 言語能力における性差

Bleecker,M.L.,Bolla-Wilson,K. & Meyers,D.A.,(1988)Age related sex differences in verbal memory. Journal of Clinical Psychology,44,403-411.
Bromley(1958) Some effects of age on short term learning and remembering. Journal of Gerontology,13,398-406.
Duggan,L.(1950)An experiment on immediate recall in secondary school children. British Journal of Psychology,40,149-154.
Harshman,R., Hampson,E. & Berenbaum,S.(1983) Individual differences in cognitive abilities and brain organization,Part I: sex and handedness differences in ability. Canadian Journal of Psychology,37,144-192.
Hyde,J.S. & Linn,M.C.(1988) Gender differences in verbal ablility:A Meta-analysis. Psychological Bulletin, 104, No.1,53-69.
Kimura,D.(1994)Body asymmetry and intellectual pattern. Personality & Individual Differences,17,53-60.
Kramer,J.H.,Delis,D.C. & Daniel,M.(1988) Sex differences in verbal learning. Journal of Clinical Psychology,44,907-915.
McGuinness,D.,Olson,A. & Chapman,J.(1990)Sex differences in incidental recall for words and pictures. Learning & Individual Differences,2,263-285.

//// 1.4 運動能力における性差

Denckla,M.B.(1974)Development of motor co-ordination in normal children. Developmental Medicine & Child Neurology,16,729-741.
Ingram,D.(1975)Motor asymmetries in young children. Neuropsychologia,13,95-102
Nicholson,K.G. & Kimura.D.(1996) Sex differences for speech and manual skill.Perceptual & Motor Skills,82,3-13.
Kimura,D. & Vanderwolf,C.H. (1970) The relation between hand preference and the performance of individual finger movements by left and right hands. Brain,93,769-774

Lomas,J. & Kimura, D.(1976) Intrahemispheric interaction between speaking and sequential manual activity. Neuropsychologia,14,23-33.
Watson,N.V. & Kimura,D.(1991)Nontrivial sex differences in throwing and intercepting: relation to psychometrically-defined spatial functions. Personality & Individual Differences,12,375-385

//// 1.5 知覚能力における性差

Burg,A.(1966)Visual acuity as measured by dynamic and static tests. Journal of Applied Psychology,50,460-466.
Burg,A.(1968)Lateral visual field as related to age and sex. Journal of Applied Psychology,52,10-15.
Denckla,M.B. & Rudel,R.(1974) Rapid "automatized"naming of pictured objects,colors,letters and numbers by normal children. Cortex,10,186-202.
Dewar,R.(1967)Sex differences in the magnitude and practice decrement of th Muller-Lyer illusion. Psychonomic Science,9,345-346.
DuBois,P.H.(1939)The sex difference on the color naming test. American Journal of Psychology,52,380-382.
Ghent-Braine,L.(1961)Developmental changes in tactual thresholds on dominant and nondominant sides. Journal of Comparative & Physiological Psychology,54,670-673.
Ginsburg,N.,Jurenovskis,M. & Jamieson,J.(1982) Sex differences in critical flicker frequency. Perceptual & Motor Skills,54,1079-1082.
Hall,J.(1984)Nonverbal sex differences. Baltimore:Johns Hopkins.
McGuinness, D.(1972)Hearing: individual differences in perceiving. Perception,1,465-473.
Ligon,E.M.(1932)A genetic study of color naming and word reading. American Journal of Psychology,44,103-122.
Velle,W.(1987)Sex differences in sensory functions. Perspectives in Biology & Medicine,30,490-522.
Weinstein,S. & Sersen, E.A.(1961)Tactual sensitivity as a function of handedness and laterality. Journal of Comparative & Physiological Psychology,54,665-669.
Witkin,H.A.(1967)A cognitive style approach to cross-cultural research. International Journal of Psychology,2,233-250.

/// 2.パーソナリティの性差

Maccoby, E.E. & Jacklin, C.N.(1974) The Psychology of sex differences. Stanford,CA:Stanford University Press.

/// 3.社会的行動の性差

Brehm,J.W.(1966)A theory of psychological reactance. Academic Press.
Cacioppo,J.T. & Petty,R.E.(1980) Sex differences in influenceability:Toward specifying the underlying processes. Personality and Social Psychology Bulletin,6,651-656
Caldwell,M.A., & Peplau,L.A.(1982) Sex Differences in same-sex friendships. Sex Roles,8,721-732.
Chesler,M.A. & Barbarin,O.A.(1985) Difficulties iof providing help in crisis: Relationships between parents of children with cancer and their friends. Journal of Social Issues,40,113-134.
大坊郁夫(1988)異性間の関係崩壊についての認知的研究,日本社会心理学会第29回発表論文集,64.
Eagly,A.H.(1978) Sex differences in influenceability.Psychological Bulletin,85,86-116.
Eagly,A.H. & Carli,L.L.(1981) Sex of researchers and sex-typed communications as determinants of sex differences in influenceability:A meta-analysis of social influence studies. Psychological Bulletin,90,1-20.
Eagly,A.H. & Johnson,B.T.(1990) Gender and leadership style: A meta-analysis. Psychological Bulletin,108,233-256.
Hall,J.A.(1984) Nonverbal sex differences:Communication accuracy and expressive style. Baltimore:John Hopkins University Press.
Hays,R.B.(1984) The development and maintenance of friendship. Journal of Personal and Social Relationships,1,75-98.
Horner,M.S.(1968)Sex differences in achievement motivation and performance in competitive and non-competitive situation. Unpublished Ph.D. thesis. University of Michigan.
Jourard,S.M.(1971) Self-disclosure:An experimental analysis of the transparent self. New York:Wiley & Sons, Inc.
Jourard,S.M & Lasakow,P.(1958) Some factors in self-disclosure. Journal of Abnormal and Social Psychology, 56, 91-98.
Latane',B. & Bidwell,L.D.(1977) Sex and affiliation in college cafeteria.Personality and Social Psychology Bulletin,3,571-574
松井豊(1990)青年の恋愛行動の構造,心理学評論,33,355-370.

Nemeth,C.J. Endicott,J. & Wachtler,J.(1976) From the '50s to the '70s:Women in jury deliberations,Sociometry,39,293-304.
Rands,M. & Levinger, G. (1979)Implicit theory of relationship: An intergenerational study. Journal of Personality and Social Psychology,37,645-661.
坂田桐子、黒川正流(1993) 地方自治体における職場のリーダーシップ機能の性差の研究-「上司の性別と部下の性別の組合せ」からの分析,産業・組織心理学研究,7,15-23.
総務庁青少年対策本部(1991) 現代の青少年 - 第 5 回青少年の連帯感などに関する調査報告書,大蔵省印刷局.
上野徳美(1994) 説得的コミュニケーションに対する被影響性の性差に関する研究,実験社会心理学研究,34,195-201
Winstead,B.A.(1986) Sex differences in same-sex friendships. In V.J.Derlega & B.A.Winstead(Eds.) Friendship and social interaction. New York:Springer-Verlag.Pp.81-99
Winstead,B.A., Derlega,V.J., Rose,S. (1997) Gender and Close Relationships. Thousand Oaks, California:Sage Publications.
山本真理子、松井豊、山成由紀子(1982) 認知された自己の諸側面の構造,教育心理学研究,30,64-68

＝＝ 世界の社会の分類。男女間における、優位性の比較。
/ 一般。

富永 健一 (著), 社会学原理, 岩波書店, 1986/12/18
岩井 弘融 (著), 社会学原論, 弘文堂, 1988/3/1

笠信太郎, ものの見方について, 1950, 河出書房
伊東俊太郎 (著) , 比較文明 UP選書 , 東京大学出版会, 1985/9/1

/ 気候。

和辻 哲郎 (著), 風土: 人間学的考察, 岩波書店, 1935
鈴木秀夫, 森林の思考・砂漠の思考, 1978, 日本放送出版協会
石田英一郎, 桃太郎の母 比較民族学的論集 , 法政大学出版局 , 1956
石田英一郎, 東西抄 - 日本・西洋・人間, 1967, 筑摩書房
松本 滋 (著), 父性的宗教 母性的宗教 (UP選書) , 東京大学出版会, 1987/1/1
ハンチントン (著), 間崎 万里 (翻訳), 気候と文明 (1938年) (岩波文庫) , 岩波書店, 1938
安田 喜憲 (著), 大地母神の時代—ヨーロッパからの発想 (角川選書)

, 角川書店, 1991/3/1
安田 喜憲 (著), 気候が文明を変える (岩波科学ライブラリー (7)) , 岩波書店, 1993/12/20

鈴木 秀夫 (著), 超越者と風土 , 原書房, 2004/1/1
鈴木 秀夫 (著), 森林の思考・砂漠の思考 (NHKブックス 312) , NHK出版1978/3/1
鈴木 秀夫 (著), 風土の構造, 原書房, 2004/12/1
梅棹 忠夫 (著), 文明の生態史観, 中央公論社, 1967

ラルフ・リントン (著), 清水 幾太郎 (翻訳), 犬養 康彦 (翻訳), 文化人類学入門 (現代社会科学叢書), 東京創元社, 1952/6/1
祖父江孝男『文化とパーソナリティ』弘文堂，1976
F.L.K.シュー (著), 作田 啓一 (翻訳), 浜口 恵俊 (翻訳), 比較文明社会論―クラン・カスト・クラブ・家元 (1971年), 培風館，1970．

J□J□バハオーフェン (著), 吉原 達也 (翻訳), 母権論序説 付・自叙伝, 創樹社, 1989/10/20

阿部 一, 家族システムの風土性, 東洋学園大学紀要 (19), 91-108, 2011-03

/ 移動性。
大築立志, 手の日本人、足の西欧人, 1989, 徳間書店
前村 奈央佳, 移動と定住に関する心理的特性の検討：異文化志向と定住志向の測定および関連性について, 関西学院大学先端社会研究所紀要, 6号 pp.109-124, 2011-10-31
浅川滋男, 東アジア漂海民と家船居住, 鳥取環境大学, 紀要, 創刊号, 2003.2 pp41-60

/ 食糧の確保の手段。
千葉徳爾, 農耕社会と牧畜社会, 山田英世 (編), 風土論序説 (比較思想・文化叢書) , 国書刊行会, 1978/3/1
大野 盛雄 (著), アフガニスタンの農村から―比較文化の視点と方法 (1971年) (岩波新書) , 岩波書店, 1971/9/20
梅棹 忠夫 (著), 狩猟と遊牧の世界―自然社会の進化, 講談社, 1976/6/1

志村博康 (著), 農業水利と国土, 東京大学出版会, 1987/11/1

/ 心理。
Triandis H.C., Individualism & Collectivism, Westview Press, 1995, （H.C. トリアンディス (著), Harry C. Triandis (原著), 神山 貴弥 (翻訳), 藤原 武弘 (翻訳), 個人主義と集団主義―2つのレンズを通して読み解く文化, 北大路書房, 2002/3/1 ）
Yamaguchi, S., Kuhlman, D. M., & Sugimori, S. (1995). Personality correlates of allocentric tendencies in individualist and collectivist cultures. Journal of Cross-Cultural Psychology, 26, 658-672
Markus H.R.,Kitayama,S., Culture and the self: Implications for cognition, emotion, and motivation. Psychological Review, 98, pp224-253 1991

千々岩 英彰 (編集), 図解世界の色彩感情事典―世界初の色彩認知の調査と分析, 河出書房新社, 1999/1/1

＝＝ 男性優位社会。移動生活。遊牧と牧畜。気体。

/ 欧米諸国。全般。
星 翔一郎 (著), 国際文化教育センター (編集), 外資系企業 就職サクセスブック, ジャパンタイムズ, 1986/9/1

/ 西欧。
// 単独社会。
// 社会間比較。
西尾幹二, ヨーロッパの個人主義, 1969, 講談社
会田 雄次 (著), 『アーロン収容所：西欧ヒューマニズムの限界』中公新書, 中央公論社 1962年
池田 潔 (著), 自由と規律: イギリスの学校生活 (岩波新書) , 岩波書店, 1949/11/5

鯖田 豊之 (著), 肉食の思想―ヨーロッパ精神の再発見 (中公新書 92) , 中央公論社, 1966/1/1
八幡 和郎 (著), フランス式エリート育成法―ENA留学記 (中公新書 (725)) , 中央公論社, 1984/4/1
木村 治美 (著), 新交際考―日本とイギリス, 文藝春秋, 1979/11/1
森嶋 通夫 (著), イギリスと日本―その教育と経済 (岩波新書 黄版 29) , 岩波書店, 2003/1/21
/ アメリカ。

// 単独社会。
松浦秀明, 米国さらりーまん事情, 1981, 東洋経済新報社
Stewart, E.C., American Cultural Patterns A Cross-Cultural Perspectives, 1972, Inter-cultural Press (久米昭元訳, アメリカ人の思考法, 1982, 創元社)
吉原 真里 (著), Mari Yoshihara (著), アメリカの大学院で成功する方法—留学準備から就職まで (中公新書), 中央公論新社, 2004/1/1
リチャード・H. ロービア (著), Richard H. Rovere (原著), 宮地 健次郎 (翻訳), マッカーシズム (岩波文庫) , 岩波書店, 1984/1/17
G.キングスレイ ウォード (著), 城山 三郎 (翻訳), ビジネスマンの父より息子への30通の手紙, 新潮社, 1987/1/1
長沼英世, ニューヨークの憂鬱ー豊かさと快適さの裏側, 中央公論社, 1985
八木 宏典 (著), カリフォルニアの米産業, 東京大学出版会, 1992/7/1
// 社会間比較。
/ ユダヤ。
// 単独社会。
旧約聖書。
新約聖書。
中川 洋一郎, キリスト教・三位一体論の遊牧民的起源—イヌの《仲介者》化によるセム系一神教からの決別—, 経済学論纂 (中央大学) 第60巻第 5 ・ 6 合併号 (2020年 3 月) ,pp.431-461
トマス・ア・ケンピス (著), 大沢 章 (翻訳), 呉 茂一 (翻訳), キリストにならいて (岩波文庫) , 岩波書店, 1960/5/25
// 社会間比較。
/ 中東。
// 単独社会。
クルアーン。コーラン。
鷹木 恵子 U.A.E.地元アラブ人の日常生活にみる文化変化 : ドバイでの文化人類学的調査から http://id.nii.ac.jp/1509/00000892/ Syouwa63nenn
// 社会間比較。
後藤 明 (著), メッカ—イスラームの都市社会 (中公新書 1012) , 中央公論新社, 1991/3/1
片倉もとこ『「移動文化考」 イスラームの世界をたずねて 』日本経済新聞社、1995年
片倉もとこ『イスラームの日常世界』岩波新書 , 1991 .
牧野 信也 (著), アラブ的思考様式, 講談社, 1979/6/1
井筒 俊彦 (著), イスラーム文化－その根柢にあるもの , 岩波書店,

1981/12/1
/ モンゴル。
// 単独社会。
鯉渕 信一 (著), 騎馬民族の心―モンゴルの草原から (NHKブックス) , 日本放送出版協会, 1992/3/1
// 社会間比較。

＝＝ 女性優位社会。定住生活。農耕。液体。
/ 東アジア。
山口 勧 (編集), 社会心理学―アジア的視点から (放送大学教材) , 放送大学教育振興会, 1998/3/1
山口 勧 (編集), 社会心理学―アジアからのアプローチ, 東京大学出版会, 2003/5/31
石井 知章 (著), K□A□ウィットフォーゲルの東洋的社会論, 社会評論社, 2008/4/1
/ 日本。
// 単独社会。

/// 文献調査。
南博, 日本人論 - 明治から今日まで , 岩波書店, 1994
青木保, 「日本文化論」の変容-戦後日本の文化とアイデンティティー-, 中央公論社, 1990

/// 社会全般。
//// 著者が、日本人の場合。
浜口恵俊 「日本らしさ」の再発見 日本経済新聞社 1977
阿部 謹也 (著), 「世間」とは何か (講談社現代新書) , 講談社, 1995/7/20
川島武宣, 日本社会の家族的構成, 1948, 学生書房

中根千枝, タテ社会の人間関係, 講談社, 1967
木村敏, 人と人との間, 弘文堂, 1972
山本七平 (著), 「空気」の研究, 文藝春秋, 1981/1/1
会田 雄次 (著), 日本人の意識構造 (講談社現代新書) , 講談社, 1972/10/25
石田英一郎, 日本文化論 筑摩書房 1969
荒木博之, 日本人の行動様式 -他律と集団の論理- , 講談社, 1973

吉井博明 情報化と現代社会[改訂版] 1997 北樹出版

//// 著者が、日本人以外の場合。
///// 欧米諸国からの視点。
Benedict,R., The Chrysanthemum and the Sword : Patterns of Japanese Culture, Boston Houghton Mifflin, 1948 (長谷川松治訳, 菊と刀 - 日本文化の型, 社会思想社, 1948)
Caudill,W., Weinstein,H., Maternal Care and Infant Behavior in Japan and America, Psychiatry,32 1969
Clark,G.The Japanese Tribe:Origins of a Nation's Uniqueness, 1977(村松増美訳 日本人 - ユニークさの源泉 - , サイマル出版会 1977)
Ederer,G., Das Leise Laecheln Des Siegers, 1991, ECON Verlag(増田靖訳 勝者・日本の不思議な笑い, 1992 ダイヤモンド社)
Kenrick,D.M., Where Communism Works: The Success of Competitive-Communism In Japan,1988,Charles E. Tuttle Co., Inc., (ダグラス・M. ケンリック (著), 飯倉 健次 (翻訳), なぜ“共産主義”が日本で成功したのか, 講談社, 1991/11/1)
Reischauer,E.O., The Japanese Today: Change and Continuity,1988, Charles E. Tuttle Co. Inc.
W.A.グロータース (著), 柴田 武 (翻訳), 私は日本人になりたい―知りつくして愛した日本文化のオモテとウラ (グリーン・ブックス 56) , 大和出版, 1984/10/1

///// 東アジアからの視点。
李 御寧 (著), 「縮み」志向の日本人, 学生社, 1984/11/1

/// 心理。
安田三郎「閥について——日本社会論ノート（３）」（『現代社会学3』2巻1号所収・1975・講談社）
木村敏, 人と人との間 - 精神病理学的日本論, 1972, 弘文堂
丸山真男, 日本の思想, 1961, 岩波書店
統計数理研究所国民性調査委員会 (編集), 日本人の国民性〈第5〉戦後昭和期総集, 出光書店, 1992/4/1

/// コミュニケーション。
芳賀綏, 日本人の表現心理, 中央公論社, 1979

/// 歴史。
R.N.ベラー (著), 池田 昭 (翻訳), 徳川時代の宗教 (岩波文庫), 岩波書店, 1996/8/20
勝俣 鎮夫 (著), 一揆 (岩波新書) , 岩波書店, 1982/6/21
永原 慶二 (著), 日本の歴史〈10〉下克上の時代, 中央公論社, 1965年
戸部 良一 (著), 寺本 義也 (著), 鎌田 伸一 (著), 杉之尾 孝生 (著), 村井 友秀 (著), 野中 郁次郎 (著), 失敗の本質—日本軍の組織論的研究, ダイヤモンド社, 1984/5/1

/// 民俗。
宮本 常一 (著), 忘れられた日本人 (岩波文庫) , 岩波書店, 1984/5/16

/// 食糧の確保。
大内力 (著), 金沢夏樹 (著), 福武直 (著) , 日本の農業 UP選書, 東京大学出版会, 1970/3/1

/// 地域。
//// 村落。
中田 実 (編集), 坂井 達朗 (編集), 高橋 明善 (編集), 岩崎 信彦 (編集), 農村 (リーディングス日本の社会学) , 東京大学出版会, 1986/5/1
蓮見 音彦 (著), 苦悩する農村—国の政策と農村社会の変容, 有信堂高文社, 1990/7/1
福武直 (著) , 日本農村の社会問題 UP選書, 東京大学出版会, 1969/5/1
余田 博通 (編集), 松原 治郎 (編集), 農村社会学 (1968年) (社会学選書) , 川島書店, 1968/1/1
今井幸彦 編著, 日本の過疎地帯 (1968年) (岩波新書), 岩波書店, 1968-05

きだみのる (著), 気違い部落周游紀行 (冨山房百科文庫 31), 冨山房, 1981/1/30
きだ みのる (著), にっぽん部落 (1967年) (1967年) (岩波新書)

//// 都市。

鈴木広 高橋勇悦 篠原隆弘 編, リーディングス日本の社会学 7 都市, 東京大学出版会, 1985/11/1
倉沢 進 (著), 秋元 律郎 (著), 町内会と地域集団 (都市社会学研究叢書) , ミネルヴァ書房, 1990/9/1
佐藤 文明 (著), あなたの「町内会」総点検 [三訂増補版] —地域のトラブル対処法 (プロブレムQ&A), 緑風出版, 2010/12/1

//// エリア毎の特色。
京都新聞社 (編さん), 京男・京おんな, 京都新聞社, 1984/1/1
丹波 元 (著), こんなに違う京都人と大阪人と神戸人 (PHP文庫) , PHP研究所, 2003/3/1
サンライズ出版編集部 (編集), 近江商人に学ぶ, サンライズ出版, 2003/8/20

/// 血縁関係。
有賀 喜左衛門 (著), 日本の家族 (1965年) (日本歴史新書) , 至文堂, 1965/1/1
光吉 利之 (編集), 正岡 寛司 (編集), 松本 通晴 (編集), 伝統家族 (リーディングス 日本の社会学) , 東京大学出版会, 1986/8/1

/// 政治。
石田雄, 日本の政治文化 - 同調と競争, 1970, 東京大学出版会
京極純一, 日本の政治, 1983, 東京大学出版会

/// ルール。法律。
青柳文雄, 日本人の罪と罰, 1980, 第一法規出版
川島武宣, 日本人の法意識 (岩波新書 青版A-43) , 岩波書店, 1967/5/20

/// 行政。
辻清明 新版 日本官僚制の研究 東京大学出版会 1969
藤原 弘達 (著), 官僚の構造 (1974年) (講談社現代新書) , 講談社, 1974/1/1
井出嘉憲 (著), 日本官僚制と行政文化—日本行政国家論序説, 東京大学出版会, 1982/4/1
竹内 直一 (著), 日本の官僚—エリート集団の生態 (現代教養文庫) , 社会思想社, 1988/12/1
教育社 (編集), 官僚—便覧 (1980年) (教育社新書—行政機構シリーズ〈122〉), 教育社, 1980/3/1
加藤栄一, 日本人の行政—ウチのルール (自治選書), 第一法規出版,

1980/11/1
新藤 宗幸 (著), 技術官僚―その権力と病理 (岩波新書), 岩波書店, 2002/3/20
新藤 宗幸 (著), 行政指導―官庁と業界のあいだ (岩波新書) , 岩波書店, 1992/3/19

武藤 博己 (著), 入札改革―談合社会を変える (岩波新書) , 岩波書店, 2003/12/19

宮本政於, お役所の掟, 1993, 講談社

/// 経営。
間宏,日本的経営 - 集団主義の功罪,日本経済新聞社,1973
岩田龍子, 日本の経営組織, 1985, 講談社
高城 幸司 (著), 「課長」から始める 社内政治の教科書, ダイヤモンド社, 2014/10/31

/// 教育。
大槻 義彦 (著), 大学院のすすめ―進学を希望する人のための研究生活マニュアル, 東洋経済新報社, 2004/2/13
山岡栄市 (著), 人脈社会学―戦後日本社会学史 (御茶の水選書) , 御茶の水書房, 1983/7/1

/// スポーツ。
Whiting, R., The Chrysanthemum and the Bat 1977 Harper Mass Market Paperbacks (松井みどり訳, 菊とバット 1991 文藝春秋)

/// 性差。
//// 母性。母親。
Caudill,W., Weinstein, H., Maternal Care and Infant Behavior in Japan and America Psychiatry,32 1969

河合隼雄, 母性社会日本の病理, 中央公論社 1976
佐々木 孝次 (著), 母親と日本人, 文藝春秋, 1985/1/1
小此木 啓吾 (著), 日本人の阿闍世コンプレックス, 中央公論社, 1982
斎藤学, 『「家族」という名の孤独』講談社 1995
山村賢明, 日本人と母―文化としての母の観念についての研究, 東洋

館出版社, 1971/1/1
土居健郎, 「甘え」の構造, 1971, 弘文堂

山下 悦子 (著), 高群逸枝論—「母」のアルケオロジー, 河出書房新社, 1988/3/1
山下 悦子 (著), マザコン文学論—呪縛としての「母」 (ノマド叢書) , 新曜社, 1991/10/1

中国新聞文化部 (編集), ダメ母に苦しめられて (女のココロとカラダシリーズ) , ネスコ, 1999/1/1

加藤秀俊, 辛口教育論 第四回 衣食住をなくした家, 食農教育 200109, 農山漁村文化協会

//// 女性。
木下 律子 (著), 妻たちの企業戦争 (現代教養文庫) , 社会思想社, 1988/12/1
木下律子 (著), 王国の妻たち—企業城下町にて, 径書房, 1983/8/1
中国新聞文化部 (編集), 妻の王国—家庭内“校則”に縛られる夫たち (女のココロとカラダシリーズ), ネスコ, 1997/11/1

//// 男性。
中国新聞文化部 (編集), 長男物語—イエ、ハハ、ヨメに縛られて (女のココロとカラダシリーズ) , ネスコ, 1998/7/1
中国新聞文化部 (編集), 男が語る離婚—破局のあとさき (女のココロとカラダシリーズ) , ネスコ, 1998/3/1

// 社会間比較。
/// 欧米諸国との比較。
山岸俊男, 信頼の構造, 1998, 東京大学出版会
松山幸雄「勉縮」のすすめ, 朝日新聞社, 1978
木村尚三郎, ヨーロッパとの対話, 1974, 日本経済新聞社
栗本 一男 (著), 国際化時代と日本人—異なるシステムへの対応 (NHKブックス 476) , 日本放送出版協会, 1985/3/1
/// 社会の特殊性。その有無についての検討。
高野陽太郎、纓坂英子, " 日本人の集団主義" と" アメリカ人の個人主義" -通説の再検討-心理学研究vol.68 No.4,pp312-327,1997
杉本良夫、ロス・マオア, 日本人は「日本的」か - 特殊論を超え多

元的分析へ - , 1982, 東洋経済新報社
/// 血縁関係。
増田光吉, アメリカの家族・日本の家族, 1969, 日本放送出版協会
中根千枝『家族を中心とする人間関係』講談社，1977
/// コミュニケーション。
山久瀬 洋二 (著), ジェイク・ロナルドソン (翻訳), 日本人が誤解される100の言動 100 Cross-Cultural Misunderstandings Between Japanese People and Foreigners【日英対訳】 (対訳ニッポン双書) , IBCパブリッシング, 2010/12/24
鈴木 孝夫 (著), ことばと文化 (岩波新書) , 岩波書店, 1973/5/21
/// 独創性。
西沢潤一, 独創は闘いにあり, 1986, プレジデント社
江崎玲於奈, アメリカと日本 - ニューヨークで考える, 1980, 読売新聞社
乾侑, 日本人と創造性, - 科学技術立国実現のために, 1982, 共立出版
S.K.ネトル、桜井邦朋, 独創が生まれない - 日本の知的風土と科学, 1989, 地人書館

/// 経営。
Abegglen, J.C.,The Japanese Factory:Aspects of Its Social Organization,Free Press 1958 (占部都美 監訳 「日本の経営」ダイヤモンド社 1960)
林 周二, 経営と文化, 中央公論社, 1984
太田肇 (著) , 個人尊重の組織論, 企業と人の新しい関係 (中公新書) , 中央公論新社, 1996/2/25
/// 保育。
Caudill,W., Weinstein, H., Maternal Care and Infant Behavior in Japan and America Psychiatry,32 1969
/// 教育。
岡本 薫 (著), 新不思議の国の学校教育―日本人自身が気づいていないその特徴, 第一法規, 2004/11/1
宮智 宗七 (著), 帰国子女―逆カルチュア・ショックの波紋 (中公新書) 中央公論社, 1990/1/1
グレゴリー・クラーク (著), Gregory Clark (原著), なぜ日本の教育は変わらないのですか? , 東洋経済新報社, 2003/9/1
恒吉僚子, 人間形成の日米比較 - かくれたカリキュラム, 1992, 中央公論社
/// 性差。
//// 女性。

杉本 鉞子 (著), 大岩 美代 (翻訳), 武士の娘 (筑摩叢書 97) , 筑摩書房, 1967/10/1
//// 男性。
グスタフ・フォス (著), 日本の父へ, 新潮社, 1977/3/1
/ 韓国。
// 単独社会。
朴 泰赫 , 醜い韓国人, —われわれは「日帝支配」を叫びすぎる (カッパ・ブックス) 新書 – , 光文社, 1993/3/1
朴 承薫 (著), 韓国 スラングの世界, 東方書店, 1986/2/1
// 社会間比較。
コリアンワークス, 知れば知るほど理解が深まる「日本人と韓国人」なるほど事典—衣食住、言葉のニュアンスから人づきあいの習慣まで (PHP文庫) 文庫 – , PHP研究所, 2002/1/1
造事務所 , こんなに違うよ！ 日本人・韓国人・中国人 (PHP文庫), PHP研究所 (2010/9/30)
/ 中国。
// 単独社会。
/// 社会全般。
林 松濤 (著), 王 怡韡 (著), 舩山 明音 (著) , 日本人が知りたい中国人の当たり前, 中国語リーディング, 三修社, 2016/9/20
/// 心理。
園田茂人, 中国人の心理と行動, 2001, 日本放送出版協会
デイヴィッド・ツェ (著), 吉田 茂美 (著), 関係(グワンシ) 中国人との関係のつくりかた , ディスカヴァー・トゥエンティワン, 2011/3/16
/// 歴史。
加藤 徹 (著), 西太后—大清帝国最後の光芒 (中公新書) 新書 – , 中央公論新社, 2005/9/1
宮崎 市定 (著), 科挙—中国の試験地獄 (中公新書 15) , 中央公論社, 1963/5/1
/// 血縁関係。
瀬川 昌久, 現代中国における宗族の再生と文化資源化 東北アジア研究 18 pp.81-97 2014-02-19
// 社会間比較。
邱 永漢 (著), 騙してもまだまだ騙せる日本人—君は中国人を知らなさすぎる, 実業之日本社, 1998/8/1
邱永漢 (著) , 中国人と日本人, 中央公論新社, 1993
/ ロシア。
// 単独社会。
/// 社会全般。

ヘドリック スミス (著), 飯田 健一 (翻訳), 新・ロシア人〈上〉, 日本放送出版協会, 1991/2/1
ヘドリック スミス (著), 飯田 健一 (翻訳), 新・ロシア人〈下〉, 日本放送出版協会, 1991/3/1
/// 歴史。
伊賀上 菜穂, 結婚儀礼に現れる帝政末期ロシア農民の親族関係：記述資料分析の試み スラヴ研究, 49, 179-212 2002
奥田 央, 1920年代ロシア農村の社会政治的構造（１）, 村ソヴェトと農民共同体, 東京大学, 経済学論集, 80 1-2, 2015-7 https://repository.dl.itc.u-tokyo.ac.jp › econ0800102
大矢 温, スラヴ派の共同体論における「ナショナル」意識 - 民族意識から国民意識への展開 - , 札幌法学 29 巻 1・2 合併号（2018）, pp.31-53
// 社会間比較。
/// 心理。
アレックス インケルス (著), Alex Inkeles (原著), 吉野 諒三 (翻訳), 国民性論—精神社会的展望, 出光書店, 2003/9/1
服部 祥子 (著), 精神科医の見たロシア人 (朝日選書 245), 朝日新聞社出版局, 1984/1/1
/// 民俗。
アレクサンドル・プラーソル, ロシアと日本：民俗文化のアーキタイプを比較して, 新潟国際情報大学情報文化学部紀要第10号、2007.
/// 血縁関係。
高木正道, ロシアの農民と中欧の農民, ――家族形態の比較――, 法経研究, 42巻1号 pp.1-38, 1993
/// 経営。
宮坂 純一, ロシアではモチベーションがどのような内容で教えられているのか, 社会科学雑誌』第 5 巻（2012年11月）―― 503-539
宮坂 純一, 日ロ企業文化比較考, 『社会科学雑誌』第 18 巻（2017 年 9 月）――, pp.1-48
/// 性差。
Д.Х. Ибрагимова, Кто управляет деньгами в российских семьях?, Экономическая социология. Т. 13. № 3. Май 2012, pp22-56

/ 東南アジア。
// 単独社会。
丸杉孝之助, 東南アジアにおける農家畜産と農業経営, 熱帯農業, 19(1), 1975 pp.46-49
中川 剛 (著), 不思議のフィリピン—非近代社会の心理と行動 (NHK

ブックス) , 日本放送出版協会, 1986/11/1
// 社会間比較。

＝＝ 液体。
/ 液体の性質。液体の動き。
小野周 著, 温度とはなにか , 岩波書店、1971
小野 周 (著), 表面張力 (物理学one point 9), 共立出版, 1980/10/1
イーゲルスタッフ (著), 広池 和夫 (翻訳), 守田 徹 (翻訳), 液体論入門 (1971年) (物理学叢書) , 吉岡書店, 1971
上田 政文 (著), 湿度と蒸発—基礎から計測技術まで, コロナ社, 2000/1/1
稲松 照子 (著), 湿度のおはなし, 日本規格協会, 1997/8/1
伊勢村 寿三 (著), 水の話 (化学の話シリーズ (6)) , 培風館, 1984/12/1
力武常次 (著), 基礎からの物理 総合版 (チャート式シリーズ) , 数研出版, 数研出版, 1986/1/1
野村 祐次郎 (著), 小林 正光 (著), 基礎からの化学 総合版 (チャート式・シリーズ) , 数研出版, 1985/2/1
物理学辞典編集委員会 , 物理学辞典 改訂版 , 培風館, 1992
池内満, 分子のおもちゃ箱 , 2008年1 月19日 http://mike1336.web.fc2.com/ (2008年2月23日)
/ 液体の知覚。
大塚巌 (2008). ドライ、ウェットなパーソナリティの認知と気体、液体の運動パターンとの関係. パーソナリティ研究, 16, 250-252

＝＝ 生命。
/ 総論。
鈴木孝仁, 本川達雄, 鷲谷いづみ, チャート式シリーズ, 新生物 生物基礎・生物 新課程版, 数研出版, 2013/2/1
/ 遺伝子。
リチャード・ドーキンス【著】，日高敏隆，岸由二，羽田節子，垂水雄二【訳】, 利己的な遺伝子, 紀伊國屋書店, 1991/02/28
/ 精子。卵子。
緋田 研爾 (著), 精子と卵のソシオロジー—個体誕生へのドラマ (中公新書) 中央公論社, 1991/3/1
/ 神経系。
二木 宏明 (著), 脳と心理学—適応行動の生理心理学 (シリーズ脳の科学) , 朝倉書店, 1984/1/1

山鳥 重 (著), 神経心理学入門, 医学書院, 1985/1/1
伊藤 正男 (著), 脳の設計図 (自然選書) , 中央公論社, 1980/9/1
D.O.ヘッブ (著), 白井 常 (翻訳), 行動学入門―生物科学としての心理学 (1970年) , 紀伊国屋書店, 1970/1/1
// 知覚。
岩村 吉晃 (著), タッチ (神経心理学コレクション), 医学書院, 2001/4/1
松田 隆夫 (著), 知覚心理学の基礎, 培風館, 2000/7/1
// パーソナリティ。
Murray,H.A., 1938, Exploration in personality:A clinical and experimental study of fifty men of collegeage.
Schacter, S., 1959, The Psychology of affiliation.Stanford University press.
三隅三不二, 1978, リーダーシップの科学, 有斐閣
Fiedler,F.E., 1973, The trouble with leadership training is that it doesn't train leaders-by. Psychology Today Feb(山本憲久訳 1978 リーダーシップを解明する 岡堂哲雄編 現代のエスプリ131: グループ・ダイナミクス 至文堂).
Snyder,M., 1974, The self-monitoring of expssive behavior. Journal of Personality and Social Psychology, 30, 526-537.
Fenigstein, A., Scheier,M.F., & Buss,A.H., 1975, Public and private self-consciousness: Assessment and theory. Journal of Consulting and Clinical Psychology,43,522-527.
押見輝男, 自分を見つめる自分-自己フォーカスの社会心理学, サイエンス社, 1992
Wicklund, R.A., & Duval,S. 1971 Opinion change and performance facilitation as a result of objective self-awareness. Journal of Experimental Social Psychology,7,319-342.
Jourard, S.M. 1971, The transparent self, rev.ed.Van Nostrand Reinhold(岡堂哲雄訳 1974 透明なる自己 誠信書房).
Brehm, J.W.,1966, A Theory of psychological reactance. Academicpss.
Toennies, F.,1887, Gemeinshaft und Gesellshaft, Leipzig,(杉之原寿一訳「ゲマインシャフトとゲゼルシャフト」1957 岩波書店)
McCrae, R. R., Costa, P. T., Jr., 1987, Validation of the five-factor model of personality across instruments and observers., Journal of Personality and Social Psychology, 52, 81-90
Eysenck, H. J., 1953, The structure of human personality. New York: Wiley.
Edwards, A.L., 1953, The relationship between judged desirebility

of a trait and the plobability that the trait will be endowsed. Journal of Applied Psychology, 37,90-93
// 情報。
吉田 民人 (著), 情報と自己組織性の理論, 東京大学出版会, 1990/7/1
/ 社会性。
吉田 民人 (著), 主体性と所有構造の理論, 東京大学出版会, 1991/12/1

/ 人間以外の生命。
// 行動。
デティアー(著), ステラー(著), 日高敏隆(訳),小原嘉明(訳), 動物の行動 - 現代生物学入門7巻, 岩波書店, 1980/1/1
// 心理。
D.R.グリフィン (著), 桑原 万寿太郎 (翻訳), 動物に心があるか―心的体験の進化的連続性 (1979年) (岩波現代選書―NS〈507〉), 岩波書店, 1979年
// 文化。
J.T.ボナー (著), 八杉 貞雄 (翻訳), 動物は文化をもつか (1982年) (岩波現代選書―NS〈532〉) , 岩波書店, 1982/9/24
// 社会。
今西 錦司 (著), 私の霊長類学 (講談社学術文庫 80) , 講談社, 1976/11/1
今西錦司『私の自然観』講談社学術文庫，1990 (1966)．
河合雅雄 (著), ニホンザルの生態, 河出書房新社, 1976/1/1
伊谷純一郎 (著) , 高崎山のサル (講談社文庫), 講談社, 1973/6/26
伊谷純一郎 (著) , 霊長類社会の進化 (平凡社 自然叢書) 単行本 –, 平凡社, 1987/6/1
/ 無神論。
リチャード・ドーキンス (著), 垂水 雄二 (翻訳), 神は妄想である―宗教との決別, 早川書房, 2007/5/25

＝＝ 辞書。
新村出 (編著) ,広辞苑 - 第5版, 岩波書店, 1998
Stein, J., & Flexner, S. B. (Eds.), The Random House Thesaurus., Ballantine Books., 1992

＝＝ データ分析の方法。
田中敏 (2006). 実践心理データ解析 改訂版 新曜社
中野博幸, JavaScript-STAR , 2007年11月9日 http://www.kisnet.or.jp/nappa/software/star/ (2008年2月25日)

私が執筆した全ての書籍。その一覧。

Iwao Otsuka (Aug 12, 2020) Sex Differences And Female Dominance
Iwao Otsuka (Aug 12, 2020) 性别差异和女性主导地位
Iwao Otsuka (Aug 12, 2020) Половые различия и женское превосходство
Iwao Otsuka (Aug 12, 2020) 男女の性差と女性の優位性

Iwao Otsuka (Aug 12, 2020) Female-Dominated Society Will Rule The World.
Iwao Otsuka (Aug 12, 2020) 女性主导的社会将统治世界
Iwao Otsuka (Aug 12, 2020) Общество, в котором доминируют женщины, будет править миром.
Iwao Otsuka (Aug 12, 2020) 女性優位社会が、世界を支配する。

Iwao Otsuka (Aug 12, 2020) Mobile Life. Settled Life. The origins of social sex differences.
Iwao Otsuka (Aug 12, 2020) 移动生活。定居生活。社会性别差异的起源。
Iwao Otsuka (Aug 12, 2020) Мобильная жизнь. Урегулированная жизнь. Истоки социальных различий по половому признаку.
Iwao Otsuka (Aug 12, 2020) 移動生活。定住生活。社会的性差の起源。

Iwao Otsuka (Aug 12, 2020) The essence of life. The essence of human beings. The darkness of them.
Iwao Otsuka (Aug 12, 2020) 生命的本质。人类的本质。他们的黑暗。
Iwao Otsuka (Aug 12, 2020) Сущность жизни. Сущность человеческих существ. Их тьма.
Iwao Otsuka (Aug 12, 2020) 生命の本質。人間の本質。それらの暗黒性。

Iwao Otsuka (Aug 21, 2020) On Atheism and the Salvation of the Soul. Live by neuroscience!
Iwao Otsuka (Aug 21, 2020) 论无神论与灵魂的救赎。靠神经科学生存！
Iwao Otsuka (Aug 21, 2020) Об атеизме и спасении души. Живи неврологией!
Iwao Otsuka (Aug 21, 2020) 無神論と魂の救済について。脳神経科学で生きよう！

Iwao Otsuka (Aug 24, 2020) Dryness. Wetness. Sensation of humidity. Perception of humidity. Personality Humidity. Social Humidity.
Iwao Otsuka (Aug 24, 2020) 干性。湿气。湿度的感觉。对湿度的感知。性格湿度。社会湿度。
Iwao Otsuka (Aug 24, 2020) Сухость. Мокрота. Сенсация влажности. Восприятие влажности. Личностная влажность. Социальная влажность.
Iwao Otsuka (Aug 24, 2020) ドライさ。ウェットさ。湿度の感覚。湿度の知覚。性格の湿度。社会の湿度。

Iwao Otsuka (Aug 26, 2020) Gases and liquids. Classification of behavior and society. Applications to life and humans.
Iwao Otsuka (Aug 26, 2020) 气体和液体。行为与社会的分类。在生活和人类中的应用。

Iwao Otsuka (Aug 26, 2020) Газы и жидкости. Классификация поведения и общества. Применение к жизни и человеку.
Iwao Otsuka (Aug 26, 2020) 気体と液体。行動や社会の分類。生命や人間への応用。

Iwao Otsuka (Sep 3, 2020) Elements of livability. Functionalism of life. Society as life.
Iwao Otsuka (Sep 3, 2020) 宜居的要素。生活的功能主义。社会即生活。
Iwao Otsuka (Sep 3, 2020) Элементы благоустроенности. Функциональность жизни. Общество как жизнь.
Iwao Otsuka (Sep 3, 2020) 生きやすさの素。生命の機能主義。生命としての社会。

Iwao Otsuka (Sep 4, 2020) The laws of history. History as a system. History for life.
Iwao Otsuka (Sep 4, 2020) 历史的规律。历史是一个系统。历史的生命。
Iwao Otsuka (Sep 4, 2020) Законы истории. История как система. История на всю жизнь.
Iwao Otsuka (Sep 4, 2020) 歴史の法則。システムとしての歴史。生命にとっての歴史。

Iwao Otsuka (Sep 21, 2020) Social Theory of Maternal Authority. A Society of Strong Mothers. Japanese Society as a Case Study.
Iwao Otsuka (Sep 20, 2020) 母亲权威的社会理论。强势母亲的社会。以日本社会为个案研究。
Iwao Otsuka (Sep 20, 2020) Социальная теория материнства: Общество сильных матерей. Японское общество как пример.
Iwao Otsuka (Sep 15, 2020) 母権社会論 - 強い母の社会。事例としての日本社会。 -

Iwao Otsuka (Sep 21, 2020) Mechanisms of Japanese society. A society of acquired settled groups.
Iwao Otsuka (Sep 21, 2020) 日本社会的机制。后天定居群体的社会。
Iwao Otsuka (Sep 21, 2020) Механизмы японского общества. Общество приобретенных оседлых групп.
Iwao Otsuka (Aug 28, 2020) 日本社会のメカニズム。後天的定住集団の社会。

Iwao Otsuka (Oct 25, 2020) Inertial Society
Iwao Otsuka (Oct 25, 2020) 惯性社会（中文版本）
Iwao Otsuka (Oct 25, 2020) инерционное общество
Iwao Otsuka (Oct 25, 2020) 慣性社会（日本語版）

Iwao Otsuka (Oct 27, 2020) Neurosociology
Iwao Otsuka (Oct 27, 2020) 神经社会学（中文版本）
Iwao Otsuka (Oct 27, 2020) Нейросоциология
Iwao Otsuka (Oct 27, 2020) 神経社会学（日本語版）

Iwao Otsuka (Oct 29, 2020) From transportation-centric society to communication-centric society. The Progress of Transition.
Iwao Otsuka (Oct 29, 2020) 从以交通为中心的社会向以通信为中心的社会。转型的进展。
Iwao Otsuka (Oct 29, 2020) От общества, ориентированного на транспорт, к обществу, ориентированному на коммуникации. Прогресс переходного периода.
Iwao Otsuka (Oct 29, 2020) 交通中心社会から通信中心社会へ。移行の進展。

Iwao Otsuka (Nov 9, 2020) The Sociology of the Individual -The Elemental Reduction Approach.
Iwao Otsuka (Nov 9, 2020) 个人社会学 -元素还原法。

Iwao Otsuka (Nov 9, 2020) Социология личности -Элементный подход к сокращению.
Iwao Otsuka (Nov 9, 2020) 個人の見える社会学　- 要素還元アプローチ -

Iwao Otsuka (Nov 9, 2020) Introduction Of A White Tax To Counter Discrimination Against Blacks.
Iwao Otsuka (Nov 9, 2020) 引入白人税以打击对黑人的歧视
Iwao Otsuka (Nov 9, 2020) Введение белого налога для противодействия дискриминации черных
Iwao Otsuka (Nov 9, 2020) 黒人差別対策としての白人税導入

Iwao Otsuka (Nov 20, 2020) Personality and sensation, perception. Light and dark. Warm and cold. Hard and soft. Loose and tight. Tense and relaxed.
Iwao Otsuka (Nov 20, 2020) 人格与感觉、知觉。明与暗。温暖与寒冷。硬和软。松与紧。紧张与放松。
Iwao Otsuka (Nov 20, 2020) Личность и ощущения, восприятие. Светлое и темное. Тепло и холодно. Твердый и мягкий. Свободный и тугой. Напряженный и расслабленный.
Iwao Otsuka (Nov 20, 2020) 性格と感覚、知覚。明暗。温冷。硬軟。緩さときつさ。緊張とリラックス。

Iwao Otsuka (Nov 21, 2020) Motherhood and Fatherhood. Maternal and paternal authority. Parents and Power.
Iwao Otsuka (Nov 21, 2020) 母性与父性。母权和父权。父母与权力。
Iwao Otsuka (Nov 21, 2020) Материнство и отцовство. Материнская и отцовская власть. Родители и власть.
Iwao Otsuka (Nov 22, 2020) 母性と父性。母権と父権。親と権力。

Iwao Otsuka (Dec 15, 2020) Sex differences and sex discrimination.

They cannot be eliminated. Social mitigation and compensation for them.
Iwao Otsuka (Dec 15, 2020) 性别差异和性别歧视。它们无法消除。对它们进行社会缓解和补偿。
Iwao Otsuka (Dec 15, 2020) Половые различия и дискриминация по половому признаку. Они не могут быть устранены. Социальное смягчение и компенсация за них.
Iwao Otsuka (Dec 15, 2020) 男女の性差と性差別。それらは無くせない。それらへの社会的な緩和や補償。

Iwao Otsuka (Dec 18, 2020) Mechanisms of acquired settled group societies. Female dominance.
Iwao Otsuka (Dec 18, 2020) 后天定居群体社会的机制。女性主导地位。
Iwao Otsuka (Dec 18, 2020) Механизмы обществ приобретенных оседлых групп. Доминирование женщин.
Iwao Otsuka (Dec 18, 2020) 後天的定住集団社会のメカニズム。女性の優位性。

Iwao Otsuka (Dec 24, 2020) Ownership and non-ownership of resources. Their advantages and disadvantages.
Iwao Otsuka (Dec 24, 2020) 资源的所有权和非所有权。其利弊。
Iwao Otsuka (Dec 24, 2020) Владение и не владение ресурсами. Их преимущества и недостатки.
Iwao Otsuka (Dec 24, 2020) 資源の所有と非所有。その利点と欠点。

Iwao Otsuka (Jan 3, 2021) Wealth and poverty. The emergence of economic disparity. Causes and solutions.
Iwao Otsuka (Jan 3, 2021) 财富与贫穷。经济差距的出现。原因和解决办法。
Iwao Otsuka (Jan 3, 2021) Благополучие и бедность. Появление экономического неравенства. Причины и решения.
Iwao Otsuka (Jan 3, 2021) 富裕と貧困。経済的格差の発生。その原

因と解消法。

Iwao Otsuka (Jan 4, 2021) Social delinquents. A true delinquent. The difference between the two.
Iwao Otsuka (Jan 4, 2021) 社会不良分子。真正的不良分子。两者之间的区别。
Iwao Otsuka (Jan 4, 2021) Социальные преступники. Настоящий преступник. Разница между ними.
Iwao Otsuka (Jan 4, 2021) 社会的な不良者。真の不良者。両者の違い。

Iwao Otsuka (Jan 8, 2021) How to enjoy game music videos.
Iwao Otsuka (Jan 8, 2021) 如何欣赏游戏音乐视频。
Iwao Otsuka (Jan 8, 2021) Как наслаждаться игровыми музыкальными клипами.
Iwao Otsuka (Jan 8, 2021) ゲーム音楽動画の楽しみ方。

Iwao Otsuka (Jan 17, 2021) Life worth living. Fulfilling life. The source of them.
Iwao Otsuka (Jan 17, 2021) 值得生活的生活。充实的生活。他们的源头。
Iwao Otsuka (Jan 17, 2021) Жизнь, достойная жизни. Полноценная жизнь. Источник их.
Iwao Otsuka (Jan 17, 2021) 生きがい。充実した人生。それらの源。

私の書籍の内容。それらの自動翻訳のプロセスについて。

ご訪問ありがとうございます！

私は本の内容を頻繁に改訂しています。
そのため、読者の皆様には、随時サイトを訪れていただき、新刊や改訂版の書籍をダウンロードしていただくことをお勧めしています。

自動翻訳には以下のサービスを利用しています。

DeepL プロ
https://www.deepl.com/translator

本サービスは以下の会社が提供しています。

DeepL GmbH

私の本の原語は日本語です。
私の本の自動翻訳の順序は以下の通りです。
日本語→英語→中国語、ロシア語

どうぞお楽しみ下さい！

私の略歴。

私は、1964年に、日本の神奈川県で、生まれた。
私は、1989年に、東京大学文学部社会学科を卒業した。
私は、1989年度の日本の国家公務員採用試験のI種区分の、社会学の職種に、最終合格した。
私は、1992年度の日本の国家公務員採用試験のI種区分の、心理学の職種に、最終合格した。

私は、大学卒業後は、日系大手IT企業の研究所に勤務して、コンピュータのソフトウェアの試作業務に従事した。
私は、現在は、企業を退職して、執筆活動に専念中である。